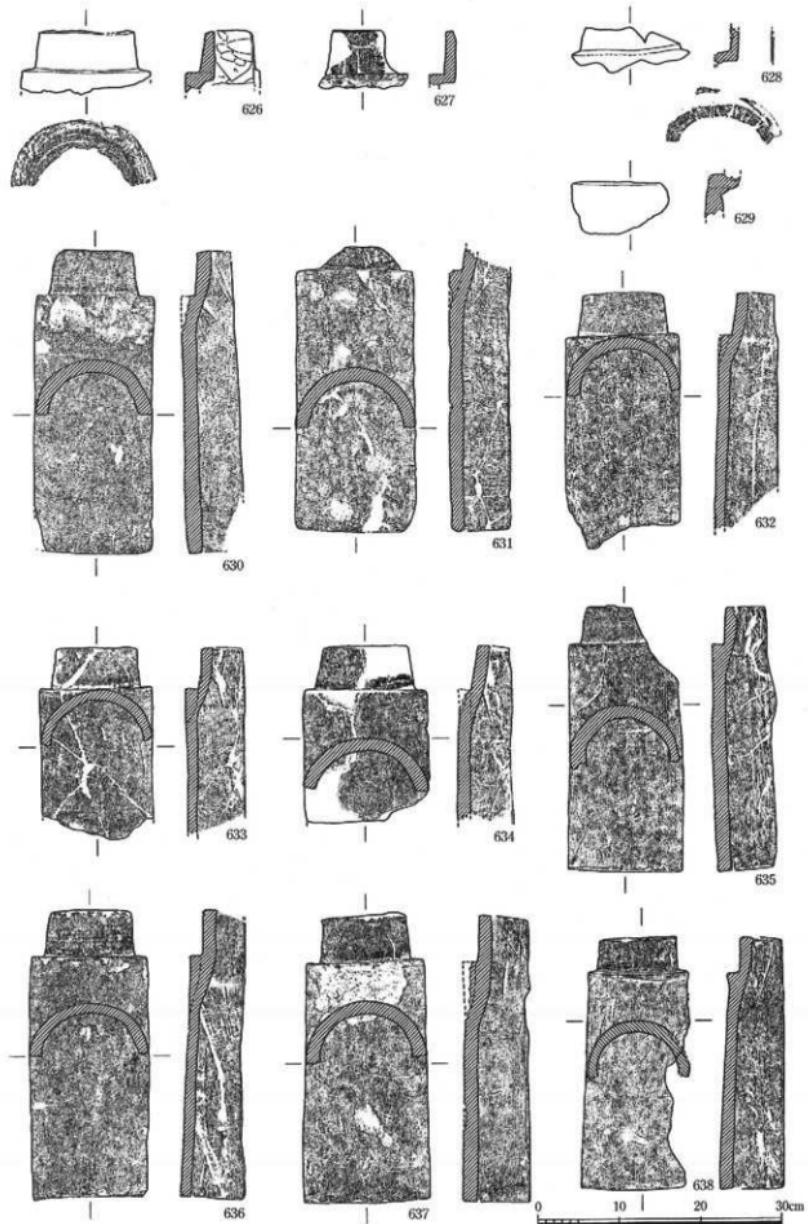


第83図 丸瓦実測図・1 (無段式、飛鳥～奈良時代)



第84図 丸瓦実測図・2 (有段式、飛鳥～奈良時代)

石英を含み、焼成がやや軟質なものが確認された。飛鳥時代の有段式丸瓦は、大阪大学保管資料（1）が完形で出土していることから、I A 04型式とセットになり、(626~629) の資料は飛鳥時代に属すると考えられる。

(井西)

第5節 平瓦 (第86~88図・図版58~62) (639~676)

平瓦についても丸瓦と同様に、飛鳥時代から白鳳時代のものについて記述する。平瓦についても丸瓦同様に同一の窯で製作されている可能性が高く、飛鳥時代と白鳳時代を明確に分類するのには、困難である。軒丸瓦・軒半瓦とのセット関係を考えるための資料としては、平瓦の凸面にタタキ痕跡が観察される資料があり、これはII A 06・II A 07・II A 09型式とセット関係にある、重弧紋軒半瓦の瓦当の貼り付け部に確認される格子タタキと同様で、色調・胎土も酷似している。よって、それらのタタキ痕跡が確認される平瓦については、白鳳時代の可能性が考えられる。しかし、凸面に格子タタキを施した後、2次調整でタタキ痕跡をすり消している資料も確認される。凸面に2次調整が施されている資料については、色調・胎土による分類を試み、1次調整においてタタキ痕跡が確認されている資料については、白鳳時代に属するものと考えた。

今回示した資料は、凹面側に桶枠板・枠板綴紐痕跡が確認できる資料と凹面側桶枠板・枠板綴紐痕跡が確認できない資料、凸面の2次調整が確認できる資料、2次調整にすり消しが施されている場合は完形に近いものを取り上げた。

まず、凸面2次調整によって分類し、凹面側に観察される桶枠板・枠板綴紐痕跡の有無でさらに細分した。

1類-a (639、640、642~644) ・・・凸面にタタキ等が確認されない資料で、凹面側に桶枠板もしくは枠板綴紐痕跡が確認されない資料である。1類に分類される資料は、比較的残りのよい資料で観察した。分割截面が確認されるため、円筒形の桶型を使用していることは確実である。しかし、桶枠板痕跡も枠板綴紐痕跡も確認できなかった。平瓦の分割は、内側から分割界線に沿って切り込みを入れ、分割した後、破面は2次調整を行わないものと(640、643、644)、ヘラケズリによって調整するもの(639、642)に分かれる。(640、643、644)は、色調は暗青灰色系を呈し、胎土は長石・石英を含み、焼成は堅緻である。(639、642)の色調は、黄褐色系を呈し、胎土は砂粒・長石・チャートを含み、焼成はやや軟質である。色調・胎土は、1次調整のタタキが確認される資料とは相違し、軒丸瓦 I A 02・03型式、丸瓦無段1類の資料と類似することから、それらとセット関係にあると考えられ、飛鳥時代に属する資料の可能性が推測される。

1類-b (648、655、641) ・・・凸面にタタキが確認されない資料で、凹面に桶枠板痕跡もしくは枠板綴紐痕跡が確認される資料である。平瓦を分割する際には、凹面側から分割界線に沿って切り込みを入れ、破面は調整せずに仕上げているものと、調整するものに分かれる。色調は橙・黄褐色系で、胎土は長石・石英・クサリ礫を含み、焼成は良好である。

2類-i a (659) ・・・凸面に格子(最大幅約1cm)タタキを施すもので、凹面側に桶枠板痕

跡もしくは棹板綴組痕跡が観察されないもの。色調は黒色から黄褐色系を呈し、胎土は精良で、焼成は堅緻である。本資料はⅡ A 06・07・09型式で観察される格子タタキ痕跡とは格子タタキの長徑・短徑が相違する。白鳳時代に属する瓦からは、このタタキ痕跡は確認されないことと、凹面に桶棹板痕跡も棹板綴組痕跡も観察されないことから、飛鳥時代に属する可能性が推測される。

2類-i b (645~653) ・・・凸面に格子（最大幅約1cm）タタキを施すもので、凹面側に桶棹板痕跡もしくは棹板綴組痕跡が観察されるもの。色調は茶・黄褐色系を呈し、胎土は長石・石英・チャートを含み、焼成は堅緻である。平瓦を分割する際には、分割界線に沿って内側から切り込みを入れ、分割した後は破面にヘラケズリを施し、仕上げている。(645、660、概要Ⅱ：第41図977)は凹面狭端縁中央に横長楕円形の当たりが観察される。桶型全体の復元ができなかったため、桶型に何ヶ所横長楕円形の当たりがあるかわからないが、1個だとすれば、棹板の片端に把手のようなものを紐などを通してとりつけたものであるかもしれない。

2類-ii (656) ・・・凸面側に斜格子タタキ（長軸最大約4cm、短軸最大約2cm）を施すもの。凹面側に桶棹板痕跡もしくは棹板綴組痕跡は確認されない。平瓦の分割の際には、分割界線に沿って内側から切り込み、破面は調整せずに焼成されている。色調は黄灰色を呈し、胎土は長石・金雲母を含み、焼成は良好である。確認した資料が少ないため、色調・胎土の類似性から、軒丸瓦とのセット関係を推測するのは無理がある。しかし、凹面側に桶棹板痕跡および棹板綴組痕跡が確認されないことから、飛鳥時代に製作された平瓦の可能性だけを指摘しておきたい。

2類-iii (661、662) ・・・凸面側に放射状タタキを施すものである。破片のため、凹面側や分割の仕方等はよくわからない。色調・胎土・焼成とともにⅡ A 06型式のものと酷似している。

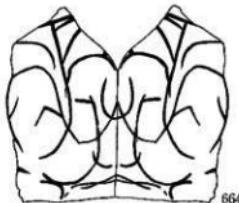
2類-iv (663、666、667) ・・・凸面側に格子タタキ（最大約0.5cm）を施すものである。凹面側は明瞭ではないが、棹板の痕跡を確認できる。分割する際には、分割界線に沿って内側から切り込み、破面は調整して仕上げる。(666、667)は端面に凸面と同様の格子タタキが施される。色調は黄褐色系のものと灰色系を呈するものとに分かれ、胎土はほぼ同様に長石・石英等の砂粒を含み、焼成は黄褐色系を呈するものが軟質で、灰色系を呈するものが堅緻である。端面にタタキが確認される資料は、丸瓦無段2類-a（白鳳時代）と同様の技法であり、平行タタキが施される資料(665)も含め、Ⅱ A 09型式とのセット関係が求められる。

2類-v (657、658、665) ・・・凸面側に平行タタキが観察されるもの。タタキ板には2種類確認され、幅約3cmの板の横方向に約0.4cmの溝を彫ってタタキ板にしているもの（-①）(657)と、板の幅は確認できないが、溝の幅が約0.3cmのもの（-②）(658)があり、-②で成形している瓦の多くはタタキ成形の後丁寧にナデが施されている。実見した資料については、いずれの資料も側面は平瓦を切断した後、2次調整をせずに焼成されている。(657)の色調は、灰色系のものと黄褐色系のものとがあり、胎土は長石・石英・クサリ礫を含み、焼成はやや軟質のものと堅緻なものとがある。(658)の色調は青灰色を呈し、胎土は精良で、焼成は堅緻である。平瓦の狭端面にタタキが確認される資料(665)はタタキ板の溝の幅で比較すると、-①類の資料と

の類似性が高い。また、2-v-②類に分類した平瓦群は、(3) の IA03型式の瓦当部に接続された丸瓦のタキ痕跡と類似し、色調・胎上も類似することから、軒丸瓦 IA03型式、丸瓦無段 I 類-b とセットになるものと思われる。(第85図 664) は、凸面をすり消している平瓦で、凸面側にヘラで紋様が描かれている。凹面側には桶板痕跡と棒板縦痕跡が明瞭に観察される。色調は灰色を呈し、胎上は長石・石英を含み、焼成は堅緻である。凸面の紋様については、藤澤一大氏より、分割した側面を反転すると「蓮華紋」のような紋様の可能性があるとの教示を得た。

第85図 ヘラ描き平瓦

(井西)



664

第6節 道具瓦

鶴尾、鬼瓦、隅木蓋瓦、熨斗瓦、面戸瓦といった道具瓦が比較的まとまって出土している。これまで道具瓦については60年度報告、「富田林市史」(註14)、概要Ⅱ・Ⅲで報告が行われてきたが、未報告分も含め、すべての出土資料を再検討し、重複もあるが整理しなおして報告する。鶴尾の各部名称は〔奈良国立文化財研究所1980〕(註15)に従う。なお、大阪大学保管資料については第3章第1節第2項で先述している。

熨斗瓦 (第98、99図・図版52) (739~745、754~757)

南門瓦落ちから出土した7点のほか、小片が4点出土している。全て凸面は繩タキで調整され、奈良時代の平瓦を用いて製作されたと考えられる。割り熨斗であり、上原真人氏の分類によるところのC類である(註16)。南門瓦落ち出土の一群は、どれも完形に近い資料で、長さは36.0~38.8cmで、ほぼ統一されている。ほとんど幅は12.0~16.4cmの範囲に収まるが、(739)は幅が19.8cmと広く、熨斗積みの最下段に置かれる肌熨斗として使用されていた可能性が考えられる。

面戸瓦 (第99図・図版62) (746~753)

98年度調査で8点が出土した。いずれも焼成後に丸瓦をはつて成形した削り面戸で、形態が判明するものは大棟下部に用いられる蟹面戸と考えられる。丸瓦の項で述べた特徴を鑑みると、鳳時代の丸瓦が使用されていると考えられる。なお、95年度調査では、奈良時代の丸瓦を牛瓦段階で面戸瓦に作り替えて製作したものが2点出土している。

鶴尾 (第100~102図・付図2・図版63~66) (758~773)

(758) は、幅0.7cmに削り出された縦帯を挟んで胴部・鰭部の正段を削り出す左側面の破片である。裏面に腹部取り付きの痕跡が見られないため、取り付きは縦帯よりも後方である。縦帯との交点で胴部の段幅は4.0cmと狭い。(758) は98年度調査において伽藍外のG区流路で出土したが、これと接合する資料が98年度富田林市調査で中門付近から出土している。(759) は脊稜に近い左側面の破片である。脊稜が上方へ反り上がる傾斜変換点に近く、段が放射状かつ密に入る。

正段の幅は1.7~3.2cmを測る。(758、759)とも厚さは1.5cmと薄手であり、焼成は非常に堅緻で須恵質・灰色を呈す。裏面は丁寧にナデが施され、粘土組積み上げの痕跡などは確認できなかった。

(760)は脊稜部分である。脊稜は断面が銳角をなす山形で、中空である。その脊稜に幅2.5cm・厚さ2.0cmの正段が取り付く。(761)は、右側面のうち鰭部と腹部の破片である。鰭の表裏面とも、幅4.8~5.4cmの正段を削り出す。鰭部の厚さは1.6cm、腹部の厚さは1.9cmである。腹部内面はナデ調整され、工具痕が残る。鰭の腹部への取り付き部分は丁寧に指で粘土を強く撫で付けている。(760、761)とも焼成はやや甘い。

(762)は先述したように大阪大学保管資料(18)と接合した。左側面の胴部から頂部へ向かって前にせり出す部分の鰭の先端である。そのため、正段の幅は胴部側の6.5cmから頂部に向かって徐々に狭まり、4.8cmにいたる。厚さは1.5~1.8cmである。鰭の端部には鰭の単位ごとに切り込みをいれ、鰭の重なりを表現する。(763)は右側面の脊稜と胴部である。脊稜は突出せず、幅が広い。焼成前に脊稜の上面を垂直に切り込んで、四角い孔を開けている。この孔は兩仕舞を考えると、鷦尾が屋根に据えられた際には何らかの方法で閉じられていたと想定したい。用途は不明である。河南高校所蔵資料には同一個体と思われる頭部片と胴部片がある。

南門の柱掘方から、柱の礎盤として使用された状況で鷦尾片が出土した。左側面の大部分と腹部の一部が残り、全形をほぼ復元できた(付図2)。これについては、考察で詳述する。

(764)は先述のように大阪大学保管資料(23)と接合する。頭部から胴部にかけての破片で、幅3.5~4.0cmの正段が平行に走る。厚さは2.3~2.7cmである。内面は指ナデを多用して丁寧に調整される。(765)は鰭部と腹部の取り付き部分にある。鰭は表面だけでなく裏面にも正段を削り出す。胴部の厚さは2.5~3.0cm、腹部の厚さは2.5cmである。内面は指ナデを多用して丁寧に仕上げる。(766)は胴部下方から上方に向かって斜めに反り上がる部分で、正段の幅は5.0~6.7cmを測る。(767)には降棟基部の丸瓦を差し込むための透かし孔の一部が残る。(768)では幅2.5cmの縦帶上面には、X形の紋様がヘラ描きされる。この(768)の底面には布目痕が残り、製作時に布を引いて製作した状況を示す。(764~768)はいずれも長石の細粒を非常に多く含み、また、段の表面は丁寧にケズリ調整されている。

(769)は低い正段が放射状にめぐる頂部先端にある。脊稜は突出せず、段の一部として両側から削り出されて成形されている。裏面には調整痕と剥離痕が観察され、はじめにハケ状工具でナデを施した後、さらに指や鋭利なヘラ状工具で乱雑に撫で付ける。剥離痕は頂部上面から約3.5cmの幅で帯状にめぐる。外表面として調整された面が裏面に全くないことから、腹部はここに取り付いたと考えられる。すなわち、頂部付近では鰭の出が全くない特異な形態を復元できる。(770)は幅1.5~1.7cmに削り出した縦帶に幅7.0~7.8cm前後の正段が取り付く部分である。わずかに縦帶外側に鰭の段部が残存するが、剥離面からやや薄い鰭であったことが想定できる。厚さは段部で2.5cm、腹部で2.3cmを測る。裏面には調整痕が観察でき、指ナデの他に(769)と酷似する

鋭利な工具による撫で付けを行っている。調整はやや雑である。(769~770)ともに須恵質を呈する。

(771、772)は幅3.5~4.0cmの段を持ち、段は比較的深く削りだして成形する。厚さは2.5~2.8cmを測る。焼成は軟質である。裏面は平坦だが、胸部か鰭部かは不明である。

(773)は縦帯と鰭部にある。鰭の段幅は6.5cmと広く、裏面には段を設けない。縦帯は2.5~4.5cmと頂部に向かって幅を増すこと、縦帯の外側には直径3.0cm程の半円形の紋様が取り付くことから、特異な紋様を持つ鷹尾の可能性がある。厚さは鰭部で3.0cmを測る。胎土は長石の粗い粒子を含み、焼成は軟質である。摩滅がひどいため、調整痕は観察できない。

隅木蓋瓦（第102図・図版65）(774~776)

(775)は60年度調査で出土した破片資料と譽田八幡宮所蔵資料とから全体形を復元したIA型式である〔60年度報告〕。全体形は箱状をなし、正面には鬼面紋が飾られ、その上辺には三重弧紋が、側辺には二重闇紋が飾られる。上面に重弧紋が使われること、側面に格子目タタキが残ること、胎土や焼成の特徴から7世紀半ばに製作されたと考えられる。今回、譽田八幡宮所蔵資料の観察と藤澤・大氏のご教示により、この隅木蓋瓦の製作手順が判明した。まず鬼面紋を持つ正面を、範で厚さ1.7cm程の長方形の板状に成形し、その上部に凸面を上にして重弧紋軒平瓦状の粘土板を取り付ける。湾曲した上面と長方形の鬼面紋部との隙間に補充粘土を詰めて塞ぐ。そして、側面と下面を取り付ける。上面には、中央に隅木に固定するための釘孔と、後端に茅負にはめ込む部分を切り取った剣形があるが、それらがどの段階に設けられたかは不明である。正面から復元できる隅木端部の大きさは、縦が15.0cm、幅が20.2cmで、隅木材としてはかなり細いように思われる。(774)は95年度調査で出土した巻毛部分の小片である。

(776)は60年度調査で出土したIB型式で、(775)よりもやや大きい〔60年度報告〕。上面・側面の後端部にあたり、後端は茅負をはめ込む部分が削られ、側面には二重弧紋が飾られている。全体形は不明である。

鬼瓦（第103図・図版67、68）(777~790)

(777、778)は手づくねで製作された鬼瓦片である。厚さ4cm前後の盤面上に幅2.0cm、高さ0.6~0.8cmの低い外縁が削り出され、(777)は右肘から下腕と右膝の上半部が、(778)は肘を含む筋骨隆々とした左腕の一部が表現されている。腕の部分は盤面から3.0~3.5cm突出する。腕には、幅0.8cm前後のヘラ状工具で柳葉状に切り込みを入れて筋肉の単位を表現し、全体を指ナデして仕上げている。裏面・側面・外縁・盤面は丁寧にケズリ調整されて平坦である。

(779~782)も手づくねで製作された鬼瓦の破片である。外形に沿って巡る高さ約1cmの外縁は、粘土を貼り足して作られ、盤面との境界には強く指で撫で付けられた痕跡が明瞭に残る。強い撫で付けの結果、外縁と盤面とは明瞭な角度をなさない。このことは、範で製作された鬼瓦の外縁とは大きく異なるという点で特徴的である。(779)は鬼瓦の頂部にあたり、ヘラ状工具で盤面に深さ0.6~0.7cmの沈線を彫り込むことによって紋様を表出する。残存するのは、鬼の額皺も

しくは巻毛の一部であろう。側面は丁寧にヘラケズリされている。(780)は右上牙・歯と右頬、そして抉りの一部を残す。牙本体は剥離して残存しないが、牙の周囲をヘラ状工具で縁取りした痕跡を明瞭に看取できる。牙の剥離面は指ナデの痕跡が残る。牙の痕跡と歯、そして抉りの位置から、抉りにはめ込む丸瓦を噛む表情の鬼面紋であったことが推定できる。頬の部分は粘土塊を貼り足した後、指で撫で付けながら整形する。頬の上方には、2条の沈線がある。これは(779)の沈線と同じく、ヘラ状工具で彫り込まれたものである。鬼の髭を表現したものであろう。外縁は存在したと思われるが剥離して残存しない。(781、782)はともに左脚下端である。(779)と同様に、強く撫で付けて貼り足した外縁を持つ。髭を表現した3条の沈線は、いずれも(779)の頂部の沈線と比べると全体に浅く、削り込みも甘い。(782)の脚下端面には布目が残り、鬼瓦を一且布の上に立てて調整したことが想定できる。

(784)は新堂庵寺で最も出土が多く、全体形を復元できる唯一の型式に属する鬼瓦である。全長27.1cm、幅は復元値29.0cm、厚さは最大で8.7cm、無紋部で約6cmである。棟端の高さに相当する本体長は20.0cmを測る。高さ2cm前後の突出した外縁の内側に、造作の大きい鬼面紋を配する。大きく突出する牙や眼の部分の范抜けが難しかったためか、范から鬼瓦を外した後に指で仕上げを行う個体が多い。両眼の間に必ず角形の釘孔が表裏両面から穿孔される。細かい木目や范傷が縦方向に走る。どの個体も非常に多くの長石粒を含み、表面は灰色、断面中心部は灰赤色を呈する。(783、785~787)はいずれも(784)と同范である。

(788)は釘孔と歯、抉り部分を残す小片である。全体形は不明である。焼成は堅緻で須恵質である。厚さ6.2~7.5cm前後を測る。

(789)はヘラ状工具で切り出すようにして立体的に鬼面紋を表出す。鼻・上唇・歯の部分である。抉りも一部残る。(790)は眼球部を一段低くすることで瞼を浮き彫りにし、黒目の部分は沈線で円を描いて表現する。いずれも長石粒を非常に多量に含み、須恵質を呈する。同一個体である可能性も考えられる。

埠（第104図）(791~804)

(791~793)は大型の埠である。中でも長方形の(791)は95年度調査で掘立柱穴から礎盤として使用された状況で出土し、柱痕跡が明瞭に残存する。格子目タタキから、製作時期は白鳳時代に求められる。(794~797、799、800)は小型の無紋埠である。レンガ状あるいは正方形の埠の破片となる。(798、801~804)は段を設けた埠である。全体に厚い。

不明瓦製品（第105図・図版68）(805~813)

(805~808)は鶴尾とよく似た淡褐灰色の瓦製品である。幅約3.4~6.7cmの段を3段平行に削り出す。裏面は平坦である。(806、807、808)は側辺の一部が緩やかな弧を描くように切り取られている。この4個体は厚さや段の成形技法などの点で規格性が高く、量産された可能性もある。花谷浩氏より飛鳥寺及び飛鳥池遺跡では2段の段を削り出したL字状の遺物が出土しており、大きさや段のつくりなどがよく似ているという御教示を頂いた。(809、810)の表面はケズリと指

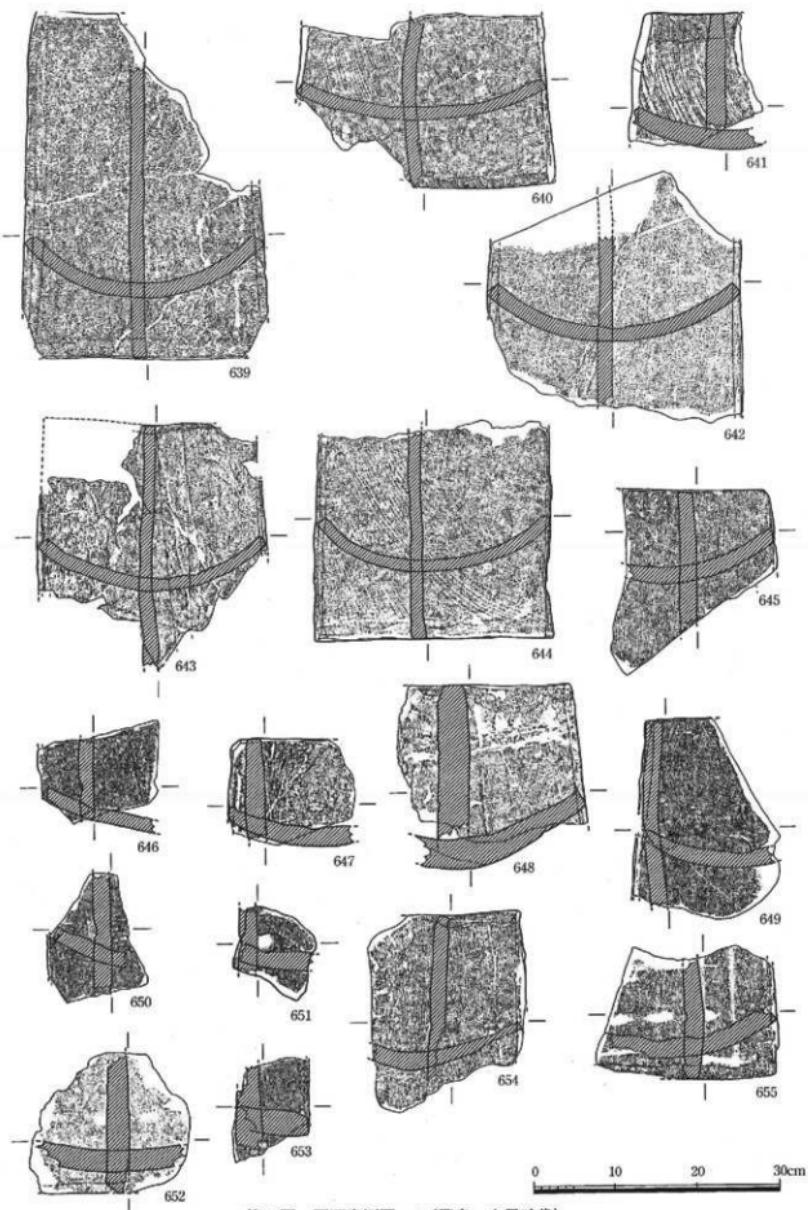
ナデで調整する。灰白色を呈する。(811) の表面は丁寧なヘラケズリで仕上げられるが、端面には布目痕が残る。灰色を呈し、須恵質である。(812) は全面ナデで調整される。灰白色を呈する。(813) は全面ナデで調整される。灰色を呈する。

(岩戸)

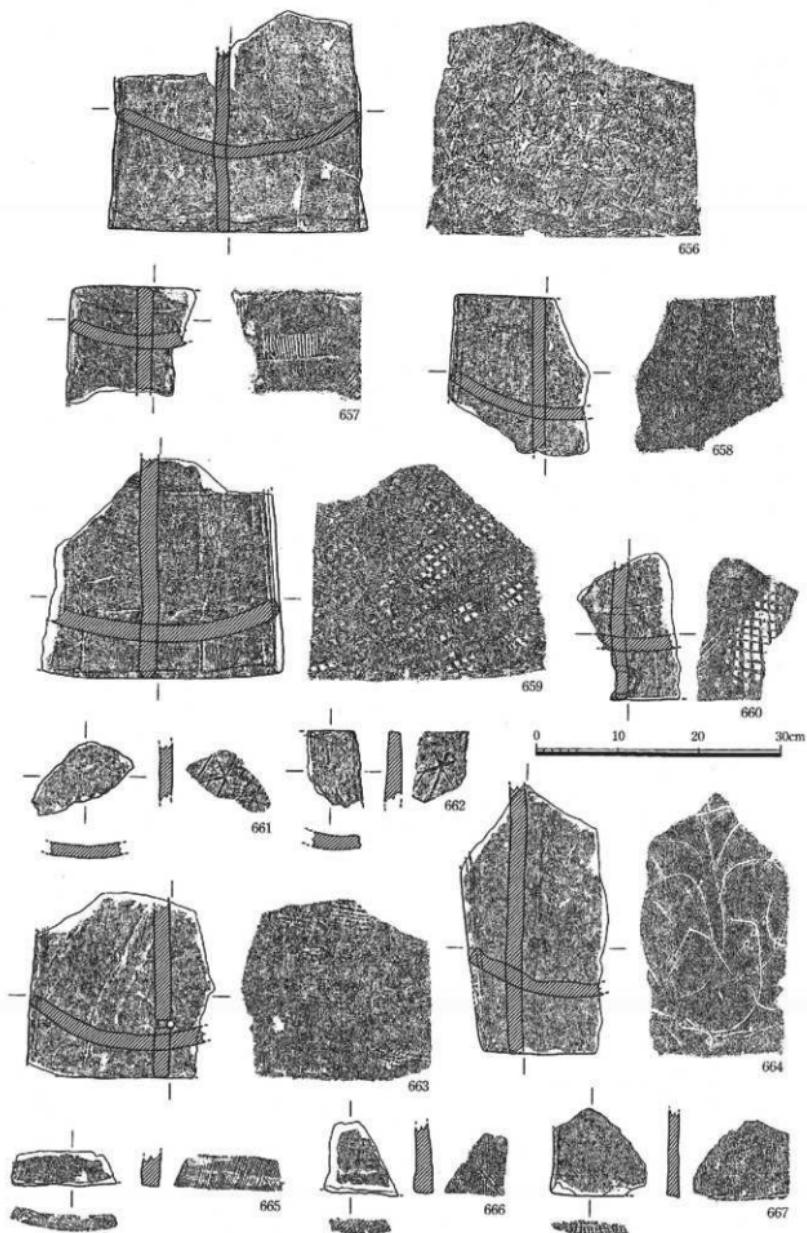
註14 北野耕平編 1981 「富田林市史」 富田林市史編集委員会

註15 奈良国立文化財研究所 1980 「日本古代の陶尾」 飛鳥資料館図録第七回

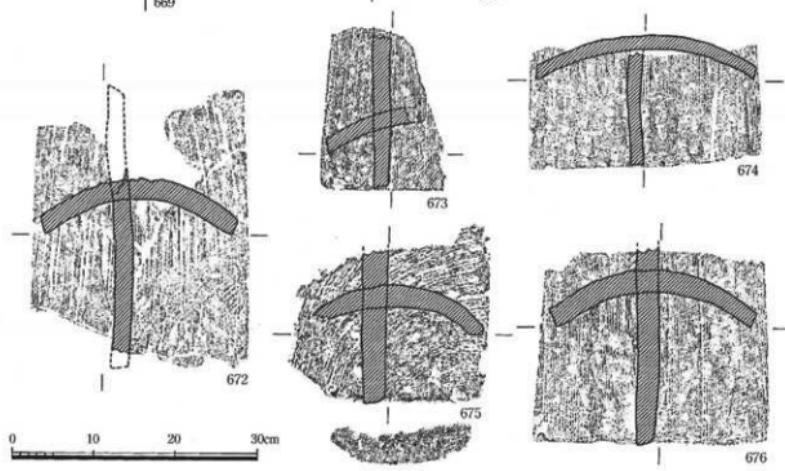
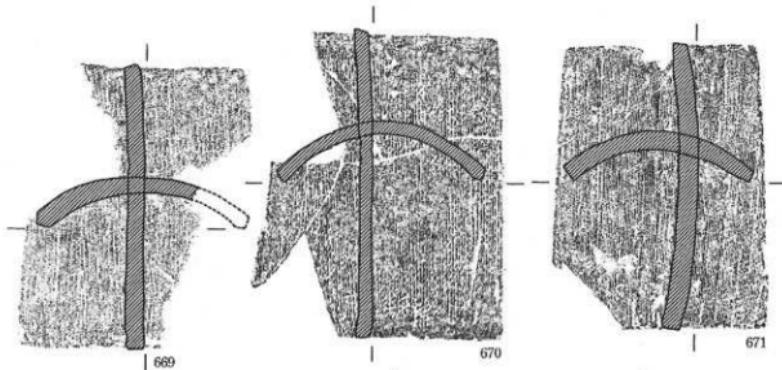
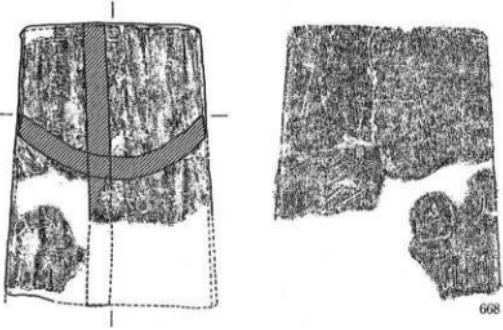
註16 上原真人 1988 「平安貴族は瓦葺住宅に住んでいなかった——平安京右京一条三坊九町出土瓦をめぐって」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会



第86図 平瓦実測図・1 (飛鳥～白鳳時代)

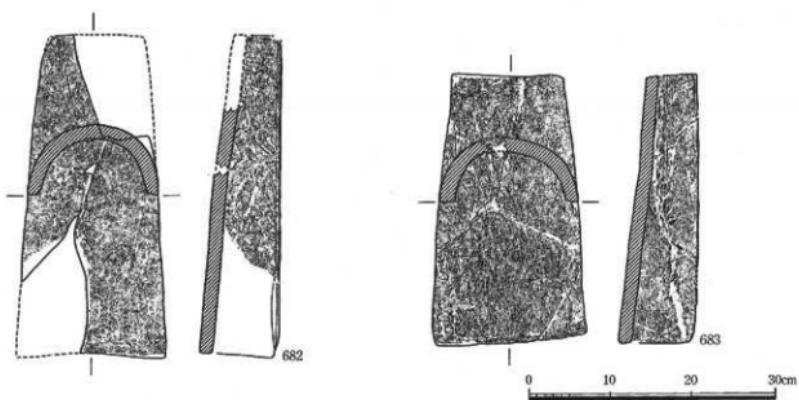
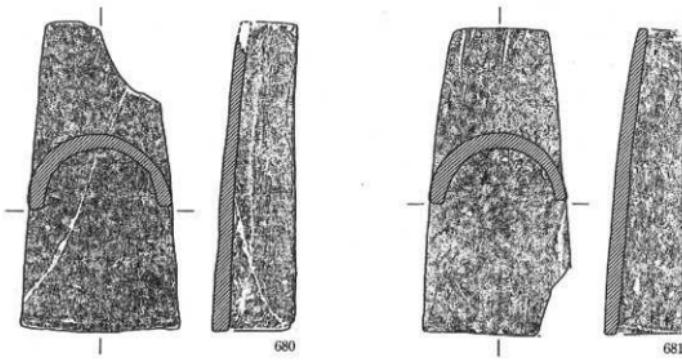
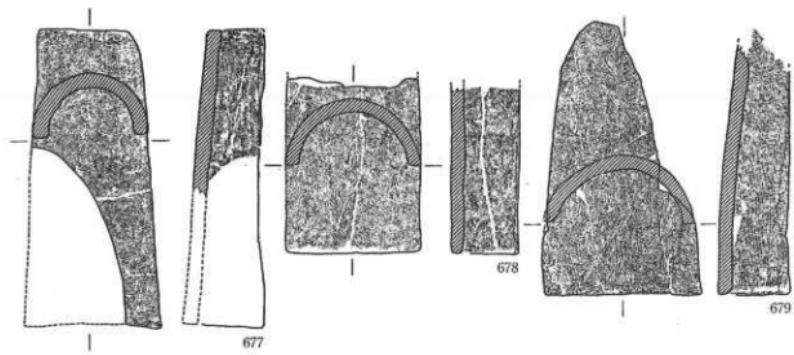


第87図 平瓦実測図・2 (飛鳥～白鳳時代)



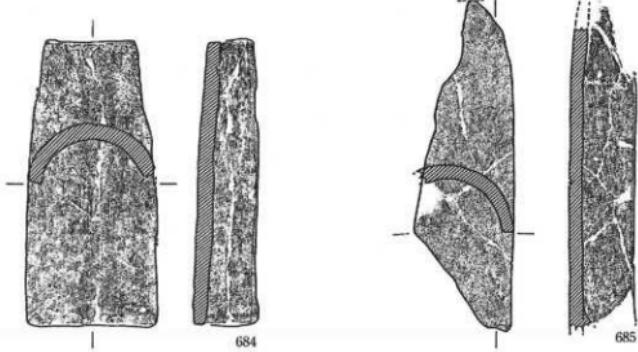
0 10 20 30cm

第88図 平瓦実測図・3(奈良時代)



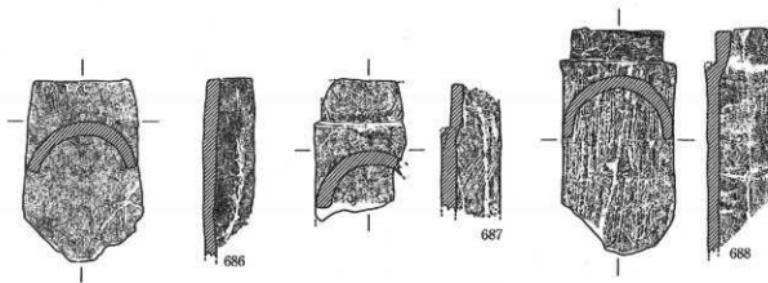
第89図 A区、瓦溜出土瓦実測図・1 (九瓦)

0 10 20 30cm



684

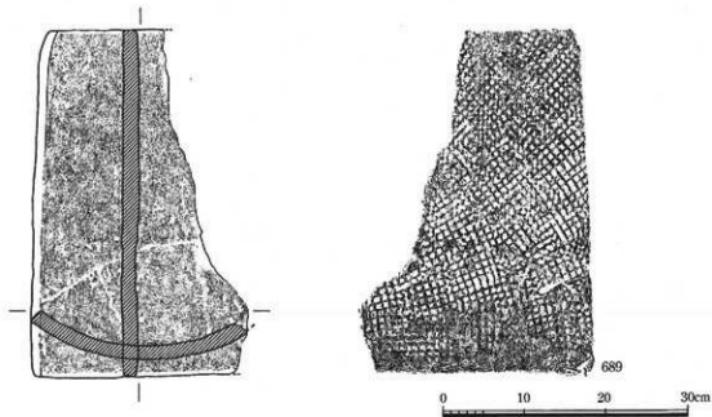
685



686

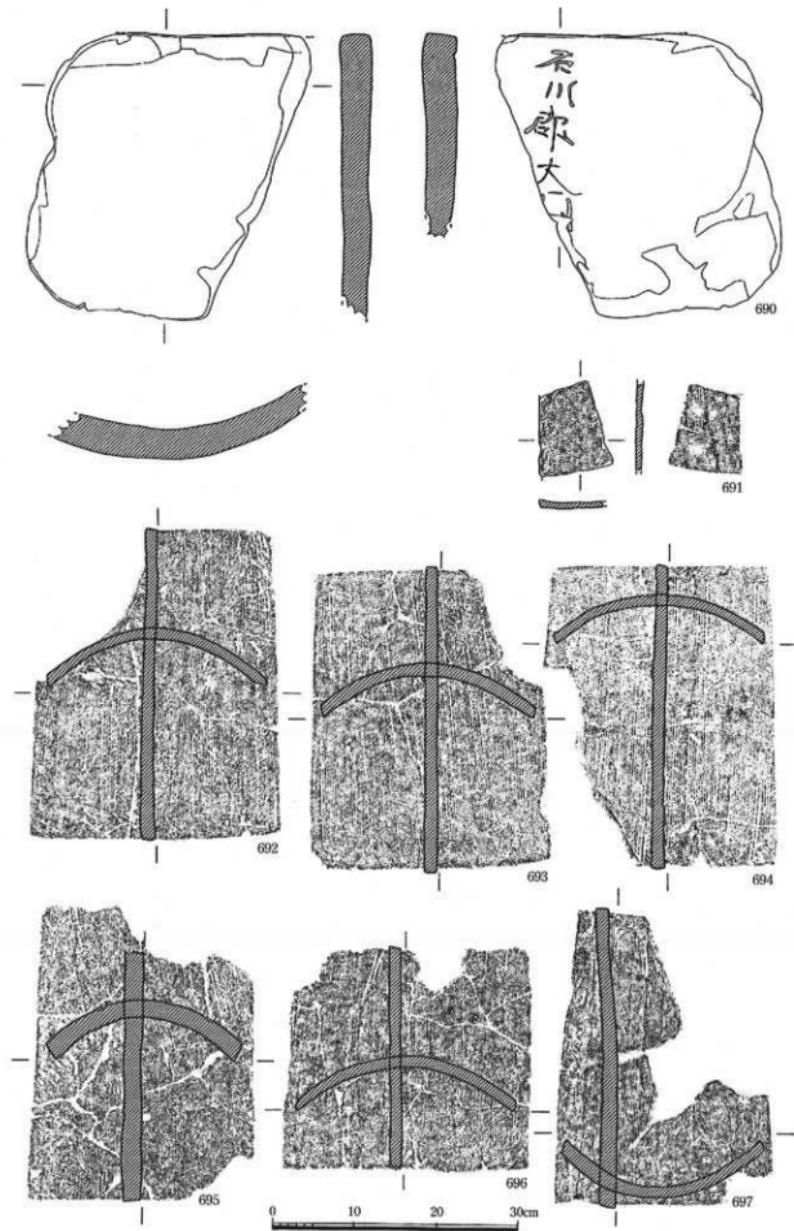
687

688

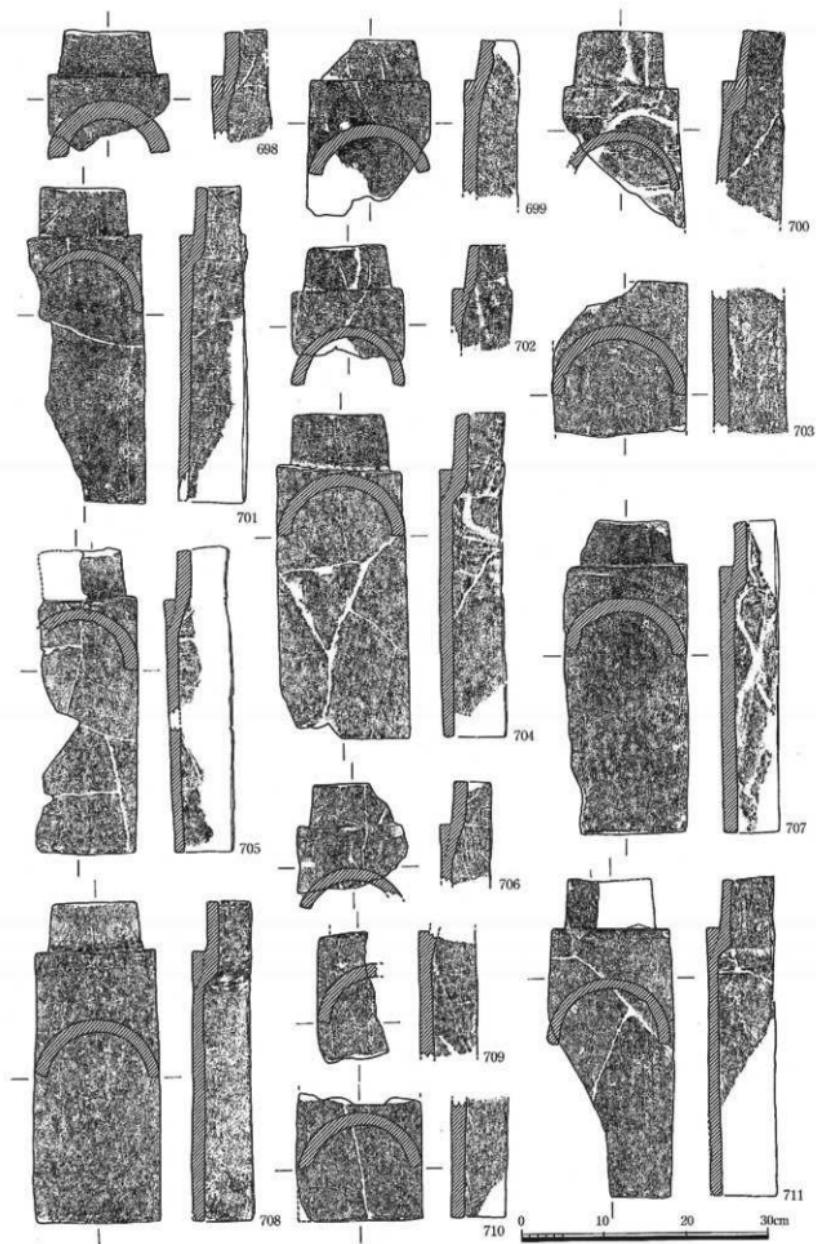


0 10 20 30cm

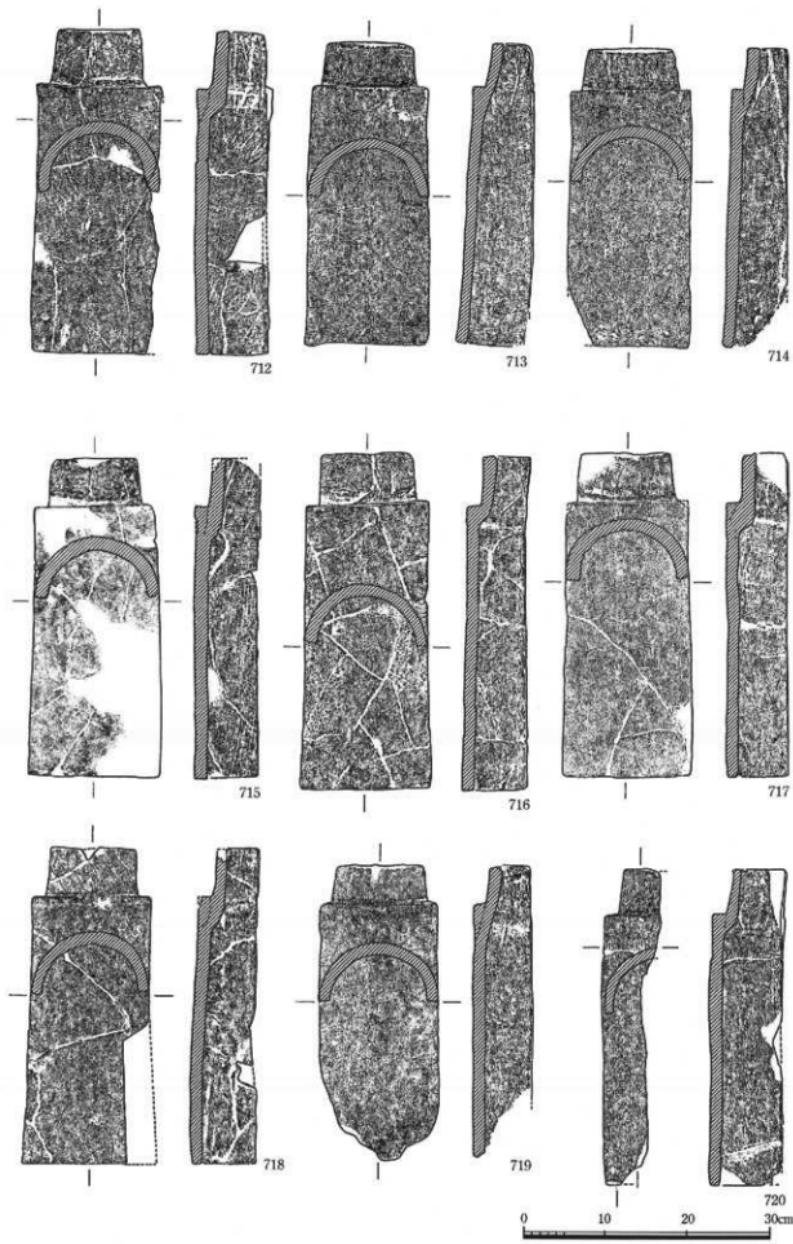
第90図 A区、瓦溜出土瓦実測図・2（丸瓦・平瓦）



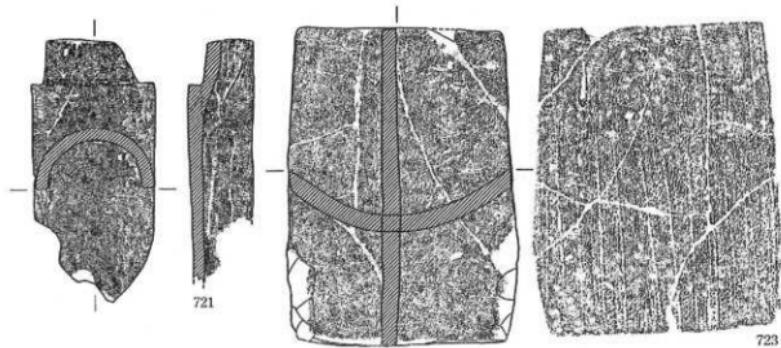
第91図 A区、瓦溜出土瓦実測図・3 (平瓦・文字瓦)



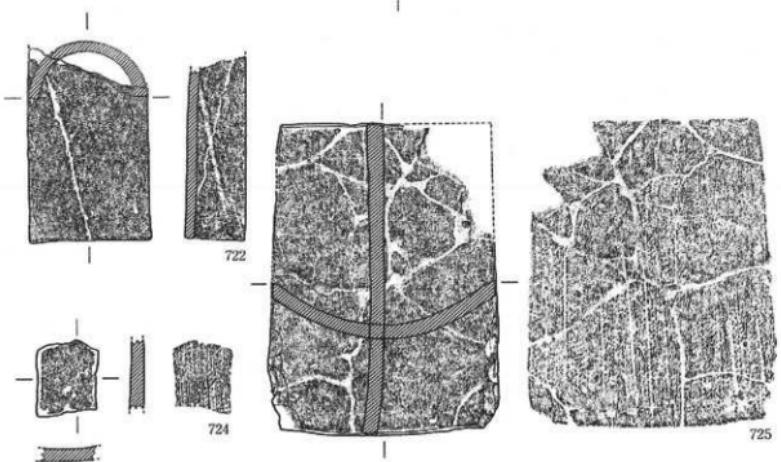
第92図 C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・1（丸瓦）



第93図 C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・2（丸瓦）



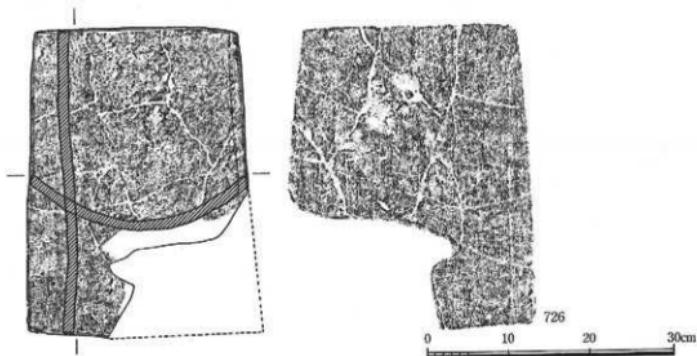
723



722

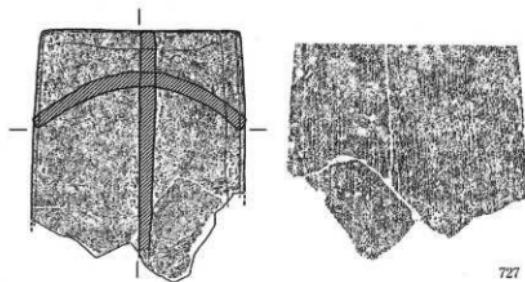
724

725

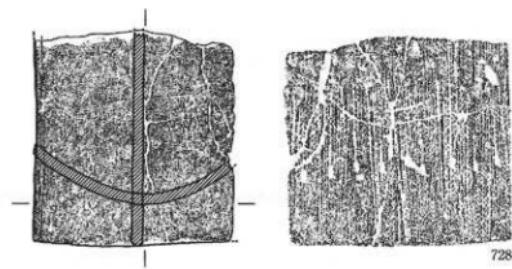


0 10 20 30cm

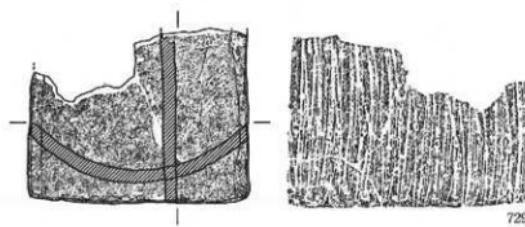
第94図 C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・3 (丸瓦・平瓦)



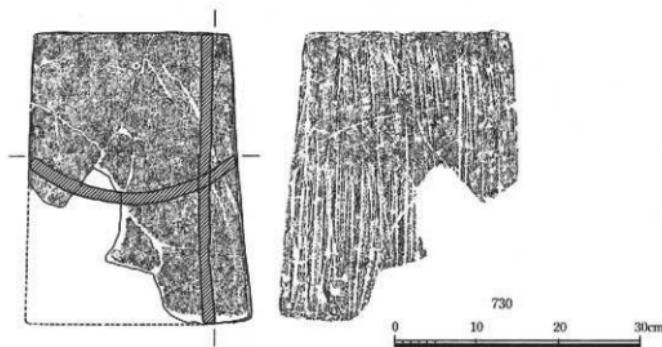
727



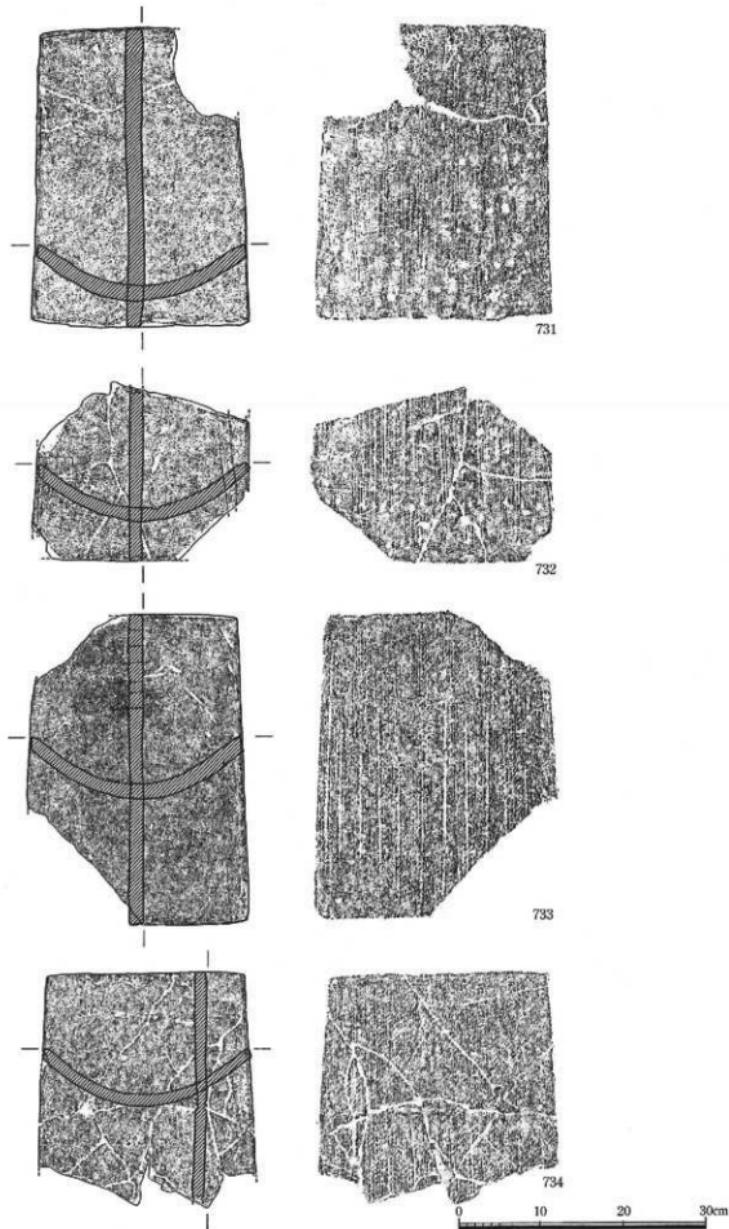
728



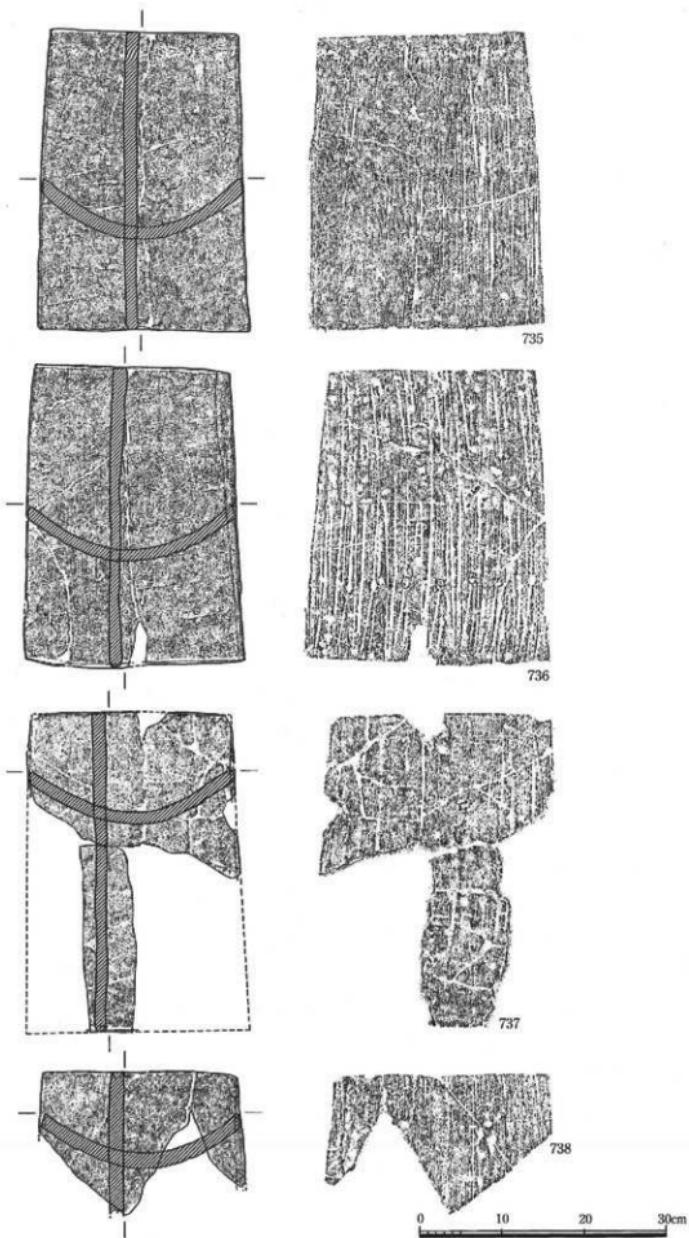
729



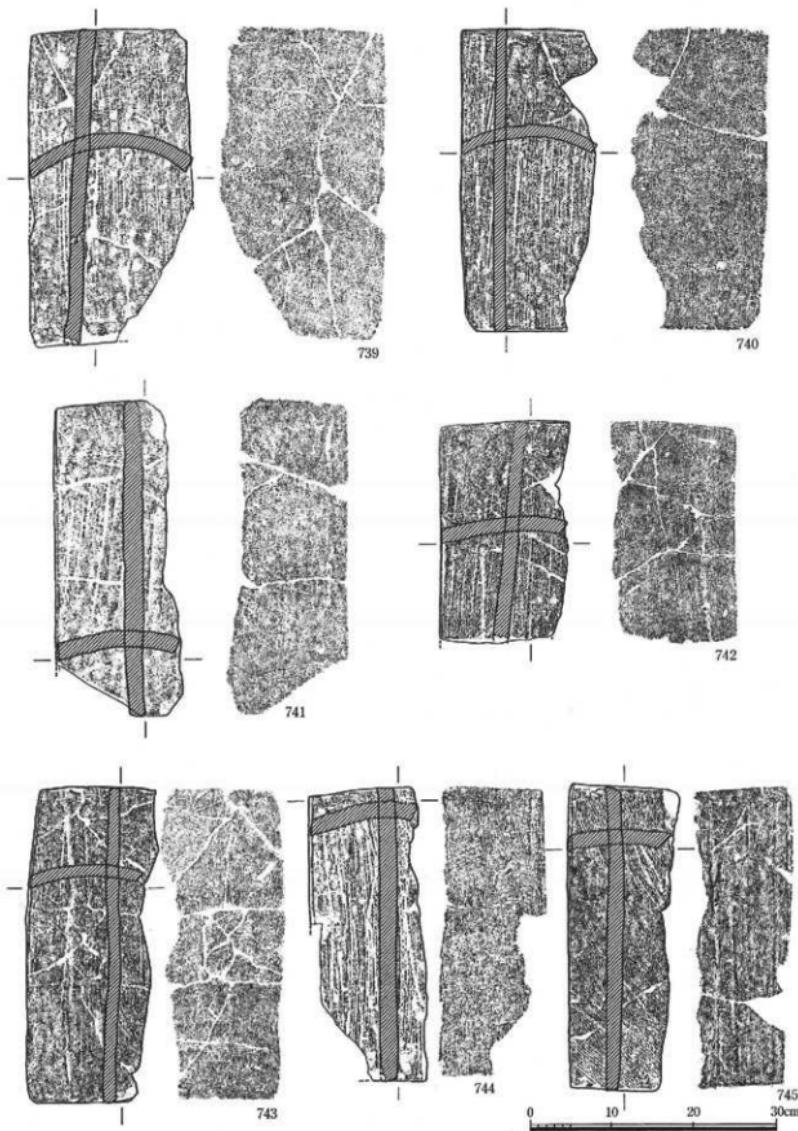
第95図 C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・4(平瓦)



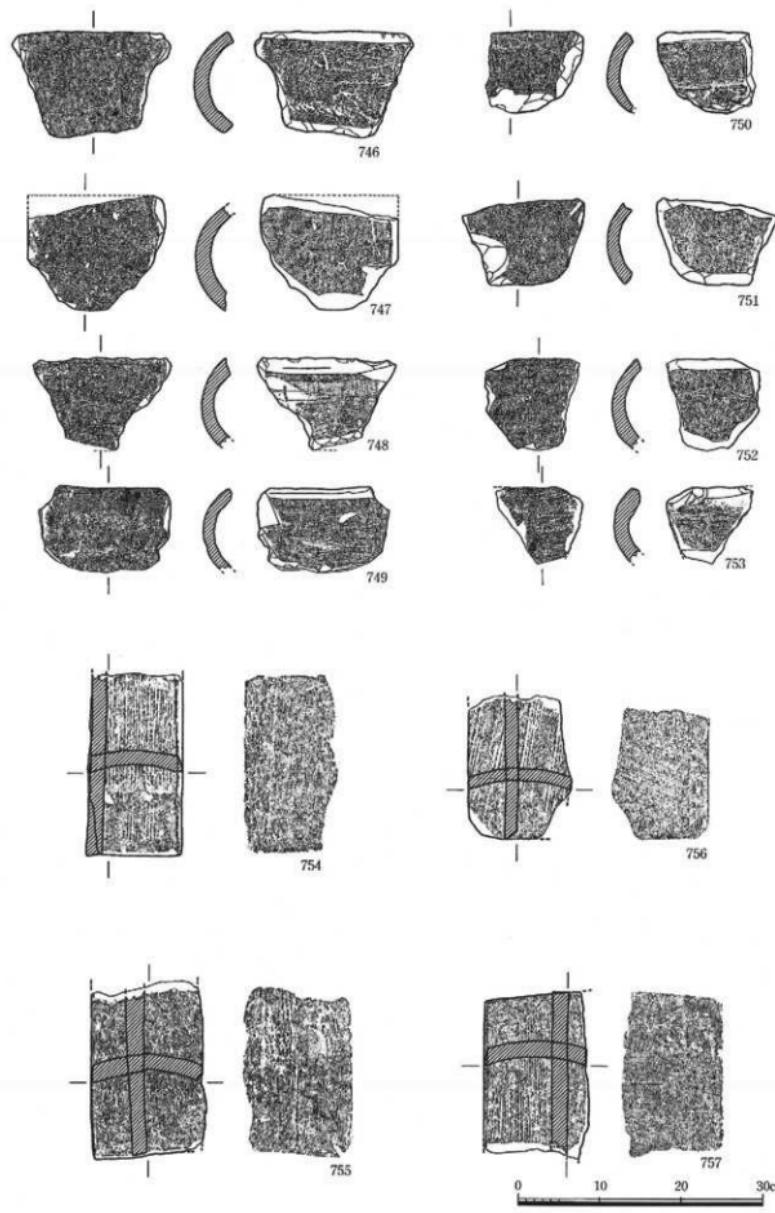
第96図 C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・5(平瓦)



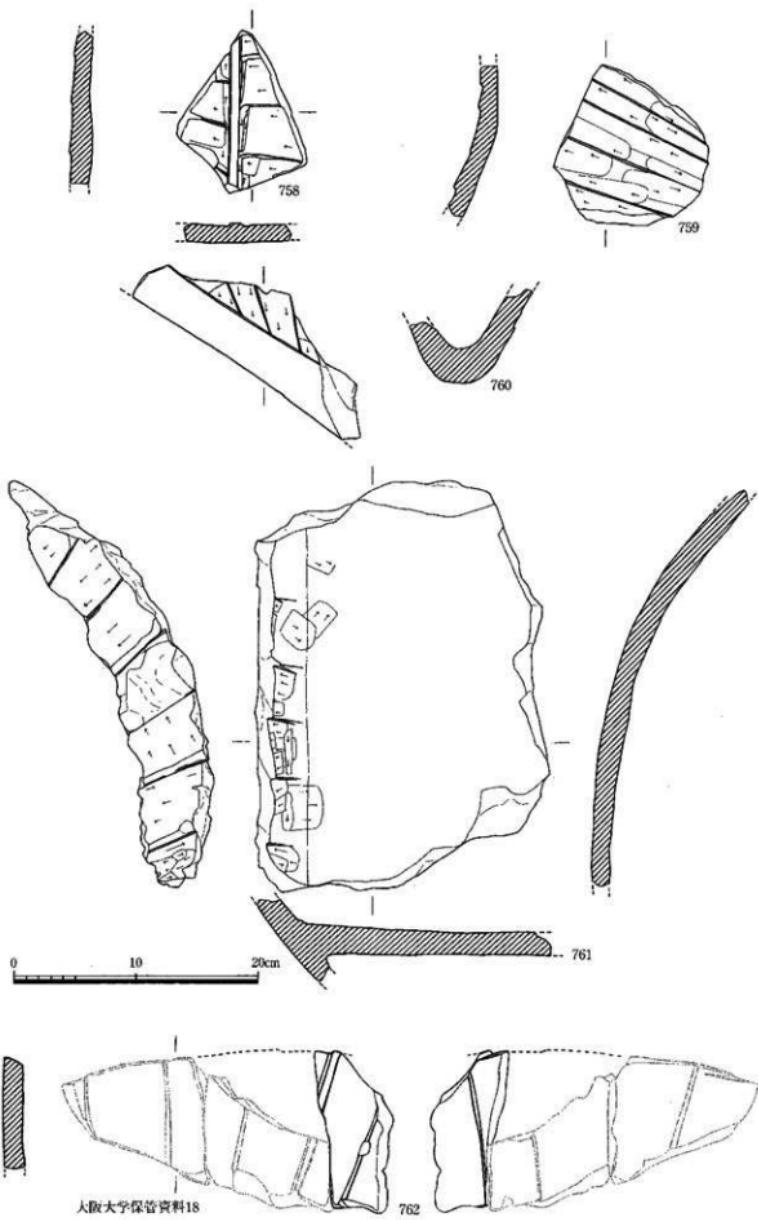
第97図 C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・6（平瓦）



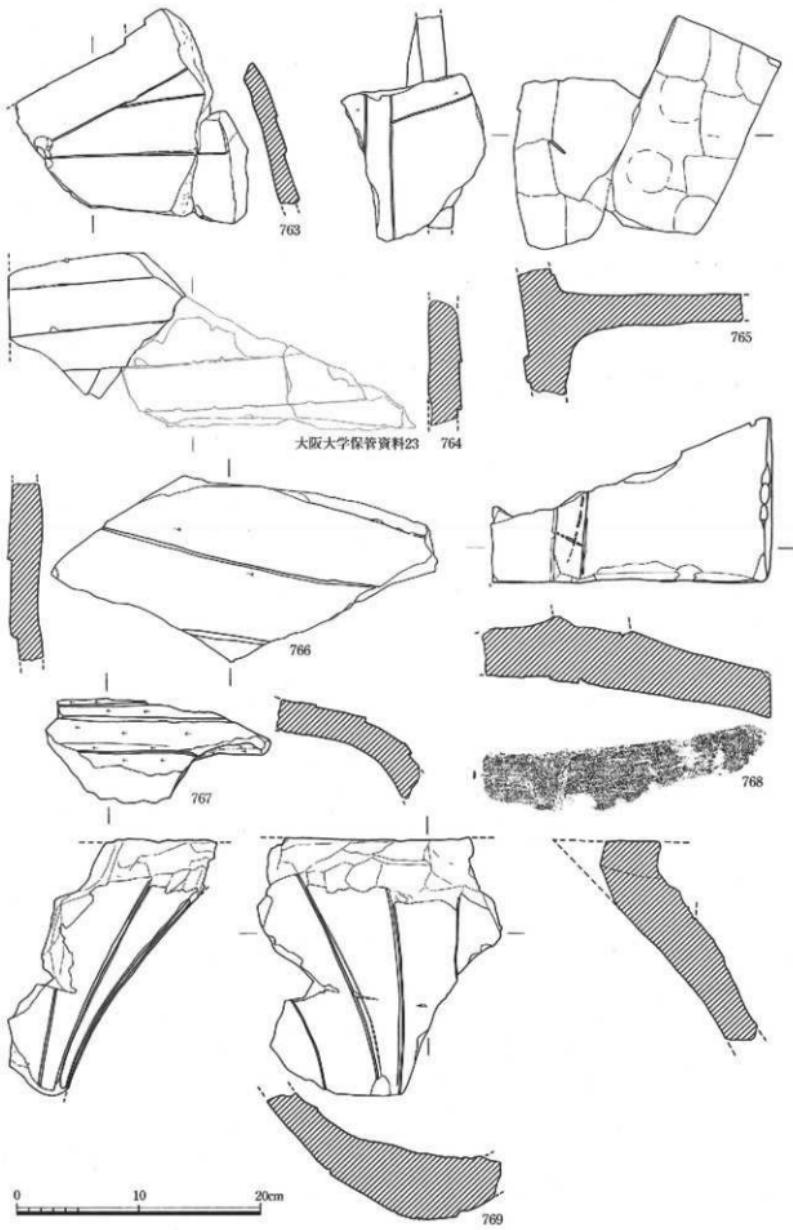
第98図 C区、南門瓦落ち出土瓦実測図・7 (梵斗瓦)



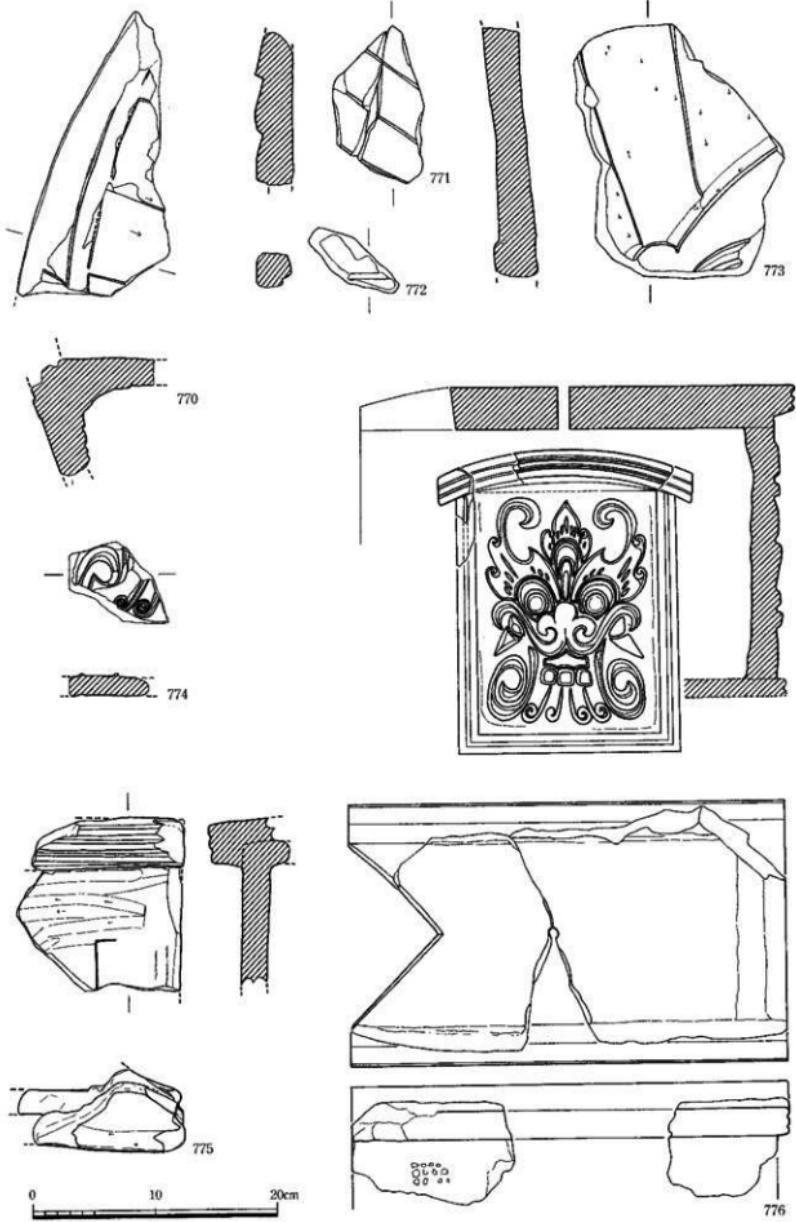
第99図 道具瓦実測図・1 (面戸瓦・贊斗瓦)



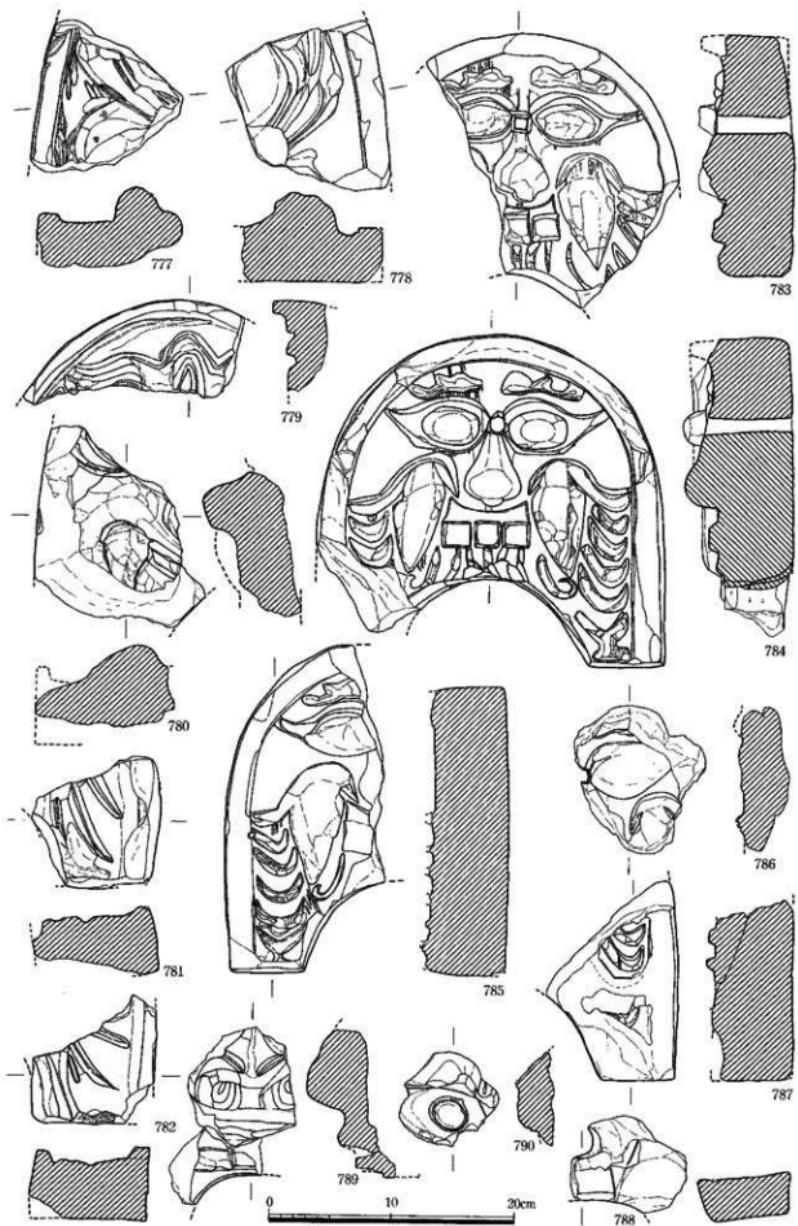
第100図 道具瓦実測図・2(鶴尾)



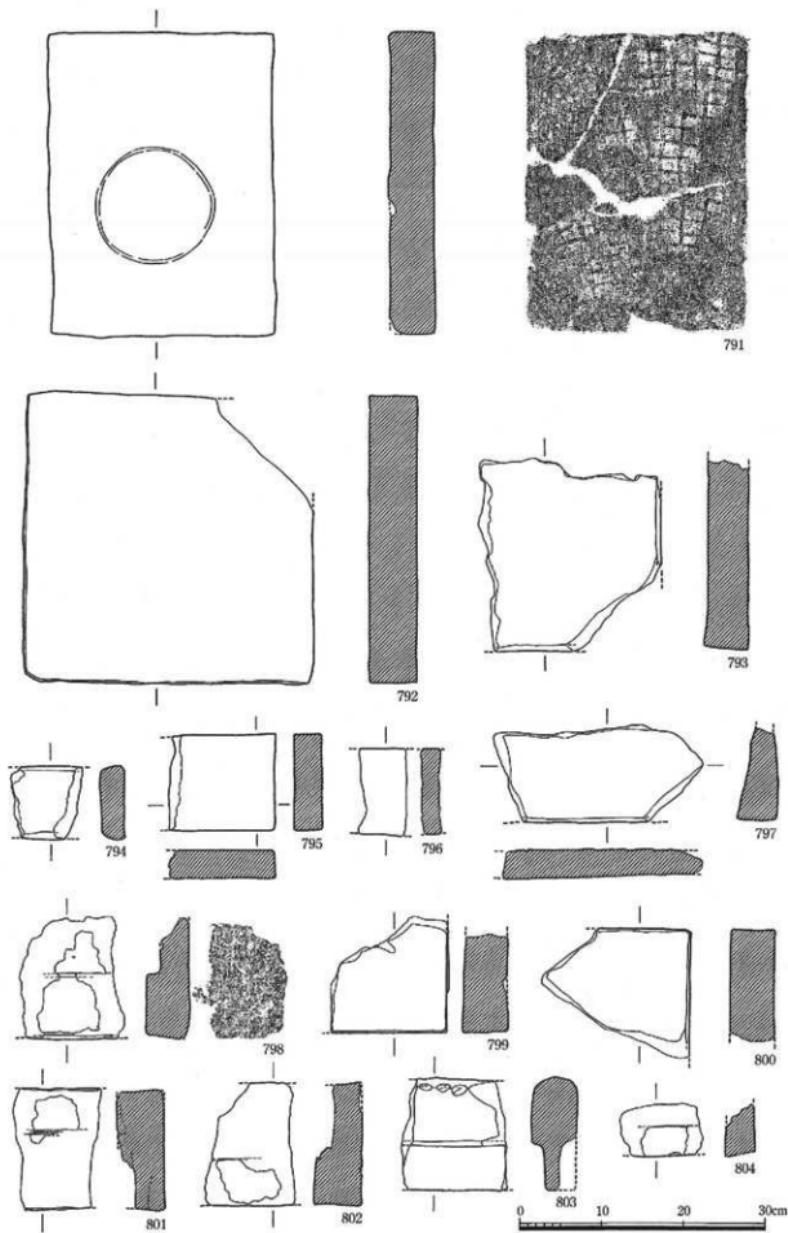
第101図 道具瓦実測図・3(鶴尾)



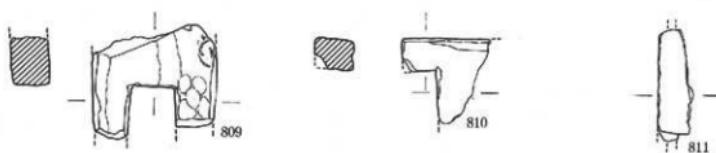
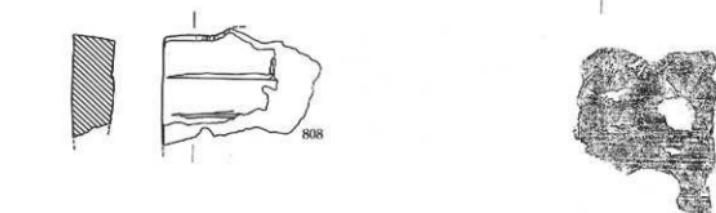
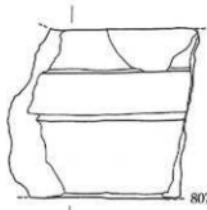
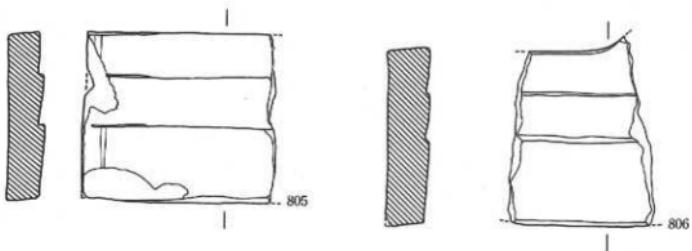
第102図 道具瓦実測図・4 (鶴尾・隅木蓋瓦)



第103図 道具瓦実測図・5(鬼瓦)



第104図 墓実測図



0 10 20cm

第105図 不明瓦製品実測図

98年度調査(98021)遺物觀察表①

調査番号	Pno.	種類	特徴	法規()は復元後 寸法(幅・高さ) のうち	色	土	性状	残存率	備考		
					(内・外・底) N6/0灰	(内・外・底) N6/0灰	(内・外・底) N6/0灰	(内・外・底) N6/0灰	(内・外・底) N6/0灰	(内・外・底) N6/0灰	
第8回 28 243 遺物器	杯蓋	(6.4)	残1.9	(内・外・底) N6/0灰	密	1 mm以下の白色砂粒 を含む。	良好	10%	反転復元		
第8回 29 226 遺物器	杯身	(8.7)	残3.1	(内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) (12.0)	堅		良好	25%	反転復元		
第8回 30 228 遺物器	杯身	(9.7)	3.5	(内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) (12.0)	密		良好	25%	反転復元		
第8回 31 227 土器器	皿	(15.0)	残3.05	(内・外・底) SYRA/5赤褐色	やや堅	石英・カシリ種、 石英を含む。	良好	30%	反転復元、内外面 施の為転写不明		
第10回 32 226 遺物器	盤	(39.9)	残31.1	(内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) N6/0灰	密	1 mm以下の白色砂粒 を少々含む。1 mm以下の 黑色砂粒を多く含む。		25%	反転復元		
第10回 33 643 遺物器	盤		残4.2	(内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) SYRA/5赤褐色	堅	1~4 mmの白色砂粒 及び小石を含む。	良好	5%	反転復元		
第10回 34 642 遺物器	杯身	(10.0)	2.8	(内・外・底) N6/0灰	密	1 mm以下の白色砂粒 を含む。	良好	20%	反転復元、ロクロ回 転右方向		
第13回 35 220 土器器	新器皿	盤	6.5	10.9	(内・外・底) (外・底) 2.50YR 4/1灰白	やや堅	0.1~3 mmの白色 砂粒を含む。	良好	95%	ロクロ回転右方向	
第13回 36 223 遺物器	盤	(23.2)	残8.45	(内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) SYRA/5赤褐色	密		良好	25%	反転復元、器皿内面 へ記号、転写本		
第13回 37 224 土器器	盤	14.3	3.9	(内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) SYRA/4C1灰白	密	1 mm以下の白色砂粒 を含む。	良好	完形	型み大、外面黒斑		
第13回 38 246 土器器	盤	(14.4)	3.7	(内・外・底) SYRA/5赤褐色	密	1 mm以下の白色 砂粒を含む。	良好	20%	反転復元		
第13回 39 221 土器器	盤	(21.7)	残3.7	(内・外・底) SYRA/3C1灰白	やや堅	石英・カシリ種、 石英・母貝を含む。	良好	口 緩 部 5%	反転復元		
第14回 40 230 土器器	皿	(15.3)	残2.45	(内・外・底) 2.50YR 4/3赤褐色 (内・外・底) 2.50YR 4/1灰白	密	やや堅	カシリ種、石英、 母貝を含む。	良好	20%	一部反転復元	
第14回 41 231 土器器	皿	(14.1)	残5.55	(内・外・底) SYRA/5赤褐色	やや堅	石英・カシリ種を 含む。	良好	25%	反転復元		
第16回 44 247 土器器	杯	(13.0)	残3.3	(内・外・底) 7.50YR 4/1灰白 (内・外・底) 7.50YR 4/1灰白	密	1 mm以下の白色砂粒 及びカシリ種を含む。	良好	30%	反転復元		
第16回 45 248 土器器	杯	(13.4)	残3.5	(内・外・底) 7.50YR 4/1灰白 (内・外・底) 7.50YR 3C1灰白	密	1 mm以下の白色砂粒 を含む。	良好	30%	反転復元		
第16回 46 249 土器器	杯	14.6	3.6	(内・外・底) 10YR 7/1灰白 (内・外・底) 10YR 7/1灰白	密	1 mm以下の白色砂粒 及びカシリ種を含む。	良好	80%			
第16回 47 232 遺物器	杯身	(14.0)	3.4	(内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) 2.50YR 4/1灰白	密	1 mm以下の白色砂粒 を含む。	良好	10%	反転復元、ロクロ回 転右方向		
第16回 48 226 遺物器	杯身	(14.0)	3.95	(内・外・底) N7/0灰 (内・外・底) 2.50YR 4/1灰白	密	1~2 mmの白色 砂粒を含む。	良好	20%	反転復元、外面白点 施		
第16回 49 234 黒色土器	碗	残3.8	(10.4)	(内・外・底) SYRA/1灰白 (内・外・底) SYRA/1灰白	密	1 mm以下の白色 砂粒を含む。	良好	10%	反転復元		
第16回 50 233 土器器	ミニトマト 高杯	残3.8	5.4	(内・外・底) SYRA/5赤	密	1 mm以下の白色砂粒 及びカシリ種を含む。	良好	40%	一部反転復元		
第19回 52 148 土器器	杯	(24.2)	残8.2	(内・外・底) 10YR 4/3に少し灰白 (内・外・底) 7.50YR 4/1灰白	やや堅	石英・カシリ種を 含む。	良好	口 緩 部 付近 10%	反転復元		
第19回 53 149 土器器	把手 杯	(26.0)	残11.8	(内・外・底) SYRA/6赤褐色	密	1 mm以下のカシリ種 を少量含む。	良好	70%、外 部 30%、 底部 10%	一部反転復元、外 面に無頭、吉字柄手 形有		
第25回 54 141 土器器	杯	13.6	3.2	(内・外・底) SYRA/6赤褐色 (内・外・底) SYRA/6赤褐色	密	カシリ種・チャート・ 石英を含む。	良好	90%			
第25回 55 140 土器器	杯	14.4	3.8	(内・外・底) 10YR 4/3に少し灰白 (内・外・底) SYRA/6赤褐色	密	カシリ種・チャート・ 石英を含む。	良好	98%			
第28回 56 228 土器器	ミニトマト 高杯	7.2	4.25	(内・外・底) SYRA/5赤	密	石英を含む。	良好	80%	保付箋		
第30回 57 158 遺物器	杯蓋	(11.4)	3.6	(内・外・底) N6/0灰	密	1 mm以下の砂粒を少々 と極少、黑色砂粒を少量 含む。	良好	20%	反転復元		
第30回 58 159 遺物器	杯蓋	13.9	残3.6	(内・外・底) N6/0灰 (内・外・底) N6/0灰	密	1 mm以下の砂粒を少々 と極少、黑色砂粒を少量 含む。	良好	55%	一部反転復元、外 面に自然地付箋		
第36回 59 161 遺物器	杯身	8.3	残1.8	(内・外・底) N7/0灰	密	1~2 mmの黑色の繊 を少々と、1~2.5 mmで白色 の繊をごく少含む。	良好	25%	完形		
第30回 60 159 遺物器	盤	(15.3)	残1.8	(内・外・底) SYRA/5赤	密		良好	30%	反転復元、内面を裁 用紙		
第30回 61 180 遺物器	杯身	(16.0)	残2.9	(内・外・底) N6/0灰	密	1~2 mmで白色の繊 を多く含み、黑色砂粒を少 量含む。	良好	25%	反転復元		
第30回 62 126 遺物器	杯身	(17.0)	残2.15	(内・外・底) SYRA/5赤	粗	0.1~3 mmの白色砂粒 を含む。	良好	5%	反転復元、ロクロ回 転右方向		
第30回 63 127 遺物器	盤	(8.0)	1.8	(内・外・底) N6/0灰	密	やや堅	良好	25%	一部反転復元。ロク ロ回転右方向		
第30回 64 157 遺物器	小皿	(9.1)	2.4	(内・外・底) N7/0灰	密	黑色砂粒を多く含む。	良好	30%	反転復元		
第30回 65 151 遺物器	杯身	12.1	3.1	(内・外・底) N6/0灰	密	0.5~2 mmで白色の繊 を多く含み、黑色砂粒を少 量含む。	良好	80%			
第30回 66 124 遺物器	杯身	(12.0)	4.3	高台付 (8.2)	密	(内・外・底) N7/0灰白	良好	20%	反転復元		
第30回 67 123 遺物器	杯身	(13.7)	4.3	高台付 (8.2)	密	やや堅	良好	10%	反転復元		
第30回 68 152 遺物器	杯身	(13.6)	3.85	(内・外・底) N6/0灰	密	1~3 mmで白色砂粒 を少量含む。	良好	40%	反転復元		

98年度調査（98021）遺物観察表②

発掘場所	Pno.	種類	基盤	高さ(内・外)とその他の指標	色	土	構成	残存率	備考	
									口径	最高
第30回	69	154	須恵器	杯身 (19.2)	5.85 (14.1)	(内) 2.5Y7/1灰白 (外) N5/0灰 (底) N7/0灰白	西 1~2 mmの白色砂粒 と黒色砂粒を少許含み、 ~4 mmで白色の砂を多く 含む。	良好	40%	反転復元
第30回	70	155	須恵器	杯身 (17.0)	4.95 (12.5)	(内) 5P8T/1灰青 (外) N6/0灰 (底) N5/0灰	西 1.5~7 mmで白色の砂 と少許含み、1 mmで白色 を多く含む。	良好	40%	反転復元、高台部に ヘラ記号有
第30回	71	165	須恵器	蓋 (22.0)	3.6	(内・外・底) 6P9T/1特青灰	西 少許含み、1 mmで白色 を多く含む。	良好	10%	反転復元、ロクロ回 転方向
第30回	72	166	須恵器	長颈甕 (7.0)	底10.1	(内) 5P8T/1灰白 (外) 5P8T/1灰 (底) N7/0灰	西 白・黒色砂粒を含む。	良好	80%	反転復元、ロクロ回 転方向、内外自然無付属、 割離
第30回	73	162	須恵器	甕 (19.4)	施2.7	(内) 5P8T/1灰 (外) N5/0灰 (底) 10Y7R/4に付する施	西 白	良好	口部	
第30回	74	158	須恵器	甕 (16.4)	施6.6 (11.0)	(内・外) N8/0灰白 (外) N8/0灰	西 1~2 mm以下の白色砂粒 を多く含む。	良好	高台部 付近 40%	反転復元
第30回	75	173	須恵器	甕 (8.05)	高台性 S.3	(内・外・底) N7/0灰	西 1~2 mm以下の白色砂粒 を多く含む。	良好	東部 東部 40%	ロクロ回転右方向
第30回	76	169	須恵器	甕 (11.0)	高台性 S.3	(内・外・底) N8/0灰	西 白色砂粒を含む。	良好	底部 底部 40%	反転復元、ロクロ回 転右方向
第30回	77	171	須恵器	甕 (10.35)	高台性 S.05	(内) N7/0灰白 (外) 7.5Y7/1灰白 (底) N8/0灰	西 2 mm以下の白灰・黒 色砂粒を多く含む。	良好	東部 東部 40%	ロクロ回転右方向、 内部に付着物有
第30回	78	172	須恵器	甕 (13.05)	高台性 S.05	(内) 7.5Y7/1灰 (外) 7.5Y7R/1灰黒	西 4 mm以下の白灰・淡 色砂粒を多く含む。	良好	年 部 年 部 70%	ロクロ回転右方向
第30回	79	180	須恵器	甕 (12.0)	高台性 12.8	(内・外) N8/0灰 (外) N8/0灰	西 やや白 0.1~3 mmの白色 砂粒を含む。	良好	底部 底部 55%	一部反転復元、ロク ロ回転右方向
第30回	80	187	須恵器	甕 (6.9)	施7.1	(内) 5P8T/1灰 (外) 5P8T/1灰 (底) 5H4T/3連青灰	西 やや白 色白砂粒を含む。	良好	底部 底部 55%	一部反転復元、底部 内面自然無付属、 割離
第30回	81	163	須恵器	甕 (4.05)	高台性 14.66	(内・外) 5P8T/1灰白	西 0.1~2 mmの白色砂粒 を含む。	良好	底部 底部 55%	ロクロ回転右方向、 底部成形後底丸化
第30回	82	125	須恵器	瓶 (3.7)	高台性 3.7	(内) 5P8T/1灰 (外) 5P8T/1灰 (底) N8/0灰	西 白	良好	底部 底部 55%	反転復元
第30回	83	163	須恵器	瓶 (3.35)	高台性 3.9	(内・外・底) N7/0灰	西 白色砂粒を含む。	良好	底部 底部 55%	反転復元
第30回	84	164	須恵器	小瓶 底丸化 瓜口瓶	高台性 4.8	(内) N7/0灰白 (外) N7/0灰白 (底) N8/0灰	西 やや白	良好	底部 底部 50%	一部反転復元、ロク ロ回転右方向
第30回	85	174	須恵器	甕 (2.0)	施12.2	(内) 7.5Y7/1灰白 (外) 7.5Y7/1灰白 (底) N8/0灰	西 2 mm以下の白・灰・ 黑色砂粒を多く含む。	良好	口部 口部 20%	反転復元
第30回	86	103	須恵器	甕 (23.6)	施7.8	(内) 5P8T/1灰 (外) 5P8T/1灰 (底) 5H4T/3連青灰	西 白	良好	底部 底部 10%	ロクロ回転右方向、 底部成形後底丸化
第30回	87	175	須恵器	甕 (21.4)	施7.3	(内) 7.5Y7/1灰白 (外) 10Y7R/1灰白	西 3 mm以下の白・灰・ 黑色砂粒を多く含む。	良好	口部 口部 15%	ロクロ回転右方向、 底部成形後底丸化
第31回	88	177	須恵器	甕 (17.0)	施7.9	(内) 7.5Y7/1灰 (外) 7.5Y7/1灰 (底) 7.5Y7/1灰白	西 1 mm以下の白・灰・ 黑色砂粒を少許含む。	良好	口部 口部 10%	反転復元、底部 内面自然無付属、 割離
第31回	89	170	須恵器	甕 (17.2)	施14.4	(内・外) N7/0灰白 (外) N7/0灰白	西 やや白 黒色砂粒を含 む	良好	底部 底部 40%	反転復元
第31回	90	179	須恵器	甕 (22.0)	施20.0	(内) 7.5Y7/1灰 (外) N7/0灰白 (底) 7.5Y7/1灰白	西 1 mm以下の白色砂粒、 1 mm以下の黑色砂粒を少 許含む。	良好	口部 口部 10%	反転復元
第31回	91	182	土師器	甕 (19.0)	施3.6	(内) 2.5Y7R/4/1須恵器 (外) 2.5Y7/3灰白 (底) 5H4T/3連青灰	西 やや白 長石・カシリ繊維 を含む。	良好	45%	反転復元、墨書き
第31回	92	187	土師器	甕 (18.0)	施3.4	(内・外・底) 10Y7R/3に付する施	西 1 mm以下の白色砂粒 及びカシリ繊維を含む。	良好	30%	
第31回	93	183	土師器	甕 (15.0)	2.85	(内) 10Y7R/3に付する施 (外) 5YRS/3/1須恵器 (底) 5H4T/3連青灰	西 長石・カシリ繊・石英 を含む。	良好	50%	
第31回	94	185	土師器	甕 (17.0)	施3.5	(内・外) 2.5Y7R/4/1に付する施 (外) 2.5Y7R/4/1須恵器	西 石英・カシリ繊・石英 を含む。	良好	5%	反転復元
第31回	95	181	土師器	甕 (14.0)	2.2	(内) 2.5Y7R/4/1須恵器 (外) 10Y7R/3に付する施 (底) 2.5Y7R/4/1Cに付する施	西 やや白 石英・カシリ繊・石英 を含む。	良好	60%	反転復元
第31回	96	180	土師器	甕 (30.0)	施3.0	(内・外) 2.5Y7R/2/1須恵器	西 1 mm以下の白・灰色 砂粒を含む。	良好	6%	反転復元
第31回	97	115	土師器	甕 (15.8)	2.5	(内・外) 5YRS/6/1須 (外) 7.5YR/6/1須	西 やや白 石英・カシリ繊・石英 を含む。	良好	50%	墨書き
第31回	98	210	土師器	甕 (22.0)	2.5	(内) 7.5YR/6/1須 (外) 7.5YR/6/1須 (底) 7.5YR/6/1須	西 長石・カシリ繊・チー トを含む。	良好	夏 30	墨書き
第31回	99	118	土師器	甕 (15.0)	2.5	(内・外) 2.5Y7R/6/1須 (外) 2.5Y7R/6/1須 (底) 7.5Y/6/1須	西 長石・カシリ繊・チー トを含む。	良好	夏 30	墨書き
第31回	100	116	土師器	甕 (13.7)	3.6	(内・外) 2.5Y7R/6/1須 (外) 2.5Y7R/6/1須 (底) SYR/2/1須	西 やや白 石英・カシリ繊 を含む。	良好	45%	反転復元
第31回	101	214	土師器	高杯 (14.0)	4.3	(内・外) 2.5Y7R/2/1須 (外) 2.5Y7R/2/1須 (底) SYR/2/1須	西 チート・カシリ繊・チー トを含む。	良好	10%	
第31回	102	120	土師器	施土器 (9.0)	3.5	(内) 2.5Y7R/2/1須 (外) N7/0灰白	西 0.1~3 mmの白・黑色 砂粒を含む。	良好	口部 口部 25%	反転復元
第31回	103	189	土師器	高杯 (10.5)	4.0	(内) 2.5Y7R/2/1須 (外) 2.5Y7R/2/1須	西 1 mm以下の白・灰・ 黑色砂粒及びカシリ繊を含 む。	良好	30%	墨書き、斜面接合部に ヘラ状工具によるナ サ工痕が全周する。
第31回	104	204	土師器	小型甕 (7.0)	4.5	(内・外) SYR/6/1須	西 チート・高石・石英 を含む。	良好	10%	一部反転復元
第31回	105	213	土師器	施(9.0)	3.4	(内・外) 10Y7R/4/1須 (外) 7.5YR/6/1須	西 チート・高石・石英 を含む。	良好	—	

98年度調査（98021）遺物観察表③

件號番号	Pno.	種類	容積	法量(目底)	最高(頂部)	は頂部	色	陶	地	焼成	残存率	備考
第31回 106 196 土器群 片口鉢	(23.1)	西	12.26				(内) 7.5YR7/3Cにぶい黒 (外) 10YR7/3Cにぶい赤褐 (底) 2.5YR5/9明赤	やや粗 磁石・クサリ礫、 赤物を含む。	良好	38%	反転復元	
第32回 107 203 土器群 鋼	(13.0)	西	4.9				(内) 10YR7/3Cにぶい黒 (外) 10YR7/3Cにぶい赤褐 (底) 2.5YR5/9明赤	密 クサリ礫・チャート・ 長石を含む。	良好	10%		
第32回 108 117 土器群 鋼	(15.0)	西	4.8				(内) 10YR5/5灰黒青 (外) 2.5YR5/9赤褐 (底) 2.5YR7/10黒	やや粗 磁石・藍母・石英 を含む。	良好	20%	反転復元、外表面 剥離	
第32回 109 205 土器群 鋼	(17.0)	西	6.0				(内) 7.5YR7/4Cにぶい黒 (外・底) 7.5YR5/6灰	密 クサリ礫・チャート・ 長石・藍母・1~2 mmの 白色砂粒・小石を含む。	良好	10%		
第32回 110 208 土器群 鋼	(16.0)	西	8.0				(内・外・底) 2.5YR4/6赤	密 良好	10%			
第32回 111 3 土器群 鋼	(19.0)	西	5.4				(内) EYR8/6灰 (底) EYR3/10黒	密 クサリ礫・チャート・ 長石・藍母・1~2 mmの 白色砂粒・小石を含む。	良好	10%	反転復元	
第32回 112 211 土器群 鋼	(16.0)	西	7.0				(内) EYR6/8灰 (外・底) EYR7/5赤	密 クサリ礫・チャート・ 長石を含む。	良好	10%	反転復元	
第32回 113 203 土器群 鋼	(16.0)	西	5.9				(内) 10YR7/2Cにぶい黒 (外) 7.5YR7/3Cにぶい黒	密 チャート・クサリ礫、 長石・藍母・1~2 mmの 白色小石を含む。	良好	10%		
第32回 114 207 土器群 鋼	(17.0)	西	8.3				(内・底) 7.5YR4/4にぶい黒 (外) 2.5YR5/9明赤	密 クサリ礫・チャート・ 長石・藍母・1~2 mmの白色小 石を含む。	良好	10%		
第32回 115 120 土器群 鋼	(16.0)	西	7.4				(内・外) 2.5YR4/6赤	やや密 磁石・石英・藍母 を含む。	良好	底 部付 近10%	反転復元	
第32回 116 215 土器群 鋼	(29.0)	西	5.5				(内) 7.5YR7/4Cにぶい黒 (外) 7.5YR5/6赤褐 (底) 7.5YR7/4Cにぶい黒	密 クサリ礫・チャート・ 長石・藍母・1~2 mmの白色小 石を含む。	良好	10%	反転復元	
第32回 117 209 土器群 鋼	(26.0)	西	8.8				(内) 7.5YR7/4Cにぶい黒 (外) 7.5YR7/3Cにぶい黒 (底) SYR6/4Cにぶい黒	密 クサリ礫・チャート・ 長石・藍母・1~2 mmの白色小 石を含む。	良好	10%		
第32回 118 216 土器群 鋼	(30.1)	西	4.3				(内・外) EYR6/6灰 (底) SYR6/4Cにぶい黒	密 チャート・長石を含む。	良好	10%	反転復元	
第32回 119 108 土器群 鋼	(33.2)	西	13.5				(内・外) 2.5Y7/2灰 (底) 7.5YR4/6灰	やや粗 磁石・クサリ礫、 藍母・石英を含む。	良好	20% 部・一部	反転復元	
第32回 120 197 土器群 手平付鉢	(33.2)	西	9.05				(内・外・底) 2.5YR6/6灰	粗 磁石・クサリ礫・石英・ 藍母を含む。	良好	20%	反転復元	
第32回 121 196 土器群 手手							(内) 7.5YR7/3Cにぶい黒 (外) 7.5YR7/2Cにぶい黒	密 クサリ礫・チャート・ 長石を含む。	良好	20%	反転復元	
第32回 122 212 土器群 手手							(内・外) 7.5YR7/2Cにぶい黒	密 クサリ礫・チャート・ 長石を含む。	良好			
第32回 123 122 土器群 羽釜	(26.0)	西	7.0				(内・底) 7.5YR4/4にぶい黒 (外) 7.5YR5/6灰	やや粗 磁石・藍母・クサ リ礫・石英を含む。	良好	口 端 周囲20%	反転復元	
第32回 124 219 土器群 羽釜	(26.0)	西	7.0				(内・外) 5YR6/6灰	粗 磁石・クサリ礫・チャ ートを含む。	良好	20%	反転復元	
第32回 125 121 土器群 羽釜	(25.0)	西	7.0				(内) 2.5YR4/3Cにぶい黒 (外) 2.5YR4/4Cにぶい黒	やや密 磁石・藍母・石英・ クサリ礫を含む。	良好	口 端 周囲20%	反転復元	
第32回 126 192 土器群 羽釜	(27.0)	西	7.2				(内) 7.5YR5/6Cにぶい黒 (外) 7.5YR6/3Cにぶい黒	密 1 mm以下の白・灰色 砂粒及び藍母・クサリ礫を 含む。	良好	5%	反転復元	
第32回 127 195 土器群 羽釜	(12.0)	西	4.4				(内) 7.5YR6/4Cにぶい黒 (外) 7.5YR6/4Cにぶい黒 (底) 10YR7/3Cにぶい黒	密 1 mm前後以下の白色 砂粒及び藍母を含む。	良好	5%	反転復元	
第32回 128 119 黒色土器 棺 (A)	(14.0)	西	6.4				(内) N2/6灰 (外) N2/7灰 (底) N4/8灰	やや粗 磁石・石英を含む。	良好	10%	反転復元	
第32回 129 200 黒色土器 棺	(14.0)	5	6.4				(内) N2/6灰 (外) N2/7灰 (底) N4/8灰	密 磁石・藍母・石英を含む。	良好	50%	体部専動実測	
第32回 130 199 黒色土器 棺	(14.0)	5	7.0				(内) N2/6灰 (外) N2/7灰 (底) N4/8灰	やや粗 磁石・石英を含む。	良好	30%	反転復元	
第33回 131 153 瓶頸器 杯身	(13.0)	4.2	(9.86)				(内) N2/6灰 (外) N2/7灰	密 1 mm以下の白・灰色 砂粒及び藍母を含む。	良好	50%	一部反転復元	
第33回 132 176 瓶頸器 鋼	(21.0)	西	5.5				(内) N2/6灰 (外) N2/7灰 (底) N7/8灰	やや粗 磁石・藍母・石英を含む。	良好	口 端 部付 15%	反転復元	
第33回 133 213 土器群 鋼	(15.0)	西	7.0				(内) 10YR6/3Cにぶい黒 (外) 10YR7/3Cにぶい黒	密 チャート・藍母・長石 を含む。	良好	10%	反転復元	
第33回 134 217 土器群 羽釜	(17.0)	西	5.6				(内・外・底) 7.5YR4/4にぶい黒	密 磁石・クサリ礫・チャ ート・長石を含む。	良好	10%	爆破壘、反転復元	
第33回 135 193 土器群 羽釜	(16.0)	西	6.5				(内) 7.5YR6/4Cにぶい黒 (外) 7.5YR6/4Cにぶい黒 (底) 10YR7/3Cにぶい黒	密 1 mm前後の白・灰色 砂粒及びクサリ礫を含む。	良好	5%	反転復元	
第33回 136 194 土器群 羽釜	(16.0)	西	11.4				(内) EYR6/6灰 (外) EYR4/6Cにぶい赤褐	密 1 mm前後の白・灰 色砂粒及び藍母を含む。	良好	15%	反転復元	
第33回 137 184 土器群 四	(17.0)	西	3.55				(内) 10YR6/2灰	密 磁石・藍母・石英を含む。	良好	50%	反転復元	
第33回 138 181 土器群 鋼	(12.0)	西	3.8				(内) 10YR6/2灰 (外) 10YR6/2灰 (底) 7.5YR6/4Cにぶい黒	密 1 mm以下の白・灰色 砂粒及びクサリ礫を含む。	良好	20%	反転復元	
第33回 139 186 黒色土器 棺	(13.0)	西	7.55				(内) N3/6灰 (外) N3/7灰 (底) 2.5YR6/2白	密 長石・石英・藍母を含む。	良好	5%	反転復元	
第35回 140 66 土器群 高杯							(内) 7.5YR6/6灰 (外) EYR6/6灰 (底) 2.5YR6/6明赤	密 0.5~1 mm程度の赤 色砂粒を少々含む。	良好	底 部 30%	底部裏面に爆破壘	

98年度調査(98021)遺物観察表④

件番号	品名	種類	特徴	測定(目盛り)		色	土	感	腐朽率	備考
				高さ	幅					
第36回	141 148	須恵器	甕	(21.0)	37.1	(内・外・底) N7/0灰	黒	良好	26%	反転復元
第36回	142 147	須恵器	甕	24.4		(内・外・底) N8/0灰	やや黒 0.1~2 mmの白・灰・褐色砂粒を含む。	良好	80%	クロロ回転右方向
第36回	143 146	土器	手平付 (26.7)	38.35		(内・外) 2.5Y7/1焼黄 (外) 2.5Y7/0灰	やや黒 0.1~2 mmの白・グリーン・土色を含む。	良好	35%	反転復元
第36回	144 40	土器	甕	(18.6)	7.2	(内・外・底) SY7/0灰	黒 1 mm程の白色の砂を多く含む。	良好	50%	反転復元
第40回	145 70	須恵器	甕	(19.0)	38.6	(内・外) N7/0灰白	黒 0.5~3 mmの砂粒を多く含む。	良好	40%	反転復元
第40回	146 56	須恵器	甕	11.1	3.25	(内・外) N8/0灰	黒 1 mm程の白色の砂を多く含む。	良好	60%	
第40回	147 65	須恵器	甕	(10.6)	3.7	(内・外) N8/0灰	黒 1~3 mmの砂を含む。	良好	50%	外面上ヒダスキの跡有、反転復元
第40回	148 65	須恵器	甕	(12.4)	3.6	(内) N4/0灰 (外) N5/0灰	黒 0.5~1 mmの白色の砂を多く含む。	良好	70%	反転復元
第40回	149 72	須恵器	甕	(10.2)	3.9	(内・外) N8/0灰 (外) SHF4/1灰黒	黒 0.5~1 mm程の白色の砂と灰・白・少々黄色有。	良好	26%	外面上自然有者、反転復元
第40回	150 60	須恵器	甕	10.4	3.56	(内・外) N5/0灰	黒 5 mm程の白色の砂と0.5~2 mm程の灰・灰色砂粒を多く含む。	良好	はぼ 完形	
第40回	151 71	須恵器	甕	9.7	3.2	(内) N7/0灰白 (外) N5/0灰	黒 1 mm程の白・灰色の砂を多く含む。	良好	75%	底部にヘラ記号有
第40回	152 90	須恵器	甕	14.4	2.9	(内) N7/0灰白 (外・底) N6/0灰	黒 3 mm以下の白・灰色小石粒を多く含む。	良好	70%	
第40回	153 94	須恵器	甕	14.9	2.7	(内・外・底) N7/0灰白	黒 0.2~4 mmの白・灰色の砂を多く含む。	良好	70% (つまみ 形)	クロロ回転左方向
第40回	154 91	須恵器	甕	(15.0)	3.5	(内) N5/0灰 (外・底) N6/0灰	黒 4 mm以下の白・灰・黑色小石粒を多く含む。	良好	70%	一層反転復元、クロロ回転右方向
第40回	155 99	須恵器	甕	(17.0)	2.6	(内) SGY7/19/オリーブ灰 (外) SGY8/17/リーブ灰 (底) SGY6/4C/灰・白・黒	やや黒 0.1~2 mmの白色砂粒を含む。	良好	30%	反転復元、クロロ回転右方向
第40回	156 97	須恵器	甕	(11.4)	2.7	(内・外・底) N8/0灰	黒 1~2 mmの白・灰色砂粒を多く含む。	良好	45%	反転復元、クロロ回転右方向
第40回	157 93	須恵器	甕	14.3	2.5	(内) N8/0灰 (外・底) N8/0灰	黒 1~2 mmの白・灰色砂粒を多く含む。	良好	0%	クロロ回転左方向
第40回	158 92	須恵器	甕	(15.8)	2.7	(内) N8/0灰 (外) N7/0灰白	黒 1~2 mmの白・灰色砂粒を多く含む。	良好	50%	一部反転復元、クロロ回転右方向
第40回	159 96	須恵器	甕	(15.0)	2.3	(内・外・底) N4/0灰	黒 1~2 mmの白・灰色砂粒を多く含む。	良好	45%	反転復元、クロロ回転左方向
第40回	160 61	須恵器	杯身	9.4	2.9	受部径 11.3	黒 0.2~4 mmの白・灰色の砂を多く含む。	良好	75% (つまみ 形) (受 部 1/6 欠損)	外面上自然有者
第40回	161 75	須恵器	杯身	11.15	3.25	(内) N8/0灰 (外) N4/0灰	黒 1~2 mmの白・灰・黑色砂粒を多く含む。	良好	75%	外面上自然有者
第40回	162 77	須恵器	杯身	(10.2)	38.4	(内) 7.5Y7/1灰 (外) 10R7/0灰白 (底) 7.5Y8/0灰白	黒 1 mmの白・灰・黑色砂粒を多く含む。	良好	40%	反転復元、外面上の受部より口部附近で黒色。
第40回	163 78	須恵器	杯身	(9.8)	3.4	(内) N4/0灰 (外) 10R9/4/1繪青釉 (底) 10R9/4/赤	黒 1~3 mm以下の白・灰・黑色砂粒を多く含む。	良好	25%	反転復元
第40回	164 69	須恵器	杯身	(12.6)	38.35	(内) SY7/1灰白 (外) N7/0灰白	黒 1~7 mmの白色の砂を多く含む。	良好	30%	外面上全体及び内面底部に焼付層、反転復元
第40回	165 83	須恵器	杯身	(18.0)	4.1	底径 (10.6)	黒 1 mm以下の白・灰・黑色砂粒を多く含む。	不良	40%	反転復元
第40回	166 58	須恵器	杯身	9.5	3.3	(内・外) N8/0灰 (外) N8/0灰	黒 1~3 mmの台形の砂と0.5~2 mmの白色の砂を少々含む。	良好	80%	
第40回	167 73	須恵器	杯身	(10.0)	3.35	(内・外) N7/0灰白	黒 0.5~4 mm程の白色的砂と少々含む。	良好	50%	反転復元
第40回	168 64	須恵器	杯身	(12.8)	38.3	(内) N7/0灰白 (外) N8/0灰	黒 1~3 mmの白色の砂と少々含む。	良好	35%	内面上口部附近に焼付層、反転復元
第40回	169 66	須恵器	杯身	10.6	4.25	高台径 (7.05)	黒 1 mm以下の白・灰色砂粒を少々含む。	良好	60%	
第40回	170 67	須恵器	杯身	(8.7)	3.3	(内) SP9/6/青灰 (外) N8/0灰 (底) N7/0灰白	黒 0.5~2 mmの砂を少々含む。	良好	75%	内外面白縁部分に焼付層、一部反転復元
第40回	171 74	須恵器	杯身	(10.4)	4.15	(内・外) N8/0灰	黒 1 mm程の白色の砂と2 mm程の白色砂粒を多く含む。	良好	25%	反転復元
第40回	172 62	須恵器	杯身	14.1	38.7	(内) 7.5Y7/1灰白 (外・底) N7/0灰白	黒 0.5~2 mmの白色砂粒を多く含む。	良好	35%	全体内部にヒダスキの跡有、一部反転復元
第40回	173 85	須恵器	杯身	(11.9)	4.5	高台径 (10.6)	黒 0.5~1 mmの白色砂粒と黑色砂粒を含む。	良好	40%	反転復元
第40回	174 78	須恵器	杯身	(18.6)	6	底径 (11.0)	黒 0.5~0.6 mmの白色砂粒を含む。	良好	40%	
第40回	175 66	須恵器	皿	(15.4)	2.15	(内) N8/0灰 (外) N8/0灰	黒 白・灰色微砂粒と黑色砂粒をわざわざ含む。	良好	25%	内外面上ヒダスキの跡有、反転復元
第40回	176 87	須恵器	皿	(15.5)	1.9	(内・外・底) N7/0灰白	黒 基本部・反転復元、全面ミガキ	良好	20%	

98年度調査(98021)遺物観察表⑤

件名番号	Pno.	種類	骨種	遺物()は復元品 (復元用)その他の		色	形	地土	焼成	残存率	備考
				骨	器						
新40回 177 82 遺物器 瓶	(9.0)	5	骨種	(内) NA/灰 (外) NA/灰 (内) NA/灰 (外) NA/灰		青	1 mm以下の白色砂粒を含む。	良好	60%	反転復元	
新40回 178 94 遺物器 瓶	(8.0)	4.1	骨種	(内) N7/0灰 (外) N7/0灰 (内) SPB/1/青灰 (外) SPB/1/青灰		青	1 mm以下の白色砂粒を含む。	良好	30%	反転復元	
新40回 179 104 遺物器 瓶	(16.0)	19.25	骨種	(内) N7/0灰 (外) N7/0灰 (内) SPB/1/灰 (外) SPB/1/灰		青	やや暗 0.1~3 mmの白色砂粒を含む。	良好	10%	反転復元	
新40回 180 88 遺物器 瓶	(7.0)	残3.5	骨種	(内) N7/0灰 (外) N7/0灰 (内) SPB/1/灰 (外) SPB/1/灰		青	1 mm以下の白・灰・灰色散在を含む。	良好	5%	反転復元	
新40回 181 113 遺物器 瓶	(8.0)	残6.2	骨種	(内) N7/0灰 (外) N7/0灰 (内) SPB/1/灰 (外) SPB/1/灰		青	やや暗 白色砂粒を含む。	良好	20%	一輪反転復元	
新40回 182 89 遺物器 小口瓶	(10.0)	残3.16	骨種	(内) N7/0灰 (外) N7/0灰 (内) SPB/1/灰 (外) SPB/1/灰		青	3 mm以下の白・茶・灰色が混在する。	良好	25%	反転復元	
新40回 183 112 遺物器 瓶	(12.0)	残9.0	骨種	(内・外・他) N7/0灰白		青	やや暗 白色砂粒を含む。	良好	30%	一輪反転復元、ロクロ回転後、外側反かぶり、二片割れ	
新40回 184 111 遺物器 瓶	(10.0)	残8.5	骨種	(内) N7/0灰 (外) N7/0灰 (内) SPB/1/灰 (外) SPB/1/灰		青	良好	30%	外側、底部内部中黄色砂粒付着。ロクロ回転後方		
新40回 185 79 遺物器 瓶	(30.0)	残4.5	骨種	(内) N6/0灰 (外) N7/1/灰白		青	1 mm以下の白・灰・灰色砂粒を含む。	良好	20%		
新40回 186 98 遺物器 瓶	(21.0)	残3.8	骨種	(内) N6/0灰 (外) 7.5RA/1/青灰		青	やや暗 0.1~2 mmの白色砂粒を含む。	良好	10%	反転復元、局部使用後、外側反かぶり、内側反かぶり、二片割れ	
新40回 187 133 遺物器 瓶			骨種	(内) 2.5Y/2/灰赤 (外) 2.5Y/4/4/ぶい赤		青	良好	50%			
新41回 188 110 遺物器 平瓶	(6.0)	残13.8	骨種	(内) 2.5Y/2/灰赤 (外) NA/0灰 (内) 0/0灰		青	やや暗 白色砂粒を含む。	良好	50%		
新41回 189 114 遺物器 平瓶			骨種	(内) 0/0/1/暗青白 (外) 7.5RA/3/1/青灰		青	0.1~3 mmの白・灰・灰色砂粒を含む。	良好	40%	ロクロ回転右方向、横置き記号、本体有	
新41回 190 107 遺物器 手爪	(14.0)	残4.0	骨種	(内・外・他) N7/0灰白		青	やや暗 0.1~3 mmの白色砂粒を含む。	良好	50%	日本式、体部第一部	
新41回 191 105 遺物器 瓶	(20.0)	残11.3	骨種	(内・外・他) SPB/1/明青白		青	良好	10%	反転復元、自然釉付着、無擦		
新41回 192 101 遺物器 瓶	(19.0)	残7.1	骨種	(内・外・他) N6/0灰		青	良好	40%	反転復元、燒造跡付着		
新41回 193 190 遺物器 瓶	(18.0)	残6.1	骨種	(内) N7/0灰白 (外) N6/0灰		青	1~2 mmの白色小石粒を含む。	良好	10%	口部部、10%、体部一部	
新41回 194 106 遺物器 瓶	(25.0)	残13.6	骨種	(内) N3/0/3/暗灰 (外) N6/0灰		青	やや暗 0.1~1 mmの白色砂粒を含む。	良好	20%	反転復元、外側釉付着、無擦	
新41回 195 102 遺物器 瓶	(25.0)	残8.5	骨種	(内) 0/0/1/灰白 (外) N6/0灰		青	良好	50%	反転復元、自然釉付着		
新41回 196 100 遺物器 瓶	(20.0)	残6.8	骨種	(内・外・他) SPB/1/明青白		青	良好	10%	反転復元、頭部外表面へ記号、本体有		
新41回 197 129 遺物器 瓶	(22.0)	残22.0	骨種	(内) 2.5Y/1/灰白 (外) 7.5Y/1/灰		青	1 mm以下の灰・黑色砂粒を少含む。	不良	20%	頭部付近20%	
新41回 198 8 土器器 直	(21.0)	3.1	骨種	(内) 2.5Y/1/灰白 (外) 7.5Y/1/灰		青	やや暗 白色砂粒・石英を少含む。	良好	45%	底部外表面	
新41回 199 35 土器器 直	(17.0)	残3.5	骨種	(内) 0/0/1/4/にぶい灰 (外) EYR/0灰		青	良好	50%	反転復元		
新41回 200 7 土器器 直	(18.0)	残3.0	骨種	(内) 0/0/1/2/灰 (外) 7.5RA/2/4/にぶい赤		青	良好	10%	反転復元		
新41回 201 8 土器器 直	(16.0)	残3.8	骨種	(内) 0/0/1/2/灰 (外) 7.5RA/2/4/にぶい赤		青	良好	50%	反転復元、内面に黑色付着物付着		
新41回 202 29 土器器 直	(16.0)	3.9	骨種	(内) 0/0/1/2/にぶい黄 (外) 7.5RA/2/4/にぶい黄		青	良好	50%	反転復元		
新41回 203 20 土器器 直	(16.0)	残3.3	骨種	(内) 0/0/1/2/灰 (外) 7.5RA/1/灰		青	良好	10%	反転復元		
新41回 204 15 土器器 直	(16.0)	残4.2	骨種	(内) 0/0/1/2/灰 (外) 7.5RA/1/灰		青	良好	10%	反転復元		
新41回 205 42 土器器 直	(12.0)	残3.3	骨種	(内) 0/0/1/2/にぶい灰 (外) 7.5RA/1/灰		青	良好	10%	反転復元、直付		
新41回 206 43 土器器 直	(12.0)	3.35	骨種	(内) 0/0/1/2/灰 (外) EYR/2/灰		青	良好	60%	反転復元		
新42回 207 41 土器器 直	(13.0)	残3.0	骨種	(内) 0/0/1/2/灰 (外) 2.5Y/1/灰		青	良好	25%	反転復元		
新42回 208 132 土器器 直	(13.0)	残2.9	骨種	(内) 10YR/3/3にぶい黒 (外) 10YR/3/3にぶい黒		青	チャート・長石を含む。	良好	10%		
新42回 209 13 土器器 直	(12.0)	残2.6	骨種	(内) 10YR/3/3にぶい黒 (外) 10YR/1/3灰 (内) 10YR/2/2灰		青	白色砂粒、黒母を少量含む。	良好	5%	反転復元	
新42回 210 134 土器器 直	(12.0)	残3.0	骨種	(内) 10YR/2/2にぶい黒 (外) 2.5Y/1/灰		青	チャート・長石・クサリを含む。	良好	40%		
新42回 211 21 土器器 直	(14.0)	2.5	骨種	(内) 10YR/2/2にぶい黒 (外) 2.5Y/1/灰赤		青	良好	20%	反転復元		
新42回 212 38 土器器 直	(10.0)	2.65	骨種	(内) 10YR/2/2灰 (外) 10YR/2/2灰		青	チャリ石・チャート・長石を含む。	良好	95%	内面保付青	
新42回 213 31 土器器 直	(9.2)	3	骨種	(内・外・他) 2.5Y/2/2灰 (内) 10YR/2/2にぶい黒 (外) 10YR/2/2にぶい黒		青	良好	完			
新42回 214 14 土器器 直	(13.0)	残3.0	骨種	(内) 2.5Y/1/3にぶい黒 (外) 10YR/2/2にぶい黒		青	チャリ石・長石・黒母を含む。	良好	10%	反転復元	
新42回 215 30 土器器 直	(10.0)	残1.7	骨種	(内) 2.5Y/1/3にぶい黒 (外) 10YR/2/2にぶい黒		青	チャート・長石・クサリを含む。	良好	10%	反転復元	
新42回 216 34 土器器 直	(3.4)	2.9	骨種	(内) 10YR/2/2にぶい黒 (外) EYR/6灰		青	チャート・クサリを含む。	良好	95%	内面保付青	
新42回 217 18 土器器 直	(17.0)	残1.80	骨種	(内) NS/0灰 (外) NS/0灰		青	不良	10%	反転復元		
新42回 218 12 土器器 直	(14.0)	残1.8	骨種	(内) NS/0灰 (外) NS/0灰		青	不良	10%	反転復元		
新42回 219 29 土器器 直	(23.0)	残3.2	骨種	(内) 2.5Y/2/2灰 (外) SYR/2/2灰		青	良好	30%	反転復元		

出土遺物観察表(6)

件番号	品名	種類	直徑(Φ) 高さ(高さ) の範囲	は後光 直径 高さ (Φ)高さ その他の 寸法	色 調	胎 土	焼成	残存率	備考	
									内	外
第42回 220 44 土器部 杯			(19.6) 5.3	(内) 2.5YR/3淡黄 (外) 2.5YR/1灰白	青	良好	50%	反転復元		
第42回 221 37 土器部 盆			(22.6) 8.3	(内・外・底) 2.5YR/2灰黒	青	良好	20%	反転復元		
第42回 222 47 土器部 瓢			(11.4) 5.4	(内・外・底) 10YR/1褐色	青 1 mm前後の白・灰色 砂粒を含む。	不良	20%	反転復元		
第42回 223 46 土器部 瓢			(15.0) 8.6	(内・外・底) 2.5YR/1灰白	青 1 mm前後の白・灰色 砂粒及びクサリ繊を含む。	不良	5%	反転復元		
第42回 224 9 土器部 瓢			(18.4) 7.45	(内) 2.5YR/2青 (外) 2.5YR/1灰白	やや青・墨石・クサリ繊・ 雲母・石英を含む。	良好	口 径 縦 深 底 2%	反転復元		
第42回 225 10 土器部 瓢			(12.4) 7.4	(内・外) 2.5YR/1灰黒 (底) 2.5YR/4C/5L/1青黒	青 白色砂粒・石英を少量 含む。	良好	口 径 縦 深 底 内面 20%	反転復元 内外様 性		
第42回 226 19 土器部 瓢			(24.3) 9.4	(内・外) 2.5YR/2灰黒 (底) 2.5YR/5灰	やや青・墨石・雲母を含む。	良好	口 径 縦 深 底 外 10%	反転復元		
第42回 227 45 土器部 瓢			(25.4) 11.0	(内・外・底) 7.5YR/7/4にいづ れ	青 1 mm前後の白・灰色 砂粒及びクサリ繊を含む。	良好	3%	反転復元		
第42回 228 48 土器部 瓢			(30.0) 10.1	(内) 10YR/8/4灰白 (外・底) 2.5YR/2灰白	青 0.5~2 mmの白・灰色 砂粒を含む。	やや 不良	2%	反転復元		
第42回 229 18 土器部 瓢			(23.3) 11.3	(内) 2.5Y/2灰黒 (外) 2.5Y/2灰 (底) 5YR/4C/5L/1赤黒	やや青・白・灰色砂粒と少 量の墨石・石英を含む。	良好	口 径 縦 深 底 外 15	反転復元		
第42回 230 2 土器部 瓢			(24.8) 9.75	(内) 5YR/8/4にいづ (底) 2.5YR/4C/5L/1赤黒	青 長石・石英・雲母・ク サリ繊・チャートを含む。	良好	10%	反転復元		
第42回 231 1 土器部 瓢			(22.6) 9.5	(内) 7.5YR/2/3 (底) 10YR/6/4にいづ れ	青 長石・墨石・チャート・ 石英を含む。	良好	10%	反転復元		
第42回 232 32 土器部 小型器			7.6 4.3	(内) 10YR/8/3灰黒 (底) 5YR/4C/5L/1赤黒	青 チート・クサリ繊・ 墨石を含む。	良好	90%			
第42回 233 5 土器部 球形器			(14.0) 8.45	(内・外) 7.5YR/3/2C/5L/1 7.5YR/3/3C/5L/1青	やや青・墨石・クサリ繊・ 雲母を含む。	やや 不良	10%	反転復元		
第42回 234 4 土器部 片口鉢			(27.3) 9.3	(内) 2.5Y/2灰黒 (外) 2.5Y/2灰 (底) 5YR/4C/5L/1赤黒	青 白色砂粒を含む。	良好	10%	反転復元		
第42回 235 39 土器部 鉢			(21.6) 8.8	(内) 7.5YR/3/2C/5L/1 7.5YR/4C/5L/1青	青 チート・墨石・チャート・ 石英を含む。	良好	3%	反転復元		
第42回 236 55 土器部 手把			残存部 10.3	(内) 8/7/1灰白 (外) 2.5Y/7/1灰白 (底) 2.5Y/7/1灰	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒及び墨石・クサリ繊 を含む。	良好	5%			
第42回 237 57 土器部 高杯			残5.2 12	(内・外) 2.5Y/7/1灰白 (底) 5YR/5/6	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒及び墨石・クサリ繊 を含む。	良好	40%			
第42回 238 50 土器部 高杯			残6.7	(内) 5YR/8/4明赤 (外) 2.5Y/7/1灰白 (底) 5YR/4C/5L/1赤黒	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒を含む。	良好	50%	一般反転復元		
第43回 239 131 土器部 手平付鉢			39.0 22	(内) 2.5Y/7/1灰白 (外) 10YR/1/2灰 (底) 10YR/1/2灰	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒及び墨石・クサリ繊 を含む。	良好	70%			
第43回 240 54 土器部 ミニコップ			6.1 4.5 3.7	(内) 10YR/1/2C/5L/1にいづ れ (底) 5YR/5/6	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒を含む。	良好	100%	反転復元		
第43回 241 62 土器部 ミニコップ			6.0 4.45 3.6	(内) 2.5Y/7/1灰白 (外) 7.5YR/3/2C/5L/1 7.5YR/3/3C/5L/1青	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒及び墨石・クサリ繊 を含む。	良好	80%	反転復元		
第43回 242 63 土器部 ミニコップ			残3.2 3.6	(内・外) 10Y/7/1灰白 (底) 5YR/4C/5L/1赤黒	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒及び墨石・クサリ繊 を含む。	良好	60%			
第43回 243 51 土器部 ミニコップ			4.9 (5.0)	(内) 2.5Y/7/1灰白 (外) 7.5YR/3/2C/5L/1 7.5YR/3/3C/5L/1青	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒を含む。	良好	30%	反転復元		
第43回 244 81 土器部 製造土器			(14.4) 3.5.5	(内・外) 7.5YR/1/灰 (底) N8/8灰	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒を含む。	良好	1%	反転復元		
第43回 245 27 土器部 製造土器			(7.6) 3.5.0	(内・外・底) 2.5YR/2/2灰白	青 チャート・墨石を含む。	良好	10%	反転復元		
第43回 246 23 土器部 製造土器			(8.4) 4.7	(内・底) 7.5YR/1/2C/5L/1 7.5YR/3/2C/5L/1 7.5YR/3/3C/5L/1青	青 長石・チート・墨石・ク サリ繊を含む。	良好	10%	反転復元		
第43回 247 28 土器部 製造土器			残4.2	(内) 7.5YR/1/2C/5L/1 (底) 7.5YR/3/2C/5L/1 7.5YR/3/3C/5L/1青	青 チャート・墨石・ク サリ繊を含む。	良好	10%			
第43回 248 25 土器部 製造土器			8.0 残4.3	(内・外) 7.5YR/2/2灰 (底) 7.5YR/3/2C/5L/1 7.5YR/3/3C/5L/1青	青 チャート・墨石・ク サリ繊を含む。	良好	10%	反転復元		
第43回 249 22 土器部 製造土器			残2.3	(内・外・底) 7.5YR/2/3にいづ れ	青 1 mm以下の白・灰色 砂粒を含む。	良好	1%			
第45回 251 646 墓又土器 瓢			(27.4) 5.1	(内・底) 2.5Y/1灰白 (外) 2.5Y/4/1灰	青 砂粒多く含む。	良好	50%	木本(廻み目)		
第46回 262 650 朱生土器 瓢			2.4 6.8	(内・外・底) 10YR/2/2灰白	青 1 ~ 3 mmの白・灰色 小石粒・チャート・クサリ繊 を含む。	良好	10%			
第46回 253 649 朱生土器 瓢			3.3 (6.4)	(内・底) 2.5Y/2/2灰黒 (外) 5YR/6/8赤黒	青 クリア織・チャートを 含む。	良好	2%			
第46回 254 644 漆器 瓢			残5.4	漆線(20.8)	青 1 mm前後の白色砂粒 を含む。	良好	10%	反転復元、ロクロ回 転右方角		
第46回 255 144 土器部 瓢			(16.8) 残7.1	(内・外・底) 10YR/7/6明青	青 長石含む。クサリ繊を わずかに含む。	良好	口 径 縦 深 底 近 10	漆器部(漆器内部内面、 漆器部内外面に漆油付)		
第46回 256 286 土器部 瓢			残2.6 (11.0)	(内・外・底) 5YR/6/6	青 長石・クサリ繊含む。	良好	底 部 近 15	漆器部(漆器内部内面、 漆器部内外面に漆油付)		
第46回 257 628 土器部 瓢			残6.4 残7.6	(内・外・底) 2.5Y/7/4にいづ れ	青 長石・石英を含む。	良好	底 部 25	漆器部又は漆器部 (内部に漆から硝化 物が付着)		
第46回 258 135 土器部 瓶			(内・外・底) 2.5Y/2/2灰	(内・外・底) 2.5Y/2/2灰	青 底	良好	10% -	漆器部		

軒丸瓦観察表①

形式名

IA 0.2型式

種別番号	種類 技術	直径	中 房			外 区			色 調	地 土			焼成	備考	
			径	周溝幅	周溝深	径	周溝幅	周溝深		石	土	水			
第54番	297	c	16.5	3.15	0.3	0.5	5.1	4.05	6.0	0.55	0.4	2.7	(内・外・面) 7.5YR4/4浅黄褐	○ ○ ○ ○ ○	やや不良
第54番	298	c	(17.0)	3.1	0.3	0.5	4.9	3.85	5.0	0.5	(0.4)	2.8	(内・外・面) 7.5Y6/1灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	299	c	16.1				4.75	4.1	4.55	0.55	0.4		(内・外・面) 5Y6/1灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	300	f	(17.1)	3.2	0.4	0.35	4.9	3.85	4.9	0.6	0.45	3.2	(内・外・面) 7.5Y4/1灰	○ ○ ○ ○ ○	やや不良
第54番	301	c	16.5	3.1	0.35	0.55	5.0	3.9	5.0	0.5	0.4	2.3	(内・外・面) 7.5YR6/6灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	302	a-2	16.7	3.3	0.4	0.3	4.9	3.45	4.9	0.5	0.45	2.0	(内・外・面) 7.5Y6/1灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	303	c	16.8				4.6	3.8	4.6				(内・外・面) 10Y6/1灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	304	c	16.4	3.2	0.35	0.6	4.85	4.15	5.0	(0.5)	(0.4)	1.25	(内・外・面) 5Y6/1灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	305	c	14.75	3.2	0.4	0.4	4.65	3.1	4.65	0.5	0.5	2.8	(内・外・面) 10Y6/2灰黄褐	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	306	a-2	16.75	3.1	0.6	0.3	4.0	3.8	4.85	0.4	(0.45)	3.1	(内・外・面) 10YR5/4にぶい黄褐	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	307	a	17.4	3.5	0.4	0.5	5.0	3.9	5.0	0.6	(0.5)	2.7	(内・外・面) 10YR2/2にぶい青棕	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	308	a-3	16.5	3.3	0.35	0.5	4.9	3.9	4.9	0.65		3.0	(内・外・面) 2.5Y7/2灰白	○ ○ ○ ○ ○	やや不良
第54番	309	c	16.5	3.0	0.35	0.5	4.6	4.6	4.65	0.5	(0.5)		(内・外・面) 5YR5/1褐色	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	310		13.0	3.25	0.6	0.4	5.0	3.9	5.3	0.35	(0.6)	2.4	(内・外・面) 2.5GY7/4根オリーブ灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	311		10.6	3.1	0.4	0.5	5.1	4.1	5.0	0.5	0.6	2.4	(内・外・面) 10YR5/3にぶい黄褐	○ ○ ○ ○ ○	やや不良
第54番	312		9.9	3.11	0.4	0.5	5.0	4.1	5.05	0.69	(0.4)	2.3	(内・外・面) 7.5Y8/1灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	313		7.0				0.45	4.92	3.9	5.0	0.65	0.56	(内・外・面) 10Y5/1灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	314		8.7				0.4	6.05	5.5	4.95	0.45	(0.5)	(内・外・面) 5Y7/2灰白	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	315		7.6										(内・外・面) 7.5YR6/6褐	○ ○ ○ ○ ○	やや不良

形式名

IA 0.3型式

種別番号	種類 技術	直徑	中 房			外 区			色 調	地 土			焼成	備考	
			径	周溝幅	周溝深	径	周溝幅	周溝深		石	土	水			
第54番	316	a-2	18.0	3.15	0.3	0.4	4.9	4.0	5.0	0.4	(0.45)	2.3	(内・外・面) 10Y6/1灰	○ ○ ○ ○ ○	やや不良
第54番	317	a-2	16.1	3.15	0.4	0.35	4.75	3.6	4.8	0.45	(0.35)	1.95	(内・外・面) 10YR5/4にぶい白	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	318	a-2	(16.3)	3.1	0.5	0.4	(4.8)	3.45	(4.9)	(0.55)	(0.5)	2.6	(内・外・面) 7.5Y7/4C-31-緑	○ ○ ○ ○ ○	やや不良
第54番	319	a	16.5	3.05	0.5	0.5	5.0	3.5	5.0	0.45	0.2	1.9	(内・外・面) 7.5YR6/6緑	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	320	a	16.7	(3.1)	0.4	0.45	9.45	4.9	3.95	0.45	(0.3)	2.45	(内・外・面) 2.5Y7/1灰白	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	321	a	(15.6)	3.0	0.4	0.4	4.8	3.6	5.0	0.4	0.45	1.8	(内・外・面) 7.5YR5/3にぶい緑	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	322	c	(18.4)	2.9	0.4	0.35	4.7	3.85	4.8	0.4	0.55	2.35	(内・外・面) 5Y7/7灰白	○ ○ ○ ○ ○	やや不良 やや不良 やや不良
第54番	323	c	16.1	3.15	0.5	0.4	4.9	3.65	5.0	0.5	(0.4)	1.8	(内・外・面) 5Y7/7灰白	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	324	a-2	16.6	3.25	0.3	0.4	4.7	3.85	4.85	(0.4)	(0.55)		(内・外・面) 5YR5/6緑	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	325	a-2	(16.5)	3.25	0.4	0.4	5.0	3.7	5.0	0.6	0.45	1.85	(内・外・面) 10YR5/3にぶい緑	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	326		(16.5)	(3.25)	0.4	0.4	5.0	3.75	5.0	0.6	(0.4)	1.85	(内・外・面) 2.5Y7/4灰白	○ ○ ○ ○ ○	やや不良 やや不良
第54番	327		7.2	9.05	0.45	5.0	9.35	5.0	5.0	0.6			(内・外・面) 5Y7/7灰白	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	328		7.0	8.05	0.45	5.0	8.35	4.95	4.95	0.55	1.9		(内・外・面) 5Y7/7灰白	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	329		7.6				5.5	3.6	5.7	0.4	0.6		(内・外・面) 5Y5/1灰	○ ○ ○ ○ ○	良好

形式名

IA 0.4型式

種別番号	種類 技術	直徑	中 房			外 区			色 調	地 土			焼成	備考	
			径	周溝幅	周溝深	径	周溝幅	周溝深		石	土	水			
第54番	330	g	16.4	3.6	5.25	3.0			5.35	0.5	0.6	2.75	(内・外・面) N7/9灰白	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	331	c	(15.1)	3.65	0.53	6.35			5.5	0.4	(0.65)	2.4	(内・外・面) 7.5Y7/1灰白	○ ○ ○ ○ ○	やや不良
第54番	332	a-2	16.5	3.4	5.2	3.6			5.2	0.4	0.4	2.6	(内・外・面) N5/6灰	○ ○ ○ ○ ○	良好
第54番	333	g	(16.1)	3.5	5.25	3.6			5.25	0.4	(0.5)	2.6	(内・外・面) BY7/1灰白	○ ○ ○ ○ ○	良好

軒丸瓦觀察表②

型式名 I A04型式

構造番号	接続 方法	直径	中厚径	薄外径 最大幅	外 区	開井長 周壁板外壁幅	瓦当厚	色 国	給 土		造成	備考	
									表面	裏面			
第57回 334	接11.2	3.4	5.1	3.63		5.4	0.8	0.4	瓦2.3	(内・外・面) 7SYR7/1灰白	○	良好	
第57回 335	c	接6.1	1.5	4.9	3.65		4.9	0.6	0.65	2.8	(内・面) 7SYR7/1灰 (外) 7SYR7/1灰	○	良好
第57回 336	c	接6.2	2.65	5.1	3.4		6.54		2.4	(内・外・面) 7SYR7/1灰白	○	やや不良 やや不良	
第57回 337		接6.2		2.6	3.5		6.27	0.8		(内・外・面) N7/0灰白	○	やや不良 やや不良	
第58回 338	c	(16.0)	3.4	5.0	3.35		6.0	0.3	(0.5)	2.3	(内・外・面) N7/0灰白	○	やや不良 やや不良

型式名 I A05型式

構造番号	接続 方法	直径	中厚径	薄外径 最大幅	外 区	開井長 周壁板外壁幅	瓦当厚	色 国	給 土		造成	備考	
									表面	裏面			
第58回 339	a-2	17.5	3.2	5.6	3.3		5.6	0.8	0.8	2.7	(内・外) 10YR7/1灰 (面) 7SYR7/0灰	○	やや不良 やや不良
第58回 340	a-2	(18.0)	3.25	5.5	3.26		5.65	0.8	(0.5)	2.0	(内・外) 5YR6/1灰 (面) 2SYR6/0灰被覆	○ ○ ○	やや不良 やや不良
第58回 341	c	接10.3	3.0	5.55	3.4		5.6	0.9	(0.5)	2.2	(内) NR/0灰 (外・面) 7SYR7/3Cふい青被覆	○ ○ ○	良好
第58回 342	c	接7.0		5.6	3.0		5.62	0.7	0.4		(内・外・面) 7SYR7/6灰	○ ○ ○	良好
第58回 343	a-2	接4.8		5.65	2.95		5.65	0.75	(0.45)		(内・外・面) 7SYR7/2灰被覆	○	良好
第58回 344	a-2	接5.8		5.64	3.4		5.64	0.6			(内) NR/0灰 (面) 5YR7/2灰	○ ○ ○	345と同一個体 と思われる
第58回 345		接6.8		5.61	3.4		5.66	0.7	(0.5)		(内) NR/0灰 (面) 5YR7/0灰	○ ○ ○	良好
第58回 346		(16.5)	3.06	5.7	3.35		5.65	0.6	(0.6)	2.0	(内) 2SYR6/1灰 (面) 5YR7/0灰	○ ○ ○	やや不良

型式名 I A13型式

構造番号	接続 方法	直徑	中厚径	薄外径 最大幅	外 区	開井長 周壁板外壁幅	瓦当厚	色 国	給 土		造成	備考	
									表面	裏面			
第58回 347	a-2	17.5	4.2	5.4	3.3		5.45	0.7	0.65	2.2	(内・外) 10YR7/1にぶい青被 (面) 7SYR6/0灰	○ ○	やや不良

型式名 I C01型式

構造番号	接続 方法	直徑	中厚径	薄外径 最大幅	外 区	開井長 周壁板外壁幅	瓦当厚	色 国	給 土		造成	備考
									表面	裏面		
第58回 348	接5.2		接6.2	3.3		1.9				(内・外・面) 5YR7/1灰 (面) 5YR7/0灰	○ ○ ○	やや不良
第58回 349	接7.4	接1.7	5.1	3.3		2.1				(内・外・面) 2SYR6/3Cふい青	○ ○ ○	良好 訓穴0.5

型式名 I C02型式

構造番号	接続 方法	直徑	中厚径	薄外径 最大幅	外 区	開井長 周壁板外壁幅	瓦当厚	色 国	給 土		造成	備考	
									表面	裏面			
第58回 350	接6.0	(12.5)	(2.0)	3.95	2.6		3.9	0.6	0.5	1.4	(内・外) 10YR7/2にぶい青被 (面) 7SYR6/0灰	○ ○ ○ ○ ○	良好 訓穴0.5

型式名 I C04型式

構造番号	接続 方法	直徑	中厚径	薄外径 最大幅	外 区	開井長 周壁板外壁幅	瓦当厚	色 国	給 土		造成	備考
									表面	裏面		
第58回 351	接4.5	(4.1)	接1.4	接1.2		接1.4				(内・外・面) 7SYR6/0灰	○ ○ ○ ○ ○	やや不良 不良好

型式名 II A06型式

構造番号	接続 方法	直徑	中厚径	薄外径 最大幅	外 区	開井長 周壁板外壁幅	瓦当厚	色 国	給 土		造成	備考		
									表面	裏面				
第59回 352	接4.0	3.4	4.1	2.85	2.2	4.0	0.6	1.8	2.35	1.05	(内・外・面) SY/2灰白	○ ○	良好	
第59回 353	e	(17.2)	3.1	4.2	接2.0	2.0	4.3	0.9	1.65	2.1	2.55	○ ○ ○	やや不良	
第59回 354	e	接14.5	3.4	3.9	2.75	2.1	3.9	0.5	1.7	1.0	1.6	○ ○ ○	良好	
第59回 355		16.5	3.3	4.1	2.95	2.2	4.0	0.5	1.9	2.0	1.8	(内・外・面) 2.5SY/1灰白	○ ○ ○	良好
第59回 356	h	16.6	3.4	4.0	3.0	2.3	4.0	0.6	1.7	1.8	1.95	(内・外) 5YR7/1灰 (面) NR/0灰白	○ ○ ○ ○ ○	やや不良 やや不良
第59回 357	e	接12.5	3.4	4.1	2.75	2.3	4.1	0.6	1.6	接0.3	1.45	(内・外) SY/2灰白 (面) NR/0灰白	○ ○ ○ ○ ○	やや不良 やや不良
第59回 358	e	接6.0		接4.65	2.9	接2.0	接0.6	0.6	1.7	2.3		(内・外) SY/1灰白	○ ○ ○ ○ ○	やや不良 やや不良
第59回 359	e	接6.1		接3.35	2.8		接2.9	0.6	1.8	2.0		(内・外) 7SYR7/2にぶい青被 (面) 10YR7/2にぶい青被	○ ○ ○ ○ ○	やや不良 やや不良
第59回 360	h	接6.5		接2.81	接2.46		接3.36	0.5	接1.6	2.35		(内・外・面) SY/1灰白	○ ○ ○ ○ ○	良好

軒丸観察表③

式名 II A06型式(361・377)・II A07型式(362・376・378～388)

漆因番号	種類 注法	直徑	中厚径	面井長 最大幅	面井 子高長	面井長 外縫幅	外 区		直厚度	色 調	粉 土			備 考	
							面井長 外縫幅	面井長 外縫幅			直石	土	粉 物		
漆605 361 h	既12.8	3.6	4.2	2.9	2.25	4.3	0.4	1.3	2.3	(内・外・面) 2.5Y5/1灰灰	○	○	○	良好	
漆605 362	既7.6 (3.4)	4.15	2.9	2.3		4.1	0.3	1.3	1.9	(内・外・面) 5Y7/1灰白	○	○	○	やや不良	
漆605 363	既4.1	既3.45	既2.55	既1.35		既3.55	0.955	1.3		(内・外) 5Y8/2灰白 (面) 10Y3/3オリーブ黒	○			良好	
漆605 364	既8.0	既3.3	4.0	2.8	2.05	4.0	0.6	1.8	2.3	既2.0	(内・外・面) 10Y7/1灰白	○	○	○	良好
漆605 365	既5.1	既3.2	既3.4	既2.4		既3.4	既0.4	1.3		(内・外) 2.5Y6/3灰白 (面) 10Y8/2灰白	○	○	○	良好	
漆605 366	既4.9	既4.16	2.75	既2.25		既4.0	0.955	1.3		(内・外) 5Y6/1灰白	○	○	○	良好	
漆605 367	既4.1	既3.0	2.8	既1.55		既3.0	既0.4	1.3		(内・外) 10Y3/3オリーブ黒	○	○	○	良好	
漆605 368	既4.4	既3.7	2.65	既2.0		既3.8	0.5	1.3		(内・外) 2.5Y6/3にい黄 (面) 10Y4/1灰	○			良好	
漆605 369	既8.5	既3.8	2.8	既2.1		既3.9	0.955	1.3	既2.2	(内・外) 5Y7/1灰白 (面) 5Y3/2リード黒	○	○	○	良好	
漆605 370	既5.3	既4.0	2.7	既2.1		既3.8	0.7	1.4	1.6	(内・外) 7.5Y5/1灰	○			良好	
漆605 371	既5.5	3.5	4.3	2.8	2.3	4.2	0.6	1.3	2.0	(内・外) 5Y4/2オリーブ (面) 5Y6/3リード黒	○	○	○	良好	
漆605 372	既5.6	既3.9	既2.6	既2.0		既3.0	0.65	1.9	2.2	(内・外) 7.5Y7/1灰白	○	○	○	良好	
漆605 373	既4.2	既2.0	4.2	既2.65	2.3	4.1	0.5	1.4	1.78	(内・外) 7.5Y7/1灰白 (外) 2.5Y6/3にい黄	○	○	○	良好	
漆605 374	既5.4	3.5	4.3	2.9	2.3	4.35	0.7	1.3	1.85	(内) 5Y4/1灰 (外) 2.5Y7/2灰白	○	○	○	良好	
漆605 375	既5.6	既2.7	既2.7	既2.4	既2.65	既3.0	0.6	1.9	2.35	(内・外) 7.5Y6/1灰 (面) 5Y7/1灰白	○	○	○	良好	
漆605 376	既5.9	既3.9	4.25	2.9	2.3	既4.1	0.95	1.3		(内・外) 10Y3/3オリーブ黒	○	○	○	良好	
漆605 377 h	既8.6									(内・外) 5Y7/1灰白 (面) 2.5Y3/2灰白	○	○	○	良好	
漆611 378 b-2	(16.0)	3.5	4.2	3.1	2.55	4.25	0.6	1.0	2.4	(内・外) 5Y7/1灰白 (面) 2.5Y3/2灰白	○	○	○	不良	
漆611 379 b-2 (16.0)	3.4	4.5	2.95	2.5		4.2	0.5	1.0	2.70	(内・外) 5Y6/1灰白 (面) 2.5Y7/1灰白	○	○	○	良好	
漆611 380 h	既9.15	既3.6	既3.05			既4.4	既0.5	1.7		(内・外) 5Y4/2オリーブ (面) 2.5Y7/2灰白	○	○	○	不良	
漆611 381 h	既6.45	既4.15	既3.0	既2.5		既4.05	0.85	1.6	2.7	(内・外) 7.5Y5/2灰白	○	○	○	良好	
漆611 382 a-2	既6.7	既1.5	既1.55			既2.95	0.85	1.5	1.6	(内・外) 7.5Y5/2灰白 (面) 2.5Y5/2灰白	○	○	○	良好	
漆611 383	既8.0	既1.0	4.25	3.0	2.6	4.15	0.5	1.2	1.95	(内・外) 7.5Y4/2灰白 (面) 2.5Y5/2灰白	○	○	○	良好	
漆611 384	17.2	3.4	4.4	3.0	2.5	4.3	0.6	1.0	既2.0	(内・外) 7.5Y4/2灰白 (面) 10Y7/2にい黄黒	○			不良	
漆611 385	既6.5	既4.0	2.85	既2.1		既4.2	0.6	0.8	既1.55	(内・外) 5Y7/1灰白	○			良好	
漆611 386	既5.9					既3.9	0.8			(内・外) 10Y3/3オリーブ黒 (面) 2.5Y9/2灰白	○			不良	
漆611 387	既6.4					既3.6	3.2			(内・外) 5Y8/1オリーブ黒 (面) 2.5Y7/2灰白	○			良好	
漆611 388	既6.9					既3.9	0.5	1.6	2.36	(内・外) 10Y7/2にい黄黒	○			良好	
漆611 389	既6.9					既3.9	0.5	1.8	既2.41	(内) 10Y3/3オリーブ黒	○			不良	

式名 HC03型式

漆因番号	種類 注法	直徑	中厚径	面井長 最大幅	面井 子高長	面井長 外縫幅	外 区		直厚度	色 調	粉 土			備 考
							面井長 外縫幅	面井長 外縫幅			直石	土	粉 物	
漆611 389			既8.7						0.6	1.2	(内・外) 5Y4/1灰 (面) 5Y8/1灰白	○		不適

式名 II A06型式

漆因番号	種類 注法	直徑	中厚径	面井長 最大幅	面井 子高長	面井長 外縫幅	外 区		直厚度	色 調	粉 土			備 考	
							面井長 外縫幅	面井長 外縫幅			直石	土	粉 物		
漆622 390 h	17.5	7.2	3.3	3.5	2.3	3.4	0.5	1.3	1.3	2.48	(内・外) NE/0暗灰 (面) 2.5Y7/2灰白	○	○	○	やや不良
漆622 391 h	17.1	7.2	3.4	3.4	2.05	3.4	0.4	1.3	既0.55	既2.9	(内・外) 2.5Y7/2灰白 (面) 7.5YR/3/3にい黄黒	○	○	○	不良
漆622 392 h	17.2	7.3	3.45	3.7	2.3	3.4	0.4	1.3	1.3	2.8	(内・外) 2.5Y7/2灰白 (面) 7.5YR/3/3にい黄黒	○	○	○	不良
漆622 393 a	(17.2)	7.15	3.49	3.5	2.2	3.4	0.55	1.1	1.4	2.5	(内・外) 10YR/3/3にい黄黒 (面) 7.5YR/3/3にい黄黒	○	○	○	やや不良
漆622 394 h	17.0	7.2	3.4	3.5	2.2	3.39	0.5	1.0	既1.26	2.7	(内・外) BY7/1灰白	○	○	○	不良
漆622 395 h	既16.6	7.3	3.5	3.6	2.2	3.4	0.4	1.1	0.95	2.4	(内・外) 7.5Y7/4/4にい黄 (面) 2.5Y9/2灰白	○	○	○	やや不良
漆622 396 h	既11.3	7.2	3.45	3.5	2.2	3.3	0.5	1.2	1.2	1.9	(内・外) 2.5Y7/2灰白	○	○	○	良好
漆622 397 h	17.6	7.1	3.45	3.25	2.2	3.2	0.45	1.4	0.9	2.7	(内・外) 2.5Y7/3/3にい黄黒	○	○	○	良好

軒丸瓦觀察表④

型式名 II A09型式										地 土 <small>表 石 心 土 壤 類 別 名</small>	地 成 <small>成 分 組 成 率</small>	備 考
桿固番号	接 法	直 径	中厚径	底井長	底井 子子長	外 区 <small>周縁板外縁板外縁高</small>	瓦出厚	色 調				
第63回 386	h	既17.7	既2.0	2.8	2.6	2.5	既2.7	既2.0	(内・外・面) 2.5Y7/3浅黄	○ ○ ○	良好	
第63回 399	h	(17.0)	6.9	3.25	3.5	2.15	3.2	0.5 (1.55)	(内・外・面) 2.5Y7/2灰黄	○ ○ ○	良好	
第63回 400	h	既18.8	既3.4	3.3	3.5	2.2	3.3	0.5 0.9 1.0	2.2 (内・外・面) 10YR8/3にぶい黄褐	○ ○ ○	良好	
第63回 401	h	既15.55	7.1	3.4	3.5	2.2	3.3	0.5 0.6 1.1	既10.05 2.05 (内・外・面) 7.5Y7/1灰白	○ ○ ○	良好	
第64回 402	h	既17.5	既2.5	3.3	3.5	2.2	3.3	0.5 (1.1)	2.3 (内・外・面) 10YR8/3にぶい黄褐	○ ○ ○	良好	
第64回 403	h	既18.6	8.1	3.25	3.6	2.2	3.4	0.4 (1.4)	既0.56 2.7 (内・外・面) 2.5Y3/1黒褐 (内・外・面) 7.5Y7/1黒	○ ○ ○	中节不良	
第64回 404	h	既19.1	既3.6	3.4	3.5	2.2	3.4	0.5 (1.6)	1.3 (内・外・面) 10YR2/1黒 (外・面) 5YR8/1深明赤褐	○ ○ ○	良好	
第64回 405	h	既18.8	既3.5	3.55	2.05	2.05	既3.3	0.4 (1.3) 既0.95	(内・外・面) 10YR8/1灰白 (内・外・面) 10YR8/4にぶい黄褐	○ ○ ○ ○	不直	
第64回 406	h	既17.7	既2.6	3.4	3.4	2.1	3.2	0.5 (1.0)	2.4 (内・外・面) 2.5Y9/1灰黄	○ ○ ○	良好	
第64回 407	h	既4.5	既3.3	3.3	2.05	2.05	既3.3	0.5 1.1	0.85 (内・外・面) 5Y5/1灰白 (内・外・面) 5Y8/1灰	○ ○ ○	良好	
第64回 408	h	既6.1	既3.5	3.6	2.6	2.3	既3.2	0.4	1.0 0.9 (内・外・面) 10Y8/1灰	○ ○ ○	良好	
第64回 409	h	既15.5	7.0	3.5	3.55	2.2	3.45	0.5 1.2	1.15 2.4 (内・外・面) 10Y8/1にぶい黄褐 (内・外・面) 5YR8/1黒	○ ○ ○	中节不良	
第64回 410	h	既0.9	中	3.2	3.5	2.1	3.3	0.5 1.1	0.8 (接) 1.65 (内・外・面) 5YR8/1黒 (外・面) 5YR7/1灰	○ ○ ○ ○	良好	
第64回 411	h	既6.0	既2.9	3.4	3.45	2.2	3.3	0.45 (1.2)	1.2 1.8 2.25 (内・外・面) 2.5Y7/1灰黄	○ ○ ○ ○	良好	
第64回 412	h	既8.0	既3.1	3.15	3.4	2.0	3.15	0.4 (1.2)	2.3 (内・外・面) 7.5Y7/1灰白	○ ○ ○ ○	良好	
第64回 413	h	既8.2	既2.7	3.25	3.4	2.1	3.2	0.4 1.15	0.9 2.4 (内・外・面) 7.5Y7/1灰白	○ ○ ○ ○	良好	
第64回 414	h	既8.8	既1.9	3.25	3.25	1.9	既8.45		既2.7 (内・外・面) 2.5Y8/1灰黄	○ ○ ○ ○	良好	
第64回 415	h	既8.5	既3.45	3.65	2.05	2.05	既3.45	0.4 (1.3)	既1.1 (内・外・面) 2.5Y8/1灰黄 (内・外・面) 2.5Y7/1灰白	○ ○ ○ ○	中节不良	
第64回 416	h	(18.5)	(7.1)	3.3	3.4	2.1	3.35	0.5 1.15	1.25 2.2 (内・外・面) 10YR7/3にぶい黄褐	○ ○ ○ ○	不良	

型式名 II A10型式										地 土 <small>表 石 心 土 壤 類 別 名</small>	地 成 <small>成 分 組 成 率</small>	備 考
桿固番号	接 法	直 径	中厚径	底井長	底井 子子長	外 区 <small>周縁板外縁板外縁高</small>	瓦出厚	色 調				
第65回 417	h	(15.0)	8.4	2.75	3.5	2.0	2.7	0.2 1.0 1.1	既1.8 (内・外・面) NR/0灰白	○ ○ ○	やや不良	
第65回 418	h	既13.15	6.7	2.7	3.4	2.0	2.7	0.2 (1.06)	既0.5 既2.0 (内・外・面) NR/0灰白	○ ○ ○	やや不良	
第65回 419	h	既6.1	既2.1	2.7	3.4	2.0	2.6	0.5 (1.06)	既1.9 (内・外・面) NR/0灰白	○ ○ ○	やや不良	
第65回 420	a-3	既12.5	6.8	2.6	3.4	2.0	2.6	0.65 1.0	0.85 2.5 (内・外・面) 7.5Y5/1オリーブ黒 (内・外・面) 2.5Y8/2黒	○ ○ ○ ○	中节不良	
第65回 421	a-3	既13.2	6.65	2.6	3.4	2.0	2.6	0.65 (1.4)	3.0 (内・外・面) 8Y7/1灰 (内・外・面) 5Y7/1灰	○ ○ ○ ○	黑色瓦	
第65回 422	b-3	既14.0	8.7	2.5	3.4	1.6	2.5	0.35 1.0	0.85 2.7 (内・外・面) 7.5Y5/1オリーブ黒 (内・外・面) 2.5Y8/3黒	○ ○ ○ ○	良好 黑色瓦	
第65回 423	a-3	15.1	7.0	2.6	3.4	1.95	2.6	0.25 1.15	0.9 2.5 (内・外・面) 10Y4/1灰 (内・外・面) 10Y4/1灰	○ ○ ○ ○	やや 黑色瓦	
第65回 424	t	15.0	6.9	2.65	3.5	1.9	2.66	0.25 (1.2) (0.9)	既2.7 (内・外・面) SYR8/1灰 (内・外・面) SYR8/1灰	○ ○ ○ ○	良好	
第65回 425	t	既9.0	既2.0	2.7	3.4	2.6	2.6	0.35 1.5	0.7 3.6 (内・外・面) 10Y3/1オリーブ黒 (内・外・面) 7.5YR4/2灰	○ ○ ○ ○	良好	
第65回 426	t	既9.0 (0.85)	2.7	3.1	3.0	2.6	既2.4	0.26	4.4 (内・外・面) NR/0灰 (内・外・面) 2.5Y7/2黒	○ ○ ○ ○	やや 不良	
第65回 427	t	既13.6	7.0	2.6	3.1	1.9	2.5	0.25 (1.0)	4.0 (内・外・面) SYR5/2黒	○ ○ ○ ○	良好	

型式名 II A12型式										地 土 <small>表 石 心 土 壤 類 別 名</small>	地 成 <small>成 分 組 成 率</small>	備 考
桿固番号	接 法	直 径	中厚径	底井長	底井 子子長	外 区 <small>周縁板外縁板外縁高</small>	瓦当厚	性合點数	色 調			
第66回 428	a-2	既15.5	3.9	2.2	2.35	1.8	2.5	1.7 1.9 2.0 2.0 2.8	既 (内・外・面) SYR7/1灰 (内・外・面) 10YR7/3にぶい黄褐	○ ○ ○	やや 不良	
第66回 429	a-3	(15.0)	3.65	2.15	2.55	1.9	2.5	1.7 (2.0) 2.0 2.9	既 (内・外・面) NR/0灰	○ ○ ○	良好 黑色瓦	
第66回 430	h	(16.0)	3.7	2.2	2.55	1.9	2.6	1.6 (1.7) (1.1)	3.05 既 (内・外・面) 2.5Y8/1灰白	○ ○ ○	良好 黑色瓦	
第66回 431		15.5	3.65	2.3	2.3	1.95	2.6	1.6 1.75 1.9	2.75 (内・外・面) NR/0灰 (内・外・面) 2.5Y8/1オリーブ黒	○ ○ ○ ○	良好 黑色瓦	
第66回 432	a-3	(15.5)	3.6	2.3	2.4	1.8	2.5	1.7 1.65 1.4	3.9 (内・外・面) SYT7/1灰 (内・外・面) 10Y4/1灰 (内・外・面) 2.5Y8/1灰	○ ○ ○ ○	良好	
第66回 433	a-3	既15.15					既1.5	1.6 0.7	既 (内・外・面) SYT7/1灰白 (内・外・面) N4/0灰 (内・外・面) 2.5Y7/2灰	○ ○ ○ ○	良好 黑色瓦	
第66回 434	a-3	既15.15					既1.5	1.2				良好 黑色瓦

軒丸瓦観察表(5)

試験名	IV A12型式												地 質 分 類 名	成 分 組 成 率	備 考
	採取 方法	直徑	中間層	選井式	選井 子測量	開井長	外 区	瓦当厚	点数	色 調	良 好 不 良				
第69回 435 a-2	挑3.1						壁1.55	1.45	0.8	残2 (内-外) SY4/1灰 (内) 2.5Y7/1灰白	○ ○		中好 中好 黑色瓦 黑色瓦 不良		
第69回 436 h	挑3.5						1.0	1.5	1.1	残3 (内-外) 10YR8/3灰青綠	○ ○				
第67回 437 h	(15.4)	3.7	2.2	2.5	1.85	2.5	1.6 (1.5) 1.6	0.75	4.0	残10 (内-外-底) 7.5Y7/1灰白	○		良好		
第67回 438 h	挑13.3	3.66	2.2	2.3	1.9	2.5	1.6 (1.3) 1.6	0.75	4.0	残8 (内-外) 2.5Y8/1灰白	○ ○ ○	○	良好		
第67回 439 z	(15.1)	4.0	2.3	2.85	1.85	2.6	1.8	残1.6	残4.4	3.2 残7 (内-外) 10YR8/4灰 (内) 7.5YR8/4灰白	○ ○ ○ ○	○	良好 中好 中好 不良		
第67回 440 e	(16.0)	3.7	2.4	2.4	2.0	2.6	1.85	0.85	0.7	3.30 残13 (内-外) NU/1灰	○ ○				
第67回 441 z	挑10.2 (3.75)	2.3	2.3	1.9	2.05	1.95 (1.36)	1.3	3.3	残10 (内-外-底) EY4/1灰 (内) 10YR7/4C灰 (内) 5YR7/4C灰白	○ ○ ○	○	良好			
第67回 442 a-2	挑14.2	3.8	2.6	2.55	1.95	2.5	1.1 (1.0)	0.8	3.0	残2 (内-外) 10Y7/1灰白 (内) 10YR7/4C灰 (内) 5YR7/4C灰白	○ ○ ○ ○	○	良好		
第67回 443 z	(15.45)	3.7	2.3	2.3	1.95	2.6	1.7	1.65	1.2	3.9 残16 (内-外) 10Y7/1灰 (内) 10YR7/4C灰 (内) 5YR7/4C灰白	○ ○ ○ ○	○	良好 中好 不良		
第67回 444 z	挑9.0	3.7	2.4	2.4	1.8	2.7	1.7	1.7	(1.06)	3.3 残8 (内-外-底) 10Y5/1灰	○ ○		良好		
第67回 445 z	挑7.95	2.81	2.3	2.5	1.9	2.6	1.7	1.8	残0.85	残3 (内-外) 10Y5/1灰 (内) 5YR5/1灰 (内) 5YR5/1灰白	○ ○ ○	○	良好		
第68回 446 E-i	16.5	4.0	2.36	2.6	2.0	2.7	1.75	1.8	1.1	2.45 残15 (内-外) N4/0灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第68回 447 E-i	挑15.4	4.1	2.5	2.5	2.0	2.7	1.8	1.7	1.16	2.6 残16 (内-外) 5Y7/1灰白	○ ○ ○ ○	○	良好 中好 不良		
第68回 448 E-i	(16.5)	4.06	2.3	2.56	1.9	2.75	1.8	1.4	1.16	残15 (内-外) N4/0灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第68回 449 E-i	(17.0)	4.0	2.3	2.5	2.0	2.5	1.85	(2.0)	(1.45)	1.3 残16 (内-外-底) 5Y5/1灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第68回 450 E-i	(17.0) (3.8)	2.36	2.5	2.0	2.8	1.8 (1.7)	(1.0)	1.8	残12 (内-外) 10Y5/1灰 (内) 5Y7/1灰白	○ ○ ○	○	良好			
第68回 451 E-i	挑15.0	4.05	2.4	2.5	2.0	2.75	1.75 (2.0)	0.8	1.5	2.70 残10 (内) 2.5YR7/4C-5Y1綠	○ ○ ○	○	不良		
第68回 452 E-i	挑8.79	2.84	2.2	2.7	1.9	残2.8	1.6	1.7	1.3	残3 (内-外) 6Y7/1灰白	○ ○ ○ ○	○	良好		
第68回 453 E-i	挑8.5	2.85	2.7	2.2	1.9	残2.65	1.7	1.8	1.3	残5 (内-外) 7.5Y7/1灰白	○ ○ ○ ○	○	良好		
第68回 454 E-i	挑8.45	2.84	2.4	2.3	2.0	2.6 (1.65)	1.85 (1.65)	2.0	2.7	残5 (内-外) N5/0灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第68回 455 E-i	挑8.3	(4.0)	2.5	2.8	2.1	2.8	1.75	(1.9)	1.0	2.75 残8 (内-外) 5Y7/1灰白	○ ○ ○ ○	○	良好		
第69回 456 E-ii	16.3	4.1	2.25	2.55	1.95	2.8	1.7	1.65	1.06	3.9 残9 (内-外) N5/0灰	○ ○ ○	○	良好		
第69回 457 E-ii	(16.5)	3.9	2.3	2.5	1.9	2.8	1.8	(1.7)	0.3	5.1 残9 (内-外) 7.5YR8/4C綠	○ ○ ○	○	良好		
第69回 458 E-ii	挑8.8	2.4	2.85	1.95	2.6	2.8 (1.8)	1.8	0.5	0.5	残4 (内) 10YR8/4C灰 (内) 7.5YR8/6灰	○ ○ ○ ○	○	やや不良		
第69回 459 E-ii	(17.0)	4.0	2.35	2.5	2.0	2.8	1.7	1.9	1.3	3.9 残15 (内) 5Y7/1灰白 (内) 7.5YR8/4C-5Y1綠	○ ○ ○ ○	○	良好		
第69回 460 E-ii	挑7.05 (3.65)	2.1	2.4	1.8	2.4	1.6 (1.5)	0.8	0.8	0.8	残3 (内-外) N4/0灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第69回 461 E-ii	挑15.2	4.0	2.26	2.6	1.85	2.85	1.7	1.55	0.5	4.9 残7 (内-外) 5YR6/6橙	○ ○ ○ ○	○	良好		
第69回 462 E-ii	挑12.1	2.84	2.2	2.8	1.9	2.7	1.7	1.55	0.85	4.5 残7 (内-外) 2.5Y7/2灰黑	○ ○ ○ ○	○	やや不良		
第69回 463 E-ii	挑6.1	2.4	2.7	2.05	2.7	1.7	1.6 (1.9)	0.8	0.8	残4 (内-外) 2.5YR5/8明赤褐色	○ ○ ○ ○	○	中好 不良		
第69回 464 E-ii	(16.4) (3.8)	2.25	2.45	0.8	2.7	1.8	1.6	0.3	6.1 残1 (内-外) 5YR8/6灰 (内) 5YR6/6灰	○ ○ ○ ○	○	中好 不良			
第70回 465 E-ii	挑8.4	2.61	2.26	2.75	1.95	2.6	1.85 (1.6)	0.95	0.8	残6 (内-外) 5YR5/2灰 (内) 5YR6/2灰	○ ○ ○	○	良好		
第70回 466 z	挑8.8 (3.6)	2.1	2.5	1.8	2.95	1.6 (1.7)	0.9	0.9	3.3	残6 (内-外) N6/0灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第70回 467 z	挑8.6	2.62	2.45	残2.0		2.62.5	1.7	1.7		残7 (内) 5Y7/2灰白	○ ○ ○ ○	○	中好 不良		
第70回 468 z	挑8.9					残1.6	残1.4			残3 (内) N6/0灰 (内) 2.5YR8/6灰	○ ○ ○ ○	○	中好 不良		
第70回 469 z	挑8.2					残0.9	2.7	0.9	0.9	残3 (内) 2.5Y5/8灰 (内) 2.5YR6/6灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第70回 470 z	挑8.4	3.76	2.8	2.5	1.9	2.5	0.85	1.9	1.0	4.0 残4 (内-外) 5YR6/6灰 (内) 5YR6/6灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第70回 471 z	挑10.0 (3.8)	2.35	2.4	2.0		2.65	1.6 (1.8)		3.5	残6 (内-外) 5Y7/2灰白 (内) 2.5YR8/4C-5Y1綠	○ ○ ○ ○	○	中好 不良		
第70回 472 z	挑8.9	2.16	2.56	残1.86		残2.55	1.6	1.7	1.2	残6 (内) 2.5YR8/4C-5Y1綠 (内) N8/0灰白	○ ○ ○ ○	○	良好		
第70回 473 z	15.55	4.0	2.35	2.5	1.95	2.7	1.75	1.5	1.05	3.8 残11 (内-外) 10Y8/1灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第70回 474 z	挑9.1	2.82	2.4	2.35	1.9	2.6	1.6	(1.7)	(0.9)	3.0 残1 (内-外) N5/0灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第70回 475 z	挑8.4	2.13	2.4	2.4	1.8	2.4	1.55	1.5	0.7	残2.1 (内) 5YR6/6灰 (内) 2.5YR8/2灰赤	○ ○ ○ ○	○	良好		
第70回 476 z	挑8.05	2.9	2.3	2.6	1.9	2.65	1.6	1.8	1.0	残2.0 (内-外) N6/0灰 (内) 5YR6/6灰	○ ○ ○ ○	○	良好		
第70回 477 z	挑8.63					残2.7	1.7	1.7	(1.3)	残6 (内-外) 5Y8/1灰 (内) 2.5Y/25灰	○ ○ ○ ○	○	中好 不良		

軒平瓦観察表①

型式名 II B61a

焼成番号	アゴの種類	アゴの形態	色・調	土			アゴ幅	幅広端部性	備考
				長石	石英	チャート			
第7288	487		3-1 棕褐色	○			6.8	45.0	アゴ瓦部まで切り込み
第7288	488		1-1 灰褐色	○	○		5.9	34.6	
第7288	489		1-1 灰色	○	○		5.9	37.4	
第7288	490		1-1 灰色	○	○		6.4	38.2	
第7288	491	3a	1-1 灰褐色	○			5.9	38.2	
第7288	492	2	1-不明 灰色(外黒)	○			6.4	41.6	アゴ瓦部まで切り込み
第7288	493		3-不明 棕褐色～灰色	○			6.2		
第7288	494		3-1 灰色	○			6.2		アゴ瓦部まで切り込み
第7288	495		3-3 棕褐色	○			6.7	34.6	
第7288	496		2-1 灰色(外黒)	○			5.9	30.6	アゴ瓦部まで切り込み
第7288	497		3-不明 棕褐色	○	○		6.9	47.2	
第7288	498	1	1-不明 灰色	○			5.7		
第7288	499	1	3-1 灰色	○			7.1	37.2	
第7288	500	1	3-3 黒灰色	○	○		6.6	32.9	
第7288	501	1	1-不明 棕褐色	○			5.5	45.0	
第7288	502	1	3-1 灰褐色	○	○		6.7	40.6	アゴ粘土板合わせ目
第7288	503	1	3-2不明 灰色(外黒)	○			7.2		
第7288	504	2	3-1 灰色	○			5.9		アゴ瓦部まで切り込み
第7288	505		3-1 灰色	○			5.5		
第7288	506	1	棕褐色(外黒)	○				45.0	
第7288	507	1	棕褐色	○	○				
第7288	508		3-1 灰色	○			6.4		
第7288	509		3-不明 灰色(外黒)	○			6.2		
第7288	510	1	1-不明 棕褐色	○	○	○	5.9		
第7288	511	1	1-不明 灰色	○			6.6		
第7288	512		3-1 灰褐色	○	○		6.3		
第7288	513	3a	灰褐色	○				41.2	
第7288	514		3-不明 灰色	○					
第7408	515	1	棕褐色	○					
第7408	516	1	灰色	○					
第7408	517	1	3-不明 淡褐色	○			6.9		
第7408	518	1	棕褐色	○					
第7408	519	1	棕褐色	○					
第7408	520	1	3-不明 灰色	○			6.7		

型式名 II B61b

焼成番号	アゴの種類	アゴの形態	色・調	土			アゴ幅	幅広端部性	備考
				長石	石英	チャート			
第7408	521	1	3-1 棕褐色	○			8.6		
第7408	522	1	棕褐色	○					
第7408	523	1	棕褐色(外黒)	○					
第7408	524	1	灰色(外黒)	○					
第7408	525	1	高褐色	○					
第7408	526	1	棕褐色	○	○				
第7408	527	1	3-1 棕褐色	○	○		8.4	37.8	
第7408	528	2	1-不明 灰色(外黒)	○			8.3		
第7408	529	2	欠-1 灰色(外黒)	○	○				
第7408	530	2	1-1 灰色(外黒)	○	○		5.9	44.0	
第7408	531	2	1-1 灰色	○			5.1	40.2	アゴ粘土帶合わせ目
第7408	532	3a	1-不明 灰色	○			5.8		
第7408	533	3a	2-3 棕褐色	○					
第7408	534	2	1-不明 淡褐色	○	○		6.0		
第7408	535	3a	-1 淡褐色	○	○			43.2	
第7408	536	3a	1-不明 淡褐色	○	○		5.9		
第7408	537	3a	1-不明 淡褐色	○			6.0		
第7408	538	3a	1-不明 灰褐色(外黒)	○			6.0		

軒平瓦観察表(2)

式名 H B02 a

辨認番号	アゴの接合	アゴの形態	色 調	地 土				アゴ幅	幅広端部径	備 考
				長 石	石 英	チャート	クサリ縫			
第70回 540	3a	3-不明	茶褐色（外黑色）	○					51.0	
第70回 541	b	2-不明	黒色	○				6.0	山田寺式共伴	
第70回 542	1	3-1	桜褐色	○				6.5		
第70回 543	1	久-1	桜褐色	○			○		38.8	
第70回 545	3a	3-1	桜褐色	○		○		6.5		
第70回 546	3a	3-1	桜褐色	○	○					
第70回 546	1	反褐色	○							
第70回 547	3a	1-不明	茶色（外黑色）	○			○	5.7		
第70回 548	3a	1-不明	灰色（外黑色）	○				6.4		
第70回 549	3a	1-不明	茶褐色	○				6.0		
第70回 550	3a	3-不明	茶褐色	○			○	6.4		
第70回 551	3a	3-不明	桜褐色	○	○			6.3		
第70回 552	3a	3-1	灰褐色	○			○			
第70回 553	3a	久-1	灰褐色	○						
第70回 554	1 or 3	-不明	桜褐色	○				6.9		

式名 H B02 b

辨認番号	アゴの接合	アゴの形態	色 調	地 土				アゴ幅	幅広端部径	備 考
				長 石	石 英	チャート	クサリ縫			
第70回 556	3b	1-1	灰褐色	○	○			6.3	49.2	瓦当面三ヶ所粘り付け

式名 H B05

辨認番号	アゴの接合	アゴの形態	色 調	地 土				アゴ幅	幅広端部径	備 考
				長 石	石 英	チャート	クサリ縫			
第77回 555		3-1	灰褐色	○			○	6.3	42.8	
第77回 556		3-特	灰褐色（外黑色）	○			○	6.3	46.8	アゴ側縁に分割縫面
第77回 557		1-1	灰褐色（外黑色）	○				6.2	52.4	
第77回 558	2	1-1	淡反褐色	○	○			6.2	49.0	
第77回 559		1-3	灰褐色	○	○			6.1	37.4	アゴ側縁に分割縫面
第77回 560		1-1	黒褐色（マーブル）	○				5.8	33.4	山田寺式共伴
第77回 561	2	3-1	灰褐色（外黑色）	○	○			5.8	39.0	
第77回 562		3-1	灰褐色（外黑色）	○				○	6.8	アゴ側縁に分割縫面
第77回 563		3-不明	灰褐色	○				○	6.2	
第77回 564		3-不明	灰褐色	○					6.3	
第77回 565		1-不明	黒色	○					6.8	山田寺式共伴
第77回 566		黑（マーブル）	○							
第77回 567	3a		黒色	○						
第77回 568		3-不明	灰褐色（外黑色）	○					5.8	
第77回 569	3a	1-1	黒色（外黑色）	○	○			5.9		
第77回 570		1-不明	灰色（外黒）	○					6.5	

内：瓦当面、外：瓦当裏面、※：反転復元、（ ）：復元値（実測図では点線表示）、残：残存値

第5章 考察編

第1節 河内国石川郡における郷の配置

栄原 永遠男

1. 線刻文字の意義

新堂廃寺の南回廊の南側から出土した一群の瓦のなかに、「石川郡大国」という文字が線刻された平瓦が含まれていた（第91図690・図版五十五）。これは、石川郡大国郷の意味と解してよかろう。したがって、これは、大国郷の所在地等を考えるきわめて有力な史料である。

この瓦は、色調・胎土からみて、近隣にあるヲガンジ池窯の製品ではなく、他窯からの搬入品と考えられている。この瓦を焼成した窯は、まだ突き止められていないようである。しかし、郡名から書き始めている点からすると、石川郡以外の他郡のものである可能性が高い。また、国名が記されていない点が重視できるとすると、河内国内で生産されたことが、一つの可能性として考えられてくる。

この文字瓦と同じ色調・胎土の一群の瓦は、その量から見て、新堂廃寺回廊の補修瓦として持ち込まれたと考えられている。そうすると、そこに線刻された前述の文字の意味するところはいろいろと考えられるが、搬入先を指示するためのものである可能性があるとするのがもっとも穏当であろう。この線をたどると、搬入先である新堂廃寺は大国郷に所在したことになる。すなわち、新堂廃寺の所在地は大国郷に属していたことになる。

この点は、大国郷のみならず、石川郡内の諸郷の全体的な配置を考えるうえで、決定的に重要な意味を持つ。そこで、この平瓦の線刻文字が示す事実にしたがって、石川郡の郷の配置について内検討したい。

2. 石川郡の郷の変遷

石川郡の郷については、『和名抄』が佐備・紺口・新居⁽¹⁾・大国の4郷をこの順にあげている。ところが、奈良時代の郷は、これとはかなり異なっていたらしい。本郡の郷の配置を考える場合、時代的な変遷を配慮する必要があるのである。さて、後掲の5通の勘籍 f～j やつぎの史料 a b には、この4郷やそれ以外の郷が見えている（傍点は栄原）。

a 「貞進仕丁歴名帳」（第四三号内包表）（二五ノ九 ～九五）

山代忌寸志麻守年十八 河内国石川郡大西郷山代忌寸志麻守

（中略）

漢人根麻呂年十四 河内国石川郡大西郷山代忌寸志麻守

b 「山代忌寸真作墓誌」

所知天下自輕天皇御世以来至于四繼仕奉之人河内国石川郡

山代郷從六位上山代忌寸真作戊辰十一月廿五日□□□□

又妻京人同国郡郷移蚊屋忌寸秋庭壬戌六月十四日□□□

また、『和名抄』前後の時期の史料にも、石川郡の郷が見えている。そのうち関係部分のみを『平安遺文』によって示そう。

e 延暦19年(800) 6月21日「山城国紀伊郡司解案」(『平安遺文』18号)

紀伊郡司解 中立売買券文事

(中略)

……売与同國石川郡大國郷戸主從六位上錦部連豊人戸從七位下錦部連姉既既、……

(中略)

延暦十九年六月廿一日擬主帳人初位下出雲臣「乙繼」

(下略)

d 天喜5年(1057) 4月3日「龍泉寺氏人等解案」(『平安遺文』855号)

龍泉寺氏人等解申重河内国前并在庁官人御證判事

(中略)

一山地壱處

在古市郡 石川両郡 科長郷

(中略)

天喜五年四月三日龍泉寺氏人宗岡公明^印

(下略)

e 承安2年(1172) 3月18日「佐伯景弘持経者注進状」(『平安遺文』5055号)

景弘沙汰持経者十口巻數事

(中略)

慈定房 応覺^{十二月 同月山川郡の所慈定房}

(中略)

承安二年三月十八日

以上の郷関係の史料を整理すると、表1のようである。これによると、佐備・緝口・大国の各郷は、8世紀から10世紀前半の『和名抄』の時代まで存続していたと見てよいであろう。また、8世紀の史料に見える山代郷は、12世紀のeにも山城郷と見える。この間、一貫して存在していたと見るのが自然であろう。『和名抄』では欠落したのではないか。

これに対して、新居郷は『和名抄』にしか見えず、はたして8世紀までさかのぼるか、また『和名抄』以後に續くかどうか疑問がある。また、8世紀の史料に見える波太郷・余戸郷はその後姿をあらわさない。さらに、11世紀中ごろの史料に見える科長郷は、『和名抄』を含めてそれ以前の史料には見えない。これらの点も、それぞれの郷の存続に問題があるかも知れないことを示唆している。すなわち、石川郡の諸郷については、時代的な変遷があることが予想されるのである。この問題は、各郷の配置を検討するなかで、さらに考えることしたい。

表1 石川郡の郷とその史料

8世紀	延暦19年	和名抄	天喜5年	承安2年
a f 佐備郷		佐備郷		
g h i 紺口郷		紺口郷		
a 大国郷	c 大国郷	新居郷 大国郷		
b h i 山代郷			e 山城郷	
g h 波多郷				
h 余戸郷			d 科長郷	

3. 郷の配置に関する従来の諸説

(a) 「河内志」

享保年中に閔祖衡が記した『河内志』⁽²⁾には、石川郡の「郷名」の項に、

佐備 方に廃して村存す

紺口 甘南備龍泉俱に成古祠有り

雑居 廃す

大国 方に廃して今大黒村存す、古市郡に属す

と記している（原漢文）。雑居郷は、郷がなくなったあと、それを引きつぐ村をあげていない。これに対して、佐備郷・大国郷は佐備村と大黒村に関係するとしている。また、紺口郷は、甘南備村と龍泉村に成古祠があることを指摘し、これに関係することを示唆している。

「村里」の項では、水分村（現在の千早赤阪村水分）について「一名紺口」と注記している。この点は、紺口郷の比定地を考える場合に大いに注目される。

(b) 「大日本地名辞書」1900年

『河内志』の指摘はきわめて不十分なものであり、石川郡の郷の配置を十分に検討したものとはいえない。これに対して、この点について始めて本格的な検討を加えたのは吉田東伍である。彼は、『大日本地名辞書』⁽³⁾において、次のような比定案を提示した。その根拠や注記と現在のだいたいの場所も併せて記しておく。

大国郷 駒谷村大字大黒・壺井、磯長村、山田村

駒谷村大字大黒を大国郷の遺称とする。

（羽曳野市大黒・壺井、太子町太子・葉室・山田など）

雑居郷 仁川村、貴志村、富田林村、大伴村

（河南町一須賀・山城など、富田林市貴志・富田林町・南大伴・北大伴・東板持など）

紺口郷 中村、河内村、白木村、赤坂村

中村の寛弘寺は紺口寺のこと。河内志が咸古神社を龍泉寺にあるとしているのは疑わしい。

(河南町寛弘寺・中・上河内・下河内・白木・千早赤阪村森屋・河野辺など)

佐備郷 東条村、千早村

東条村に大字佐備あり。『延喜式』の咸古佐備神社は東条村大字甘南備にあるので、佐備は紺口郷から分かれたもの。咸古佐備神は「蓋紺口県主の祖神にして、佐備郷に祭りたる也。」

(富田林市佐備・龍泉・甘南備、千早赤阪村吉年・東坂など)

(e) 「日本地理志料」1902年

これにわずかに遅れて出版された鶴岡良弼の『日本地理志料』⁽⁴⁾では、「和名抄」に欠落した郷として磯長郷を補った上で、それぞれの比定地を示している。これに、現在の行政区画を併記しておく。

佐備 佐備・東板持・山中出・北大伴・南大伴・別井（以上富田林市）・白木・寛弘寺・神山・中村・馬谷・上河内・下河内・芹生谷（以上河南町）

紺口 龍泉・甘南備（以上富田林市）・小吹・中津原・千早・東坂・吉年・桐山・二河原辺・川辺・水分（以上千早赤阪村）

新居 貴志・中野・新堂・富田林・毛人谷（以上富田林市）・一須賀・大塚・山城（以上河南町）

大国 大黒・姫井・通法寺・広瀬（以上羽曳野市）

磯長 山田・春日・太子・葉室・畑（以上太子町）・東山・平石・寺田・加納・持尾・弘川（以上河南町）

(d) 「国史辞典」1940年

蘆田伊人は、『国史辞典』⁽⁵⁾の「かわちのくに」の項で、以下の比定を示している。

佐備郷 佐備川の左岸、東条村大字佐備

紺口郷 東条川右岸の低地を基調とし、南河内郡中村の地方がこれにあたり、大字寛弘寺はその遺名。

新居郷 石川左岸。新堂村、貴志村地方。

大国郷 東条川と石川との合流点付近。石川村、大伴村の地方。

なお、科長の地も石川郡内。

(e) 「富田林市誌」1959年

つぎに、『富田林市誌』（1959年4月）では、以下の諸点が記されている（35ページ）。

- ① 『和名抄』の郷名はだいたい地理地勢の順に記されているのが普通である。
- ② 石川郡は、最初の佐備郷から南下して紺口郷を記すが、次に佐備郷より北上して雑居郷をあげ、最後に大国郷を記している。
- ③ 石川郡は最初は佐備郷と紺口郷の二郷からできていた。その後、帰化氏族が佐備より北の方で繁茂したために雑居郷ができた。そして大国郷と数えるに至った。
- ④ 百済郷は最初は石川郡の内にあった。六〇戸を越えたので、十数戸を割いて余戸郷とし、大化改郡の時にこの二郷で錦部郡を作った。

(f) 吉田晶論文 1960年

吉田晶は、2万5千分の1地形図に比定案を図示している。¹⁰ 郷名を図に記している場所を次にあげる。ただし、新居・大国郷の比定は行っていない。

紺口 龍泉あたり

佐備 中佐備あたり

山代 山城あたり

科長 太子～春日あたり

波太 番あたり

(g) 『富田林市史』第1巻 1985年

井上薰は、本書の第2章第2節1において、以下の比定案を提示している。

佐備郷 川向・山中田・東板持・西板持・下佐備・中佐備・上佐備・岸之木・龍泉・草野・蒲・甘南備（以上富田林市）

佐備郷と紺口郷はかつて一体であった。

紺口郷 奈良朝の波太郷・余戸郷を含む。

南別井（富田林市）・出屋敷・寛弘寺・神山・芹生谷・中（以上河南町）・森屋・水分・川野辺（以上千早赤阪村）

波太郷 馬谷・中・白木・今堂・長坂・北加納・南加納・平石（以上河南町）・畠（太子町）

余戸郷 河内（河南町）・東阪・桐山（以上千早赤阪村）

雑居郷 奈良朝の山代郷を含む。波太郷の地を含むのかもしれない。

東山・一須賀・大ヶ塚・山城（以上河南町）・北別井・北大伴・南大伴・新堂・中野（以上富田林市）

大国郷 平安中期の科長郷を含む。

桜井・喜志（以上富田林市）・大黒・壺井・通法寺（以上羽曳野市）・伽山・太子・向小路・春日・山田・東条・大道（以上太子町）

(h) 「大阪府の地名Ⅱ」1986年^⑦

- 佐備郷 佐備川沿岸の佐備・東板持（以上富田林市）から東条川流域の寛弘寺（現河南町）、北大伴・南大伴（以上富田林市）、北加納・南加納・白木・中・神山（以上河南町）
- 紺口郷 佐備川の上流の龍泉・甘南備（以上富田林市）や東条川の上流の現千早赤阪村
- 新居郷 石川左岸の現富田林市貴志・桜井・中野・若松・富田林の各町とその周辺の地を新居郷と推定。右岸は山代郷を形成していたが『和名抄』にもれた
- 大国郷 大黒・壺井・通法寺（以上羽曳野市）。石川左岸の広瀬（羽曳野市）までを大国郷と見てよいかどうかは疑問。
- 山代郷 山城・一須賀・大ヶ塚（以上河南町）などの石川右岸。科長の地域（太子町）も含むかも知れない。
- 科長郷 飛鳥川の流域、磯長谷一帯（太子町）。

4. 和名抄の郷配置の検討

(1) 大国郷に関する通説の再検討

『和名抄』に見える石川郡の郷の配置を検討するにあたって、(e)『富田林市誌』が、「『和名抄』の郷名はだいたい地理地勢の順に記されているのが普通である」(①)と指摘している点が注意される。わたくしは、以前からこのように考えており、賛成である。以下もこの考え方によつて検討を進めたい^⑧。また、郷の比定にあたっては、地形的なまとまりができるだけ無視しないように考えるべきである。具体的には水系の重視である。

しかし、それよりもわれわれがまず第一に前提としなければならないのは、新堂廃寺から出土した平瓦の線刻文字である。これによれば、冒頭にも述べたように、新堂廃寺の所在地は、奈良時代には大国郷に属していたと考えられるのである。

ところが、これは、従来の通説を根底からくつがえすものである。従来、大国郷の所在地については、(a)『河内志』以来、(d)『国史辞典』をのぞいて、羽曳野市^{ひびきの}の大黒^{おほくろ}という地名に注目し、この周辺に比定されてきた。しかし、大黒・壺井・通法寺あたりは古市郡に属し、条里地割でも古市郡の条里地割に含まれている。この点からすると、この地域に石川郡大国郷を比定することには問題がある。また、大黒天の信仰とも関係を持つらしい大黒^{おほくろ}という地名が、はたして古代の大國郷を比定する根拠として、どれほどの力を持っているのか、はなはだ心もとない。少なくとも、新堂廃寺出土の文字瓦と比べて、何ほどの証明力も持つてはいない。新堂廃寺の文字瓦が出土した現時点では、この通説に拘泥する必要は、もはやなかろう。

さて、新堂廃寺の所在地付近が大国郷に属していたとすると、注目すべきは、その北方に羽曳野市尺度^{ひびきのしき}という地名が残っていることである。『和名抄』によると、古市郡には尺度郷がある。これは、「西琳寺縁起（西琳寺文永注記）」にひく「天平十五年帳」に見える尺度郷に相当するも

のと思われる。⁽¹²⁾ 羽曳野市尺度の付近が、この尺度郷に比定されるであろう。

そうすると、石川郡大国郷のすぐ北側に古市郡尺度郷があったことになる。⁽¹³⁾ また、石川郡内で新堂廢寺の北側にさらにもう1郷あったとすることには、面積的に見て無理がある。これらのこととは、大国郷が石川郡のもっとも北側にあったことを意味する。このことは、郷の配置を考えるうえで、重要な意味を持っている。なぜなら、『和名抄』では石川郡の郷は、佐備・紺口・新居・大国の順にあげられており、大国郷は石川郡の郷の末尾に配列されているからである。石川郡の木尾の郷が同郡のもっとも北にあるということは、『和名抄』の郷の配列がなんらかの秩序に従っていることを十分に推測させる。

(2) 佐備郷・紺口郷・山代郷の比定

そこでつぎに、佐備郷と紺口郷の関係を取り上げたい。この両郷の位置関係をどのように考えるかが、石川郡の郷全体の配置を理解する鍵となる。

(b) 『大日本地名辞書』は、寛弘寺を紺口郷の遺称として重視し、紺口郷を千早川（東条川）の流域の平地部のみならず、旧赤坂村まで含めて理解している。また佐備郷は、佐備川の流域から旧千早村を比定地としている。これに対して(c)『日本地理志料』では、佐備川と千早川（東条川）の両川の上流側に紺口郷、下流側に佐備郷を比定している。(h)『大阪府の地名』も基本的にはこの考えを踏襲している。その結果、両者とも寛弘寺の地域を佐備郷に含めることになっている。(f)吉田晶論文、(e)『富田林市誌』⁽²⁾も、紺口郷と佐備郷を南北の関係で捉えている点では、これらと同様である。

わたくしは、紺口郷を現地比定する場合、寛弘寺という地名を無視することはできないと考える。この点では、『国史辞典』に賛成である。また(a)『河内志』が、水分村の一名が「甘口」であったという情報を伝えている点も重要である。甘口は紺口と関係があると見られるからである。水分の地域は水越川の流域に属するが、水越川は千早川（東条川）の支流であり、全体として千早川（東条川）の流域と見ることができる。

したがって、寛弘寺を紺口郷の比定地の範囲に含まない(c)『日本地理志料』、(h)『大阪府の地名Ⅱ』の考え方には問題がある。この両者が、寛弘寺の地名を棄ててまで、紺口郷の比定地を龍泉・甘南備から千早赤坂村としたのは、早く(a)『河内志』が不十分ながら指摘したように、『延喜式』神名帳の咸古佐備神社に相当すると考えられる神社が、もと甘南備村字馬田（もしくは高田）にあったとされることや、この咸古佐備神社が合祀された咸古神社が龍泉にあることによっているとみられる。

たしかに、咸古神社と咸古佐備神社とが龍泉と甘南備にあるとすると、これは重要なことである。これについて(b)『大日本地名辞書』は、龍泉の咸古神社について疑義を呈し、「延喜式咸古神社は此地（寛弘寺一榮原）に在るべき也。河内志之を龍泉寺に在りと云は信ずべからず、龍泉寺佐備郷なり」としている。この見解は、(g)『富田林市史』によって支持されている。しか

し、甘南備の咸古佐備神社の方は無視できなかつたとみえ、「蓋紺口県主の祖神にして、佐備郷に祭りたる也」と指摘している。

このうち、甘南備の咸古佐備神社についての(b)『大日本地名辞書』の理解は注目される。すなわち、佐備郷の中に紺口県主が祖神を祭ったというのである。龍泉の咸古神社も同様に理解することが可能なのではなかろうか。(b)『大日本地名辞書』(g)『富田林市史』が指摘しているように、紺口県主の勢力圏は、かつては龍泉・甘南備にまで及んでいた。その時期に咸古神社や咸古佐備神社が祭られたが、その後この地域は佐備郷とされたのではなかろうか。咸古佐備神社は、咸古神社の佐備にあるものという理解も可能であろう。

つぎに、石川郡条里の復原研究では、「観心寺勘銘縁起資財帳」に見える二条佐備里は、塙田秀雄氏の推定によると、現在の富田林市中佐備付近に比定され、この地名が9世紀までさかのぼることが確かめられる((g)『富田林市史』)。

以上によって、『和名抄』の佐備郷と紺口郷に関する私見を述べたい。まず佐備郷は、富田林市佐備という地名や、咸古佐備神社の存在、水系としてのまとまりなどを考慮すると、佐備川の流域に比定するのがもっとも妥当であろう。(g)『富田林市史』と同じである。また、紺口郷については、河南町寛弘寺・千早赤阪村水分の一名であるという甘口に注目すると、この地域が千早川(東条川)の流域に属し、佐備川とは水系を異にすることが注意される。『和名抄』の紺口郷は千早川(東条川)の流域に比定できるのではないか。

前述のように、山代郷は8世紀から12世紀まで一貫して存在しており、『和名抄』はこれを落していると考えられたとした。この山代郷の比定について、(f)吉田晶論文は山城あたりとし、(g)『富田林市史』は雜居郷に含まれるとし、雜居郷を東山・一須賀・大ヶ塚・山城(以上河南町)・北別井・北大伴・南大伴・新堂・中野(以上富田林市)としている。また、(h)『大阪府の地名II』は山城・一須賀・大ヶ塚などの石川右岸で、科長も含まれるかも知れないとしている。私見は、石川西岸や科長については別として、これらとほぼ同様である。しかし、紺口郷を千早川(東条川)の流域としたことにより、紺口郷と山代郷との関係を考察しておく必要が出てきた。

両郷の遺称と見られる河南町寛弘寺や千早赤阪村水分(甘口)と河南町山城とは南北の位置関係にあり、寛弘寺と山城とは千早川(東条川)の西岸と東岸となる。この点から推測するに、紺口郷は千早川(東条川)の流域平地に比定されるが、その最下流部は山代郷に属し、同郷はさらに梅川流域まで拡がっていたと考えられる。

さて、『和名抄』の佐備郷と紺口郷が私見のように比定できるとすると、そこから郷の配置に関する重要な論点を導き出すことができる。それは、佐備郷と紺口郷が西から東に並んでいたと考えられることである。前述のように、『和名抄』は石川郡の郷を、佐備・紺口・新居・大国の順に配列していた。佐備郷と紺口郷を、佐備川・千早川(東条川)の両流域の北と南に位置していたとする(c)『日本地理志料』、(e)『富田林市誌』、(h)『大阪府の地名II』では、この『和名抄』の配列の順を説明できないのである。この問題点は、(e)『富田林市誌』の②、③に吐露

されている。

これに対して、私見ではこのような問題は生じない。『和名抄』は、石川郡の郷を列挙するにあたって、まず南側の郷からはじめて西から東にあげていったのである。また、この配列順からすると、『和名抄』では、山代郷はほんらい紺口郷の次、新居郷の前に並んでいたと想定されることになる。

(3) 新居郷の比定(その1)

『和名抄』では、新居郷は、佐備郷・紺口郷の次、大国郷の前に配列されている。一方、各郷の現地比定では、新堂廃寺出土瓦の線刻銘からみて、大国郷は石川郡のもっとも北側、古市郡尺度郷の南側にあった。この地域は、石川の西岸にあたる。また、佐備郷・紺口郷については、それぞれ佐備川流域・千早川(東条川)流域にあたり、西から東に並んでいたと想定された。また、『和名抄』には欠落しているが、山代郷はさらに東の梅川流域と推定される。このような中で、新居郷の比定地はどこに求めうるであろうか。

佐備川の西には石川が流れているが、その西岸には富田林市錦織の地名が残り、錦織神社も存在する。この点から、少なくとも佐備川との合流点付近より上流の石川の西岸側は、錦織郡に属していたと見られ、新居郷にあてることはできない。また、『和名抄』の郷配列の順序からも、これは考えにくい。

そうすると、石川郡内で新居郷の比定地として考えうる余地があるのは、梅川の流域よりさらに東側、石川の東岸側しかないことになる。しかし、この点の考察を進める前に、山代郷・波太郷・余戸郷の問題を解決しておく必要がある。

(4) 波太郷・余戸郷の比定

周知のように、正倉院文書の丹裏古文書には、官位を得たり得度したりする場合に戸籍を調査した結果を記した勘籍が含まれている。^[10] その中には、石川郡の郷名が記されているものが5通ある。

f 天平勝宝2年3月23日「勘籍」(第54号内包裏) (25ノ111)

(佐伯) □□ 諸上平内田郡佐伯郷主佐伯御形見門戸

(天平) □□ 十八年藉内田郡佐伯郷主佐伯御形見之馬道上平十五

(天平) □□ 平十二年藉内田郡佐伯郷主佐伯御形見之馬道上平

(天平) □□ 五年藉内田郡佐伯郷主佐伯御形見之馬道上平二

神龟四年藉内田郡佐伯郷主佐伯御形見之馬道上平七

天平勝宝二年三月廿三日

- g 「船速石立及島吉事勘籍」(続々修46ノ7、3ノ346-347、ただし島吉事勘籍の部分のみ)、天平勝宝2年3月19日「勘籍」(第52号内包裏)(25ノ108-109)

島吉事年式拾陸

右人、天平十八年藉紺口郷戸主鳩麻呂戸島吉事年式拾參

天平十二年准藉紺口郷戸主鳩麻呂戸島吉事年式拾柒

天平五年藉同郷戸主鳩千鶴房鳩安麻呂男鳩吉事年拾

(鳩古年肆)
神龟四年藉同郷戸主鳩千鶴房鳩安麻呂男□□□□□

(異筆)「鳩吉事年肆」

養老五年藉波太郷戸主鳩千鶴房鳩安麻呂年式拾陸

天平勝宝二年三月十九日

- h 天平勝宝2年(750)3月23日「勘籍」(第1号包裏)(25ノ64-65)

山代伊美古大村年卅五

天平十八年籍

天平十二年籍

天平五年籍

神龟四年籍

養老五年籍

天平勝宝二年三月廿三日

- i 後次「勘籍」(第61号内包裏)(25ノ119-120)

草原乙麻呂年五拾壹

天平十八年藉紺口郷戸主草原久遼良戸同部乙麻呂年肆拾捌

天平十二年准藉同郷戸主草原久遼良戸同部乙麻呂年肆拾弐

天平五年藉同郷戸主草原大麻呂戸同部乙麻呂年参拾伍

(神龟力)

□□

[

] 同部乙麻 []

- j 前後欠「勘籍」(第九五号外包括紙紐)(二五ノ一四五)

養老五年緒 所賁山代郷戸主山代忌寸国依弟 [] 麻呂男 []

これらの勘籍については、多くの問題が含まれているがここでは各人の所賁郷に注目したい。

表2は、これを整理したものである。

表2 勘籍による所貫郷の変化

	養老5	神龜4	天平5	天平12	天平18
f □□諸上	(佐備郷)	(佐備郷)	佐備郷	佐備郷	佐備郷
g 嶋吉事	(波太郷)	紺口郷	紺口郷	紺口郷	紺口郷
h 山代伊美吉大村	(山代郷)	波太郷	余戸郷	紺口郷	紺口郷
i 草原乙麻呂	—	—	紺口郷	紺口郷	紺口郷
k —	山代郷	—	—	—	—

—は史料の欠損により不明の部分。

()は勘籍の対象者の生前であることを示す。

これによると、f □□諸上、i 草原乙麻呂のように、所貫郷になんの変動がないものもあるが、g 嶋吉事と h 山代伊美吉大村の2人は、所貫郷が変化している。特に後者の変動には激しいものがある。

この点について、洞富雄は、郷の地域の未固定による郷の設定替えの結果であるとし、高重進⁽¹⁷⁾は、天平12年より前における郷域の未確定の結果と考えている。さらに高島正人は郷域の浮動性⁽¹⁸⁾を指摘している。これに対して、吉田晶⁽¹⁹⁾はこれらの意見を受け入れつつも、所貫郷の変化の背景に現実に郷戸の移住があったことを考える方が、より合理的な解釈であるとしている。

吉田の根拠は、所貫郷の変化が1つまたはそれ以上の郷を越えていることにある。石川郡についていえば、山代伊美吉大村の本貫は山代郷と予想できるが、東南(北カ)隅の波太郷から余戸郷に所貫されたのち、佐備郷を越えて西南隅の紺口郷まで移貫しており、嶋吉事は東北隅の波太郷から東南隅の紺口郷に移貫した、とする。

このような理解は、吉田が、紺口郷の比定地を佐備郷の比定地よりも佐備川の上流側に求めたところから導き出されている。しかし、前述のように、紺口郷の比定地は千早川(東条川)の流域で山代郷の西南側に求めるべきなのである。そうすると、後述する波太郷・余戸郷の比定地からすると、紺口郷との隔たりは、吉田の想定するほどのものではないことになるが、1つの郷をまたいで所貫郷が変化した可能性はやはり残っている。しかし、この問題は、同様に所貫郷が変化した事例が勘籍から認められる河内国丹北郡、紀伊国牟婁郡の場合と合わせて考えるべきであるので、ここまでとしておきたい。

さて、表2で注意すべきは、所貫郷の変化の範囲が、山代・波太・余戸・紺口の4郷にとどまり、佐備・新居・大國の3郷には及んでいないことである。言いかえると、千早川(東条川)流域から石川東岸の地域で所貫郷の変化が起きており、佐備川流域から、佐備川とイ江川の合流点以北の石川西岸側には及んでいないのである。このことは、これら4郷が近接した位置関係にあることを推定させる。

これによれば、波太郷・余戸郷はどの地域に比定できるであろうか。紺口郷と山代郷の比定に

については先に述べた。また、大国郷は石川西岸の地域に存在した。そうすると、石川郡内で波太郷・余戸郷に比定しうるのは科長の地をおいてほかにはないことになる。(f)吉田晶論文では、波太郷を太子町畠あたりとしているが、結局これがもっとも妥当なのではあるまいか。余戸郷については手がかりがないが、波太郷とともに科長の地やその周辺に比定するほかない。

(5)新居郷の比定(その2)

さきに、新居郷の比定地としては、錦部郡の範囲や、佐備・紺口・山代・大国の各郷の比定地から考えて、梅川の流域より東側、石川の東岸側しかないことを指摘した。この地域は、具体的には科長の地を中心とするが、8世紀にあっては波太郷と余戸郷が存在していた可能性が高いと考えられた。

(b)『大日本地名辞書』は科長の地を大国郷に含めているが、大国郷の比定地が確定した現時点では、その可能性はない。(c)『日本地理志料』は、『和名抄』に磯長郷が落ちているとして、科長の地に磯長郷をあてている。後者の点は(h)『大阪府の地名II』も同様である。『和名抄』に磯長郷が落ちているとすることはあまり根拠はないが、科長郷が史料dに見える11世紀中ごろには、科長の地が科長郷であったとみてよかろう。

そうすると、8世紀段階の波太郷・余戸郷が、『和名抄』段階で新居郷となり、さらに11世紀中ごろには科長郷となっていたと考えるのがもっとも妥当であろう。

5. 石川郡の郷の配置

以上、石川郡の各郷の比定地を検討してきたが、それを整理すると表3のようになる。この表にもとづき、『和名抄』における郷の配列順に留意しながら、各郷の地域的な関係を整理しておきたい。

これまでの検討によって、各郷の比定地を簡単に整理すると、およそ次のようになる。まず佐備郷は佐備川の流域に比定できる。紺口郷は千早川(東条川)の流域で山代郷の南側、山代郷は梅川の流域と見られる。波太郷・余戸郷は科長の地で、『和名抄』段階では新居郷となり、さらに科長郷となっていた。そして大国郷は、石川と佐備川の合流点以北の石川西岸側の地域に比定することができる。

表3 石川郡における郷の変遷

8世紀	延暦19	和名抄	天喜5年	承安2年
佐備郷		佐備郷		
紺口郷		紺口郷		
山代郷		(山代郷)		山代郷
波太郷		新店郷	科長郷	
余戸郷				
大国郷	大国郷	大国郷		

これによると、『和名抄』は、石川郡の各郷を列挙するにあたって、次のような順序にしたがつたことになる。すなわち、まず石川の東岸側のもっとも西側の佐備郷をあげ、そこから東に進んで紺口郷をあげた。次にさらに東からやや北側に位置する山代郷をあげていたと見られるが、いつしか欠落してしまった。さらに、科長の地にあった新居郷をあげて、石川東岸側の郷を列挙することは終わる。ついで石川の西岸側に移るが、石川郡で石川西岸にあるのは大国郷だけである。そこで最後に大国郷を配列して石川郡の項を終えている。

6. むすび

本稿の出発点は、新堂廃寺から出土した瓦の線刻文字の意味を、搬入先を指示するためのものを見る立場に立つ点にある。これによると、新堂廃寺の所在地は大国郷に属していたと考えられることになり、この点に基づいて郷の配置を全体的に考え直した。その結果は、従来の諸説となり異なるものとなった。しかし、この前提が動けば、本稿での検討に大きく影響することはいうまでもない。今後、この点は、文字瓦全体の中で検証していかたい。

また、今回は紙数の関係から、論点を郷の配置のみに絞った。このため、各郷と氏族との関係、とりわけ新堂廃寺が存在した大国郷と氏族との関係、この地方にかつて存在した紺口県から郷への変遷をどのように考えるか、などの重要な問題にふれることができなかった。これらについては、次の機会に論じることとしたい。

註

- (1) 『和名抄』の高山寺本は「新居」とするのに対して、大東急記念文庫本は「難居」とする。いずれが正しいのかにわからぬ。しかし、難居郷は他に見あたらないのに対し、新居郷は『和名抄』に二四例もある。河内国でも古市郡と河内郡にある。これらの点を考慮して、一応「新居」の方をとった。
（参考）19年 2月。
- (2) 『日本輿地通志載内部（五畿内志）』の一部分。並河誠所（水）によって全体が完成されたのは1734年。
（参考）19年 2月。
- (3) 吉田東伍『大日本地名辞書』（富山房、1900年〔明治33〕3月、増補版、1969年〔昭和44〕12月）。
- (4) 那良良弼『日本地理志料』（1902〔明治35〕～1903年、覆刻、臨川書店、1966年4月）。
- (5) 蓬田伊人「かわちのくに」（『国史辞典』二、富山房、1940年11月）。
- (6) 吉田晶「八世紀の家族構成に関する一考察—特に天平勝宝二年の勘籍史料に見られる流動性について—」（『大阪電気通信短期人文学研究論叢（人文・社会科学編）』2、1960年11月）。
- (7) 『大阪府の地名II』（日本歴史地名系28、平凡社、1986年2月）。
- (8) わたくしは、このような考え方方に立って、これまでに以下の論文を執筆してきた。柴原「古代における紀北四郡の郷について」（『和歌山地方史研究』21、1991年8月）、同「郡的世界の内実—播磨因賀茂郡

の場合一」(『人文研究』51-2、1999年12月)。

- (9) 「和名抄」の郷の比定において水系を重視することの有効性については、註8『人文研究』論文参照。
- (10) 『国史辞典』は、他と異なって大国郡を東条川と石川との合流点付近の石川村・大伴村付近にあてている。しかし、特に根拠があげられているわけではない。
- (11) 大黒寺が大黒天の信仰と関係することについては、「大阪府の地名Ⅱ」参照(1078ページ)。
- (12) 西琳寺縁起(西琳寺文永注記)については、「羽曳野市史」第4巻、史料編2(1981年6月)、「藤井寺市史」第4巻、史料編2上(1984年3月)、「続群書類従」第27輯下、駅家部(1926年6月)など参照。
- (13) 石川郡と古市郡の境が羽曳野市尺度と富田林市平・同喜志新家との間にあったことについては、由井喜太郎「河内国条里の研究」(『ヒストリア』13、1965年8月)、「富田林市史」第1巻(1985年3月)、塙田秀雄執筆)に指摘がある。
- (14) 『式内社調査報告』第4巻(立學館大學出版部、1979年11月)。
- (15) 勘籍制度については、吉田晶「九通の勘籍史料をめぐって」(『日本古代社会構成史論』塙書房、1968年6月、もと註6論文)に整理されている。
- (16) 現存する勘籍史料の問題点については、註6吉田晶論文と岸後男「山代忌寸貞作と蚊屋忌寸秋庭一墓誌の史料的考察一」(『日本古代籍帳の研究』塙書房、1973年5月、もと奈良県教育委員会編「山代忌寸貞作」1954年8月)をあげておく。
- (17) 洞富雄「郷戸法的擬制説に対する疑い」(『庶民家族の歴史像』校倉書房、1966年2月、もと「古代籍帳における夫婦別籍と夫婦別居一附・郷戸法的擬制説に対する疑い一」『日本歴史』130-131、1959年4・5月)。
- (18) 高重進「条里地域における古代村落の成立とその変遷」(『古代・中世の耕地と村落』大明堂、1975年3月、もと「郷里制下の郷と里の成立とその村落史上の意義」『広島大学文学部紀要』19、1961年3月)。高重は、山代伊美吉人村の勘籍に見える波太郷を茨田郡の郷とし、余戸郷をどの余戸に相当するか不明であるとするが、天平十八年緒の頃の「河内国石川郡」が以下では省略されたのであり、波太郷・余戸郷とともに石川郡の郷と見て差し支えない。
- (19) 高島正人「律令村落制度の一・三の問題」(『立正史学』26・27、1962年3月・1963年3月)。
- (20) 吉田晶註15論文。

第2節 新堂廃寺造瓦集団の系譜と動向

～軒丸瓦からのアプローチ～

井西 貴子

はじめに

大阪府教育委員会によって実施された新堂廃寺の発掘調査は、1960年度調査から数え6回目となる。新堂廃寺出土瓦の研究は、藤澤一夫氏によって提示された研究を基礎に進んできた（60年度報告）。本稿では、現段階での整理結果のまとめを行う。

1. 各型式の特徴（第106図）

新堂廃寺出土軒丸瓦は11型式に分類できる。

I A02型式 蓮弁が8葉で、中房の周囲に凹線が巡り、その周りに凸線が巡ることが特徴である。範型はA型範で、丸瓦の取り付け位置は、範傷を目印に比較的検討しやすく、きっちりと 90° ・ 180° に取り付けられていないので円形範である。丸瓦との接続技法は、4種類（a・c・e・f）の技法が混在している。比率の高い技法はc技法で、確認できる資料の55%を占める。瓦当裏面はナデが施され、平坦面を作り出している。回転台使用の痕跡を確認する資料はない。瓦当外周と瓦当裏面下半外周に指をあてナデを施す。接続する丸瓦は無段式である。

I A03型式 瓦当紋様はI A02型式と酷似する。範型はA型範で、I A02型式と同様の理由で、円形範である。丸瓦との接続技法は、3種類（a・c・e）の技法が混在しているが、比率の高い技法はa技法で、確認できる資料の40%を占める。回転台使用の痕跡は確認されない。瓦当裏面下半外周にユビナデを施す。接続する丸瓦は無段式である。

I A04型式 蓮弁の幅広部分は尖り、飛鳥寺「星絹」の流れを汲む瓦当紋様である。範型の当たりが確認できる資料はなく、B型範である。丸瓦の接続位置が、 90° ・ 180° で接続するので方形範である。丸瓦との接続技法は、3種類（a・c・g）の技法が混在する。本型式のみg技法での接続が確認された。接続技法を確認できる資料は少數であるが、比率の高い技法はc技法である。瓦当裏面が凸レンズ状に膨らみ、回転ナデの痕跡が同心円状に観察される資料があり、回転台を使用している。しかし、回転台使用の痕跡が確認されない資料も存在する。接続する丸瓦は有段式である。

I A05型式 紋様構成はI A04型式と同様であるが、蓮弁幅広部分の尖りが緩やかである。

範型の当たりを確認できる資料はなく、B型範である。丸瓦との接続技法は、2種類（a・c）の技法が混在する。確認できる資料は少數であるが、比率の高い技法はa技法である。瓦当裏面は不定方向にナデを施し、平坦に仕上げている。回転台は使用しない。本型式は、ヲガンジ池瓦窯で確認されている。本窯で製作された当該期の丸瓦は無段式のみであるため、接続する丸瓦は、無段式である。

I A13型式 瓦当紋様はI A05型式と酷似する。範型は、資料数が少なくよくわからない。丸瓦との接続技法については、1点(a手法)確認されただけである。瓦当裏面は不定方向にナデを施し、平坦に仕上げる。回転台使用の痕跡はない。⁽¹⁾接続する丸瓦は無段式である。

II A06型式 山田寺式の瓦当紋様である。本型式は、色調・胎土の相違と範の摩耗から2つに細分される。色調が黒色で胎土に砂粒が目立つもの(①)と色調が灰白色で胎土が精良なものである(②)。範型はA型範で、丸瓦の接続位置にはらつきがあるので円形範である。丸瓦との接続技法については、4種類(a+b+e+h)の技法が混在する。h技法で接続されるのは、②の段階である。⁽²⁾接続する丸瓦は無段式である。

II A07型式 瓦当紋様は、II A06型式と酷似する。範型はA型範、丸瓦の接続位置にはらつきがあるので円形範である。丸瓦との接続技法は、3種類(a+b+h)の技法が混在する。確認できる資料の大半がh技法である。接続する丸瓦は、無段式である。

II A09型式 川原寺式の瓦当紋様である。範型は円形のB型範で、上下分割の楕型を使用している。丸瓦との接続技法については、1点(a技法)を除きすべてh技法である。接続する丸瓦は無段式である。

II A10型式① II A09型式より、蓮弁長が短い。範型は円形範である。丸瓦との接続技法は、確認できる資料すべてh技法である。接続する丸瓦は、確認される資料がなく不明。

II A10型式②～④ II A10型式①をオリジナルとして中房部を彫り直し嵌めかえている。中房部の嵌めかえは、同紋の瓦が数個体確認されること、範傷の増加と中房部の差し替えが並行に観察されることから、製作工程(窯入れ)のワンクールの可能性が推測できる。ワンクール終了ごとに中房部を差し替えたのかもしれない。本型式は、少なくとも3ケールは製作されていることが確認される。

II A10型式② 色調は黒灰色で、胎土は非常に精良で、焼成はやや軟質であるもの(以下「黒色瓦」と色調は黒灰色を呈し胎土に長石・多量の砂粒を含むものとに分かれる。範傷は、3ヶ所観察される。範型は円形範である。丸瓦との接続技法と範傷の進行との関係は、範傷が2ヶ所明瞭に観察される時期の接続技法は2種類(a+h)が確認され、範傷が3ヶ所確認される時期は、l技法(横置式一本造り)である。前者は「黒色瓦」である。h技法は、丸瓦の先端を箆車状に切り込んでいるにも関わらず、瓦当裏面に接続のための溝を彫っており、II A09型式などに比べ技法の後出性が見られる。胎土の差異は製作技法・範傷の差異とも合致する。接続する丸瓦は、確認される資料がなく不明。

II A10型式③・④ 範傷は③の段階で4ヶ所、④では5ヶ所確認される。色調は灰色～青灰色を呈し、胎土は長石・砂粒を含む。焼成は堅緻である。製作技法はすべてl技法である。接続する丸瓦は不明。

IV A12型式 平城宮式の瓦当紋様である。本型式では、範傷の進行により3段階の時間差が看取される。

第1段階 范傷の確認されない段階である。色調が灰白色を呈し、胎土に砂粒を含むものとⅡ a 10型式②で「黒色瓦」とした資料と同様の色調・胎土を呈するものに分かれる。范型はA型范で、上下分割の枷型を使用している。范傷を目印として丸瓦の取り付け位置を観察すると 90° ・ 180° で接続されるので、方形范である。

「黒色瓦」と「黒色瓦」以外の製作技法は、ともに2種類(a・h)確認される。接続する丸瓦は有段式と無段式が確認された。

第2段階 范傷が蓮子と珠紋に確認される段階である。色調は灰色系のものと橙褐色を呈するものに分類されるが、胎土はいずれも長石粒を含み酷似している。丸瓦との接続技法は3種類(a・h・l)確認された。接続する丸瓦は有段式である。

第3段階 范型が二つに割れ、接合した范型を使用して製作している。瓦当面には、第2段階で確認された范傷に沿って太く一直線に凸線が見られる段階のものである。製作技法は1種類のみで、すべてl技法(横置式一本造り)である。接続する丸瓦は有段式である。

2. ヲガンジ池瓦窯の製品

新堂廃寺所用瓦の多くは、新堂廃寺の北西約100mに位置するヲガンジ池瓦窯で製作された。⁽³⁾ 本瓦窯跡では、発掘調査で2基の瓦窯が検出され、飛鳥から大平期の瓦が製作されている。管見の及ぶ限り、本瓦窯跡からは、IA02型式、IA03型式、IA05型式、山田寺式軒丸瓦(型式名は不明)、II A09型式、IV A12型式が出土した。IA02型式、IA03型式、IA05型式の出土位置は窯内ではなく灰原からである。

本窯製品の胎土は、長石粒を多く含み、少量の石英・雲母が観察される。色調は、灰色を呈するものと橙褐色を呈するものが存在する。焼成はいずれも良好であるが、須恵質のように堅く焼き上げられるものは見受けられない。

また、丸瓦については半地下式有段登り窯(大平期操業)では、有段式が確認されているが、飛鳥～白鳳期操業の窯からは有段式は確認されていない。

一方、新堂廃寺出土の軒丸瓦で、ヲガンジ池瓦窯跡で出土が確認されていない型式は、IA04型式である。ヲガンジ池瓦窯製品とは、色調・胎土が相違し、接続する丸瓦は有段式である。IA04型式の色調は、灰白色を呈し、胎土は精良で焼成は堅緻である。

IA04型式以外の型式を色調・胎土で比較すると、II A06型式①とII A10型式①・②、IV A12型式第1段階の瓦について明らかに相違が見られる。

II A06型式①は、色調が内外断面とともに黒色を呈し、同型式の他の瓦とすぐに峻別できる。胎土内に含まれる砂粒の量も、同型式の他の瓦に比べて多い。

II A10型式①は、色調は白灰色を呈し、胎土中にほとんど砂粒を含まない。焼成は堅緻である。軒平瓦のIV B04型式と色調・胎土とともに酷似する。

II A10型式②とIV A12型式第1段階の瓦の中に、色調が内外面黒色で、胎土が精良、焼成がやや

軟質の瓦が、ヲガンジ池瓦窯製品とは相違し、「黒色瓦」と呼称している。

「黒色瓦」は成形段階での粘土の練り方に問題があるのか、包含する砂粒の量に問題があるのか、非常にもちろく、洗浄作業を行うと小片となり剥離していった。ヲガンジ池瓦窯製品には、このような状況は見られない。

これらの型式の瓦の出土量は、いずれも少數であり、ヲガンジ池瓦窯では製作されていない⁽⁴⁾。

范 型	接 続 技 法								回 転 台	丸瓦	「黒色瓦」
	a	b	c	e	f	g	h	i			
飛鳥寺「星組」	B	方形				○			○	有	
I A 02型式	A	円?	○	○	○				×	無	
I A 03型式	B	円?	○	○	○				×	無	
I A 04型式	A	方形	○	○		○			○	有	
I A 05型式	B	?	○	○					×	無	
I A 13型式	B	?	○						×	無	
II A 06型式①	A	円形	○	○	○					無	
II A 06型式②	A	円形	○	○	○	○				無	
II A 07型式	A	円形	○	○			○			無	
II A 09型式	A	円形	○			○				無	
II A 10型式①	B	円形				○					
II A 10型式②	B	円形	○			○	○			○	
II A 10型式③	B	円形				○				×	
II A 10型式④	B	円形				○				×	
IV A 12型式 1	A	方形	○			○			無・有	○	
IV A 12型式 2	A	方形	○			○	○		有	×	
IV A 12型式 3	A	方形					○		有	×	

3. 型式編年

瓦当紋様の型式が時期決定の指標となることは、明らかなことであるが、飛鳥寺出土瓦の資料は、技法も含めた詳細な研究がなされ⁽⁵⁾、初期の瓦工人の製作技術が、解明されている。初期の瓦工人の製作技術は工人集団ごとに技法の共通性をもっている。その一つが瓦当部の製作技術と丸瓦の接続技法の単一性である。その点を重視すると瓦当紋様と製作技術、丸瓦との接合技法が飛鳥寺瓦工人の技法により近い型式が、先出性のあるものと理解される。新堂廢寺出土瓦においては、I A 04型式が、飛鳥寺「星組」の瓦当紋様をもち、「星組」工人の技法での製作が確認されることから最も先行する瓦となる。瓦当紋様は、蓮弁数が偶数の10葉である。飛鳥寺「星組」の蓮弁に偶数弁が採用されるのは斑鳩寺からである。斑鳩寺 I C型式が製作された時期とさほど違わない時期に製作されたのである⁽⁶⁾。飛鳥寺と同范である垂木先瓦 I C01型式が確認されていることもその傍証となろう。

I A 05型式は、蓮弁の幅広部分の尖りが緩やかになるので、紋様意匠から I A 04型式より後出する。丸瓦との接続技法で考えると、e・f 技法が確認されていないので、I A 02・03型式よりは先出するものと考えられる。I A 02・03型式は接続技法において、II A 06型式に続く e 技法が、I A 02型式と I A 03型式においても確認されることからも、I A 01型式より I A 02型式と I A 03型式の後出性が窺える。I A 02型式と I A 03型式は瓦当紋様と范傷から時間差が看取され、I A 03型式をオリジナルとして、I A 02型式が製作された。

I A 03・I A 02型式は、瓦当紋様から斑鳩寺前期の瓦である斑鳩寺 4 型式の流れを汲み、片岡王寺と同紋異范である、斑鳩寺中期の瓦である斑鳩寺 6 C 型式とさほど前後しない時期があてはあるのではないか。

II A 06型式①と②については、范傷の増加と范型の摩耗によって時間差が指摘できる。范型の摩耗から①→②の先後関係が与えられ、丸瓦との接続技法にも差異が見られる。范傷も同様に II A 06型式①→②と増加する。II A 07型式は、紋様意匠から II A 06型式より後出性が認められる。南河内地域において山田寺式の瓦当紋様を採用する寺院の中では、西琳寺が最も山田寺式に近い瓦当紋様と製作技術をもっている。新堂廃寺のII A 06・07型式は、西琳寺に遅れる時期に製作されたのであろう。

II A 09型式の瓦当紋様は川原寺式を呈し、山田寺式を早するII A 07型式よりも明らかに後出する。接続技法は、確認できるほとんどの資料が h 技法である。h 技法は、II A 06型式より後出するII A 07型式において主流となる接続技法であり、接続技法においても II A 09型式の後出性が窺える。しかし、接続技法は II A 07型式から II A 09型式へと連続し、II A 07型式と大きく時期を隔てることはないであろう。第5節新堂廃寺重弧紋軒平瓦の検討においても、大きく時期を隔てないとの検討結果が提示された。

II A 10型式②～④は、II A 10型式①をオリジナルとして中房部のみ差し替えた范型を使用する。范傷の増加から②→③→④の時期差があり、紋様意匠は II A 09型式と同様であるが、製作技法の観察から IV A 12型式と同時期の製作と理解した。

II A 10型式②～④がIV A 12型式と同時期に分類される根拠として、軒丸瓦と同様の色調・胎土を呈する丸瓦・平瓦（「黒色瓦」）が一つのポイントとなるので、「黒色瓦」について記述する。色調・胎土の類似性から丸瓦は無段 4 類（詳細は本章第6節を参照されたい）、平瓦は桶巻き作りの 3 類である。丸・平瓦共に凸面には繩タタキが施され、タタキ締めは円弧を描く。凹面は調整を加えず、棒板痕が明瞭に残る。側面調整は行わないか、凹面側を小さく面取りする。「黒色瓦」以外の平瓦はすべて一枚作りで成形されることから、「黒色瓦」の先出性が窺える。

以上見てきたように II A 10型式②～④は、瓦当紋様からは II A 09型式と同様であるが、組み合う丸瓦・平瓦はIV A 12型式の製作の範疇に組み込まれ、製作技法においては、IV A 12型式第1段階の軒丸瓦におけるバリエーションの共通性（概要Ⅲ参照）から IV A 12型式と同時期の製作と理解した。また、II A 10型式②のヲガンジ池瓦窯製作瓦、II A 10型式③・④は、横置式一本造りで

製作されている。範例が増加していること、この技法もⅣ A 12型式と共にすることもⅡ A 10型式②～④とⅣ A 12型式の同時性が窺える。

Ⅱ A 10型式①については、製作技法がⅡ A 09型式と共に同時性を看取させるが、第5節重弧紋軒平瓦の検討において、Ⅱ A 10型式①とセット関係となる重弧紋軒平瓦は存在しないとの見解が出されており、色調・胎土からは、Ⅳ B 04型式とセット関係を読みとるのが妥当であろう。その点を重視すると、Ⅱ A 10型式①もⅣ A 12型式と同時期もしくは、やや先出する時期があつてはあるものと理解される。丸瓦との接続技法（h技法）についてもⅡ A 10型式②・Ⅳ A 12型式第1段階の製作技法にも共通性があり矛盾しない。

接続技法に視点をおいて、各型式の編年案を提示し、型式間における画期を読みとる。

- ・ a 技法は、長期間連續して確認される。
- ・ c 技法と f 技法は、Ⅰ A 02型式を製作した段階で消滅する。
- ・ b 技法はⅡ A 06型式①から出現し、Ⅱ A 07型式で消滅する。
- ・ e 技法はⅠ A 03型式で出現し、Ⅱ A 07型式で消滅する。
- ・ h 技法はⅡ A 06型式②で出現し、Ⅳ A 12型式 2 で消滅する。
- ・ l 技法はⅣ A 12型式 2 で出現し、Ⅳ A 12型式 3・4、Ⅱ A 10型式③・④で主流となる。

前記の技法の連続性と消失、新技術の導入と瓦当紋様から画期を読みとると、i～iii期を想定することができる。i期の紋様意匠は、素弁蓮華紋で、中房の蓮子は1+4を配し、外縁は素紋である。接続技法としては、c 技法と f 技法がこの期で消滅する。ii期の紋様意匠は、単弁蓮華紋で中房の蓮子が1+4を配し、外縁が三重圓線のもの（山田寺式）と、複弁蓮華紋で中房の蓮子が1+5+10を配し、外縁は面違鋸齒紋（川原寺式）のものがある。接続技法はb 技法が消滅し、h 技法が導入される。iii期の紋様意匠は、複弁蓮華紋で中房の蓮子が1+5+9を配し、外縁は面違鋸齒紋（川原寺式）のものと複弁蓮華紋で、中房の蓮子が1+6を配し、外区に珠紋が巡り、外縁に三角山線紋（平城宮式）をもつものがある。接続技法では新技法であるl 技法が、導入される。

瓦当紋様・製作技法・出土点数で求めた画期を寺院造営の画期と合わせると i 期が創建期、ii 期が増築期、iii 期が大改修期に相当する。（P 163参照）

新常光寺出土軒丸瓦			
他の窯の製品 (輸入品)		ヲガンジ池瓦窯	
飛鳥寺「琴絃」			
IA04型式			
IA05型式			1期
IA13型式			
IA03型式			
IA02型式			
IA06型式①			II期
IA06型式②			
IA07型式			
IA09型式			
IA10型式		→ 製品と範輸入	Ⅲ期
IA10②=「黒色瓦」 = IA12型式 1		製品と範輸入 →	
IA12型式 1			
IA12型式 2			
IA12型式 3・4			
IA10型式③・④			

操作法

型式	B 方	回	有	← 斑鳩寺 4 C型式
飛鳥寺「星組」	[B 方]	回	有	← 四天王寺 N M I b 1
IAO4型式	B 方	回	有	← 斑鳩寺 6 C型式
IAO5型式	B ?	X	無	← 斑鳩寺 6 C型式
IAI3型式	B ?	X	無	← 斑鳩寺 6 C型式
IAO3型式	A [円]	X	無	← 斑鳩寺 6 C型式
IAO2型式	A [円]	X	無	← 斑鳩寺 6 C型式

4. 瓦・瓦・工人の移動

(1) 工人集団の系統

i期のIA04型式の工人集団は、瓦当紋様・製作技法ともに飛鳥寺「星組」の系譜をひくものである。

IA05型式の瓦当紋様は、從来から四天王寺NM**I b 1**との同范である可能性が指摘されている^⑦。今回実物を照合した訳ではないので、確実なことは言えないが、中房から派生する間弁の間隔が等しいという点で、彫り直しの可能性は否定できない。しかし、蓮弁の形状、蓮弁の膨らみ、中房の大きさの違いからは模刻である可能性が高いものとして論を進める^⑧。四天王寺NM**I b 1**と新堂廃寺IA05型式・IA13型式では、中房の大きさに差がある。中房は新堂廃寺IA05型式→四天王寺NM**I b 1**→新堂廃寺IA13型式の順で大きくなる。蓮弁の膨らみは、四天王寺NM**I b 1**→新堂廃寺IA05型式→新堂廃寺IA13型式の順で大きくなる。ヲガンジ池瓦窯で製作された新堂廃寺IA02型式・IA03型式の中房の蓮子は、1+4で後者が中房の外周にそって配置され、その特徴は山田寺式紋様をもつ新堂廃寺IIA06・IIA07型式まで受け継がれる。四天王寺NM**I b 1**の蓮子は中房の中に配置されているが、新堂廃寺IA05型式の蓮子は中房の外周に沿わすことに意味があったのかもしれない。同紋である四大王寺NM**I b 1**は、飛鳥寺「星組」工人の技術の関与が指摘されているが、本型式は瓦当紋様は飛鳥寺「星組」の紋様意匠を模刻しているが、製作技法については、「星組」の関与は認められない^⑨。

IA02型式・IA03型式の瓦当紋様はその特徴として、中房の周間に凹線が巡り、その周間に凸線が巡ることが上げられるが、初期の紋様構成としてはあまり例のないものである。從前から指摘されている紋様としては、奈良県片岡王寺の資料があげられる^⑩。共通点は、中房の周間に凹線を巡らすことである。蓮子の数は新堂廃寺が1+4であるのに対し片岡王寺は1+8で、外側の蓮子を中房の外周に沿って配する点は共通である。片岡王寺の蓮弁は中肉で弁央に稜を立てる点は新堂廃寺と異なる。片岡王寺の資料は、蓮弁と蓮子の数と外側の蓮子を中房の外周近くに配する点が斑鳩寺6C型式との共通性を見いだすことができる。この斑鳩寺6C型式（若草伽藍金堂の瓦）は、瓦当紋様から前期の瓦、斑鳩寺6A型式の流れを汲むものであり、紋様意匠・製作技法とともに飛鳥寺「星組」の関与が指摘されている。IA02・03型式は、製作技法からは飛鳥寺「星組」の関与と認められない。瓦当紋様についても飛鳥寺「星組」からの流れと読みとるよりも、森郁夫氏が指摘する、古新羅の影響を受けるものと理解される。丸瓦との接続に先端を齒車状に切り込んだ資料が確認されていることもその傍証となろう。

(2) ヲガンジ池瓦窯に見る初期寺院の造瓦体制

新堂廃寺の創建期(i期)には、ヲガンジ池瓦窯での操業(IA02・IA03型式・IA05型式・IA13型式?)と、他の窯で製作されたIA04型式の製品が屋根を飾る。IA04型式の製作技法は、飛鳥寺「星組」の技術を踏襲しており、ヲガンジ池瓦窯で製作された軒丸瓦の製作技法も技

術の單一性は認められないが、飛鳥時代に確認される他の古代寺院の製作技術と技法を異にしない。ただ1点ⅠA03型式で確認される、丸瓦先端を齒車状に切り込む技法が存在するが、資料数が少ないので新技法とまでは認識できない。日本最古の寺院である飛鳥寺の屋根瓦を製作した丁人を指導したのは、百濟から渡來した四人の「瓦博士」であることは、過去の種々の研究によりほぼ確実であろう。新堂廃寺創建期は瓦当紋様に古新羅の影響があるⅠA02・03型式の存在が、建立氏族を小陵するものと理解されるが、技術系譜については、飛鳥時代寺院はいずれも「飛鳥寺」で瓦製作を行った「瓦博士」の技法内におさまる。いいかえれば、製作技法は飛鳥時代初期の工人集団には大きな差異が看取されないということであろう。

初期の工人集団は、「瓦博士」の指導のもと、土器工人集団を母胎として発展してきたことが指摘されており、瓦工人集団に組み込まれた段階で、製作技法・紋様系譜を併せ持った単位集団に編成されていくのではないか。

(3) ii期における瓦生産の動向

ⅡA06型式①は、軒平瓦も搬入されている。しかし出土量は少なく、1棟の屋根を葺くだけの瓦は搬入されていない。ⅡA06型式が搬入された後ヲガンジ池瓦窯では、同じ范型を使用しⅡA06型式①と②が製作され、ⅡA07型式へ継続して製作が行われる。ⅡA06型式①では、范型と工人がヲガンジ池瓦窯に移動してきたのである。ⅡA06型式・ⅡA07型式の製作技法は、本章第4節で論じられているが、瓦当紋様については山田寺式を採用するものの、外区の三重闇線は挽き型施紋である。製作技法からみると、山田寺では、山田寺式A種の范傷の確認されない段階においては、飛鳥寺「星組」における工人の製作技術が踏襲されている。^[13]南河内では、最も山田寺A種に近いと考えられる西琳寺で、飛鳥寺「星組」工人の技術の踏襲が見られるが、続く野中寺・新堂廃寺では確認されない。新堂廃寺に限れば、製作技法及び三重闇紋を持たない范^[14]、を使用するという点で山田寺A種の製作年代からは大きく下る可能性が指摘される。先述したがこれは、工人差を見るよりも、時期差を見るのが妥当であろう。

ⅡA09型式は、製作技法からはⅡA07型式との共通性が観察され、このⅡA09型式は、ヲガンジ池瓦窯から細井廃寺・龍泉寺へ製品が供給されている。この段階では、新堂廃寺を中心とした地域単位での経済活動の萌芽を読みとることができるのではないか。7世紀後半に集中して寺院が増加した背後には、数次に渡る工人集団の渡来を想定させよう。それらの工人集団すべてが、中央の支配体制に組み込まれるのではなく、地域豪族層の支援のもとに製作を行っていた可能性が考えられる。^[15]

(4) iii期の瓦供給体制

次に新堂廃寺の瓦製作に画期が見られるのは、ⅡA10型式①とⅡA10型式②の「黒色瓦」とⅣA12型式第1段階の「黒色瓦」の搬入である。いずれの型式も1棟の瓦を葺くだけの瓦は搬入さ

れておらず、出土位置が南面回廊付近に固まっているため、修造用の瓦と理解する。

Ⅱ A10型式は、①と②が搬入された。本型式は搬入品と考えられる資料以外は横置式一本造りで製作されている。Ⅱ A10型式②の段階で瓦当範が移動したのであろう。

Ⅳ A12型式は、第1段階で「黒色瓦」が搬入された。同じ第1段階の資料には、ヲガンジ池瓦窯で製作された色調・胎土と同様で、「黒色瓦」と同様の技法で製作される資料が存在するので、瓦当範と工人が移動してきたものと考えられる。

搬入された段階では製作技法が混在しているが、ヲガンジ池瓦窯で工人集団が増加した段階から製作技法は横置式一本造りに限定される。ここに新堂廃寺大改修期が想定できる。平城宮式6304型式の瓦当紋様は、難波宮（吹田市七尾瓦窯製品）・野中寺（下田池瓦窯製品）・船橋廃寺・大安寺・薬師寺等で出土している。これらの瓦は、新堂廃寺と船橋廃寺を除きすべて同紋異瓦である。森郁夫氏は、「寺にはそれぞれ所用の瓦窯の存在することから寺ごとに相違する紋様であってもおかしくない。しかし、同系の紋様が宮でも寺でも使用されていると言うことは、範を彫る段階での造官省と造瓦組織との接点が考えられる。」⁽¹⁶⁾と指摘している。すなわち瓦当紋様における、中央集権体制である。また、平城宮式瓦当紋様は畿内ののみならず、地方にも伝播していく。製作技術に視点を移すと、部分的であるにせよ、国分寺所用瓦に横置式一本造りでの製作が行われる。横置式一本造りの製作技術は、瓦の需要の増加に伴い、瓦工以外の職人や経験の浅い職人達による瓦生産を可能にする技術革新であろう（本章第3節）。指導者は、製作技法の伝播から見ると中央からの派遣であると考えられる。主流となる製作技術ではないが、国分寺造営の瓦製作に採用されることは、中央からの技術指導がなされていることを裏付けるのではないか。国分寺においては中央からの瓦当紋様（瓦当範）・製作技術の援助が看取され、地域窯成立の背景には在地豪族の経済的基盤があることも見逃せない。当時期では国分寺などに見られる中央の援助を受けて造営される寺院と在地豪族の経済的基盤のもとに造営される寺院が存在するということである。この段階ではまだ工人層が必要に応じて各地で製作に当たるという自立的な経営体であったとは考えにくい。

以上について再度新堂廃寺の造営についてまとめると、新堂廃寺創建期においては、Ⅰ A02・Ⅰ A03型式の瓦当紋様を採用する建立氏族のもとに、飛鳥寺の建立氏族である蘇我氏が関係する瓦窯の製品であるⅠ A04型式が搬入されたことが、初期寺院の造営に関して蘇我氏や聖德太子を代表とする崇仏派の強い意志が働いていたことを如実に示しているのではないか。

新堂廃寺の伽藍拡張時である7世紀後半は、地方豪族の間で古墳に代わる權威の象徴ということが意識され、寺院造営が流行した時と期を一にする。またこの時期は国家鎮護の仏教という思想が浸透はじめた時期でもある。寺院造営に必要な技術者集団が寺院造営主体である豪族の要請に応じて各地へ移動することにより、瓦当紋様・製作技法の拡散が見られ、地域色も出てくる。

新堂廃寺大改修時は天平期であり、国分寺の建立等を軸とした中央による瓦當管理、瓦工管理が徹底され浸透していく一方、在地豪族の経済的基盤の上で地域窯の瓦生産体制の整備が行われ

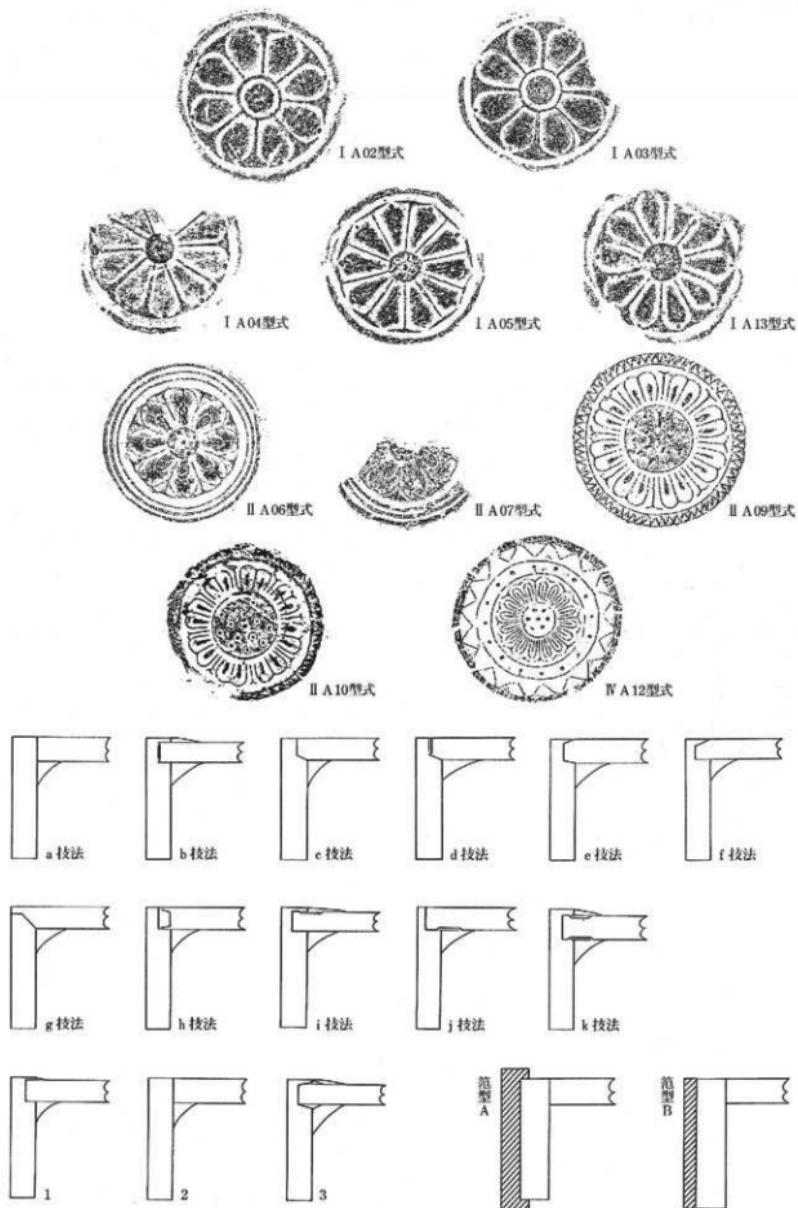
ていく時期でもある。国家の支援によって全国的に広がる中央主導の管理された国分寺・国分尼寺と地方豪族の経済的基盤を背景に成立する寺院造営が並立する状況には、地方における経済基盤の充実と国家における権力の集中が看取され、ここに律令国家の完成が窺えるのである。

註

- (1) 本型式は、色調・胎土がヲガンジ池瓦窯出土の資料と類似するので、本窯で製作された製品であろう。
- (2) 新堂廃寺出土丸瓦からは、白鳳時代の有段式丸瓦は確認されていない。
- (3) 富田林市教育委員会1986『ヲガンジ池瓦窯現地説明会資料』
- (4) 北野綽平先生、調査担当の富田林市教委中辻亘氏のご教示による。
- (5) 花谷浩2000「飛鳥寺・豊浦寺の創建瓦」『古代瓦研究』—飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立まで—
古代瓦研究会
- (6) 花谷浩1979「飛鳥～奈良時代の軒丸瓦について—法隆寺出土古瓦の調査速報①」『伊河留我』七
法隆寺昭和資料帳調査速報 小学館
- (7) 上川睦2000「河内の斑鳩寺・四天王寺系軒丸瓦」『古代瓦研究』—飛鳥寺の創建から百濟大寺の成立
まで—
古代瓦研究会
- (8) 四天王寺N M I b 1と新堂廃寺I A 05型式との同范関係を検討するにあたり、(財)京都市埋蔵文化財研
究所網伸也氏に便宜を図って頂いた。記して感謝いたします。
- (9) 網伸也1997「四大王寺出土瓦の編年的考察」『堅田直先生古希記念論文集』真陽社
- (10) 奈良国立博物館1970『飛鳥白鳳の古瓦』
- (11) 註6文献と同じ
- (12) 森郁夫1994「わが国における初期寺院の成立」『学叢』第16号
- (13) 佐川正敏・西川雄大2000「山田寺式の創建瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅣ』第4回シンポジウム古代瓦研
究会
- (14) 范に三重圓線はあるが、周縁が深く明瞭に施紋されないため挽き直している可能性も考えられる。
- (15) 大脇潔1983「古代寺院の造営と工人の移動—蓮華文帶鶴尾を中心として—」『文化財論叢』同朋舎
- (16) 森郁夫1991『日本の古代瓦』雄山閣出版

あとがき

新堂廃寺の調査・整理に携わって足かけ9年の歳月が流れました。95年度調査での面積は5,400m²、毎日々多量に出土する「瓦」にとまどいばかりでした。「新堂廃寺の調査をしています。よろしくお願ひします」の言葉に多くの方々が現場に足を運んで下さいました。ご指導頂いたこと、充分にいかしきれていないと思いますが、多くの先生方、現場作業から遺物整理までを共に歩んできた方々、共同執筆者の仲間達、「新堂廃寺」という遺跡が、自身を成長させてくれたように思います。ありがとうございました。



第106図 軒丸瓦型式一覧・接続技法模式図

第3節 新堂廃寺出土横置式一本造りの製作技法

井西 貴子

新堂廃寺では、II A 10型式②～④とIV A 12型式第2・3段階で横置式一本造りが採用される。本技法について多くの研究成果が発表されている⁽¹⁾。今回は、新堂廃寺で観察された横置式一本造りの製作技法について検討する。

1. 研究史

縦置式 林博通氏は、榎木原瓦窯の検討から、技法をA・B 2種類に分類している。型木に粘土を巻いて円筒状の丸瓦部をつくり、型木を瓦当裏面にたてて製作する。最終的には、型木で成形した円筒形の丸瓦を約1/2切りとるため、瓦当裏面下端には土堤状の高まりが観察されることがある。また瓦当裏面には型木にかぶせた布目が観察される。

横置式 カマボコ形の台の上で丸瓦が製作され、前端を折り曲げた粘土の上から別の粘土で充填した瓦當缶をあて、製作される。成形台については、上原真人社が復元している⁽²⁾。カマボコ形に突出した上部木型と、瓦当裏面に観察される下部木型を組み合わせたものが推測されている。成形台を使用した場合の布目は、2次調整が施されない限り、瓦当裏面・丸瓦側面にも観察される。

毛利光俊彦氏は、瓦当裏面の観察から横置式一本造り製作の瓦の中には、組み合わせの成形台ではなく、一本式成形台で製作されたものもある可能性を指摘している。

上原氏によって復元された組み合わせ式の成形台を用いて製作された瓦は、奈良時代後半を中心として、国分寺所用瓦の製作において展開する。また、長岡京・法隆寺・平城宮6229Aにおいても同様の製作技法が見られる。

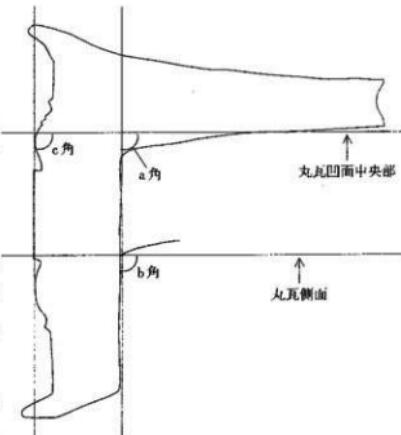
2. 新堂廃寺出土横置式一本造りの製作技法

横置式一本造りで製作された瓦は、2型式確認されたが、比較的資料数が多く、細部観察が可能なIV A 12型式で検討を行う。

(1) 横置成形台を使用

(a) 瓦当裏面布目痕跡 瓦当裏面は2次調整が施されている資料が多いため、布目が残る資料は少ない。(II概要: 第31図816) は、瓦当裏面に布目が観察される。

(b) 瓦当側面布目痕跡 瓦当側面も瓦当裏面同様2次調整される資料が多く、布目が観察される資料は少ない。1点のみであるが、(378) は丸



第107図 軒丸瓦 a・b・c 角計測位置

瓦側面に布目が観察される。

- (c) a 角の共通性 (第107図) 角度を測定するためには、瓦当裏面に2次調整が行われていないことが条件となる。しかし資料数に制約もあるので、2次調整が行われていても部分的に成形台が確認できる資料、図上で復元できる資料も含めて計測した。a 角が測れる資料は図化していない資料も含め15点であった。計測した結果 a 角は、ほぼ94度を測る。いずれの資料についても、±1度までの誤差の範囲であった。
- (d) b 角の共通性 計測できる資料は5点と少ない。計測可能な資料に関しては、a 角同様に角度のばらつきは見られなかった。
- (e) c 角の相違 計測にあたって断面図の中房部を方眼の縦軸とし、凹面との角度を測った。瓦当面に2次調整を行うことは、基本的ないので計測できる資料数は21点であった。計測した結果 c 角は a 角に比べ共通性が低いことがわかった。中心は90度を測る資料であるが、±2.5度のばらつきが見られた。

2次調整の施されていない瓦当裏面と丸瓦側面に布目が観察されていること、a 角・b 角が固定されていることから、IV A 12型式は横置成形台を使用し瓦当部と丸瓦部を成形していると判断して間違いないであろう。

(2) 製作工程について

まず、調整・成形技法を整理する。

- (a) 凸面調整 丸瓦の段部側に向かってヘラケズリが施される。
 - (b) 瓦当側面の成形 ヘラケズリが施される。
 - (c) 瓦当裏面から丸瓦先端凹面の調整 2種類確認される。
 - i . . . 瓦当裏面中央の粘土を下から瓦当上端に向けてかき上げ、丸瓦凹面側にナデつける。
 - ii . . . 丸瓦凹面と瓦当裏面の境にユビナデを施すが、下半は平坦に仕上げる。
 - (d) 瓦当側面の調整
 - i . . . ナデが施される。
 - ii . . . 瓦当面側に向けてヘラケズリが施される。ヘラケズリによって、瓦当面側面下半は、瓦当面に対して鋭角になる。
 - (e) 瓦当部上端から丸瓦凸面にかけての調整
 - (d)の段階まで製作した瓦を再び成形台にのせ、瓦当部上端から丸瓦凸面を段部に向かってヘラナデ（幅約1cm）を施す。丸瓦凹面には、再び成形台にのせた時に生じた「当たり」が観察される。
- 以上見てきたように、横置式一本造りで製作された瓦は、成形・調整から2種（iとii）に分かれる。これは成形台の相違ではなく、製作技法に由来すると思われる。
- 以下に、具体的な製作工程と成形台の復元を試みる。

製作工程 1 (i 技法)

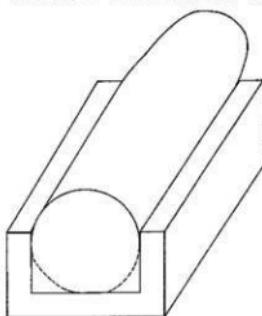
- ① 粘土板を切り取り、成形台の上から粘土をのせる。
- ② 瓦当範に粘土を詰め（範に詰められた粘土の厚みが瓦当下端の断面の厚みである）、成形台の先端に瓦当範を押しつける。
- ③ 瓦当側面上端と丸瓦部凸面を、段部に向けてヘラケズリを施す。
- ④ 瓦当部（瓦当範をつけた状態）を下にして、丸瓦部側面の調整と瓦当部下半の成形を行う。
- ⑤ 瓦当裏面の粘土を丸瓦接続部にナデつけて接続の補強を行う。
- ⑥ 瓦当範をはずし再び成形台にのせ、瓦当上端と丸瓦凸面にヘラナデを施す。

製作工程 2 (ii 技法)

- ① 粘土板を切り取り、成形台の上から粘土をのせる。
- ② 丸瓦成形の粘土は、瓦当部上端に折り返す。瓦当部下端にも粘土を補填する。
- ③ 瓦当範に粘土を薄く（断面観察では約5mm）詰め、成形台で形作られている、瓦当部分の粘土に押しつける。
- ④ 瓦当側面上端と丸瓦部凸面を、段部に向けてヘラケズリを施す。
- ⑤ 瓦当部（瓦当範をつけた状態）を下にして、丸瓦部側面の調整と瓦当部下半の成形を行う。
- ⑥ 瓦当範をはずし、再び成形台にのせ、瓦当上端と丸瓦凸面にヘラナデを施す。

(3) 成形台について

新堂廃寺出土の横置式一本造りの製作技法について述べてきた。最後に推測の域は出でていないが、新堂廃寺出土Ⅳ A 12型式の成形台の復元を試みる。新堂廃寺の横置式一本造りで使用された成形台は、組み合わせ式のものではなく、一本の型木を使用しその型木を固定するための枠があった可能性が考えられる（第108図）。成形台に丸瓦下半部を形作る「受け」の存在を判断するには、いずれの資料も2次調整が施されているためむづかしい。しかし、i 技法で製作された瓦の破面は、上半と下半で割れている資料はほとんど確認されていない。また上半と下半で2次調整に差はない。これは、瓦当範に粘土を詰める時にある程度の厚みをもたせ丸瓦部と接合した結果である可能性が推測できる。ii 技法で製作された軒丸瓦は瓦当厚が3.2～5.6cmとばらつきが見られる。また、いずれの資料も瓦当部下半はヘラケズリが施される。以上の観察結果からⅣ A 12型式を製作した成形台は、瓦当部下半を形作る「受け」がなかった可能性が推測できる。凹面側の2次調整は、瓦当部を下にした状態で施されている。丸瓦凹面側の粘土の動き（ユビナデ）を観察する限り、凹面調整からさほど時間がたっていない時に凹面側の調整も施されたもの



第108図 成形台復元模式図（推定）

と思われる。瓦当部を下にして丸瓦を立てる時には、木枠で固定している円筒もしくは上端が半円形で下端は方形を呈する丸瓦部を成形する台ごと持ち上げたのかも知れない。丸瓦部の成形台の形状はいずれの資料も2次調整が行われており瓦当裏面からは判断できなかった。

このような成形台で軒丸瓦を製作した理由の一つは、製作段階で横置成形台と瓦当範があったのではなく、瓦当範が最初にあり、その使用期間の途中で横置式一本造りが採用されたことに由来するものと思われる。このことは、一方で短期間で大改修が行われたことを理解させるのではないか。この短期間で行われる大改修に対応する大量の瓦が必要であり、工人は増加せざるをえない。ヲガンジ池瓦窯で一本造り軒丸瓦が製作されるのは、回廊用の補修瓦（「黒色瓦」）が搬入されて以降である。本章第6節に論じられているように、横置式一本造りで製作された「黒色瓦」群は補修用の搬入瓦であろう。新たに設けられたヲガンジ池瓦窯で製作された製品は、南門の建築、堂塔伽藍の改修すべてにあてられたものと考えられる。

Ⅳ A12型式は、ヲガンジ池瓦窯から出土しており、新堂廃寺の発掘調査でも奈良時代の瓦は、全体のほぼ半分の出土量が確認されている。改修を短期間で完成させる必然性があったかのように、製作に携わる工人集団は、飛鳥～白鳳時代に比して大所帯である（本章第6節参照）。検出されている窯は現段階では1基であり、幾つかの瓦工人集団が同時に作業を進めたものと思われる。軒丸瓦の瓦当部と丸瓦を接続するタイミングはラフなものではないことから、接続式で製作する軒丸瓦は、作業状況に時間的な制約を受ける。工人集団が増えれば、作業工程に時間的な制約を受ける接続技法より、一度に軒丸瓦が製作可能な横置式一本造りの方がより合理的である。また、作業技術の面においても工人集団が増加することは、従来の「瓦工」による体制は維持できず、経験の浅い工人が製作に関与せざるをえない状況があったのではないか。接続式で製作される軒丸瓦は、職人としての瓦工の技術が不可欠である。技術的に容易な「一本造り」を採用したことにより、短期間に大量の軒瓦を生産することが可能になったのである。

註

- (1) 小林行雄1964「屋瓦」『統古代の技術』

木村捷二郎1969「平安中期の瓦についての私見」『延喜天慶時代の研究』

林博通1975「いわゆる一本造りあぶみ瓦についての研究」『史想』第17号

近藤喬一1977「平安京古瓦概説」『平安京古瓦図録』

上原真人1986「仏教」『岩波講座 日本書古学4』

鈴木久男1987「平安京右京七条・坊の軒瓦について」『長岡京古瓦集成』

鈴木久男1990「一本造り軒丸瓦の再検討」「畿内と東国の瓦」京都国立博物館

- (2) 上原真人1986「仏教」『岩波講座 日本書古学4』

- (3) 奈良国立文化財研究所1991「平城宮発掘調査報告ⅩⅢ」奈良国立文化財研究所学報第50冊

第4節 山田寺式軒丸瓦における外縁の挽き型施紋について

堀 大輔

新堂庵寺では、II A06型式およびII A07型式という2種の範の山田寺式軒丸瓦が出土している。遺物の項で述べたとおり、これらの製作技法に関して最も特異であるのは、外縁の重圓紋を挽き型で施紋していると考えられることである。甚だ不合理とも思われることであり、本節では遺物に観察されるその根拠について少し詳しく述べてみたい。ただしII A07型式はほとんどの個体で外縁が剥離欠損しているため、まずII A06型式の観察をもとに考えてみる。

1. II A06型式に見る挽き型施紋の痕跡

II A06型式において挽き型施紋の痕跡と考えられるものには、およそ以下の5つが挙げられる。

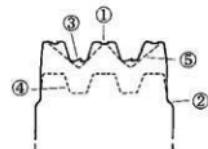
①重圓紋の「山」の中央に浅い溝が走る個体が多い。軒平瓦の型挽き重圓紋にしばしば見られる現象で、施紋時に挽き型の押し付けが不十分であったため、「谷」で抉り取られた粘土が「山」にかぶり、中央だけがかぶらずに残ったことで溝状に見えるものである。当然、挽き型の圧着が完全である個体にはこの溝は認められないが、その場合でも、回転方向の擦痕が明瞭に残るもののが少なからずある。

②外縁部の内外面に挽き型端部の当たりと見られる段差が残る。最後にナデ調整されているために、粘土のめぐれかえりは確認できないが、範端の痕跡ならば通常内面には現れないはずである。何らかの事情で範にこのような段差があったと考えることも可能ではあるが、他の痕跡と考え合わせると、やはり挽き型の当たりと見るのが妥当である。

③重圓紋の「谷」の部分に段差が生じている個体がある。この段差の壁の部分は断面形がオーバーハングしており、垂直方向に抜き取る範に出来するとは考えにくい。すなわち2周目の挽き型の當て方が1周目より浅く、かつ位置もわずかにずれてしまったためと推測される。

④外縁の高さの個体差が大きい。1.5cm～2.5cmまでがあり、焼成時の収縮の差としては大きすぎる。

⑤個体によって重圓紋の断面形が明らかに異なるものがある。少なくとも、「山」・「谷」が四角に近いものと三角に近いものが確認でき、前者は色調灰白色のものに、後者は黒色のものにそれぞれ多い。



第109図 挽き型施紋の痕跡模式図

そもそも、明確な砂粒の移動や、挽き型施紋の始点・終点などが観察されれば、このような微細な痕跡を列挙するまでもなく挽き型施紋の確証となりうる⁽²⁾のだが、残念ながらそのような個体は確認していない。また、③以外の個々の属性は、範がそのように彫られていた、ないしは範の彫り直しということで解釈することも不可能ではない。しかしながら、これらを同時に説明するためには、やはり挽き型による回転施紋が行われたと考えざるを得ない。さらに、摩滅して観察

の困難な個体を除けば、常にこれらの属性が複数組み合わさって認められることからして、重圧紋の挽き型施紋は、一部の個体に例外的に行われたものではなく、全ての個体で行われたと判断する。

それではⅡA07型式についてはどうか。先述のようにほとんどの個体で外縁だけがきれいに剥離しており、焼成が甘いため摩滅も著しいが、そのため逆に外縁だけの破片でも割合容易にⅡA07型式の破片であることが判別できる。摩滅のため①や③の属性は観察できないが、その他のものは多くの破片で認められるため、ⅡA06型式と同様、ⅡA07型式においても全ての個体で挽き型施紋が行われた可能性が高いと考える。

2. 山田寺式軒丸瓦の製作工程

では、外縁だけ挽き型施紋する軒丸瓦とは、どのような手順で作られるのだろうか。

まず問題になるのは範の形状だろう。特に内区だけのBタイプの範であったのか、外縁までのAタイプであったのかが気になるところである。⁽³⁾当該資料の外縁側面にはしばしば小さな段差が巡るため、一見すると外縁側面までかかる範であることが自明のことのように思える。しかし、先述のようにこれは型挽きの痕跡であり、範の形状を示すものではない。そこで想定として前者であると仮定し、範の外周に沿って外縁だけを手づくねで作ったとするなら、当然重圧紋は挽き型施紋となり、外縁高にもばらつきが生じることになる。しかし、遺物を見ると新堂庵寺の山田寺式軒丸瓦の外縁は、高さにこそ大きな個体差があるものの幅は一定しており、歪みなくまっすぐ屹立している。外面も平滑に仕上げられており、Bタイプ範で外縁だけ手づくねで作りつけたとは考えられない。したがってやはりAタイプの範であったと推定される。また、瓦当裏面と側面がシャープな直角をなしていることからすれば、外縁の外側も瓦当裏面と同じ高さまで範がかぶっていたと思われる。裏面と同じ高さに至る範が内区から一体のものであったのか、棚型と組み合わせて使用していたのかについては直接の証拠がない。⁽⁴⁾

次に、範には重圧紋が彫ってあったのか、なかったのか。遺物に範で作ったことが確実な重圧紋が見出せない以上、これも不明と言わざるを得ないが、作範者が勝手に重圧紋だけを省いたというのも考えにくいよう思う。しかしながら一方で、棚型を使わない範であったと仮定すれば、外縁が高い、つまり範の外縁部分が幅に比して深すぎたため、うまく彫刻できずに省いてしまったか、あるいはかなり拙いものであったというのもありえることだと思う。

3つ目には、工程中のどの段階で外縁に施紋するのかということがある。遺物の頃で述べたように、ⅡA06・07型式の丸瓦接合の多くは歯車接合である。この技法は乾燥が始まるまでに瓦当部に丸瓦をくい込ませることが要であり、その際には当然、裏面から瓦当面に向けてかなりの圧力が加わる。よって、それを行うには範から瓦当部を抜いた後ではまず不可能であると推測される。したがって丸瓦接合後に範から抜き、恐らく杵形のような整形台の上に乗せて外縁に施紋するという手順が復元できる。なお、施紋に伴う砂粒の移動がほとんど認められないことからすれ

ば、范から抜いた後、粘土が十分に柔かいうちに整形台に運んだものと思われる。ただし、整形台の痕跡は裏面調整によって消されているらしく、確認できていない。

これらをまとめるとⅡA06・07型式の製作工程は次のようになる。

- 1・Aタイプの范を据え、通常の軒丸瓦と同じように范に粘土を詰める。
- 2・丸瓦を接合する。
- 3・范から抜き、杵状の整形台に乗せて挽き型で三重圈紋⁽⁵⁾を施紋する。
- 4・瓦当側面、外縁部内面、瓦当裏面などをナデ調整して仕上げる。

3. なぜ挽き型施紋をしなければならなかったのか

このように外縁をわざわざ挽き型施紋する理由は何か。大量生産の手段であるはずの范施紋において、このような作り方は非合理的であるように思われる。かつてこの問題について、これらの山田寺式の外縁が高すぎて范抜けが悪かったために、外縁部分は敢えてゆるく范詰めし、抜いた後に挽き型で施紋せざるを得なかつたという見解を述べたことがある。⁽⁶⁾しかしながら、先述のようにこれらの外縁はしっかりと均質に成形されており、きちんと范詰めしたものであることは明らかである。高い外縁を范から抜くことは確かに容易ではなかったと思われるが、現実にそれは行われたと考えざるを得ない。よってこの考えはここで改めたいと思う。

しかし、問題の根本が外縁の高さにあることは変わりないであろう。十分に范詰めを行っているにもかかわらず挽き型施紋が必要であったということは、范に重圈紋が刻まれていなかつたか、もしくは極めて不十分なものであったとしか考えられない。それは前に述べたように、范の外縁部分が深いため彫刻が思うに任せなかつたためであろう。この想定が的を射ているのなら、范は枷型を用いないタイプである可能性が高い。枷型と組むのであれば、外縁の高さと彫刻の難易度は関係しないからである。

これに伴い製品の外縁高が一定しないことについても、范詰めがゆるかっただためとは考えられない以上、型挽きという行為そのものに理由を求めなければならない。すなわち、重圈紋を施紋した工人たちが非常に丁寧な作業を志向していることは、型挽きの始点や終点が確認できないことからも窺われ、そういう失敗があった時には何度もやり直しをしたのではないだろうか。場合によっては一度施紋した重圈紋を削り取ることもあったと思われ、そうした結果が外縁高の個体差となっていると考える。⁽⁷⁾飛鳥時代の素紋縁軒丸瓦の後、初めて高い外縁とそこにつけられた紋様を作り出すことになった人々の、試行錯誤が窺われる資料である。

註

- (1) このことについては、すでに簡単な発表を行っている。(堀 大輔「新堂庭寺の山田寺式軒瓦」(古代瓦研究会『飛鳥白鳳の瓦づくりⅣ～山田寺式軒瓦の成立と展開(1)～』) 2000年)
- (2) 帝塚山大学・森 郁夫氏、(附) 京都市埋蔵文化財研究所・網 伸也氏にご指摘いただいた。
- (3) 近藤喬一「瓦の範と瓦当」(小林行雄博士古稀記念論文集刊行会『考古学論考』、平凡社、1982年)
- (4) 先学の用語に従えば、本来範と模型は区別して呼称すべきであり、両者を組み合わせる場合、毛利光俊彦氏はその総称として「瓦当成型型」の語を用いているが、ここでは煩雑さをさけるため、これを含めて範と呼んでおく。(毛利光俊彦「軒丸瓦の製作技術に関する一考察～范型と模型～」(京都国立博物館『畿内と東国の瓦』) 1990年)
- (5) 1点だけ、四重櫛紋の外縁部小片も確認している。
- (6) 註1に同じ。
- (7) 今回の修正案については、多くの部分を奈良国立文化財研究所・花谷 浩氏のご教示によった。

第5節 新堂廃寺の重弧紋軒平瓦

廣瀬 雅信

1. はじめに

瓦の製作技法については長く多彩な研究史がある。平瓦の製作技法については佐原眞のきわめて実証的な研究があり、それが基礎となって、多種の平瓦の製作技法の解明が進んできている。また、丸瓦の製作技法については大脇潔の研究により、先の佐原論文の援用では理解不足を生じる部分の整理もされ、双方をフィードバックしながら瓦研究は大きく進展したといえる。

初期の軒平瓦については、瓦当紋様から見た年代論、紋様系統論等とともに、施紋方法や製作手順、製作用具に関する研究も進展してきており、同様の軒丸瓦の研究成果とも相まって、同範、同紋関係から瓦の需給や瓦缶の移動も含めた工人集団の動向、さらには、政治的背景もふまえた寺院同士の系統、建立氏族にまで言及した研究も見られるようになってきた。

一方、これまでの研究は軒瓦を中心としたもののが多かったことから、丸・平瓦との共伴関係については解明されていない部分が大きいことも事実である。また、軒丸瓦と軒平瓦のセット関係も、多種の瓦が使用された寺院遺跡では明解に整理しにくいこともあります。特に、ここで取り上げる重弧紋軒平瓦は白鳳時代以後相当長期間使用された瓦であり、組み合う軒丸瓦も様々である。複数の型式が混在する場合、建物ごとの組み合わせについては、出土状態が軒先からの落丁状況を示していたり、廃絶時の状況をよく残していれば一定程度明らかにできるだろうが、どれがどの軒丸瓦と同時期であるのかを確定するのは、かなり困難な作業だといえる。

新堂廃寺の場合も、胎土・色調から共伴関係を推定できたものはあるが、すべて解明できたわけではない。本稿では製作技法についての記述を中心とし、その結果相対的な新古が明らかにできたものについて、軒丸瓦との共伴関係に関する予察を示すこととする。

以後の記述の中で示す個体の番号は、本書に報告した遺物の番号である。挿図・図版を参照されたい。

2. 重弧紋軒平瓦の各型式

第1章第1節および第3節に報告したとおり、新堂廃寺出土の軒平瓦については重弧の挽き型の形態と製作技法等により3型式5種に分類した。重複するが簡単に再録しておく。

II B01型式a：弧線の幅が凹線の幅より広いもののうち、弧線の頂部が平坦なものである。凹線の断面形は丸みを帯びている。平瓦凸面は丁寧にヨコナデしてタタキ目をすり消しているものが多いが、顎接合面はヨコナデするものと格子タタキ目を残すものが混在する。

II B01型式b：II B01型式aと同様、弧線の幅が凹線の幅より広いもので、弧線の頂部が丸みを帯びているものである。顎接合面をヨコナデするもの、格子タタキ目を残すものに加えて、ヨコナデした後にヘラ状工具による沈線を加えるものが見られる。

II B02型式a：弧線の幅と凹線の幅がほぼ等しいもので、弧線の頂部と凹線の底部はいずれも丸みを帯びている。頸接合面はヨコナデするものと格子タタキ目を残すものの2種がある。

II B02型式b：重弧紋の形態はII B02型式aと同じであるが、截頭円錐形桶を使用し、頸の接合を粘土円筒上端で行うなど、製作技法が著しく異なるものである。

II B05型式：弧線の幅より凹線の幅が広いもので、弧線の頂部はやや尖った印象を与える。きわめて浅く施紋されたものがあるが、原体は同じであると考えられる。

3. 製作技法

(1) 桶について

重弧紋軒平瓦桶直径一覧表

(単位: cm)

型式	遺物番号	復元直径	備考
II B01型式a	487	45	
	488	34.6	
	489	37.4	
	490	38.2	
	491	38.2	
	492	41	
	496	30.6	
	497	47.2	
	499	37.2	
	500	32	
	501	46	
	502	40	
	506	45	
	513	41.2	
II B01型式b	527	37.8	
	530	44	
	531	40.2	
	535	43.2	
II B02型式a	495	34.6	
	540	51	
	543	38.8	
II B02型式b	12	49	截頭円錐形桶狭端側
	539	49.2	*
II B05型式	555	42.8	
	556	48.8	
	557	52.4	
	558	49	
	559	37.4	
	560	33.4	
	561	39	

・桶の形状

近年山田寺の重弧紋軒平瓦を製作した桶は円筒形であることがわかつてきた。⁽¹⁰⁾ 重弧紋が回転を利用した押し挽き施紋であることから、粘土板を巻き付け、整形した後に桶の天地を逆転させる必要があるわけで、截頭円錐形桶ではこれはきわめて困難な作業であることが実験により確かめられている。この問題は桶が円筒形であれば解決できることで、山田寺で創案された円筒形桶は軒平瓦製作技術として優れたものであつた。

新堂庵寺の重弧紋軒平瓦は、完形に復元できたものではなく、平瓦部まで大きく残っている破片も数少ないが、側縁に分割截面や分割破面を残す資料を見る限り瓦当面と側縁の角度がほぼ直角をなすものがほとんどであること、大型の破片でも瓦当側と狭窄側の円弧の径が変わらないことなどから、円筒形の桶を用いたものが大半を占めると考えている。⁽¹²⁾

ただ、明らかに截頭円錐形桶を使用したと考えられるものもわずかながら含まれている。(12)と(539)は色調・胎土・焼成とも酷似しており、同時期の製品であるこ

とは間違いない。このいずれもが瓦当面と側縁の角度が鈍角をなし、側縁に分割截面が残ることから、截頭円錐形桶を使用したものと考えられる。

・桶の外径

桶の外径は平瓦凹面の円弧から円周を復元して求めたものであるが、焼きひずみや破片が小さいための誤差もあってかなりのばらつきが見られる。また、粘土の乾燥、焼成による縮小を見込んだ数値ではないので、実際の桶の外径はやや大きくなるであろう。⁽¹⁰⁾

II B02型式 b を製作した截頭円錐形桶の外径は狭端側の数字であるが、直径約49cmを測る大型のものである。

円筒形桶を型式別に見ると、II B01型式 a は平均直径39.5 cmで、37~42cmのものが50%を占める。45cmを超えるものは28%、35cm以下のものは22%である。II B01 b は平均直径41.3 cmで、37~44cmの間に取まる。II B02型式 a は計測できたものが3点しかなく、平均直径は41.5 cmであるがばらつきが大きい。最小は34.6 cm、最大は51.0 cmである。II B05型式は平均直径43.3 cmで、37~43cmが43%、48cm以上のものが43%、36cm以下のものが14%である。

ただ、これらの数値が単純に桶の数を示すものではない。完形に復元できる資料がないため棒板痕跡の詳細な観察による桶の復元まで至っていないことから、実際にいくつの桶が使用されたかは解明できていない。

(2) 成形・調整

観察した重弧紋軒平瓦はすべて粘土板巻き付けによるものである。

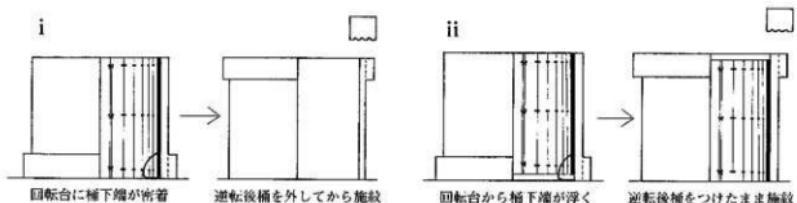
・円筒形桶使用の成形・調整の手順

① 卷き付け：粘土板の合わせ目が観察できる破片で見ると、凸面側から見て左側が上になる重ね方をしている。⁽¹¹⁾

施紋の項で詳述するが、桶の下端部から粘土板の端部がはみ出していたと考えられるものがある。このような巻き付け方は、桶の下部になにかを挟むことにより、桶を立てた状態でも可能であろうが、少しずらして粘土板の上をころがすように巻き付けることも可能である。⁽¹²⁾ 桶の端からの粘土板のはみ出しは一定ではないが、回転台に桶を固定するための粘土の一部を桶の下に挟んだような場合にもそういう現象は起こりうるであろうから、桶を立てた状態で巻き付けたか、転がすようにして巻き付けたかは現時点では明らかではない。

② タタキ締め：タタキ目の観察できる資料はすべて正格子である。格子目は一辺10mm弱のもの(507、508、510)と5mm弱のもの(511、523、524、543、546)の2種が見られる。回転の方向は左回りであろう。その後の工程は、粘土円筒全体をヨコナデ調整する場合と、額の接合を行う場合がある。

③ 額の接合 i : 額を接合した後にヨコナデ調整を施すものである。額の剥離面にタタキ目が残る資料は各型式に見られる。タタキ目は端部に平行なものがほとんどで、額の接合を意識して密に格子目を施した可能性がある。



第110図 円筒形桶による重強紋軒平瓦製作 2 様

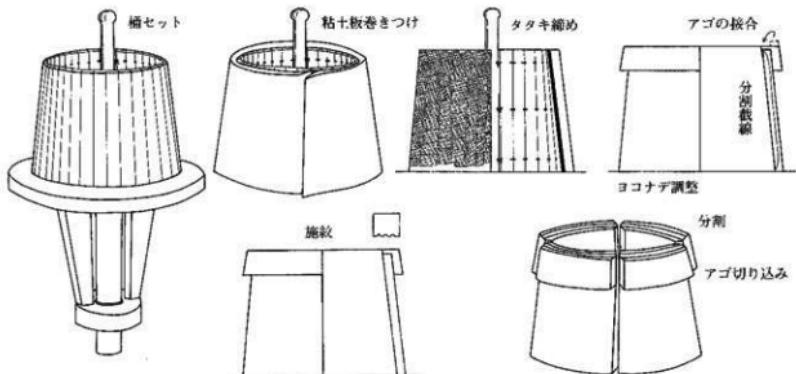
接合作業位置は粘土円筒下端で、一定の幅の粘土帯を左回転で巻き付けている。額の凸面をタキ締めすることはない。額の段部はユビナデして平瓦に接合するが、その前に額の奥行きを一定にするための切りそろえを行うものが多い。このときの切り込みが平瓦部まで及んでしまい、ユビナデで隠しているものの、そこで破損しているものがかなりの割合で見られる。使用した工具は刃の薄いヘラ状のもので、回転を利用したと推定する。ヨコナデはきわめて丁寧であるが、タキ日を完全にすり消していないものも(516、519、529など)わずかにある。回転の方向は左回りである。

④ 額の接合ii：粘土円筒全体をヨコナデ調整してから額を接合するものである。額の接合面に何の加工もないもの(491、513、532～538)とヘラ状工具による平行または斜めの沈線を施すもの(528～531)がある。接合のための加工をしないものは各型式に共通してみられるが、沈線を施すものはⅡB01型式bだけに見られる技法である。接合手順、手法は額の接合iと共通している。

・截頭円錐形桶使用の成形・調整の手順

資料が限られているため、全行程の手順と手法が明らかになったわけではない。

- ① 卷き付け：粘土板巻き付けであるが、合わせ日の観察できる資料はない。
- ② タタキ締め：額の接合面が観察できる資料はないが、破損した断面に観察される接合面の凹凸から、格子タタキであろうと考える。ヨコナデ調整は額接合後に行ったものである。
- ③ 額の接合：粘土上帶を粘土円筒上端部から若干はみ出させて接合し、直角に折り曲げて瓦当面を形成していることが特徴である。その際折り返した粘土の端を凹面側に引き伸ばしてかぶせるように成形している。つまり、桶を外した平瓦用の粘土円筒を用いて額の接合以降の作業を行っているのである。断面で観察できる平瓦端部には変形が認められること、凹面側に引き伸ばした粘土のなじみが悪く一部が剥離していることなどから、半乾燥した状態で額を接合したと考えられる。⁽¹⁶⁾ そのまま分割すれば狄端側が瓦当になり、軒平瓦としては特異な形状となるが、成形後に桶の天地を逆転させるという困難は解決できる。額段部のユビナデ調整は円筒形桶使用のものに比して難である。工人の目から見て死角になる部分であり、手探りの作業であったためである。



第111図 截頭円錐形桶による重弧紋軒平瓦製作手順

(3) 施紋

挽き型による押し挽き回転施紋である。瓦当側縁の残っている資料を観察した限り、分割後に施紋したと考えられるものはない。施紋原体は波形に加工した板状の挽き型であろう。瓦当の凹両面に挽き型の端の当たりが観察されるものが多い。施紋時の回転は左回りであるが、成形・調整の段階とは天地逆の状態であるから、砂粒や粘土の動きは逆になっている。

円筒形桶使用のものは粘土円筒下端で頸を接合している。したがって通常であれば調整後に天地を逆転した段階では桶の端部が瓦当面と同じ高さにあるということで、桶を外さずに回転施紋することは不可能である。施紋に当たっては、まず瓦当面を平坦にするための回転ナデを施すが、その際、凹面側を数cmの幅でヨコナデするものがある。そのようなものは施紋段階で桶が外れていたことは明白である。また、後述するように、桶をつけた状態で施紋したと考えられるものもある。

- ① 円筒形桶使用の施紋 i : 桶を外してから施紋するもの。挽き型の当たりが布疋痕を切っているもの（495、496、518など）、凹面側のヨコナデによって布疋痕がすり消されていて、しかも挽き型の当たりがそのヨコナデを切っているもの（489、493、512、558など）、などがある。
- ② 円筒形桶使用の施紋 ii : 桶をつけたまま施紋したと考えられるもの。巻き付けの項で若干ふれたが、桶を回転台からわずかに浮かせて据え付けたと考えられる例が少なからず存在する。布袋や枠板の痕跡が端部まで及ばないもの（527、557）や、瓦当面近くの凹面側が不自然に肥厚するもの（500、501）、その膨らみを挽き型の幅に合わせてヘラケズリするもの（491、516、530）などがあり、それらは桶をつけたまま回転施紋することが可能である。実験的に確かめたわけではないが、桶を外してから施紋する場合、粘土円筒が自立でき、かつ施紋原体を押しつける垂直方向の力に耐える強度が必要である。わざわざ手間をかけて桶を回転台から浮かして設置するということは、天地を逆転してすぐに施紋することが目的であったと考える。粘土が柔らかいうち

に施紋することで生産の迅速化を図ったのであろうが、量的には技法の主流とはなっていない。挽き型の幅に合わせて凹面側の肥厚をヘラケズリしたりする手間が加わってさほど迅速化にはつながらなかつたのであろうか。

(4) 分割・側縁調整

両側縁が完存する資料は少ないが、それらで見ると4分割されている。分割は凹面に印された分割界線を目印に凹面側から刃物による分割截線を入れて割り離される。円筒形桶使用のものにも截頭円錐形桶使用のものにも凸面側から截線を入れたものはない。分割界線は幅2~3mmの浅いもので、燃り紐によるものと考える。各型式とも分割に先立って、頸の凸面側に切り込みを入れるものが多い。切り込みはV字形のものが大半であるが、円周に直行するものもわずかに見られる(495、500、533)。切り込みは頸の厚み分だけを意識していたようで、あまり深く平瓦部まで切り込んでいるものはない。そのため、切り込み面と分割截面の間にわずかに破面が観察できるものがある。

また、II B05型式だけに見られる技法であるが、切り込みを入れていないため頸の側縁が分割破面となる資料が数点ある(556、559、562)。

側縁は分割後調整しないものと、丁寧なヘラケズリ調整を加えるものがあるが、型式による差は明確ではなく、時期差や工人差に結びつくかどうかは判然としない。

4. 挽き型の摩耗から見た新古

施紋原体は波形に加工した板状の挽き型であろうと推定した。また、施紋前に瓦当面を平坦に回転ナデ調整するのであろうということも指摘した。II B01型式aの弧線の平坦な頂部の砂粒・粘土の動きは、凹線部分と微妙に違う動き方をしており、挽き型の形を反映したものではなく平坦に調整した面が残っているものと考えられる。そうであれば、挽き型の摩耗から個体間の新古を見取ることが可能であろう。

II B01型式a・bを比較すると、弧線と凹線の高低差にはあまり違いはなく、凹凸両面に観察される挽き型の当たりの深さは差が大きい。II B01型式aでは挽き型の当たりはいずれも浅いが、II B01型式bでは瓦当面から1cmを越えるもの(524)も見られる。この現象は挽き型の摩耗によると考えられる。平坦な瓦当面に挽き型を当てて回転させると、まず凹線を挽く部分が粘土に食い込んでいく、弧線を挽く部分がそれに続く。凹線が十分な深さに達したと見れば弧線を挽く部分が粘土に触れないうちに作業を終えてもいいわけで、そういう意味でグループがII B01型式aだと考える。当然挽き型の凹線を挽く部分が最も早く摩耗する。挽き型の両外側は粘土に触れることはないからほとんど摩耗しないであろう。その結果、弧線と凹線の高低差がほとんどなく、挽き型の当たりの深さに差が出るのである。すなわち、II B01型式a→II B01型式bという時間差で両者をとらえることができる。

II B02型式aでは挽き型の当たりの深さにさほど差は出でおらず、このような時間差はあま

り明瞭ではない。生産期間が短かったことを示しているのだろう。

ⅡB05型式では、挽き型の当たりから時間差を看取することは困難であるが、この型式の特徴としてきわめて施紋の浅いものがある。これを挽き型の摩耗による現象と解釈すれば、時間差を看取することが可能である。ⅡB01型式aの場合、挽き型の波形の高低差がかなり大きかったために弧線頂部に平坦面が残ったのであろうが、ⅡB05型式の場合挽きの浅いものであっても、弧線の頂部がやや尖り気味という特徴を表しているもの（557、561、563など）については挽き型の形態を反映したものである。前述のごとく、挽き型の凹線を挽く部分が真っ先に摩耗するのであるから、ⅡB01型式よりも早く波の高低差は失われていくだろう。すなわち、ⅡB05型式の中では、挽きの深いもの→挽きの浅いものという時間差がとらえられるのである。

5. 軒丸瓦との共伴関係に関する予察

(1) 軒丸瓦の抽出

新堂磨寺の場合、重弧紋軒平瓦と組み合う可能性のある軒丸瓦は山田寺系のⅡA06・07型式と川原寺式のⅡA09・10型式であると考えられ、型式学的な新旧関係もこの順でとらえられる。このうちⅡA10型式は中房の改築とされによってさらにⅡA10型式①～④に細分したが、本章第2節で検討したように②～④は平城宮式軒丸瓦ⅣA12型式との比較から奈良時代に下ることが明らかである。また、①は製作技法を見る限りⅡA09型式との共通点が多いが、以下の理由でこれも奈良時代に下る可能性が高いと考えている。ⅡA10①型式は、胎土・色調がⅡA09型式とは全く異なっており、重弧紋軒平瓦の中にも共通する胎土・色調のものはない。新堂磨寺出土の軒平瓦の中で胎土・色調がよく似ているのは均齊唐草紋軒平瓦ⅣB04型式である。両者はセットで搬入された可能性が高い。仮にⅡA10①型式がⅡA09型式の差し替え瓦として搬入されたものであるなら、組み合う軒平瓦は当然重弧紋であろうが、重弧紋軒平瓦には一枚作りのものは確認されていないことから奈良時代まで下るものはなく、すべて白鳳時代に属するものと考えてよい。⁽¹⁸⁾したがって、差し替え瓦という理解ではⅣB04型式の存在が説明できないわけで、ⅡA10型式は小修理のためではなく、大規模な改修のために運ばれた瓦であると考えられるのである。その時期は瓦類の総量から見て奈良時代に入ると考える。大規模な改修に際しても、軒丸瓦だけは意識的に川原寺式の瓦当紋様を用いる建物があったとしか考えられない。組み合う軒平瓦は均齊唐草紋軒平瓦ⅣB03とⅣB04型式である。

結果、重弧紋軒平瓦が組み合う軒丸瓦はⅡA06、07、09の3型式に限定される。

(2) 丸瓦との共通点の抽出

個々の組合せについて検討するための一つの手がかりとして、平瓦部あるいは頭の剥離面に残されたタタキ目と丸瓦に残されたタタキ目を比較してみる。

重弧紋軒平瓦に観察されるタタキ目は原体の大きさが一辺10mm程度のものと5mm程度の2種の正格子タタキのみで、同種の平瓦との同時性を看取できる。ただ、一部の平瓦に見られる斜格子

タタキ目は重弧紋軒平瓦にはない。丸瓦は凸面に丁寧なナデを施しているものが多く、タタキ目が観察できるものはわずかである。第6節で述べられたように、無段式2類—aの丸瓦に平行タタキまたは正格子タタキのもの（618）があるが、胎土・色調から川原寺式ⅡA09型式との類似が指摘されている。

今ひとつの手がかりは色調と胎土及び焼成の共通性であろう。ⅡA06型式の弁央の稜線がはっきりしたものの中に黒色で胎土に砂粒を多く含む資料があり、ⅡB02及びⅡB05型式の施紋の深いもののうちで同様の色調、胎土のもの（541、560、565）が組み合うであろうことは容易に判別できた。しかし、そのほかのものについては其伴関係の判別は容易ではない。白鳳時代の各型式の軒丸瓦は色調・胎土・焼成の差が型式差に反映しているとは言い難い状況である。その状況は重弧紋軒平瓦においても同様で、青灰色で焼成が硬質のもの、褐色系で焼成が軟質のもの、黒灰色で焼成が軟質のものなどが各型式に入り交じっており、しかも、長石とクサリ礫が多く、雲母をわずかに含む胎土はほぼ共通しているのである。¹⁰⁹これは本章第2節で軒丸瓦について述べられているように、各型式の製作時期にあまり時間差がないことを示しているのではないかと推測する。

（3）重弧紋軒平瓦の変遷

軒丸瓦のうちⅡA06型式の弁央の稜線がはっきりしたものが一番古いことは明白であり、軒平瓦ⅡB02型式とⅡB05型式の中にそれに組み合うものがあることははっきりしている。つまり、ⅡB02・05型式よりⅡB01型式の方が新しく位置づけられるであろう。また、ⅡA06型式の範が摩耗した段階のものと後出の型式と考えられるⅡA07・ⅡA09型式との間にあまり時間差がないとすれば、どの型式の重弧紋軒平瓦が組み合ってもよいともいえる。あえて推定するなら、ⅡA06型式の範がやや摩耗した段階のもの、ⅡA07型式、ⅡA09型式はそれぞれの製作時期が順にある程度の重なりを持って変遷しており、その間に製作された軒平瓦は、①ⅡB02・05型式のうちの黒色を呈するもの→②ⅡB02・05型式→③ⅡB02・05・01型式a→④ⅡB02・05・01型式bというようなわずかな時間差を持った変遷が考えられるのではないだろうか。このうち、もっとも数量の多いⅡB01型式が一番長く作り続けられ、ⅡB02・05型式は3ないし4段階目では生産が終わっていたものと考えられる。

以上、新草庵寺の重弧紋軒平瓦について書き連ねてきたが、検討不足が著しいことは自覚している。布袋の製作技法については全く検討する余裕がなかったし、桶の大小や使い方が時間差に反映するかどうかの検討もできていない。今後に残された課題が多い。

註・参考文献

- (1) 佐原眞1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌58巻2号』
- (2) 大脇潔1991「丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所研究論集第49冊
- (3) 藤澤一夫1941「攝河泉出土古瓦の研究—編年的様式分類の一試企—」「佛教考古學論叢」考古學評論第三輯、東京考古學會、山本忠尚1991「軒平瓦の創作」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所研究論集第49冊、山崎信二1993「桶巻作り軒平瓦の製作工程」「考古論集—潮見浩先生退官記念論文集—」など。
- (4) 森郁夫1982「瓦当紋様の創作」『ミュージアム376号』、岡本東三1983「法隆寺天智9年焼亡をめぐって—瓦からみた西院伽藍創建年代—」「文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集」など。
- (5) 許(3)、(4)文献のほか、佐川正敏1995「山田寺出土軒丸瓦の概要と堂塔の造営・修理」「山田寺学報検討会記録Ⅱ」など。
- (6) 概説としては、森郁夫1986「瓦」『考古学ライブラリー43』がある。また、須恵器の年代観との関係から論じたものに、菱川哲郎1986「畿内の初期瓦生産と工人の動向」「史林69—3」がある。
- (7) 山崎信二1983「後期古墳と飛鳥白鳳寺院」「文化財論叢 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集」、花谷浩2000「京内廿四寺について」『研究論集Ⅹ』奈良国立文化財研究所学報第60冊など。
- (8) 新空寺では井西貴子が試みている。井西貴子1997「新空寺発掘調査概要・Ⅱ」。また、五十川伸矢や梶原義実の研究は有効であろう。五十川伸矢1981「古代瓦生産の復元」「考古学メモワール」、梶原義実1999「七世紀における造瓦組織の発展」「史林82—6」
- (9) 本稿作成中に花谷浩「たかが重弧、されど重弧」に接した。軒丸瓦の様式が遡れば、紋様、製作技法、施紋方法などの点で重弧紋軒平瓦も変わることを解き明かし、様式研究の要素となりうることを示した。花谷浩2001「たかが重弧、されど重弧—飛鳥地域出土重弧紋軒平瓦様式区分の企図—」「帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅲ」
- (10) 山本忠尚は許(4)文献で山田寺の重弧紋軒平瓦が円筒形桶で製作されたことを解明し、「円筒桶巻き作り」と名付けた。花谷浩はさらに、山田寺四重弧紋軒平瓦A型式について、たった一つの円筒形桶で製作されたことを解明している。花谷浩1997「山田寺創建軒平瓦の製作技法—桶は一つ軒平瓦は皆兄弟」「奈良国立文化財研究所年報1996」、同じく許9文献。なお、太宰府の平安期の平瓦には「円筒桶」を用いたものがあり、桶は非開閉式と考えられていることを梶原義実氏の教示により知った。
- (11) 山本忠尚許(4)文献では、法隆寺式の忍冬唐草紋軒平瓦は逆円錐形に据えた桶に粘土板を巻き付けるという手間のかかる方法をとったと考えている。また、機能的に優れた「円筒桶」の技法が後に続かない理由を、桶巻き作りから凸型台一枚作りという皇帝体制への過渡期の技法と理解した。
- (12) 框板痕跡は明瞭ではないが、単位幅3cm程度で、枠板ごとの凹凸が見られる。開閉式であろう。桶ごと天地を逆転させることが前提であるから当然無柄である。
- (13) 佐原眞は(1)で、乾燥・焼成による縮小率を1割1分と見込んでいる。
- (14) 佐原眞は(1)で、このような重ね方を「S型」、逆を「Z型」と呼んだ。
- (15) 円筒形桶を転がす巻き付け方については、山本(4)文献で、山田寺出土の重弧紋軒平瓦に関する山本清一氏の観察結果として報告されている。
- (16) 本書作成中に開催した検討会で、花谷浩氏の観察により判明した。また、粘土円筒上端で頭を接合している類例としては、尾張元興寺の重弧紋軒平瓦について桶端部から粘土板をはみ出させて巻きつけてい

- た可能性とともに報告されている。名古屋市教育委員会1994「尾張元興寺跡発掘調査報告書－名古屋市文化財調査報告28－」
- (17) 森郁夫氏から、特異な形態だが、二の半をそのまま重ねられるという利点があるので、狹端側が瓦当になる作り方があつてもいいのではないかとのご教示を得た。
 - (18) 山田寺では奈良時代の補修瓦まで「山田寺式」を墨守している。佐川正敏・西川雄大2000「山田寺の創建軒丸瓦」、花谷浩2000「山田寺の重弧紋軒平瓦」いずれも『飛鳥白鳳の瓦づくりⅣ—山田寺式軒瓦の成立と展開—（1）発表要旨』古代瓦研究会
 - (19) 59・60年度調査では伽藍中枢部で多量の焼土層が確認されたことと、検出された造構が白鳳時代以降のものと考えられることから、飛鳥時代創建の伽藍が焼失し、白鳳時代以降に再建されたと推定された。本稿で言う大規模改修もある意味で再建を指しているが、創建時の伽藍配置や構造が未だ明らかになつていない現状では、全面的な建て替えであったとも言い切れないだろう。
 - (20) 脂土が共通しているということは、生産地が同じであることを示している。タガンジ池瓦窯跡の報告書が未刊であるため確実なことはいえないが、筆者は同窯の茲然性が高いと考えている。

あとがき

重弧紋軒平瓦に関しては最近花谷浩氏の精力的な研究に接して瞠目するが多く、このような描文を公表することには内心忸怩たるものがある。氏は「たかが重弧、されど重弧」とノリがいい。筆者はといえば、「だけど重弧は蔽の中」といった心境である。

発掘調査の段階からこの報告書作成まで変わらぬご指導を賜った北野耕平先生、森郁夫先生、大脇潔先生、毛利光俊彦氏、花谷浩氏には厚くお礼申し上げたい。第1回から参加させていただいている古代瓦研究会には触発されることが多かった。また、歩みのろい筆者の背中を押し続けてくれた本書の若い共同執筆者たちにも感謝している。

第6節 奈良時代における新堂廃寺の造瓦組織

～丸瓦・平瓦の分析より～

梶原 義実

はじめに

新堂廃寺の調査では、軒瓦の他に多くの丸瓦・平瓦が出土した。特にC区、南門瓦落ち出土の奈良時代の丸瓦・平瓦は良好な一括資料であり、またその他の地区からも完形近い瓦が相当数出土している。これらの資料は、新堂廃寺の造瓦組織を考えるにあたって格好の材料である。

本節では、出土丸瓦・平瓦のうち比較的の残存率が高く、より多くの情報を残している資料をピックアップして分析し、新堂廃寺の造瓦組織に迫ってみたい。なお具体的には、閾数が2つ以上残っている資料を分析の対象とした。遺物番号は第83、84、88～98図に従い、図未掲のものについて丸瓦はa・b・c～、平瓦はA・B・C～と表した。

丸瓦・平瓦の分類

・分類にあたって

まず丸瓦・平瓦の分類にあたって、どのような属性を重視するかを決定しなくてはならない。本稿では工人単位数から想定される工房の規模やその変遷・供給先との関係などの復元を目的としており、それに合った属性を考慮し選定する必要がある。それにあたって、平瓦を用いて工房内の労働組織を復元した五十川伸矢氏の論考【五十川1981】や、同氏による周山窯での具体的な資料整理【京都大学考古学研究室1982】はたいへん示唆に富んでおり、また拙論【梶原1999】でも、平瓦を分析する上で「細部調整法」と「道具の痕跡」のもつ意味が異なることを述べている。これらの論考をもとに、ここに分類基準としての各属性のもつ意味について掲げておく。

細部調整法・・・技法という言葉も用いられるが、用途や機能に関わる技法は、他からの影響により有効な技法を採用したり、作り分けを行ったりする可能性もあり、正しく工人単位を復元できない。ここでは直接的に工人の違いを表す、工人の手癖的な属性として細部調整法という言葉を用いる。しかし、異なる工人が同様の細部調整を採用していた（似たような手癖を持っていた）場合、両者が作った製品を正確に分けることは難しい^①。従って細部調整法によって分類された分類数は、考え得る「最小の」工人単位数を表すに過ぎず、さらなる細分には他の細部調整法または道具の痕跡による補完が必要となる。

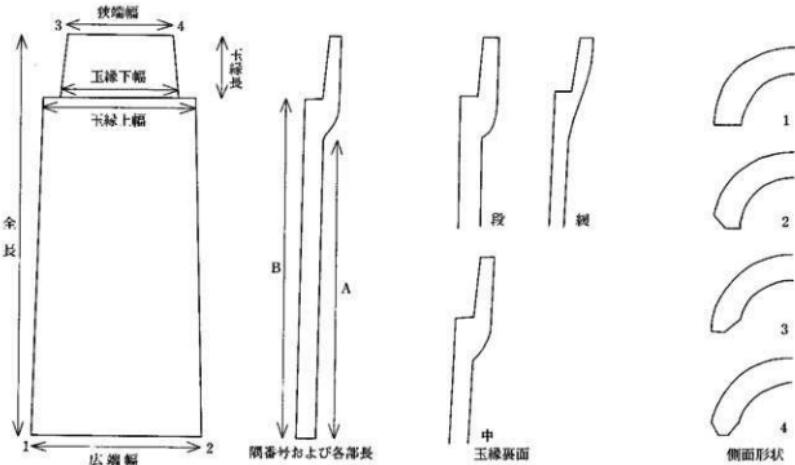
道具の痕跡・・・まず、道具が工房で共有されていたか各工人が個別に所有していたかによって、道具の痕跡のもつ意味が異なってくるため、細部調整法との照合が必要である。さらに、道具が個別所有であった場合も、道具は消耗品であるため、同一工人が複数の道具を時期差で使い分けた可能性も考慮しなくてはならない。従って道具の痕跡による分類数は、考え得る「最大の」工人単位数を表すといえる。道具の痕跡=工人単位数に近づけるためには、細部調整法による検

証はもちろんのこと、できるだけ消耗度の低い道具を属性として使用することも有効である。

これらのこと考慮に入れつつ、具体的な分析を行っていきたい。

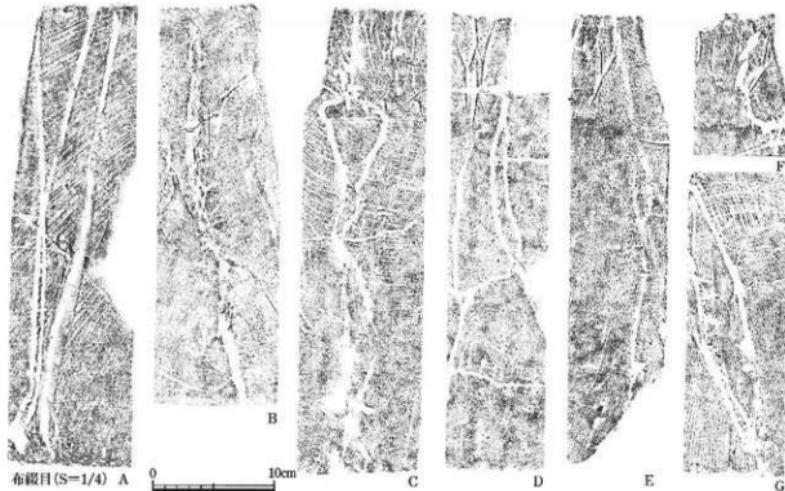
ID番号	出土位置	種類	無段／有段	玉縁裏面	全長	A品	B品	玉縁長	広端幅	玉縁上幅	工縫下幅
693	A区・瓦渠	1・2・3・4 無段	-	32.4	-	-	-	-	19	-	-
694	A区・瓦渠	1・2・3・4 無段	-	34.6	-	-	-	-	16	-	-
696	A区・瓦渠	3・4 無段	-	-	-	-	-	-	-	-	-
625	梁渠	1・2・3 無段	-	37	-	-	-	-	16	-	-
8	2・3・4 無段	-	35.2	-	-	-	-	-	-	-	-
688	A区・瓦渠	3・4 有段	段	-	-	-	-	-	-	-	-
700	C区・南門瓦渠	3・4 無段	段	-	-	-	-	-	6	-	-
701	C区・南門瓦渠	3・4 無段	段	36.6	29.2	32.8	5.6	-	14	11.2	-
704	C区・南門瓦渠	1・2・3・4 無段	段	38.6	29.2	32.8	6.8	-	16	11	-
705	C区・南門瓦渠	2・4 無段	段	38.4	29.2	32.8	6.8	-	15.2	12.2	-
709	C区・南門瓦渠	1・2・3・4 有段	段	39	29	33.2	5.6	15.6	14.8	12	-
711	C区・南門瓦渠	2・3・4 有段	段	36.6	29.4	32.8	5.6	-	14.4	11	-
712	C区・南門瓦渠	1・3・4 有段	段	39.4	29.4	32.8	6.6	-	15.2	12	-
713	C区・南門瓦渠	1・2・3・4 有段	段	36.4	29.4	33.4	6	16	14.8	11.6	-
714	C区・南門瓦渠	1・2・3・4 右段	段	41	32	34.8	6.2	16	15	12	-
717	C区・南門瓦渠	1・2・3・4 左段	段	36.6	29.6	33.4	6.2	15.6	14.6	11.8	-
720	C区・南門瓦渠	1・3 右段	段	39	30.4	33.4	6.6	-	-	-	-
b	C区・南門瓦渠	1・2・4 右段	段	39	30	33.8	6.6	19.8	15	12	-
705	C区・南門瓦渠	2・4 右段	段	37.2	27.4	31	6.2	-	-	-	-
718	C区・南門瓦渠	1・3・4 右段	段	36.8	28.8	33	5.6	-	14.4	11.4	-
713	C区・南門瓦渠	1・2・3・4 右段	段	36.8	27.2	31.6	5.2	15	14.2	11.6	-
714	C区・南門瓦渠	1・2・3・4 右段	段	36.6	28	31.6	5	14.8	14.6	12	-
719	C区・南門瓦渠	3・4 右段	段	-	-	-	4.6	-	14	12	-
722	C区・南門瓦渠	1・2 右段	段	-	-	-	5.4	-	15	12.4	-
630	瓦含糊	1・2・3・4 右段	段	37.4	28.6	33	4.4	14	14.6	11	-
632	C区・南門(中世)	1・2 右段	段	-	28	32.4	4.4	15	14.6	-	-
c	不明土壤	1・2 右段	段	-	27.6	31.8	-	13.6	-	-	-
633	聖地49	3・4 右段	段	-	-	-	5	-	13.6	11	-
634	袋地49	3・4 右段	段	-	-	-	5	-	15.4	12.4	-
635	G区・溝58	1・2・3 右段	段	32.6	24	28	4.6	14.2	-	-	-
636	聖地49	1・2・3・4 右段	段	35.4	22.8	29.6	5.6	14.4	14.4	11.2	-
637	聖地49	1・2・3・4 右段	段	35.5	25	30	5.6	15.6	14.6	11.2	-
638	G区・溝58	1・2・3・4 右段	段	31	24	26.6	4.4	13.6	13.6	11	-
698	C区・南門瓦渠	3・4 右段	段	-	-	-	5.4	-	14.8	12	-
699	C区・南門瓦渠	3・4 右段	段	-	-	-	5.6	-	14.6	12.4	-
700	C区・南門瓦渠	3・4 右段	段	-	-	-	5.6	-	13.6	11	-
632	C区・南門(中世)	3・4 右段	段	-	-	-	5.2	-	14	11.2	-
671	C区・瓦渠	1・2 右段	段	-	-	-	16.4	-	-	-	-
672	C区・南門瓦渠	1・2 右段	段	-	-	-	15.2	-	-	-	-

凡例 - : データ存在せず * : 欠損のため計画不能 脳上長: 長石 石: 行英 ク: クサリ壁 チ: チャート 宮: 宮母



第112図 千瓦凡例図

鉄番号	厚さ	凸面印字	凸面調整	凹面名目	凹面毛細目	表面形状	色調	胎土	焼成
13.6	1.6	無力印字	無い模ナデ	周	B	4	オリーブ黒	赤・石	稍不良
11	2	無力印字	無い模ナデ	周	B	3	墨灰	赤・白	良
12	1.6	前方向彌	無い模ナデ	周	B	3	灰	長・ク	稍不良
-	1.6	前方向彌	無い模ナデ	周	B	3	褐色	長・石	稍不良
(2.2)	1.6	無	無	周	A	3	墨	長・石	良
13	1.6	無	無	周	A	3	墨	長・石・ク・子	稍不良
14	1.6	無	無	周	A	3	墨	角・石・墨	不良
10.4	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	明褐色	赤・石・ク	稍不良
10.4	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	褐色	長・ク	稍不良
11	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	褐	長・石・ク	稍不良
-	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石・ク・青	稍不良
10.4	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
10.2	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
10	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
10.2	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
10.2	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
11.4	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
11	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
-	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
-	1.6	無	工員ナデ	周	C	1	灰	長・石	稍不良
-	1.6	無	工員ナデ	周	D	1	灰白	赤・石・ク	稍不良
10.4	1.6	無	工員ナデ	周	E	1	灰白	長・石・ク	稍不良
10.4	1.2	無	工員ナデ	周	E	1	明褐色	赤・石・ク	稍不良
10.4	1.6	無	工員ナデ	周	E	1	褐色	赤・石・ク	稍不良
10.6	1.6	無	工員ナデ	周	E	1	褐色	赤・石・ク	稍不良
10.8	1.6	無	工員ナデ	周	E	1	灰白	赤・石・ク	稍不良
-	1.2	無	工員ナデ	周	E	1	灰白	赤・石・ク	稍不良
9.6	1.6	無	工員ナデ	周	E	1	灰	赤・石・ク	稍不良
-	1.6	無	工員ナデ	周	F	1	青灰	赤・石・ク	稍不良
-	1.6	無	工員ナデ	周	F	1	青灰	赤・石・墨	良
10	1.4	無	工員ナデ	周	F	1	灰	赤・石	良
10.4	1.6	無	工員ナデ	周	F	1	灰白	赤・石	稍不良
-	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・チ	稍不良
10	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
10.4	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
10	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
9.4	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
10.4	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
10.8	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
9.6	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
10	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
-	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良
-	1.6	無	工員ナデ	周	G	1	褐色	赤・石・墨	良



第113図 丸瓦凹面拓影図

・丸瓦

2隅以上を残すという前述の基準をクリアした丸瓦は全部で51点。そのうち奈良時代の資料は40点。さらにそのうち23点がC区、南門瓦落ち出土の一括資料である。分類基準としては、型本の数を明確にするという観点より、有段式丸瓦の場合玉縁裏面の形状および全長など各部法量を基本とし、また布綴目なども重要なポイントとして観察した。

なお、表にあげた観察点以外にも、分割手法などの観察も行ったが、すべての個体において分割界線を用い、丸瓦円筒の内側から截線を入れる点で共通しており、また有段2類b～eのような側面調整を施さないものに関してはすべて破面をそのまま残していた。型式間で大きく差異が出なかったことから分析表からは外した。

まず奈良時代の無段式丸瓦は1種のみである。

無段3類 (625、683、684、686、a) の5点。全長は32～38cmとややばらつきがある。暗黒色系の色調と胎土に砂粒をあまり含まない点において他と異なる。布綴目は布をかなりの幅で重ね合わせ数本の綴目を作るもの(第113図A)と、布端を斜めに一本の綴目で縫い合わせるもの(第113図B)の2種がみられ、それぞれで凸面縄タタキの方向や側面調整が異なるようである。

次に有段式丸瓦(35点)は以下の5種に分類できた。

有段2類a (688)の1点。玉縁部凹面側は段状。凸面に縦方向の縄タタキを施すが、縄が他に比して太く、また縄タタキ後に凸面を調整しない。側面調整は凹面側のみ削る。

有段2類b (700、701、704、707・708、711、712、715～717、720、b)の12点。玉縁部凹面側は段状。全長は1点の大型品を除いて38～40cm、また広端から凹面の段の変曲点までの長さ(凡例A長)は29～30cm、凸面側玉縁部までの長さ(凡例B長)は33cm前後など、かなり規格性が高い。凸面は左撚りの細い縄タタキを縦方向に施した後、工具で横方向にナデ消している。布綴目は半数を超える個体で観察され、すべてCである。側面は調整しない。胎土に多種の砂粒を多く含み、焼きはやや甘い。

有段2類c (705、718)の2点。玉縁部凹面側は明瞭な変曲点をもつが、傾きは有段2類bに比してやや緩やかである。2点のみで法量的なことはいいにいが、有段2類bよりもひとまわり小型品が含まれるようである。布綴目はDがみられる。以下有段2類eまで、調整や胎土・焼成等有段2類bと同様。

有段2類d (630、631、713、714、719、721、722、c)の8点。玉縁部凹面側には明確な変曲点をもたず、なだらかである。全長は37cm前後、A長は27～29cm、B長は32cm前後と、有段2類bよりもやや小さいがこれも規格性が高い。タタキは明瞭に残す個体がない。布綴目はEの1種類である。

有段2類e (633～638)の6点。玉縁部凹面の形状は有段2類dと同様であるが、法量が全体的にdよりやや小さく、しかもばらつきが大きい。凸面は有段2類bと同様左撚りの縦方向縄タタキをT.具でナデ消す。布綴目はF・Gの2種がみられるが、綴目の部位が異なっており、上

下につながる同じ縁目のようにある。

なお、表最下部の6点は分類不可能な個体である。(632、698、699、702) は有段2類dまたはe、(678、710) は有段2類b～eのいずれかにあたる。

・平瓦

前述の基準をクリアした平瓦は全部で38点。そのうち奈良時代の瓦は33点、さらにそのうち21点がC区、南門瓦落ち出土の一括資料である。数量の多い一枚作り平瓦は、97年概要では凸面調整の違いとして、調整を加えない(4a)・繩タタキ後ナデ(4c)・繩タタキ後指オサエ(4d)の3種に分類しているが、4cのナデ痕は、当該遺物を観察したところ、粘土塊から粘土板を切り取った際の糸切痕が、タタキを施した後も完全には消えずに残っていたものであり、細部調整法上の特徴とは言い難い。

4dについては詳述が必要である。この指オサエは、平瓦端部のタタキが及ばなかった部分を補足的に押さえる目的で施されたもの(表中d')はわずかであり、多くは端部から10～15cmほど中央に寄ったあたりに横方向に指跡が並んでいる(表中d。第94図～98図を参照)。どのようにしてこの指跡がついたかについて本節では、凹面ケズリ調整を第114図のように行なった結果であるとみた。その根拠としては、まず瓦の縦断面をみると、(731、736、739)などの瓦に顕著のように、指オサエが並んでいる部分を変曲点として、凸面側にやや反っている例が多いことがわかる。これは指オサエがみられる部分が、凹面ケズリにあたっての支点となったことを表している。さらには、これらの瓦の中には凸面の繩タタキが潰れていったり、凹型台の痕跡が残っている個体がなく、瓦が反っているという事実も勘案すると、凹面ケズリ時に凹型台を使用したという解釈は、これらの瓦に関しては否定的にならざるをえない。

また、指跡が残る個体・残らない個体は双方とも凹面ケズリを施しており、残らない個体のみが凹型台を使用したという痕跡も特に見当たらないことから、両者の違いは単純に凹面調整を行った時点での瓦の乾き具合の違いととどめることができる。ただ、表からみてとれるとおり、この両者は凸面タタキの違いとよく対応しており、瓦がどのくらい乾いた時点で凹面調整を行なうかというのも、工人の手癖を示す要素の一つであるのかもしれない。本節では表には項目を設けるものの、工人単位認定のための属性として積極的に評価することは控えておく。

その他の属性については、細部調整法としては狭端側からの縱方向繩タタキや凹面側を浅く面取りする側面調整など共通性が強かった。道具の面でも、布目はすべてほぼ同じであり、成形台の特定を期待して計測した曲率も、凡例のR長が平瓦中央部付近で15～17cmとほぼ共通しており、



第114図 平瓦凹面削り調整

特に型式差は見いだせなかった。従って、これらの属性は表からは外してある。

また全長などの諸法量もそれほど大きな差はみられなかったため、型式分類にあたってはタタキ板の種類で基本的な分類を行い、法量などはあくまで補完的な属性として使用するにとどめた。タタキ板は消耗度が高いこともあり、型木・法量および布綴目という三重の属性での分類を行った丸瓦に比べ、平瓦の型式は必ずしも型式=丁人単位とはならない可能性があることを特に注記しておく。

桶巻作り平瓦は數量も少なく、奈良時代のものは以下の1種のみである。

3類 (668、695、697、745) の4点。凸面の縄タタキがタタキ締めの円弧を描く。縄目は $3 \times 3\text{cm}$ あたり6粒×10本程度。タタキはかなり密である。凹面は調整を加えず、棹板痕が明瞭に残る。側面調整は行わないか、凹面側を小さく面取りする。暗色系の色調や胎土に砂粒をあまり含まない点から、無段4類の丸瓦との組み合はと思われる。また、「石川郡大門」銘の平瓦も胎土や色調からこの一群に含まれる。

一枚作り平瓦は29点。以下の7種に分類した。なお、すべての型式において、砂粒を多く含み焼成がやや甘いという点は共通しており、有段2類b～eの丸瓦と組み合は、同一の生産地と思われる。なお、支番のa～gは凡例に示したタタキ日のa～gに対応する。

4類a (674、731、735、738～740、A) の7点。タタキ板の縄目は $3 \times 3\text{cm}$ あたり8～9粒×15～16本。縄は左燃りで太さは一定。全体を密に叩く。また、指オサエが広端付近にみられる個体、やや中央に寄ったところにみられる個体の双方が存在する。全長は34～37cmあたりで、ややばらつく。

4類b (671、676、694、732、741、743) の6点。タタキ板の縄目は $3 \times 3\text{cm}$ あたり6～8粒×12～14本。縄は左燃りで太さは一定。やや隙間を開けてタタキを施す。指オサエが中央寄りにみられる。全長が残る個体はほとんどが36cmを超えている。

4類c (733) の1点。タタキ板の縄目は $3 \times 3\text{cm}$ あたり10粒×12本程度。縄は左燃りで、10～12本に1本程度太く縄痕が表される。タタキ板の側端であろうか。全体を密に叩く。全長35cm。

4類d (723、725、737) の3点。タタキ板の縄目は $3 \times 3\text{cm}$ あたり6～7粒×12本程度。縄は左燃りで、10本に1本程度太く縄痕が表される。全体を密に叩く。指オサエが中央寄りにみられる。全長38cm超とやや大型であり、葺く際に広端側面を少し打ち欠いている。

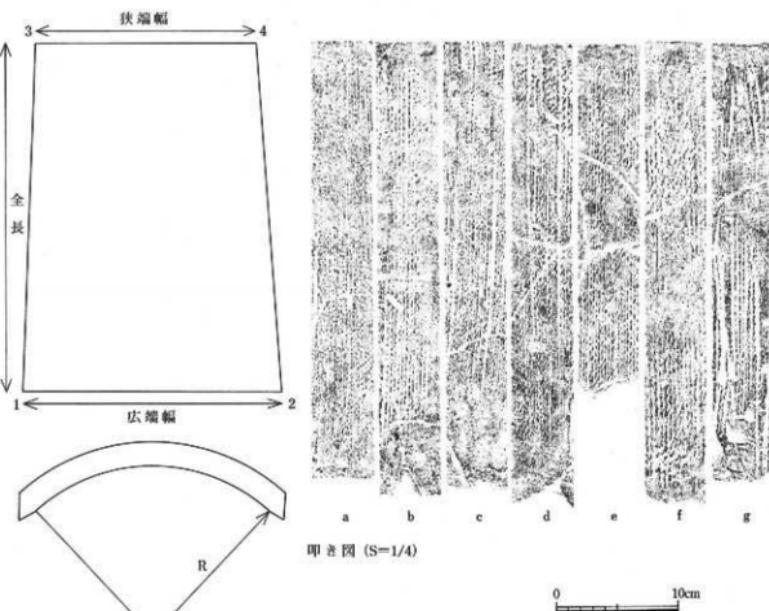
4類e (726、727、734) の3点。タタキ板の縄目は $3 \times 3\text{cm}$ あたり5～7粒×10～12本。縄は左燃りで太さは一定。全体を密に叩く。全長がわかる個体は1点のみで38cm。

4類f (670、692、693、696) の4点。タタキ板の縄目は $3 \times 3\text{cm}$ あたり7～8粒×9～10本。縄は左燃りで太さは一定。全体を密に叩く。全長37～38cmとやや大型。

4類g (672、729、730、736、744) の5点。タタキ板の縄目は $3 \times 3\text{cm}$ あたり5～10粒×10～12本。縄は左燃りと右燃りが混在し、太さも様々。また一部の縄はややほどけ気味にたわんでいる。全体を密に叩く。指オサエがある個体とない個体がある。全長34～36cm。

断面番号	出土位置	段 間	全 長	玄 面	凸面幅	凹面幅	凸面印跡	凸面特徴	凹面調整	色 質	胎 土	焼 成
695	A区、南門瓦落ち	1・2・3	36.8	25.2	22.2	7.5	a	b	無	透青	角・石・ク	胎瓦
697	A区、南門瓦落ち	1・2・3	36.4	25.2	22.2	7.5	a	b	無	透青灰	角	胎瓦
745	C区、南門瓦落ち	2・4	36.8	—	—	—	a	b	無	角・石	角	良
668	包合層	2・3・4	34.6	—	21.6	7.5	a	b	板工具ケズリ	黒帯	角	胎瓦
731	C区、南門瓦落ち	1・2・3・4	36.6	26.4	22.4	7.5	a	b	c'	工具ナメ	角	良
735	C区、南門瓦落ち	1・2・3・4	35.8	26	23	7.5	a	b	d'	部分削ナメ	角白	角・良
736	C区、南門瓦落ち	3・4	—	—	23.6	7.5	a	d	部分ナメ	角	角・石・ク・チ	稍不均
739	C区、南門瓦落ち	1・2	37.8	—	—	7.5	a	d	工具ナメ	透青	角・石・ク・チ	稍不均
740	C区、南門瓦落ち	2・4	34.2	—	—	7.5	a	a	工具ナメ	灰暗	角・石・ク・チ	稍不均
A	C区、南門瓦落ち	1・4	35	—	—	7.5	a	a	無	角	角	良
624	包合層	1・2	—	26	—	7.5	a	d	工具ナメ	暗青灰	角	良
732	C区、南門瓦落ち	1・2	—	26.8	—	7.5	b	d'	工具ナメ	灰白	角・石・ク	良
741	C区、南門瓦落ち	1・3	36.5	—	—	7.5	b	d	工具ナメ	櫻	角・石・ク・チ	稍不均
743	C区、南門瓦落ち	2・4	36.4	—	—	7.5	b	d	工具ナメ	櫻	角・石・ク・チ	稍不均
671	包合層	1・2・3・4	35.4	25	22.5	7.5	b	a	工具ナメ	灰	角・石・ク・チ	良
575	包合層	1・2	—	26.4	—	7.5	b	d	工具ナメ	黒	角・石・ク・チ	良
694	包合層	2・3・4	36.8	—	24.8	7.5	b	d	工具ナメ	黒灰	角・石・ク・チ	稍不均
733	C区、南門瓦落ち	1・3・4	35	—	24.4	7.5	c	a	工具ナメ	灰白	角・石	不均
723	C区、南門瓦落ち	1・2・3・4	38.2	25.8+	25	7.5	d	d	工具ナメ	灰白	角	良
725	C区、南門瓦落ち	1・2・3・4	38.4	25.8+	25.8	7.5	d	d	工具ナメ	灰白	角・石	良
727	C区、南門瓦落ち	3・4	38	—	24.8	7.5	d	d	工具ナメ	櫻	角・石・ク・チ	稍不均
728	C区、南門瓦落ち	2・3・4	38	—	25	7.5	e	a	工具ナメ	荒灰	角・石・チ	稍不均
727	C区、南門瓦落ち	3・4	—	—	24.6	7.5	e	a	工具ナメ	明灰櫻	角・石・ク	良
734	C区、南門瓦落ち	3・4	—	—	24.6	7.5	e	a	工具ナメ	荒灰	角・石	稍不均
696	A区、南門瓦落ち	1・2	—	25.6	—	7.5	f	a	工具ナメ	透青灰	角・石・チ	稍不均
670	包合層	1・2・3・4	37.6	27	24.8	7.5	f	a	搭ナメ	灰白	角・石・ク・チ	稍不均
692	包合層	1・2・4	38.2	28	—	7.5	f	a	工具ナメ	灰灰	角・石・チ	稍不均
693	包合層	1・2・3・4	37	26.8	24.8	7.5	f	a	工具ナメ	灰白	角・石	稍不均
729	C区、南門瓦落ち	1・2	—	26.8	—	7.5	g	a	工具ナメ	灰白	角・石・ク	良
730	C区、南門瓦落ち	1・3・4	35.4	—	23.8	7.5	g	d	工具ナメ	灰	角・石・ク	良
736	C区、南門瓦落ち	1・2・3・4	38.6	27	24.2	7.5	g	d	工具ナメ	灰白	角・石	良
744	C区、南門瓦落ち	2・4	37.6	—	24	7.5	g	a	工具ナメ	灰	角	良
672	包合層	1・2・3・4	34.8	24.4	23	7.5	g	a	部分削ナメ	暗場	角・石・ク・チ	稍不均

凡例 *: 欠損のため計測不能 +: 端部打ち欠き 凸面特徴 a: 叩きのみ b: 叩き締めの凹弧 c: 中央寄りに指オサエ d': 端部指オサエ



第115図 平瓦凡例図

南門造営および各伽藍修造時の瓦生産について

以上、新堂廃寺出土の奈良時代の丸瓦・平瓦について分類作業を行ってきたが、これをもとに、南門の造営や、回廊やその他の建物の修造にあたっての瓦生産に迫ってみたい。

まず、第3章でも少し触れられているが、多くの型式が南門中心に出土する一方、南門ではまったく出土せず、回廊やその他地区で主に出土する型式が丸瓦・平瓦ともに存在する。この節での分類をもとに以下にまとめてみる。

回廊主体……丸瓦—有段2類a・無段4類

平瓦—3類

南門主体……丸瓦—有段2類b・有段2類c・有段2類d

平瓦—4類a・4類c・4類d・4類e・4類g

他地域でおもに出土……丸瓦—有段2類e

平瓦—4類f

築地で出土……丸瓦—有段2類e

南門・他地域ともに出土……平瓦—4類b

まずは回廊の瓦からみていく。丸瓦は有段2類aの1点を除くすべてが無段4類であり、行基葺で葺かれていたことがわかる。この丸瓦と3類の平瓦は、先述のように他の瓦とは胎土や色調が異なる。この瓦は同様の胎土・色調であるII A10型式②およびIV A12第1段階の軒瓦と組み合うと考えられ、軒瓦の項でも触れられているとおり、他型式とは焼成窯が異なるのであろう。全体の中では数量的に寄体でもあり、新堂廃寺主要窯（ヲガンジ池瓦窯）以外の窯から供給された搬入品としてよいと考えられる。南門や他地域でおもに使用されている有段式丸瓦と一枚作り平瓦は、同廊地区では各1点ずつしか出土しておらず、ごく小規模の差し替え程度に使用されたにすぎないのであろう。

統いて南門の瓦であるが、南門の瓦はすべて同一調整・胎土・焼成であり、新堂廃寺の主要窯で焼かれたものであろう。従って、出土型式数から工房の規模が想定できる。丸瓦では有段2類b・dの2型式を主として少量のcが出土しており、2~3の工人単位を想定できる。平瓦については、4類a・c・d・e・gの5型式が出土しているが、複数のタタキ板が同一の成形台に対応する可能性や、道具管理の状況からタタキ板と成形台が必ずしも対応しない可能性もあり、「最高で」5つの工人単位が関与していたということになる。

さらに、築地や北方トレンチ包含層など、南門以外でおもに出土する型式群として、有段2類cの丸瓦と4類fの平瓦がある。これらの瓦も、南門の瓦と調整・胎土・焼成はまったく同じであり、同一の窯からの供給品である。しかし法量を比べてみると、有段2類eの丸瓦は、個体差が大きいものの、南門の玉縁式丸瓦に比して4~6cmも短いことがわかる。また4類fの平瓦は、全長37~38cmであり、ややばらつきはあるものの34~35cmの小型品が多く存在する南門所用の4

類a・c・gに比べ、平均値でひとまわり大きいようである。南門の造営とその他の建物の修造では、厳密な瓦の作り分けが行われていたのであろうか。白鳳時代の平瓦は40cm近い個体も多く全体的にやや大きめである。修造にあたって、以前に葺かれていた瓦に法量を合わせる意識があつたのかもしれない。

また、南門・他地域双方で出土している4類bの平瓦も、全長37~38cmであり、他地域主体に出土する4類fに法量的に近い。ここでこの瓦の南門出土分3点を詳細にみると、3点中2点が平瓦を焼成後分割した割り熨斗瓦であった。また搬入品と考えられる回廊所用の3類の平瓦も南門で1点のみ出土しているが、これも割り熨斗瓦である(745)。これらの瓦については、本来回廊用やその他の建物用であった瓦を、何らかの理由で南門に転用する際、規格差の影響が出にくく熨斗瓦としておもに使用したという可能性を呈示しておく。この他にも法量面でみると、南門で主体的に出土してはいるものの、大型品であり、他とはサイズが合わず広端を打ち欠いている4類dの平瓦も、本来その他の建物用であったのかもしれない。

最後に回廊修造・南門造営・その他の建物の修造という三者の時期的関係についても少し考察を加えておく。軒瓦の項で触れられているとおり、回廊修造用の丸瓦・平瓦と対応するII A10②の軒丸瓦は、南門やその他の建物で主体的に使用された丸瓦・平瓦に伴うと考えられる、横置式一本造りの軒丸瓦II A10型式③~④⁽⁷⁾と同范であり、しかも範傷が少ない時点のものであることから、本節で扱った瓦の中では回廊修造がもっとも先行することがわかる。統いて南門とその他建物であるが、先述したとおり、4類bの瓦について、本來回廊用・その他建物用であった瓦を、割り熨斗瓦として南門に転用した可能性があり、その点から考えると、その他建物の修造→南門造営という順序も考えられる。しかし丸瓦をみると、その他建物の修造に使用したと考えられる有段2類eの丸瓦は、順序的に当然南門より造営が遅れるであろう築地でも出土している。これらから考えると、南門造営とその他建物の修造には、それほど時期差はないと思定できる。このことは、南門所用瓦とその他建物所用瓦の型式差を時期差としてはとらえにくい、すなわち先述したように、同時期の作り分けである可能性を補強する要素となる。

以上のことから新堂廐寺では、回廊の修造は主要窯以外の窯からの製品供給で賄われており、南門の造営とその他建物の修造(築地造営を含む)では、同じ窯の製品を用いているものの、丸瓦・平瓦とも型式や法量が異なっており、作り分けが行われていた可能性が提示できた。

南門造営においては、丸瓦で3つ、平瓦で最高4~5つの工人単位の関与が認められた。これは本章第2節で述べられている飛鳥・白鳳時代の造瓦組織に比べかなり多い。

また、南門では軒瓦を使用していないかった可能性は残るもの、これらの丸瓦・平瓦とおそらく同時に同一工房で製作された軒瓦は軒丸瓦2箇、軒平瓦は1箇である。このことからは、工房内の軒瓦工人と丸瓦・平瓦工人の数比なども浮かび上がってくる。

この分析は、奈良時代における地方寺院付属工房全体の規模を考える上で非常に興味深い一例

となりえるだろう。

主要参考文献

- 五十川伸矢 1981 「古代瓦生産の復原」『考古学メモワール』
梶原義夫 1999 「七世紀における造瓦組織の発展」『史林』82—6
京都大学考古学研究室 1982 『丹波周山窯址』
望月精司 1993 「第3章 10世紀の瓦」『二ツ梨豆岡向山古窯跡』小松市教育委員会

註

- (1) 工人単位という概念については【梶原1999】による。なお【梶原1999】では「単位工人」という語を用いているが、【望月1993】では同様のものを「工人単位」と表しており、用語についてはそれに従う。
- (2) 例えは本節で扱う資料の場合、平瓦の凹面を横方向にケズリ調整するという細部調整法は、すべての平瓦に共通してみられるが、これをこの慣習のみで工人単位別に細分することは難しい。
- (3) 丸瓦なら型木、平瓦なら桶や成形台など。分類基準としてよく使用されるタタキ板は、かなり消耗度が高い道具に属すると思われる。
- (4) 網タタキが斜めに施されるとされていた4-bは、桶巻作りの特徴である「タタキ縫めの凹凸」を描くタタキが施されていることがわかった。本節の分類では3類としている。
- (5) 主要伽藍北端付近にあたる北方トレンチ包含層でかなりの数量出土しており、主要伽藍の補修瓦として用いられたのであろう。後に出てくる「その他の建物」という表現もまた、主要伽藍を想定している。
- (6) II A 10②の軒丸瓦は、范傷が進んでいないものは通常の接合法で黒灰色を呈しており、范傷が進んでいるものは横置式一本造りで軟質の焼成である。回廊出土の暗色系の丸瓦・平瓦と対応するのは前者の方である。
- (7) 註6参照。II A 10型式②の范傷が進んだ方の軒丸瓦もこちらに含まれる。

第7節 南門柱掘方出土鷲尾とその復元

岩戸 晶子

南門では、中央間両側にあたる6つの柱掘方から、鷲尾片が礎盤としてその底面に据えられた状況で出土した。大きな破片から細片まであること、近い部位の破片が一つの柱掘方に入っていることから、南門付近で砕かれた後、柱掘方の底部に敷かれたものと考えられる。すべての破片が同一個体と考えられたため、その組み上げと復元作業を文化財修復・復元を専門とする（株）スタジオ三十三に委託して行った（付図2）。

この節では、南門柱掘方出土鷲尾（以下、南門鷲尾と呼称する）の復元の根拠と、復元の結果、得られた知見について詳述したい。

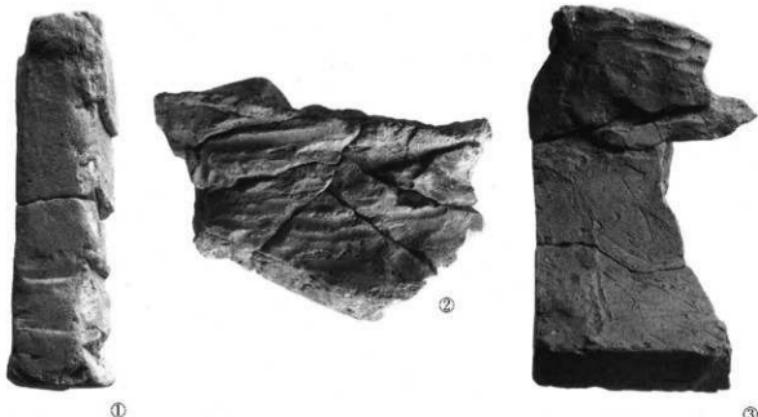
1. 色調・焼成・胎土

色調は淡い灰褐色および淡灰色を呈する。焼成は良好で、胎土には砂粒を多く含み、特に長石粒が非常に多いのが特徴である。

2. 形状

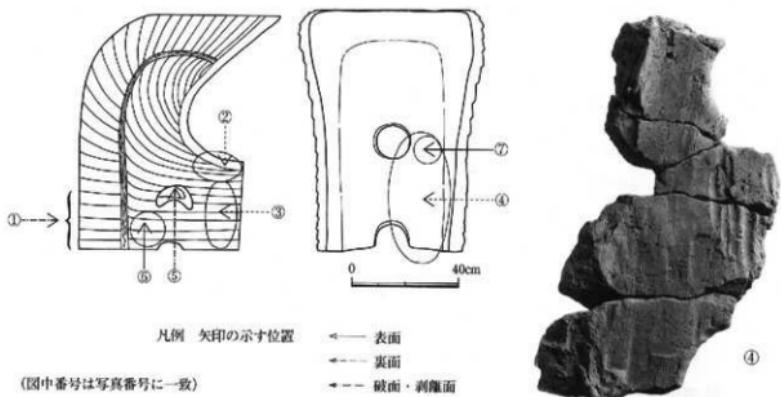
側面 左側面の大部分は残存していたが、右側面は一部の胴部段を除きほとんど残存しなかつたため、右側面は左側面を反転して復元した。脊梁は一部しか残存しないが、脊梁が剥離した痕跡があることから削り出しへなく、粘土を貼り足して成形したと判断でき、断面蒲鉾形の脊梁が頭部まで伸びる形に復元した。頂部における鰐や脊梁の形態については全く手がかりがなかつたが、残存部との収まりが最も良いと思われる形状に復元した。特に、鰐部に関しては、先端が全く残存せず、鰐の出を確定できなかつたため、収まりと縦帶との距離から復元した。その結果、復元値でそれぞれ高さ90.0cm、基底部の頭部から鰐先端までの長さ61.0cmと小型の鷲尾であることがわかった。

胴部と鰐部全面には、比較的細い幅2.0~4.5cmの正段を全面に削り出す。胴部上半の段は縦帶に向かって巻き込むようにカーブしていくため、鰐の段とは連続しない。幅1.5~2.4cmで比較的細い縦帶の上には、三条の波状紋がヘラ描きされている。縦帶上に波状紋がヘラ描きされた類例はない。本例は稚拙な波状紋であるが、法隆寺出土例に縦帶上に唐草紋を墨書きした例があり、意匠としては共通のものの可能性がある。上半の縦帶は水平に伸びた後、脊梁との交点に向かってやや下方に伸びる。これは、自重のために頂部が下方に沈んだためと考えられ、残存しない頂部は上方に反り上がらない形であると判断する根拠となった。下から5つ目の段から8つ目の段にかけては、降棟上端の丸瓦を差し込むための、縦9.0cm・横14.5cmの弧形の透かし孔が上方に向かって斜めに穿たれている。破面には透かし孔を穿孔する際の工具痕が明瞭に観察できた（第16図-⑤）。この降棟用透かし孔の下方の胴部下辺には、幅11.0cmの半楕円形の抉りが設けられて



①

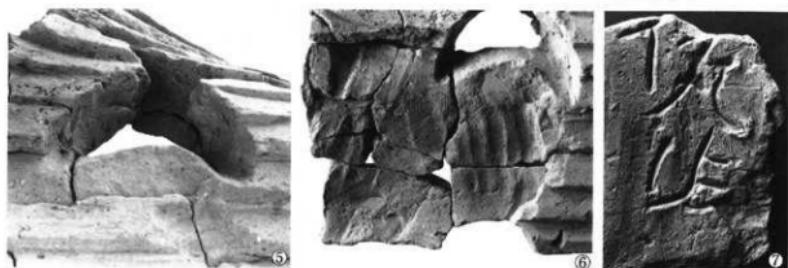
③



凡例 矢印の示す位置

- ← 表面
- 裏面
- ↔ 破面・剥離面

(図中番号は写真番号に一致)



第116図 南門柱掘方出土鶴尾の各部位

いる。これは鷲尾の固定に関するものとは考えにくく、重量のある鷲尾を運ぶ際や屋根に据える際、この部分に手を入れて持つために設けたものと推定している。同様の抉りは、三ツ塚天神窯出土例でも確認されている〔丹波三ツ塚遺跡発掘調査団編2000〕。

正面 頭部は脊梁の剥離部分から中軸線を割り出して反転した。復元値で、頭部幅は基底部で44.7cm、脊梁を含む頭部の高さは33.5cmである。大棟との接合部には特に何も設けない。脊梁端面は幅約11.0cm、高さ約5.0cmに復元できた。高さ30cm弱の熨斗積みの頂に、雁振瓦代わりの丸瓦を置くという大棟の構造が想定できる。頭部端面は丁寧にヘラケズリが加えられる。右半の端面はわずかしか残存しないが、ヘラ描きの一部が観察できた。その全体形は不明で、紋様を意図したものか記号の部類か判断できない。

正面から見た胴部・鰐部の上辺は、やや沈んだように見える。これは前述したように、焼成前の段階に自重で頭部が下がったことによると考えられる。胴部・鰐部が上方に向かって細くなり、正面觀は長方形または逆台形に近いことも、同様に自重のためであろう。

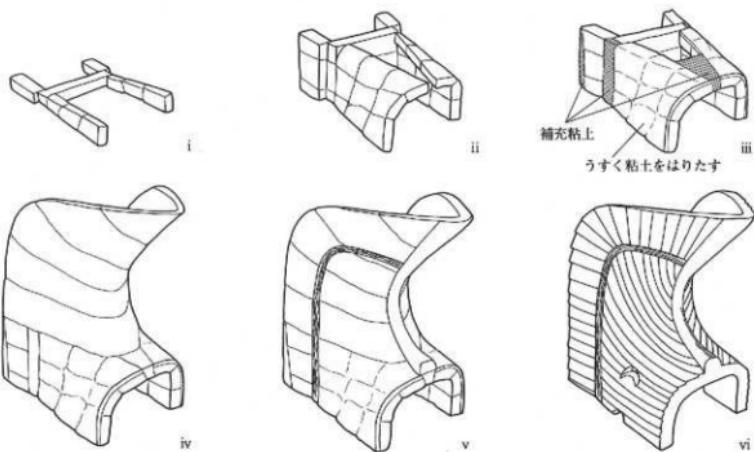
脊梁上には、縦帶上の波状紋と一連のヘラ描きが施されている。しかし、脊梁の中央部で終わるため、波状紋というより火炎紋と呼ぶべきであろう。本例は簡略化されたものであるが、西琳寺出土例の火炎宝珠紋や法隆寺講堂出土の鷲尾Aの火炎紋と共通する意匠といえる。

背面 腹部は下端の半円形の削り形と中央の円孔の弧をそれぞれ復元し、その中軸を腹部の中軸とした。復元値で、腹部幅52.3cm、下端削り形の半径13.0cm、高さ11.0cm、円孔の半径は約13.0cmとなった。下端削り形は蝶羽の羽み巴をはめ込むための仕口、円孔は焼成時に火のまわりを良くするためのものと考えられる。円孔の右脇には二文字がヘラ書きされる（第116図-⑦）。文字は下に統かないと明瞭に見えないが、上方には何文字か存在していたと推測できる。奈良大学東野治之氏の御教示によれば、読みの試案としては「頂□（張カ）」が挙げられる。頂には「瓦製品」などの意味があるが、非実用的な文字でもあり、確定はできない。二文字目はかなり崩れており、不確定要素を含む。鰐の裏面は段が省略され、縦方向のヘラケズリで平坦に仕上げられている。

3. 成形方法

鷲尾の製作方法については、和田庵寺出土鷲尾A〔大脇1999〕や三ツ塚天神窯出土鷲尾〔丹波三ツ塚遺跡発掘調査団編2000〕などで復元が行われている。和田庵寺例は胴部と腹部を一体で作る方法、三ツ塚天神窯例では、胴部と鰐部を一体に成形する方法である。南門鷲尾では裏面の調整が丁寧であるため、粘土紐の継ぎ目が明瞭に残存しなかったこと、頭部や腹部がほとんど残らないことなどから不明な部分もあるが、偽口縁や剥離部分の観察によって、和田庵寺例や三ツ塚天神窯例とは異なる製作方法が確認できた（第117図）。以下、順に述べる。

①左右胴部の基底として、幅が12.0～15.0cm、高さ10.0cm前後、厚さ4.0cm前後のブロック状粘土をそれぞれ3個並べる。腹部の基底として、同じ高さのブロック状粘土を胴部と90度ほどの角



第117図 魟尾製作工程模式図

度で置く。さらに鰭も同じ高さのブロック状粘土をわずかに外側に向かって開くように置き、基底とする。

- ②胸部・腹部・鰭部それぞれ2段目のブロックを積む。
- ③胸部には幅を狭めるようにしてもう一段ブロックを積み、頭部頂にできた隙間を補充粘土で埋める。頭部側から鰟尾の内部に手を入れて、この部分の裏面を強くなでつける（これについては後述する<a>）（第116図-②）。鰭部を延長するために、その端部に粘土を足す。
- ④胸部・腹部と鰭部の接合部分についての段差に補充粘土を加え、なだらかに整える。
- ⑤胸部下半（下から8つ目の段あたりまで）の表面に厚さ1.0cm前後の薄い粘土を貼り足す（これについては後述する<c>）。その際、接合面には強い指ナデで溝をつけ、接着をより強固なものにする工夫をしている（第116図-⑥）。
- ⑥8段目から上半は胸部と鰭部を一体に成形している。幅7.0～10.0cmの太目の粘土板を水平断面がU字状になるように積み上げていく。腹部との関係は判断できない。
- ⑦基本形が完成した胸部に脊梁にあたる部分の粘土を貼り足す。
- ⑧仕上げとして、胸部に縦帯を削り出し、その上面に波状紋をヘラ描きする。その後、胸部段と鰭部段を削り出す（施紋方法については後述する）。脊梁全体にヘラケズリを施して整形した後、火炎紋をヘラ描きする。
- ⑨胸部の下半に降棟用透かし孔、下端に抉り、そして腹部の下端に割り形、中央に円孔をそれぞれ切り出して成形する。

この復元した調整や製作技法に関して、文中の<a>・・<c>3点について補足しておく。

<a> 裏面の調整について

頭部の裏面には、当たりの痕跡が幅0.8cm前後の凹線として頭部先端から約5.0cmの範囲に認められる（第116図-③）。この痕跡は、鶴尾の頭部の曲面を成形するために何らかの型や枠を用いた可能性を示唆するものかもしれない。胸部下半には比較的丁寧なヘラケズリを施す。しかし、腹部と鰭部の取り付け部分には補強粘土を加え、それを指で強くナデつけた痕跡が明瞭に残り、頂部に近い部分はヘラケズリの後やや粗いナデで調整する。腹部の裏面は、上方から手を入れて上に向かって搔きだすように強い指ナデを施す（第116図-④）。

 鰭の成形方法について

前述したように、鰭も下から8つ目の段までは、高さ10cm前後の粘土ブロックを積み上げて成形している。しかし、その部分の後端面は垂直方向の剥離面と認識できた（第116図-①）。このことから、鰭端面を一度形成した後、さらに粘土を補充して鰭の長さを延長したと考えられる。上方になるにつれて剥離面までの鰭の出が長くなるのも、ブロックを積みながら全体のプロポーションを確認しつつ、鰭部を延長していく工程が推測できる。

<c> 胸部の二層構造について

胸部の二層構造は、この鶴尾の構造上の大きな特徴である。ブロック状の粘土塊を積むという行為は、まず基底部の骨格を作るという強い目的意識の現れと考えられる。胸部には外側に粘土を層状に貼り足す。さらに胸部を厚くしようとする意図が見て取ることができ、「丈夫さ」を追求する工人の意識が感じられる。一方、同様にブロック状の粘土塊を積み上げて基底部を成形する鰭は一層からなり、外側に粘土を張り足した痕跡はない。おそらく上半の荷重が胸部よりもかかるため、鰭部を厚くする必要もなかったのであろう。つまり、このように基底部を厚い粘土ブロックで作り上げる目的は、鶴尾の上半の重量を支えることのできる土台を求める意識からきたものであろう。粘土ブロックや粘土紐の継ぎ目らしい偽口縁は、胸部左側面全体で6条確認できた（付図2の矢印参照）。

4. 施紋方法

施紋方法については、以下の手順が復元できる。

まず、全体が出来上がった鶴尾に、細く弱いヘラ描きで割付線を描く。胸部から頂部への屈曲部には、縦帯の割り付け線が観察できる。その後、さらに縦帯を沈線で下描きした後、断面方形に削り出して成形する。削り出された縦帯の上面には、三条の波状紋をランダムにヘラ描きする。胸部・鰭部の段より先に施紋されたために、段の成形段階で、縦帯が深く切り込まれた部分の波状紋は削られて失われた部分もある。胸部・鰭部の段も、縦帯と同様に、沈線で紋様をあらかじめ下描きした後、斜めに工具の刃先を当てて段を削り出して成形する。段を削り出した後には、補助的なヘラケズリを加えて仕上げる。段や縦帯の基底部に近い部分は、十分に工具が当たられ

なかったために削り出しが甘く、沈線のみの部分もある。

まとめ

鷲尾は6世紀末の仏教建築の伝来に伴って製作が開始され、最初に飛鳥寺の屋根を飾った。飛鳥・白鳳の寺院では盛んに製作・使用され、7世紀に製作の中心が認められる。その系統は平安宮にも受け継がれ、その視覚的効果から古代を通じて格の高い瓦屋根に用いられた。宮殿や寺院の屋根景観の復元、その形態や紋様、製作技術の検討など考古資料として鷲尾のもつ検討課題は多岐にわたる。そうした中で、この鷲尾はその特異な出土状況もさることながら、側面のほとんどの破片が残存し、全形が復元できた点は貴重である。また、韓国・四天王寺例に続き、日本で初めて文字が書かれた鷲尾として確認された点などは、全国でも貴重な鷲尾資料である。特に、その製作方法・製作手順をほぼ復元することができ、飛鳥寺の「星組」の工人の協力によって瓦生産を始めた新堂廃寺の工人らが新たな工夫を重ねながら鷲尾製作に携わっていた状況を明らかにすることができた。本例が今後の鷲尾研究の好材料となることを願うものである。

参考文献

- 大脇潔 1999 「鷲尾」 日本の美術1 No.392 至文堂
国立慶州博物館編 2000 「新羅瓦塚」
丹波三ツ塚遺跡発掘調査団編 2000 「丹波三ツ塚遺跡Ⅳ」 兵庫県水上市島町
余良国立文化財研究所 1980 「日本古代の鷲尾」 飛鳥資料館図録第七冊

註

- (1) この鷲尾の年代・位置付けについては第8節で後述する。
(2) 「棟尾」との文字がヘラ描きされる(大脇1999、国立慶州博物館編2000)。
(3) その後、島根県・米見廃寺の調査で人名などの文字が書かれた鷲尾片が出土している(島根県埋蔵文化財センター柳浦俊一氏のご教示による)。

第8節 道具瓦から見る新堂廃寺

～鶴尾と鬼瓦を中心～

岩戸 晶子

新堂廃寺では1959年の調査以来、鶴尾、隅木蓋瓦、鬼瓦、熨斗瓦や面瓦といった道具瓦資料が多数出土している。その中でも、59年度調査以降顕著な遺物として、鶴尾と隅木蓋瓦が知られている。一方、初期の調査では出土が少なく注目されなかった道具瓦に鬼瓦がある。本稿では道具瓦の中でも、まとまった数がある鶴尾と鬼瓦を取り上げ、型式分類と大まかな編年を行う。

第一項 新堂廃寺の鶴尾

新堂廃寺では非常に多くの鶴尾が出土し、他に類をみない。鶴尾は大阪大学所蔵資料と大阪府所蔵資料を検討の対象とし、型式分類と編年を行う。鶴尾の型式分類を行う際の視点としては、①厚さ、②段の幅とその調整、③縦帯、④腹部と鰐部との取り付き角度、⑤腹部の鰐部への取り付き位置、⑥胴部と鰐部の段、⑦焼成と色調、などがある。大脇潔氏の先行研究により、時代が下るにつれて、①薄手のものから厚手のものへ、②段の幅は細いものから太いものへ、③簡素な縦帯から幅の広い縦帯へ、④腹部と鰐部の取り付き角度が小さく頭部から鰐部へ大きく擴状に広がり基底部の平面形が台形を呈するものから、取り付け角度が大きく基底部の平面形が長方形を呈するものへ、⑤腹部は鰐部の後方に取り付くものから縦帯の真裏辺りで取り付くものへ、⑥胴部と鰐部の段が互い違いに作られるものから連続するものへ、かつ両面に段が割り出される鰐から裏面の段が省略されるものへ、⑦焼成は須恵質で非常に硬質なものから比較的軟質なものへ、という変遷が明らかにされている〔奈文研1980・大脇1999〕。しかし、現時点ではこれらの変化を絶対的に評価する指標はない上に、今回の新堂廃寺の資料で全体形がわかる資料も少ないため、各指標を相対的かつ総合的に比較することで判断するしかない。

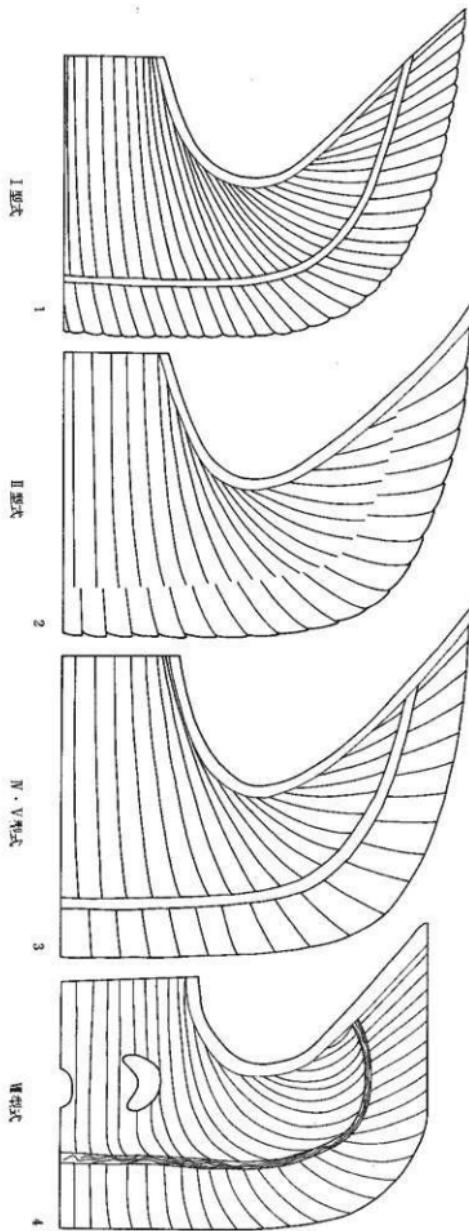
これまでの鶴尾の年代決定の指標は客観的データを使用したものではなかった。そこで、今回は先述した要素のうち、①・②・③・④については数値化し、グラフにして表した(第119図・表1)。その結果、段の幅は胴部・鰐部に限らず、段のある場所によって大きな差異が出てしまい、今回のように正確な位置が不明な破片資料を検討対象とする場合には、厳密な比較が不可能であるということが判明した。そのため、本稿では段の幅は一つの目安として使用するにとどめ、縦帯の幅、胴部・鰐部および腹部の厚さ、腹部の鰐部への取り付け角度の3点を主要な指標とし、焼成・色調や腹部の鰐部への取り付け位置などの視点も取り入れて鶴尾の編年を試みた。

まず、型式分類を行う。新堂廃寺の鶴尾は11個体以上あり、7型式10種類に分類できた。各型式の特徴を簡単にまとめる。

I型式 (758・759)

幅が0.7cmと非常に細い縦帯を持ち、胴部と鰐の段は互い違いに配される。正段の幅も1.6~4.0

第118図 鳥尾模様図 (縮尺不同)



cmと細い。腹部は縦帯よりも後方に取り付く。厚さは1.5cmと薄手のつくりで、焼成は非常に硬質である。これまで新堂庵寺1Aもしくは新堂庵寺Aと呼ばれているものである〔府教委1961・奈文研1980〕。1個体以上ある。

II型式 (13~16)

縦帯を特に作り出さずに、幅7cm程度の段を互い違いに配することで縦帯を表す。鰐の裏面にも段を表す。厚さは1.4~1.7cmと薄手である。焼成は硬質であるが、色調は淡灰褐色を呈する。1個体以上ある。

III型式 (17・760・761)

胴部と鰐の表裏面に正段の比較的細い段を持つ。腹部と鰐の取り付け位置は縦帯のやや後方に当たり、取り付け角度は50~60度である。基底部の平面形が頭部から鰐部に向かって撥状に広がる古式の様相を示す。焼成は硬質である。2個体以上ある。

IV型式 (18~22、762・763)

幅1.1cmの細い縦帯を持ち、鰐部の表裏面と胴部の段は互い違いに配される。縦帯よりも後方に腹部が取り付く。厚さは1.2~2.0cmと薄手である。鰐の先端部は一枚ごとに切り込みを入れて重なりを表現し、占式の様相を残す。脊稜には用途不明の孔が切り込まれている。焼成はI~III型式に比べてやや軟質である。1個体以上ある。

V型式

胎土に含む長石の多寡と鰐の出の程度によってa・b・cの三種類に細分した。いずれも灰色を呈し、須質である。

a (764~768) 幅2.0~2.4cmの低い縦帯を持ち、胴部と鰐部は互い違いに配される。縦带上にはヘラ書きがある。鰐部・腹部の厚さは2.2~3.7cmであるが、胴部の厚さは3.6~4.5cmと厚い。鰐の出は約12.0cmを測り、表裏面に段が設けられる。腹部と鰐部の取り付け位置は縦帯のやや後方で、取り付け角度は約90度である。緻密な胎土はヲガンジ瓦窯製品には見られず、搬入品と考えられる。2個体以上ある。

b (24) 厚さ2.5cmの鰐部のみ残る。鰐の両面に段を設ける。1個体以上ある。

c (769・770) 幅1.6cmの縦帯が残る、非常に緻密な胎土はヲガンジ池瓦窯製品には見られず、搬入品と考えられる。1個体以上ある。

VI型式

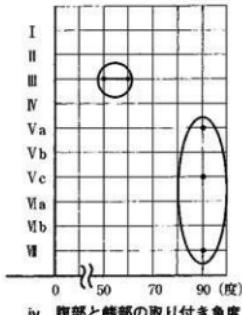
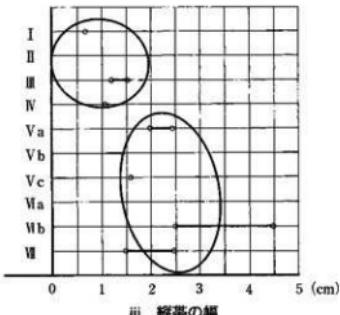
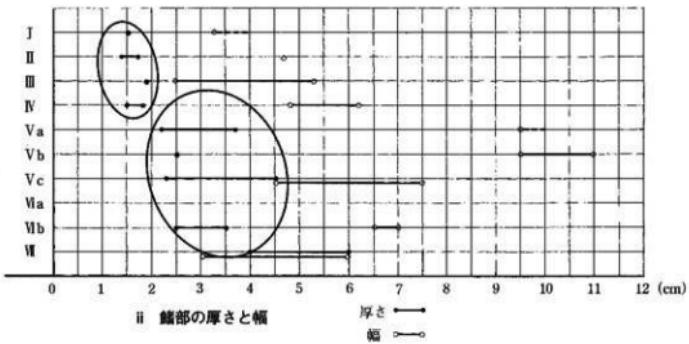
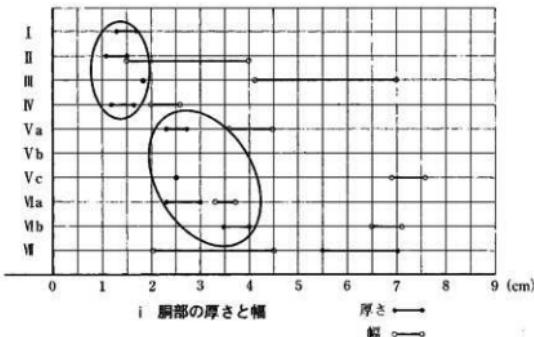
焼成が軟質で、灰黄色を呈する。段の幅に非常に大きな差異があったため、a・bの2種類に細分したが、同一型式になる可能性も捨てきれない。従って、VI型式全体で1個体以上あるということにする。

a (771・772) 正段は比較的深く削り込んで成形されるが、段差自体にシャープさが見られない。段の幅は3.3~3.7cmで、厚さは2.3~3.0cmを測る。

b (773) 直径3.0cmの半円形の紋様が取り付く縦帯は頂部に向かって幅を増していく、特異

表1 鰭裏面の段の有無

型式	段の有無
I	不明
II	有
III	有
IV	有
V a	有
V b	有
V c	不明
VI a	不明
VI b	無
VII	無



第119図 鰭尾法量計測図

な紋様の鶴尾になる可能性がある。鰭は幅6.3~7.0cmを測る。鰭の裏面の段は省略されている。厚さは2.5~3.5cmである。

VII型式（付図2）

胸部の段は比較的細く、1.5~2.5cm幅の縦帯に向かって巻き込むように配される。胸部の厚さは5.5~7.0cm、鰭の厚さは4.0~5.5cm、腹部の厚さは8.7cmと非常に厚い。腹部と鰭部の取り付け角度は約90度で、取り付け部分は縦帯のほぼ真裏にあたる。1個体である。

以上のように分類した各型式の年代について考察する。鶴尾の編年の場合、瓦溜や包含層からの出土などが多く、伴出遺物や遺構から製作・使用された年代を決定できるものがほとんどない。型式学的方法を併用しつつ、検討を進める。

まずI型式（第118図-1）は飛鳥寺西門所用の飛鳥寺B式に、II型式（第118図-2）は飛鳥寺中金堂所用の飛鳥寺Aとそれぞれ酷似する。飛鳥寺の創建鶴尾であるA・Bはその焼成・色調から「星組」の瓦を焼いた工人の手によるものと推定でき、崇峻元（592）年の中金堂の造営が西門の造営よりも早いため、飛鳥寺Aが飛鳥寺Bよりも先行すると考えられている〔大脇1999〕。この考え方方従うと、II型式がI型よりも先行することになるが、II型式は段を互い違いに配することで縦帯を表現する点は飛鳥寺Aと同じであるものの、飛鳥寺Aよりも段の幅が広い点、飛鳥寺の鶴尾には見られる沈線で表した縦帯を省略している点などを考慮すると、I型式と年代はそれほど変わらないがやや遅れて製作されたものであろう。厚さが1.5cm前後と非常に薄手であること（第119図-i・ii）、焼成が須恵質で非常に堅緻であることも、この2型式は抜きん出でおり、ヲガンジ池瓦窯で焼成されたのではなく、確実に搬入品と位置付けられる。飛鳥寺と同窯の垂木先瓦が新堂廐寺から出土していることと、この鶴尾と飛鳥寺鶴尾の高い共通性とを合わせ考えると、飛鳥寺造営に携わった「星組」の工人系統が新堂廐寺の造営に関与していた可能性が想定できる。しかしながら、その胎土などはヲガンジ瓦窯の製品とは異なっている。大和からの搬入品である可能性もあり、今後の検討課題である。いずれにしてもI型式・II型式の鶴尾は7世紀前半の創建段階、その中でも特に早い段階に完成した堂宇に使用されていたと考えられる。

III型式・IV型式もI型式・II型式と同じく比較的細かい段が胸部から鰭部全面に巡る鶴尾である。厚さも2.0cm以下の範囲に収まる薄手の鶴尾であるが（第119図-i・ii）、焼成がI型式・II型式に比べやや甘いこと、縦帯の幅が太くなること（第119図-iii）、焼成・色調がヲガンジ池瓦窯の軒瓦・丸瓦・平瓦に似ることなどからI型式・II型式を搬入後に新堂廐寺の工人によって製作されたと考えたい。よって、I型式・II型式と時代はそれほど隔たらない7世紀前半のうちに製作されたと考えられる。

V型式・VI型式（第118図-3）はI~IV型式に比べ、①より厚く、かつ1個体の中で厚さにばらつきが出る、②縦帯の幅が広い、③腹部と鰭部の取り付け角度が90度といった特徴を持ち、技術的にそれまでの鶴尾とは一線を画す（第119図）。この3特徴のうち、①・③は技術的に断絶

があったことを示し、その要因としては、時期的な差異によるものと技術系統の差異によるもののが考えられよう。しかし、型式学的方法ではこの問題は解決できない。

そこで、個体数に着目する。I型式からIV型式までの個体数は5個体ある。一方、V型式からVI型式までの個体数も6個体ある。この2群が仮に時期的差異ではなく、同時期に属する工人の技術的差異であるとすると、一寺院の必要とする鶴尾の数としては不自然なものとなる。こうした合理的な判断から、この2群は時期的な差異と判断し、後者については7世紀中頃以降に製作されたもの、山田寺式軒瓦とほぼ時を同じくするものと想定する。

南門から礎盤に転用されて出土したV型式（第118図-4）は、比較的細い縦帯を持つ点、鰐と胸部に正段を配するのは7世紀前半の鶴尾の特徴を備えている。しかしながら、胸部の段が縦帯に向かって巻き込むようにカーブする特徴は、他では四天王寺C式、高岡3号窯といった7世紀代半ばの鶴尾に見られる特徴である。⁽²⁾さらに、小型であるにも関わらず際立って厚みがある点、鰐の裏面の段が省略される点（表1）、そして腹部と鰐部の取り付け位置が縦帯の真裏でかつ角度が90度と大きい点は7世紀後半の鶴尾の特徴と捉えられる。以上をまとめると、段などの紋様に関する部分は古式の様相を示すが、厚さや腹部と鰐部の取り付けといった技術的要素は非常に新しい様相を示す。つまり、新しい段階で古い段階の鶴尾の紋様を模したと考えられるこの鶴尾は復古瓦的な性格を帯びたものであろう。復元の結果、この鶴尾は焼き歪みによる失敗品とは考え難く、いったん屋根に葺かれていたと考えられる。柱掘方からは大きな破片だけでなく、細片も出土したことは、完形品の状態で南門付近まで運ばれ、柱掘方に割り敷かれていたと考えられる。7世紀後半に製作され、奈良時代の南門創建段階には屋根から下ろされていたことをあわせ考えると、このV型式の鶴尾は山田寺式軒丸瓦II A06式と川原寺式軒丸瓦II A09型式の中に胎土が酷似するものがあることから、7世紀第3四半期頃に位置付けられよう。胎土から判断すれば、ヲガンジ池瓦窯で焼成された可能性もある。

新堂廃寺の鶴尾について通観したが、新堂廃寺の特徴としては日本最古の鶴尾といわれる飛鳥寺と同じ特徴を備えた鶴尾が「星組」の工人の関与によって導入されていること、胸部と鰐部両方に段を持つという古い要素を残す鶴尾が作り続けられたことが挙げられる。換言すれば、鶴尾の製作に関して高いレベルの情報を維持し続けたということができるだろう。

第2項 新堂廃寺の鬼瓦

新堂廃寺の鬼瓦は60年調査以降出土を見たが、98年度調査で飛躍的にその数を増した。それらをまとめると、以下のように5型式に分類できる。

I型式 (23・777・778) 粘土の盤上に鬼神が蹲踞した姿が表されていると考えられる。周

囲に沿って、低く平坦な外縁が削りだされている。范作りではなく、鬼身部は粘土が貼り足されるなど手づくねで成形される。

Ⅱ型式 (779~782) I型式と同じく手づくねによって作られる。牙や歯は粘土を貼り足し、ヘラや指で成形するが、巻き毛はヘラで沈線を彫り込むことで表現する。粘土貼り足しによって成形される傾斜縁の内側に、抉りにはめ込む丸瓦を噛んだ表情の鬼面紋が表される。以前に表採された右半分をおおよそ残す破片 [北野1981] とを総合すると、眼と鼻部分は不明ながら、アーチ形の外形と鬼面紋がほぼ復元できる (第120図-1)。

Ⅲ型式 (783~787) 新堂廃寺の鬼瓦で唯一完形に復元できる (第120図-2)。また、新堂廃寺の鬼瓦では唯一范によって成形されており、出土数も最も多い。抉りにはめ込む丸瓦を噛んだ表情の造作の大きい鬼面紋が表される。眉間部分を残す破片には全て固定のための正方形の釘孔が穿孔される。太い牙の外側には巻き毛の表現があり、眉は雲形である。長石粒を非常に多く含む胎土と、断面が灰赤色を呈するのが特徴的である。

Ⅳ型式 (788) 小片で詳細不明だが、抉りにはめ込む丸瓦を噛んだ表情の鬼面紋が表されていたと考えられる。大きな円形の釘孔が中央に穿孔される。范作りか手づくねによるものかは判断できない。焼成は須恵質で灰色を呈する。

Ⅴ型式 (789・790) いわゆる手づくねの鬼瓦であり、ヘラ状工具で削り出したり、粘土を盛り上げたりして凹凸が激しい鬼面紋を成形する。長石を多く含む胎土が特徴的であり、灰色を呈する。

以上の鬼瓦について分析を加える。この5型式の鬼瓦はいずれも鬼身紋・鬼面紋鬼瓦であり、平城宮造営開始時に鬼身紋・鬼面紋鬼瓦が平城宮で導入されて以降、つまり奈良時代以降に製作されたものであることは明らかである。しかし、細かい年代論は、ほとんどの鬼瓦が包含層から出土したこともある、遺構や伴出遺物との照合は難しい。奈良時代以降の新堂廃寺の軒瓦は、奈良時代に属するものと鎌倉時代に属するものがある。ほとんどが奈良時代のもので、鎌倉時代の瓦は非常に少なく、丸瓦・平瓦は確認されていない。以下では、新堂廃寺の鬼瓦の年代論と系統という二点について検討したい。

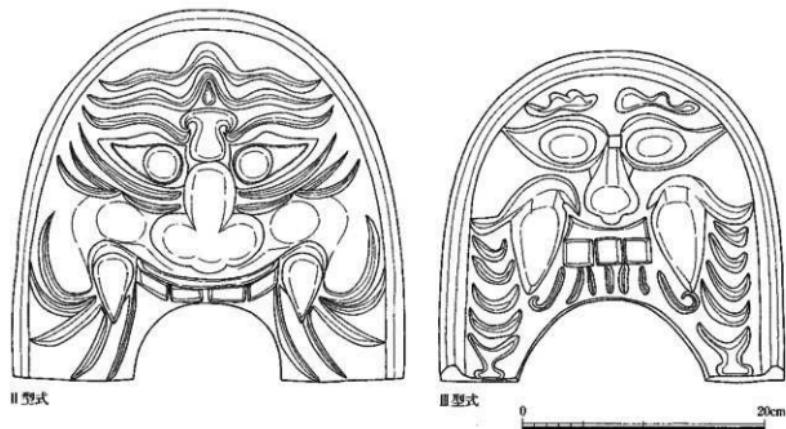
これまで古代の鬼瓦の特徴としては范作りであることが第一に挙げられてきた。しかし、新堂廃寺では少なくとも3型式が手づくねによって成形される。鬼瓦の製作が范作りから手づくねに変化するのは平安時代末から鎌倉時代初期頃と言われている [小林1981]。しかし、新堂廃寺の中世瓦は鎌倉時代の軒丸瓦・軒平瓦があるだけで、丸瓦・平瓦は確認されない。まず、新堂廃寺で出土したI型式・II型式・V型式が中世、鎌倉時代の鬼瓦かどうかについて検討する。

中世の鬼瓦には外縁を持つものはほとんどなく、外周に沿って珠紋帯を持つものが圧倒的に多い。I型式・II型式は共通して、素紋の外縁を持ち、その中に鬼身紋・鬼面紋を作る。I型式は鬼神が蹲踞する特徴的なモチーフで、畿内での鬼面紋鬼瓦の創出の契機となった平城宮I式の影

影響を受けたものと考えざるをえない。なお、河内にはこの平城宮式I型と同範もしくは同系統の鬼瓦が集中的に分布している³⁰。一方、II型式は、退化はしているが巻き毛の表現を持つ点、外縁を持つ点、口端がつりあがり憤怒相である点、アーチ形の外形である点、などの諸特徴は奈良時代の鬼瓦に顕著に見られるが、鎌倉時代のものには見られないものである。V型式は小片であり、詳細は不明であるが、凹凸が非常にシャープになる点などはI型式・II型式と様相を異なる。また、I型式・II型式の胎土・焼成は新堂廃寺で出土する古代の軒瓦、丸瓦・平瓦の中に共通するものがあるが、胎土に粗い長石粒を含み、非常に硬質に焼成されているV型式に共通する古代の軒瓦、丸瓦・平瓦は存在しない。

以上を総合すると、I型式・II型式は手づくねによって製作されるものの、奈良時代の鬼瓦と判断できよう。すなわち、範を製作するだけの技術を持てなかつた工人が、範作りの鬼瓦を志向しつつ製作したものであることが想定できる。I型式で3個体、II型式で4個体以上が製作されていること、さらに(27)と(778)や(781)と(782)のように同部位において高い規格性を得ようとしていることが看取でき、範作りの製品を意識していた状況を傍証するものと考えられる。一方、I型式・II型式と様相を異にするV型式は胎土や焼成の特徴を重んじれば、鎌倉時代に製作された可能性が高い。

III型式は範で作られた鬼瓦で、新堂廃寺では最も多く出土する。鬼面紋が非常に稚拙であるため、時代が下るという判断も不可能ではないが、範作りが行われた最後の時期である平安時代まで下げることは、その鬼瓦の出土数の多さと平安期の軒瓦がほとんど出土しない事実とに矛盾が生じるため、不可能である。このIII型式の鬼瓦の特徴を列挙すると、①素紋の外縁を持つ、②珠紋帶を持たない、③鼻孔の表現がない、④幅に比べて全長が短い、⑤釘孔を固定装置として持つ、



第120図 鬼瓦復元図

⑥半円形の抉りを持つ、といったことが挙げられる。①～③は紋様の特徴、④～⑥は鬼瓦の固定方法や鬼瓦がふさぐ棟の構造に関する特徴といえるが、紋様に関しても技術的にも、奈良時代に畿内で創出・使用された平城宮式鬼瓦と南都七大寺式鬼瓦のうち、平城宮式鬼瓦に顕著な特徴を備えているということができよう。鬼面紋は退化しているため傍証にしかならないが、大ぶりな巻き毛や雲形の眉も平城宮式鬼瓦に見られるものと共通しているともいえる。

平城宮式鬼瓦において鬼身紋に鬼面紋が取って代わったのが平城宮瓦編年第Ⅱ期（以下、「平城宮瓦編年」は省略）にあたること、平城宮式鬼瓦のうち第Ⅲ期以降に創出された型式はほとんど畿内地域には波及せず、それにかわって南都七大寺式系の鬼瓦が波及することを合わせ考えると、新堂廃寺のⅠ型式は第Ⅰ期の後半から第Ⅱ期にかけて、Ⅱ型式・Ⅲ型式はⅠ型式にやや遅れて第Ⅱ期中に製作されたと考えたい。（783）が出土した土坑からは第Ⅱ期にあたる6303系-6664系の軒瓦のセットが共伴したこともこうしたことを傍証するものと考えられる。

まとめ

7世紀に製作された鷦尾と、8世紀以降製作が始まった鬼瓦について、型式分類と大まかな編年、そしてその系統について通観した。新堂廃寺の鷦尾は創建段階では飛鳥寺の「星組」の工人が関与し、その後も7世紀を通じて古式の様相を保つ鷦尾を作り続けたことから、鷦尾製作に關して高い技術力を保持していたことを窺わせる。一方、鬼瓦は平城宮式鬼瓦の製作技法・紋様を意識しつつも、手づくねの鬼瓦や非常に稚拙な鬼面紋の鬼瓦をしか製作することができなかった。このような状況は、道具瓦の製作環境が7世紀と8世紀で大きく変化したことが原因と考えることができる。

その背景としては、造瓦組織の変化、工人の専門分化が起こった可能性を考えたい。飛鳥時代に建立される寺院は少なく、おそらくその造営にあたっては中央からの全面的な支援が必要であり、実際、中央もそれに対応し、軒瓦の製作から道具瓦の製作まで一括して中央の工人が関与していた状況があった。新堂廃寺の創建初期段階は、特に飛鳥寺造営に携わった「星組」系統の工人が瓦生産を一手に担っていたということができる。

しかし、8世紀に入って寺院造営が各地で爆発的に増加すると、瓦生産も当然大量の需要が生じる。飛鳥時代の瓦生産が始まった直後の段階では瓦陶兼業窯で瓦が焼かれていた。それが7世紀に入って瓦の需要が増えると、瓦窯としての専業分化が進む。それと同様に、瓦陶兼業から瓦専業へ、さらに道具瓦工人が専業化し、他の大量生産する軒瓦・丸瓦・平瓦の工人から分化するという動きが8世紀になって始めたという可能性が考えられる。

とくに、鬼瓦は瓦の中でも、製作には特別な知識や情報が必要である。こうした知識や情報は、瓦の葺き方や棟構造など建築技術に関わるもの、また建てようとする建物の規模や屋根構造などの建築仕様に関わるもののが考えられ、それらを踏まえた上で鬼瓦が設計されたはずである。屋根の「地」の部分に葺くために大量生産される軒瓦や丸瓦・平瓦とは、その製作段階で必要な知識

や情報の種類・内容は大きく異なり、建築に携わる人間の関与は不可欠であったと考えられる。そのため、寺院造営が活発してくる中、奈良時代の段階で鬼瓦工人が専業化していく、もしくは造営組織の個々の工人集団間で、軒瓦や丸瓦・半瓦とは異なるネットワークを形成していたことも十分に考えられるのである。¹⁷ 8世紀の新堂廃寺ではこの部分に問題が生じていたのであろう。つまり、建築計画と道具瓦生産の間の情報交換がうまくいかなかった、あるいはそうした役割・知識を持った人物を確保できなかっただけでなく、といった状況下で、鬼瓦に関しては知恵を寄せ合い、当時の畿内において主流であった平城宮式をモチーフにして「それらしい」製品を製作した結果が、この新堂廃寺の鬼瓦なのではないだろうか。

古代の畿内周辺において確認されている鬼瓦に新堂廃寺ほどの「獨白性」を見て取れないことを理由に、新堂廃寺という寺の位置付けが変化した可能性も考えられなくもない。しかし、稚拙な鬼瓦を製作している一方で、平城宮式軒瓦の范をセットで入手し、ヲガンジ池瓦窯で生産している状況を踏まえれば、その可能性は低いのではないだろうか。

中央との強いつながりを見せる鷹尾や軒瓦と際立って対照的な鬼瓦からは、鷹尾や軒瓦の生産に發揮した高い技術や情報の収集能力を、8世紀になって直面した鬼瓦生産には發揮することができないまま、新堂廃寺が廃絶に向かった状況を想定したい。

参考文献

- 岩戸晶子 2001 「奈良時代の鬼面文鬼瓦—瓦葺技術から見た平城宮式鬼瓦と南都七大寺式鬼瓦の変遷—」『史林』第84巻3号（掲載予定）
- 近江昌司 1964 「鰐身紋鬼板通考（前）（後）」『大和文化研究』第9巻2号・6号
大和文化研究会
- 大阪府 1934 「百済寺跡の調査」 大阪府史跡名勝天然記念物調査報告書4
- 大阪府教育委員会 1961 「河内新堂・烏合寺跡の調査」
- 大阪府教育委員会 1971 「国府遺跡発掘調査概報」 大阪府文化財調査摘要1970-6
- 大脇潔 1999 「鷹尾」日本の美術12 No.392 至文章
- 北野耕平 1981 「歴史時代の富田林」『富田林市史』富田林市史編集委員会
- 小林章男 1981 「鬼瓦」大蔵経出版
- 帝室博物館 1937 「大平地宝」
- 奈良国立文化財研究所 1980 「日本古代の鷹尾」飛鳥資料館図録第七冊
- 毛利光俊彦 1980 「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として—」『研究論集Ⅺ』
奈良国立文化財研究所

註

- (1) 個体の判別をする際、本来焼成や色調は重要なポイントになりうるが、鶴尾の破片資料の場合には、鶴尾が大きいことなどもあってか、部位によって色調に大きな差異があることがわかった。そのため、焼成や色調は重視せず、段の削り出し方などの技術的特徴や胎土など、部位によって偏りが出にくいポイントによって個体を判別した。
- (2) この二例とも東播磨の窯で焼かれた鶴尾であるが〔大脇1999〕、既に段を削り出すことは省略され、沈線で段を表している。
- (3) 古代の鬼瓦の下端には、丸瓦をはめ込んで固定するために切り取られる部分がある。その部分を「抉り」と呼ぶことにする。
- (4) 具体的な出土地としては、同范品および1型式の系統をひく小型の鬼瓦が出土した西琳寺〔帝室博物館1937〕、1型式系統の小型品が出土した衣錦庵寺〔大阪府教委1971〕・伴林庵寺〔近江1964〕・百濟寺〔大阪府1934〕が挙げられる。ただし、全て窓で成形されている。
- (5) ここでいう「半円形の抉り」とは狭義の半円形であって、抉りの高さと幅がほぼ1：2であるものをいう。この狭義の半円形の抉りは奈良時代の鬼瓦の中で、平城宮式鬼瓦とその系統に遡る鬼瓦に顕著な形態である。詳しくは、拙稿〔岩戸2001〕を参照して頂きたい。
- (6) 一方の南都七大寺式鬼瓦の特徴は、①外縁を持つことは少ない、②必ず珠紋帯を持つ、③全長が幅を大きく上回り、縦長のプロポーションを取る、④基本的に裏面に把手状の鉢を固定装置として持つ、⑤縦長半円形の抉りを持つ、⑥鼻孔を上向きに大きく開ける、となる。
- (7) たとえば、国分寺において採用される軒瓦と鬼瓦の系統（平城宮式・南都七大寺式など）は全く一致せず、軒瓦と鬼瓦では焼成段階は同じでも、それぞれの製作に携わる工人集団は、窓の製作段階もしくは生瓦製作段階のいずれかで異なる組織として分化していたと考えられる。この論証は別稿に譲る。ただし、分化の段階—窓の製作段階までか、生瓦の製作段階までなのかーについては現段階では不明である。今後の課題としたい。

第9節 新堂廃寺出土鶴尾 修復報告書

(株)スタジオ三十三

1：修復作業に至る経緯

新堂廃寺から出土した白鳳時代の鶴尾は、その資料的価値を鑑み、また遺物が大型であることから強度を確保できる材料での修復が必要なため、修復を専門家の手にゆだねることとなり、(株)スタジオ三十三が業務を受託することとなった。

2：工房へ搬入の時点での遺物の様子

遺物は想定される元来の形のおおよそ3から4分の1が遺存しており、約40点あまりの破片となっていた。個々の破片は位置の同定が済んでおり、復元図への図示と遺物へのナンバリングで位置が指示されていた。また、それ以外に位置の確定しない細片があった。

遺物は厚みのある灰色の素焼きで、焼成自体はかなりしっかりしているものの、自重がかさむ為、取り扱いに伴い表面の土の粒子がごくわずかずつではあるが剥落しつつある状態であった。

3：修復の方針

現存する破片をすべて組み立て、失われた部分を復元し、本来の姿に復元する。その際、重量のある大型品であることから、破片の接合と復元部分には十分な強度を持たせる。復元部分の制作にはオリジナルの持つ優美で力強い作風を十分表現し、また時代の特徴を持たせるため、専門の研究者の指導を確実に反映させる。さらに今後の調査で同一個体の破片が出土した場合、後から組み込みができるよう、解体可能な接合とする。

完成の姿は、オリジナル部分がどれだけを占め、どのような形状なのか見学する人にはっきりとわかり、なおかつ復元部分と調和して見えるような仕上がりとする。

運用の便宜のため、移動可能な専用の展示台を制作する。また修復報告書を作成する。

以上の方針から、上粘土を用いた原型制作による復元技法が適当と判断された。これは一時的に粘土で復元部分を造形し、十分添削した上でシリコーンで型取りし、エポキシ樹脂製の復元部分を得る方法である。形状の十分な考察が可能で、実物と同じ土粘土を材料とするので材料の質感やへらなどの工具の使用痕がほぼ同じに表現され、また粘土特有のへらの切れも同じなので作風や表面の風合いを同じ雰囲気に造形することができる。なおかつ考察された形状そのまで型取りして固定されるので、粘土に起る乾燥収縮や変形は生じず、焼成はもちろん不要である。強度も十分な合成樹脂材料を用いることができる。

4：修復の工程

(1) 樹脂処理

破片の破断面同士の接合の際の強度を確保し、また表面の土粒子の剥落を止める必要があった。このため、まず破片の表面から合成樹脂を含浸させて胎土を強化させることとした。樹脂含浸による表面の風合いの変化と、拓本採取のための紙の水張りに支障がないかを確認するためサンプルとして提供いただいた瓦片でテストを行った。その結果に基づき、アクリル樹脂バラロイドB

72、5パーセント溶液（希釈はトルエン＋アセトン）を刷毛塗りで全体に2回塗布し、破断面には濃度の高い20パーセント液を塗布した。

結果的に表面は多少の濡れ色となったものの、ほとんど変化しなかった。

（2）破片の接合

接合はセルロース樹脂系接着剤セメダインCを使用した。作業はセメダインC原液とアセトンで希釈した液を用意。破断面に希釈液を一面に塗布し、凹凸に応じて濃度の高い液を用いて、できるだけ広い面積で破片同士が接合するように留意しつつ、また接合関係が正確に合うように注意して順次接着を行った。

（3）作業用支持台の制作と設置

現存破片からなる実物ブロック単体では自立しないため、塑像制作に用いるベースを芯にして木材で支持台を組み、実物ブロックを立ち上げた。現存部分には前面に稜線の一部、背面に棟に設置する際の半円形の割りがあり、それぞれの中心線を結ぶ線が全体の中心軸線と想定された。そのため稜線と背面にマスキングテープを仮張りして中心線を引き、中心線が垂直に立ち上がるよう位置の微調整を行った。中心の位置出しにはレーザー式水平儀（ジャイロ支持の本体からレーザー光線で水平・垂直線が投影される。）を利用した。

これらの作業は後々の取り回しを考えてキャスター付きの移動、回転が可能な架台の上で行った。

（4）土粘土原型の制作

復元図を十分に検討した後、支持台を利用して塑像用の心材（シュロ縄巻きの番線）を組み、その上に造形用の土粘土を盛りつけた。実物が粘土に接する部分には鋸箔を張り、その上をシートワックスで覆い、実物を粘土で汚さないように養生した。

（5）原型の検収

（6）粘土原型の型取り

実物部分を再度養生した上で、復元原型の型取りを行った。型取りには複製品制作の際に用いる型取り用縮合型シリコーンゴム東芝TSE350RTVを使用。稜線から左と右そして背面と3分割する型削とした。シリコーン型の形状を支持するバックアップ型は石膏を使用し、縦横に角材で補助フレームを入れた。

（7）型の取り外しと原型の解体

バックアップの石膏型、シリコーン型の順に型をはずし、その後実物から粘土を取り外して、養生を外した。

（8）復元部分の成形

エポキシ樹脂エピコート828をベースに社内で調合した造形用エポキシ樹脂を用い、ガラス繊維を封入した繊維強化プラスチック（FRP）を材料にシリコーン型から復元部分を成形した。実

物の部分は片側に偏るため、転倒を防ぐため復元部分にはおもりを封入した。

(9) 実物のブロックとの接合

復元部分を有機溶剤で洗浄してから、立ち位置で固定されている実物ブロックと接合させた。実物側の接合する面はセメダインCを塗布して溶解可能な保護塗幕を作つてからエポキシ樹脂を盛りつけて復元部分との隙間を埋めていった。

(10) 内面の制作

内面は原型で制作しなかったが、外から見えず造形的な処置はさほど必要ないため、実物の破断面を保護塗膜で覆つてからエポキシワーカブルレジンサンモジュールPM2500を盛りつけ、形状を整えた。

(11) 細部の調整

実物同士の接合部分に残った角の部分などの欠損をエポキシワーカブルレジンで充填した。

(12) 完成検査

(13) 実測図の作図

彩色作業の前に完成実測図を作図した。作図は京都大学大学院岩戸晶子・梶原義実、帝塚山大学矢倉嘉人による。

(14) 復元部分の彩色

復元部分が調和するように実物の色調に合わせて彩色を施した。彩色はアクリル樹脂絵の具を使用し、樹脂との食い付きを確保するため下地にプライマー処理を施した。

色調は実物に近い基本色を全体に塗布した上に、質感の表現のためごくうすい汚しを重ねた。

(15) 展示台の制作

展示台は木製軸組で化粧外板仕上げとし、遺物が接地する天面は付加タイプシリコーン製のシートを設けた。また展示の際などの運用の便を考え、キャスターを内蔵した。キャスターはロック機構付きを使用し、設置の際には不要に移動しない様にした。

株式会社スタジオ三十三

作業スタッフ 齋藤 伸治

古谷 垣紀

小柳 俊之

企画担当 井上 喜代志

文 責 増田 啓

附章 摂河泉の古代寺院

はじめに

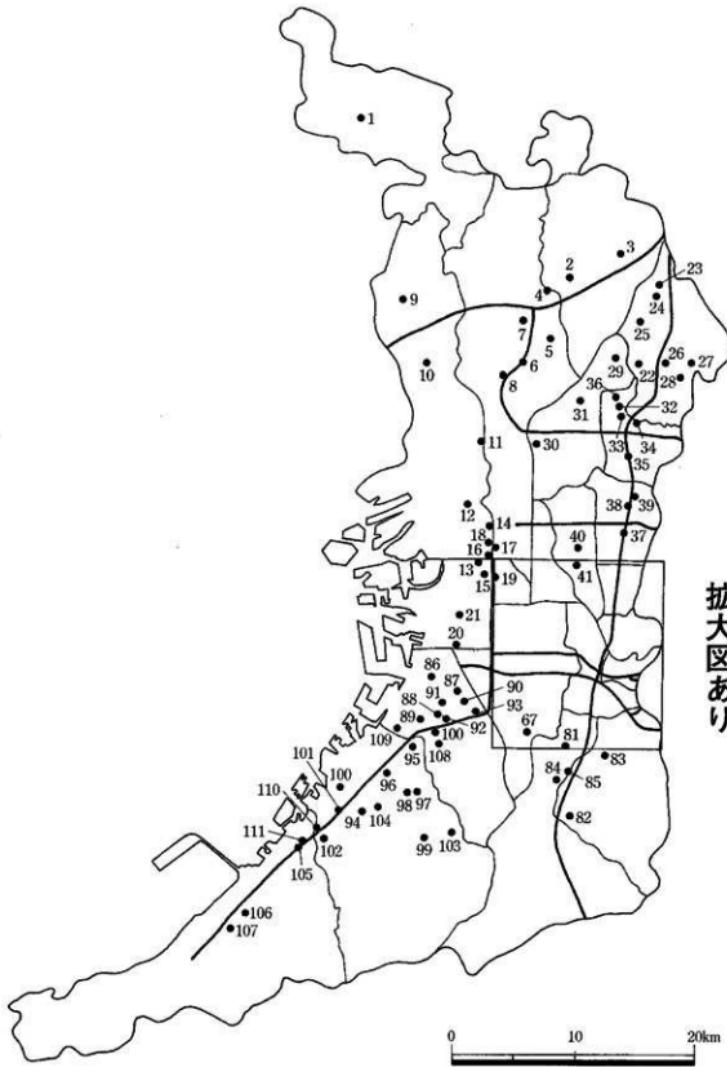
大和と大陸との交流の玄関口であった難波津を中心に、畿内の主要地域を形成していた摂津・河内・和泉の三国には、早くから多くの古代寺院が建立された。文献や寺伝で創建を占く位置づけられている寺院も多くあるが、本書では瓦の型式や検出遺構といった考古学的データの裏付けのある遺跡だけが基礎資料になりうべきものと考え、大阪府に所在する飛鳥時代から奈良時代に創建された寺院遺跡107ヶ寺のデータを集成了した。

摂河泉とうたっているが、摂津国の兵庫県に含まれる地域に所在する遺跡は扱わなかった。不十分ではあるが、この資料が今後の研究の参考になればと考える。

凡　　例

1. この一覧は、大阪府下に存する飛鳥から奈良時代創建の寺院遺跡について、旧国郡別に集成了るものである。郡界の復元については諸説あるため、どの郡に属するか見解の分かれる遺跡もあるが、本書ではいずれかに含ませることとした。大方の批判を乞う。
2. 基本的データとして取りあげた項目は、遺跡名（別名）・所在地・存続年代・伽藍配置・検出遺構・瓦窯・集落・古墳・軒瓦の同范関係で、特記事項を備考として加えた。
3. データの出典は参考文献一覧にあげた。
4. これらの項目のうち内容が不明なものについては項目そのものを表から削除してあるが、調査が実施されていて、寺院関連遺構が未確認のものなどは項目を残した。
5. 出土瓦が報告されているものについては、6分の1の拓本を掲載した。
6. 瓦の型式名等は参考文献に記載されている名称をそのまま使用した。
7. 寺院跡とは確定していないものの、瓦の出土から寺院に関連する可能性の高い遺跡については、末尾に瓦の拓本を掲載し、遺跡名を併記した。

拡大図あり



大阪府下 古代寺院位置図（番号はP224以下と対応）

摂津の古代寺院

西村 香織

大阪府下で旧摂津国に属する奈良時代までの古代寺院は、現在判明しているだけで能勢郡1カ寺、島上郡2カ寺、島下郡5カ寺、豊島郡2カ寺、西成郡1カ寺、東生郡5カ寺、百済郡2カ寺、住吉郡3カ寺の計21カ寺を数える。創建年代は白鳳と思われるものが多く、次いで奈良、飛鳥の順である。伽藍配置が確認されている寺院は非常に少數で四天王寺と薬師寺式の摂津田辺廃寺のみであるが、阿倍寺跡では四天王寺式が想定されている。寺域規模については四天王寺が8町×6町で最も広く、石積寺、芥川廃寺、大里廃寺では1町四方程度あるいはそれ以下である。堂宇の基壇規模、その外装が判明しているのは四天王寺1カ寺のみにとどまる。

屋瓦については7削近くの寺院で確認されている。未調査のため表面採集のみの場合もあるが、飛鳥時代の四天王寺を筆頭にその多くは軒丸瓦・軒平瓦のセット関係が明らかになっている。同範囲関係については四天王寺と関わりの深い寺院が最も多く、府下の摂津国古代寺院では、金寺山廃寺、安曇寺跡、法円坂廃寺、堂ヶ芝廃寺、百済尼寺跡、摂津國分寺跡、津守廃寺との関係が確認できる。の中でも、安曇寺跡、法円坂廃寺、百済尼寺跡が四天王寺創建瓦と同範の軒丸瓦をもつことは注目に値する。

寺院への瓦の供給元となる瓦窯が判明している寺院は5カ寺とごくわずかである。四天王寺に枚方市と京都府八幡市にまたがる樟葉平野山瓦窯で焼成された瓦が供給されていたということはよく知られている。その他には豊中市の金寺山廃寺と桜井谷窯跡、高槻市の芥川廃寺と芥川廃寺瓦窯跡、同じく梶原寺跡と梶原瓦窯跡、茨木市の穂積廃寺跡と白頭瓦窯跡がある。

郡家川西遺跡（島上郡衙跡）と芥川廃寺については京都府の正道遺跡と正道廃寺、宮城県の郡山遺跡と郡山廃寺等に見られるような、郡衙とそれに付属する寺院の関係をもつと考えられ、芥川廃寺は「島上郡衙跡附寺跡」として国の史跡に指定されている。同様に郡衙との対応関係が推定される寺院としては大里廃寺、穂積廃寺、堂ヶ芝廃寺、法円坂廃寺が挙げられる。また、梶原寺と対応すると思われる梶原南遺跡は奈良時代の山陽道大原駅に比定されている。竹原伸仁氏はこうした例を挙げ、「ただ単なる寺院建立氏族の一般的な集落ではなくに、（中略）極めて公的と思われる施設への併設が目立つ」と述べている。このように公的施設との密接な関係を感じさせる寺院の存在は、古代寺院のあり方を考える上で重要な要素を含んでいると考えて大過ない。

河内の古代寺院

北河内

西村 香織

北河内では交野郡に7ヶ寺、茨田郡に3ヶ寺、讚良郡に5ヶ寺の古代寺院が確認されている。創建年代が飛鳥時代に比定されているのは蹉跎廃寺・中山觀音寺跡・船橋廃寺（枚方市）の3ヶ寺である。しかし、いずれも伽藍配置は明らかになっていない。

白鳳時代創建と考えられる寺院は正法寺跡・高宮廃寺跡・九頭神廃寺・高瀬寺跡・讚良寺跡・瓦堂寺院跡、奈良時代では百濟寺・高柳廃寺・太秦廃寺・廢德泉寺・廢開元寺・廢長宝寺が確認されている。讚良寺跡は郡名を冠していることから、郡領寺院であった可能性が示唆される。また、廢長宝寺は付近の「郡津」の地名が示すとおり郡衙や津などの施設に伴う寺院であったと考えられる。

軒丸瓦の同范関係は、九頭神廃寺と四天王寺NMT a 1型式、八幡市の山城・美濃山廃寺・蹉跎廃寺でそれぞれ確認されている。九頭神廃寺創建期には四天王寺所用瓦が焼成された樟葉平野山瓦窯から瓦が供給されていたようである。高宮廃寺と讚良寺跡・百濟寺と山城・平川廃寺においても同范関係が認められるが、九頭神廃寺を除くと瓦窯が判明している寺院はない。

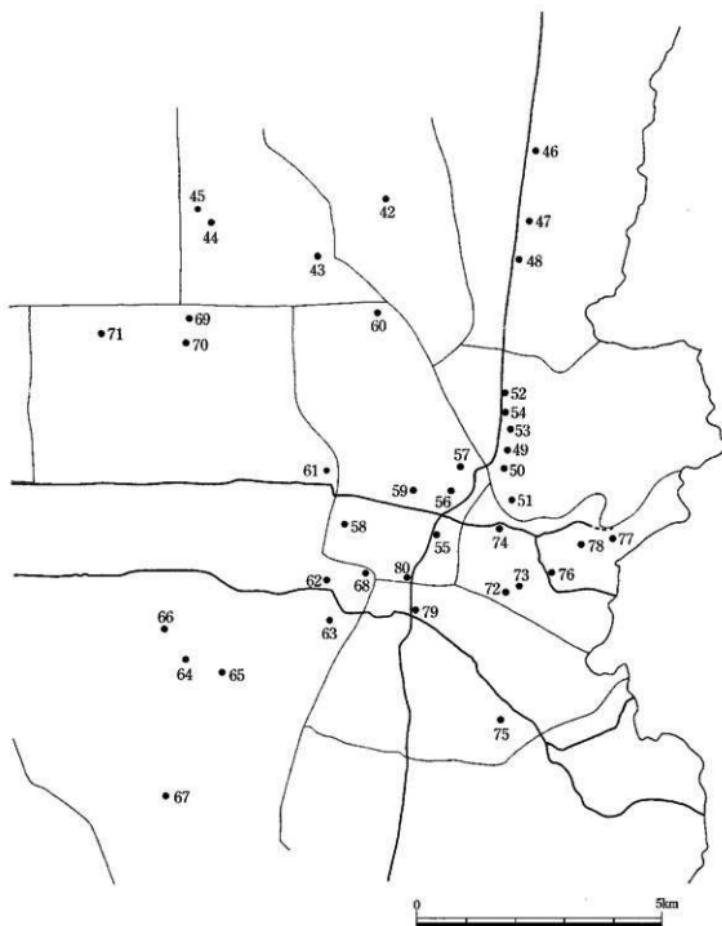
中河内

矢倉 嘉人

中河内は5郡からなり、飛鳥時代から奈良時代に創建された古代寺院は河内郡3、若江郡3、渋川郡3、高安郡3、大県郡6の18ヶ寺が確認されている。飛鳥時代の瓦が出土する寺院として、若江郡の若江寺（東大阪市）、渋川郡の渋川寺（八尾市）があげられるが、いずれも遺構が検出されていないため不明確な点が多い。

飛鳥時代末から白鳳時代にかけて大県郡の、生駒山西麓、東高野街道沿いに南北1列に並んで相次いで寺が建てられた。平野廃寺・大県廃寺・大県南廃寺・太平寺廃寺・安堂廃寺・高井田廃寺（柏原市）の6ヶ寺がこれにあたり、これらの寺院は『続日本記』に記載された、いわゆる「河内六寺」である。これまでの研究成果により、それぞれ、三宅寺・大里寺・山下寺・智誠寺・家原寺・鳥坂寺にあてられている。この他にも白鳳時代に創建された寺院として、河内郡の河内寺・法通寺（東大阪市）、若江郡の西郡廃寺（八尾市）、渋川郡の鞍作廃寺（大阪市）、高安郡の心合寺・高麗寺（八尾市）などがある。奈良時代には、高安郡の教興寺（八尾市）などが建立されている。

中河内地域の飛鳥時代寺院は、瓦の出土が確認されている寺院が2ヶ寺あるだけで、南河内に比べると少ない。



中河内の古代寺院位置図

南河内

矢倉 嘉人

南河内は6郡からなり、飛鳥時代から奈良時代創建の寺院は志紀郡6、丹比郡11、安宿郡7、古市郡2、石川郡3、錦部郡2の31ヶ寺が知られている。その多くは、大和と難波とを結ぶ交通の要所である石川と大和川の合流点付近に集まっている。

南河内において最も古い寺院は石川郡にある新堂廃寺である。また、新堂廃寺と同様、飛鳥時代の瓦が出土する寺院に志紀郡の船橋廃寺（柏原市）、衣縫廃寺・土師寺（藤井寺市）、古市郡の西琳寺（羽曳野市）があげられる。白鳳時代には寺院が増加し、安宿郡では片山廃寺・五十村廃寺・原山廃寺（柏原市）、志紀郡の葛井寺・抒志廃寺（藤井寺市）、丹比郡の野中寺・善正寺（羽曳野市）、丹比廃寺・黒山廃寺（美原町）、東野廃寺（大阪狭山市）、津堂廃寺（藤井寺市）、石川郡の龍泉寺（富田林市）、山城廃寺（河南町）、錦織郡の細井廃寺（富田林市）などが確認されている。奈良時代には安宿郡に国分寺・国分尼寺（柏原市）が、古市郡に譽田八幡宮神宮寺（羽曳野市）が建立される。

新堂廃寺近くには終末期古墳であるお龜石古墳があり、石郭の周囲には、同廃寺と同じ窯で焼いたと思われる平瓦積護壁が設けられていたことから、建立氏族の墓と推定されている。また、細井廃寺では同心円紋の叩きを持つ壇が出土しており、これと同様の壇が南坪池古墳からも出土している。このことは、古墳と寺院との関係を考える上で興味深いものである。

飛鳥時代の寺院建立時期については、南河内地域が中河内地域を凌駕している。これは、南河内の初期寺院が新堂廃寺では飛鳥寺「星組」の系統による軒丸瓦製作や同范の垂木先瓦が確認されること、衣縫廃寺においても飛鳥寺と同范の軒丸瓦が確認されることからも理解されるよう、大和との直接的な繋がりによるものであろう。これらの寺院が建立された背景には渡来系氏族の技術の導入がある。玉手山横穴群、飛鳥千塚、一須賀古墳群、高井田横穴群、寛弘寺古墳群などの古墳群、お龜石古墳や小口山古墳、仏陀寺古墳などの横口式石郭をもつ古墳などの存在がその傍証となろう。

しかし、白鳳時代に入ると中河内地域においても有力な氏族を中心として活発な寺院造営が展開される。

奈良時代に入っても、有力氏族の氏寺の造営が確認される。また「中央」指導による国分寺・国分尼寺の造営に加え、多くの寺院で平城宮式と同形式の瓦が採用されている。このことから律令期においても、同地域が重要であったことを確認できる。

和泉の古代寺院

中村 祐子

和泉は大鳥郡、和泉郡、日根郡の3郡からなり、奈良時代までの古代寺院は、大鳥郡に8ヶ所、和泉郡11ヶ所、日根郡に3ヶ所が存在する。多くは、和泉国を縦断する南海道沿いに建立されている。

このなかで飛鳥時代建立と考えられる寺院は、和泉郡の小松里廃寺（岸和田市）である。白鳳時代建立の寺院は、大鳥郡では塙穴寺・華林寺・百舌鳥陵南廃寺・長承寺・家原寺・仏光寺・和泉上師廃寺（堺市）がある。和泉郡では信太寺・和泉寺・坂本寺・池田寺・松尾寺（和泉市）、秦廃寺（貝塚市）、春木廃寺・別所廃寺（岸和田市）が存在する。日根郡には地藏堂廃寺（貝塚市）、禪興寺廃寺（泉佐野市）、海会寺（泉南市）がある。奈良時代の寺院は大鳥郡では大野寺（堺市）、和泉郡は和泉国分寺（和泉市）、田治米廃寺（岸和田市）である。

伽藍配置が確認されている寺院は坂本寺と海会寺のみで、両寺院とも法隆寺式である。

寺院所用瓦を焼成した瓦窯については、池田寺と海会寺に関連して調査が実施されている。池田寺では4基の窯が検出されている。池田寺所用瓦を焼成していたのはロストルなしの平窯（2号窯）である。海会寺の瓦窯は講堂基壇下層に、有段の焼成部からなる窯窓が1基検出されている。同寺域南側ではロストルを有する平窯が1基、登窯が2基検出されている。海会寺所用瓦を焼成していた可能性が指摘されるのは、講堂基壇下層の窯窓である。

壇越の集落は池田寺と海会寺で確認されている。

和泉の初期寺院では、まず小松里廃寺で豊浦寺式軒丸瓦が採用され、ついで輕寺式軒丸瓦が坂本寺、池田寺で採用される。白鳳時代になると塙穴寺、海会寺、禪興寺廃寺で西琳寺式もしくは百濟大寺式軒丸瓦が採用されている。これらの瓦当紋様は中央からの直接伝播によるものと考えられ、塙穴寺は西琳寺式軒丸瓦を採用することから河内と繋がりがあったことが想定される。また信太寺は、輕寺式軒丸瓦の影響を受けた信太寺式軒丸瓦を採用している。池田寺で採用される池田寺I式は、百濟大寺式（木之本廃寺）の影響を受けて製作されたものと思われる。海会寺の瓦には、四天王寺と同様の軒丸瓦がある。海会寺では他に川原寺式軒丸瓦も採用している。本寺院は和泉地域の街道沿いに存在する寺院の中でも最西南端に位置する。海会寺は和泉のみならず畿内の最西南端であり、その海会寺に百濟大寺式の範型が四天王寺から運ばれていることに、中央の意図が看取され、当時代の畿内を考える上で非常に興味深いことである。

また、集落跡でも古瓦の出土が確認されている。加治神前島中遺跡と堀遺跡では豊浦寺式軒丸瓦が、大庭寺遺跡では、8世紀初頭に属する小型の単弁蓮華紋軒丸瓦が確認されている。

大園遺跡出土の埴仏は山田寺出土の埴仏を踏み返しているものと考えられる。

摂津国能勢郡

1. 大里庵寺 豊能郡能勢町大里

【存続年代】 白鳳時代～

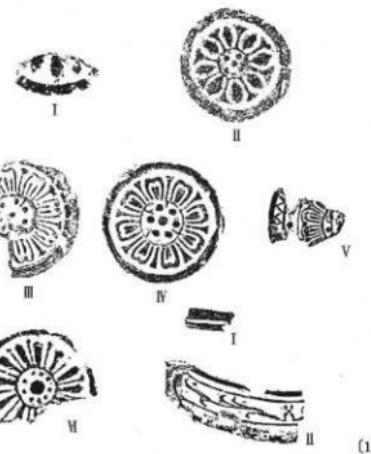
【検出遺構】 柱穴、溝

【集落】 大里遺跡

【備考】 丸瓦、平瓦、鉄釘、銅釘、

鉄製品、製塙土器、土馬

能勢郡衙の可能性



摂津国岬上郡

2. 芥川庵寺 高槻市郡家新町

【存続年代】 白鳳時代～平安時代

【検出遺構】 碓石、東西溝（北区西溝）

東側：谷地形

【瓦窯】 芥川庵寺瓦窯跡

【集落】 郡家今城遺跡

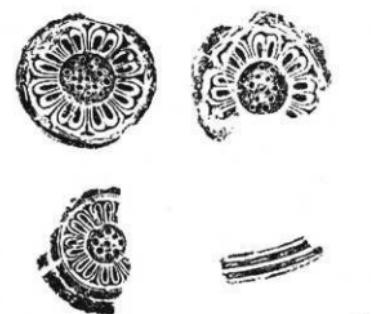
【同范関係】 京都府大山崎町出土軒丸瓦

【備考】 国指定史跡 岬上郡衙跡附寺跡

重圈紋軒丸瓦、塑像片、相輪片、

鬼瓦片、銅片、鉄釘

「西寺」陽刻平瓦



3. 梶原寺跡 高槻市梶原1丁目

【存続年代】 白鳳時代～平安時代

【検出遺構】 南北棟掘立柱建物跡（僧坊か？）

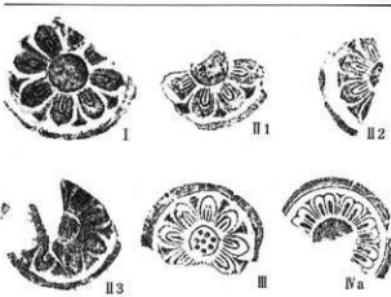
2×7間以上（8世紀代）

【瓦窯】 梶原瓦窯跡

【集落】 梶原北遺跡、梶原南遺跡

【同范関係】 飛鳥寺X型式（梶原Ⅲ型式）

【備考】 正倉院文書に記載の「梶原寺」



摂津国嶋下郡

4. 太田廃寺跡 茨木市東太田2丁目

【存続年代】 飛鳥時代～平安時代

【検出遺構】 瓦石、中心部は消滅

【集落】 太田遺跡・總持寺北遺跡(同范瓦が出土)

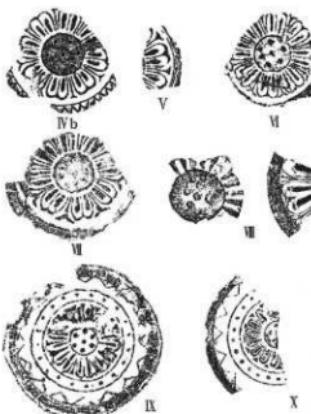
【同范関係】 河内寺

【備考】 複弁蓮華紋軒丸瓦、唐草紋軒平瓦

付近で同廃寺のものと考えられる

花崗岩製円形凹柱座心礎発見

(方形含利孔から含利容器)



5. 西方淨土寺跡 茨木市水尾4丁目弥勒堂付近

【存続年代】 白鳳時代～

6. 常楽寺跡(三宅寺跡) 茨木市藏垣内

【存続年代】 白鳳時代～中世

【検出遺構】 万福寺境内に花崗岩製塔心礎

直径70cm、深さ9cmの凹柱座、

排水溝(飛鳥後期形式)



7. 穂積廃寺跡 茨木市上穂積3丁目

【存続年代】 白鳳時代～平安時代

【検出遺構】 中心部未調査

【瓦窯】 白頭瓦窯跡

【備考】 蓮華紋軒丸瓦、重弧紋軒平瓦

郡遺跡(嶋下郡衙跡推定地)と近接



8. 峰前寺跡 摂津市千里丘3丁目

【存続年代】 奈良時代～

摂津国豊島郡

9. 石積寺跡 池田市畠5丁目4

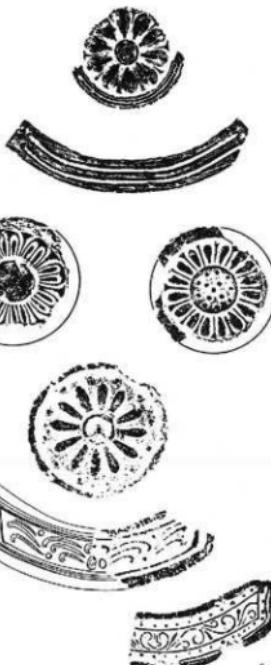
【存続年代】 白鳳時代～奈良時代

【検出遺構】 未調査

【古墳】 二子塚古墳、善海1・2号墳、

五月ヶ丘古墳(秦氏の墓か?)

【備考】 白鳳時代～天平時代の丸瓦・平瓦



10. 金寺山廃寺跡(新免庵寺跡) 豊中市本町8丁目

【存続年代】 白鳳時代～9世紀初頭

【瓦窯】 桜井谷窯跡

【集落】 本町遺跡

【古墳】 新免宮山古墳群

【同範関係】 四天王寺NM II d型式(複弁)、堂ヶ芝庵寺、
四天王寺NH V c型式(藏手状唐草紋)、

【備考】 丸瓦、平瓦、鬼瓦、ミニチュア罐

看景寺に花崗岩製回柱座心礎

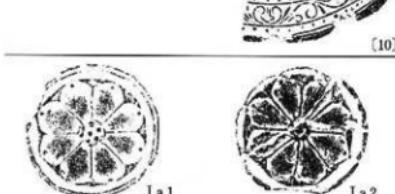
摂津国西成郡

11. 摂津国分尼寺跡 大阪市東淀川区柴島2

【存続年代】 奈良時代～

【備考】 法華寺境内に塔基礎

円形柱座礎石



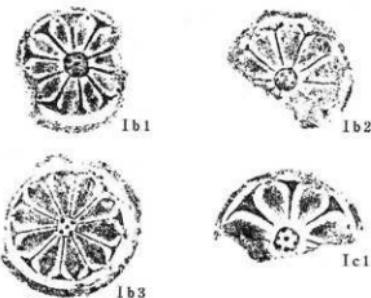
摂津国東生郡

12. 安曇寺跡(阿曇寺跡) 大阪市中央区高麗橋1

【存続年代】 飛鳥時代～

【同範関係】 四天王寺NM I a 1型式

【備考】 重廓軒平瓦、「隆平永宝」(皇朝
十二錢)、飛鳥時代難波宮下層遺
跡と共に上器、官衙の一部とも
考えられる



13. 四天王寺 大阪市天王寺区四天王寺1

【存続年代】 飛鳥時代～現代

【伽藍配置】 四天王寺式

【検出遺構】 南大門：瓦積基壇 14.5×12.1 m

3×2 間 創建時は掘立柱

中門：第IV層→3間×2間分検出

第V層→柱間10尺前後

基壇：東西57尺×南北47尺

第VI層→一辺12m版築基壇

南：凝灰岩切石痕跡 北：瓦積、石段

参道が塔南側石段まで続く

金堂：第1次→53尺×64尺（天平尺）土壇

地盤54尺×65尺

第2次→48尺×59尺土壇

地盤49尺×60尺

第3次→49尺×52尺土壇

地盤52尺×62尺

梁柱間：12尺66（平均）

正面5×側面4間

食堂：基壇高さ0.3m

講堂：基壇周囲凝灰岩地盤

正面106.5尺側面49.7尺

隅木、丸垂木の痕跡、金銅風錠

回廊：南回廊→北側基壇は瓦積貼り、

外側は凝灰岩切石、

中門を含み総桁行約23.6m検出

西回廊→外側は凝灰岩、根固めに瓦列

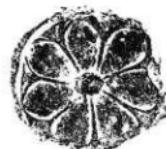
東北回廊→内側凝灰岩切石

東西回廊→約333.5尺検出

北回廊→12.8尺、講堂に続く溝（道路跡）、土坑、井戸

柵列：寺域境界線（創建期）

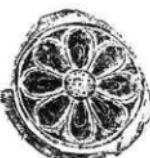
【瓦窯】 椿葉平野山瓦窯群（創建時）



I c 2



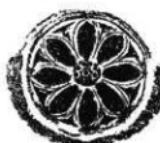
I a



II a 1



II a 2



II b



II c



II d



II e



II f



II g

【同範關係】 軒丸瓦

N M I a 1 = 法隆寺・若草伽藍、法門坂廃寺、

九頭神廃寺、山城・鞘岡廃寺

N M II a 1・2 = 大和・木之本廃寺

N M II a 2 = 海會寺

N M II c = 堂ヶ芝廃寺

N M II d = 金寺山廃寺、堂ヶ芝廃寺

N M II e = 津守廃寺

N M II f = 野中寺

N M III a 2 = 平安宮豊樂院

N M III c = 堂ヶ芝廃寺

N M IV b = 後期難波宮6241型式

N M VI d = 大縣廃寺

軒平瓦

N H IV b 2 = 平安宮豊樂院

N H V b = 摂津國分寺跡

N H V c = 金寺山廃寺

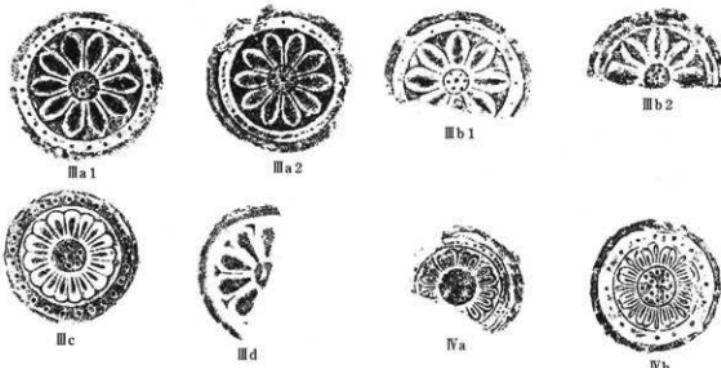
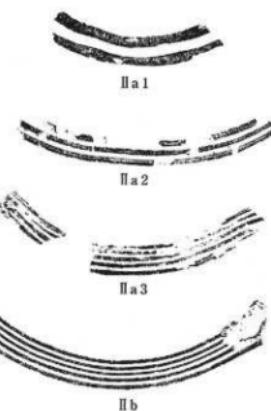
N H VI b 2 = 摂津國分寺跡

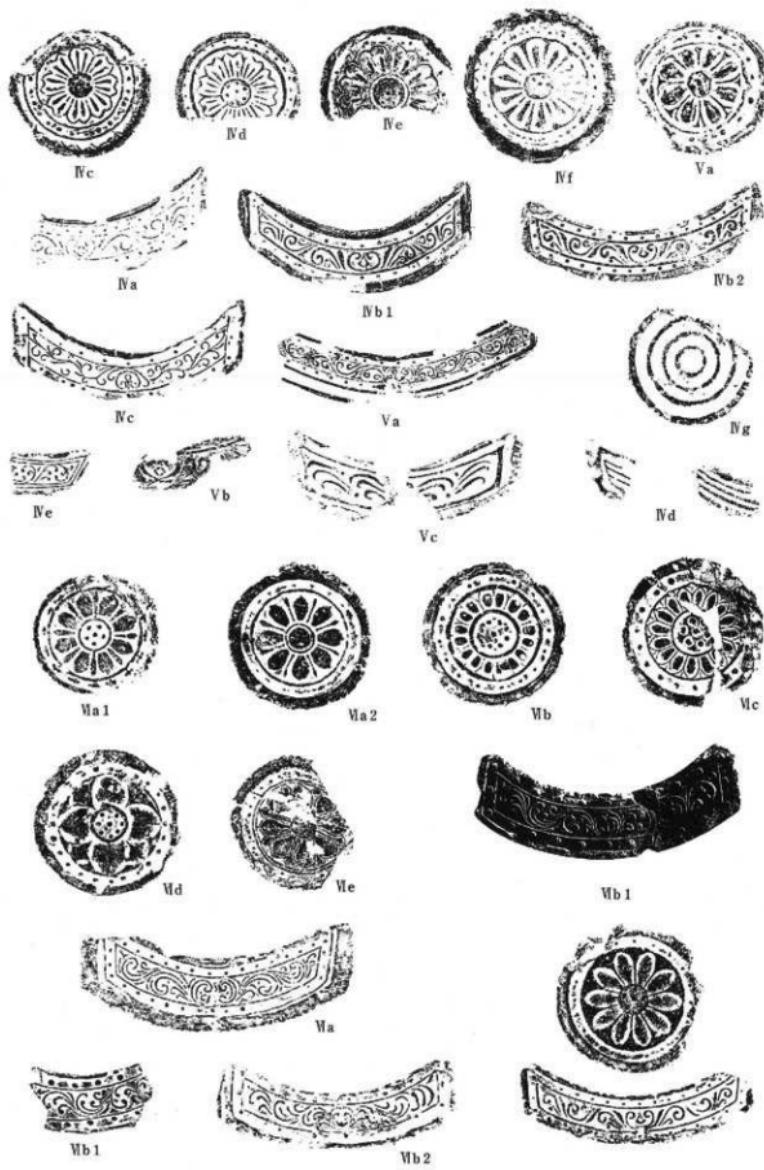
【備考】 国指定史跡

風舞、鶴尾（ほほ完形）、蓮華紋裝飾鶴尾片、

仏面戲画丸瓦、土器類

天徳4（960）3月17日焼亡





14. 法円坂廃寺 大阪市中央区法円坂町

【存続年代】 飛鳥時代～

【同範関係】 四天王寺 N M I a 1 型式

【備考】 雜波宮跡下層・大坂城跡下層・

森の宮遺跡

丸瓦、平瓦



[14]

15. 阿倍寺跡（阿部寺廃寺） 大阪市阿倍野区松崎2、3

【存続年代】 白鳳時代～平安時代

【伽藍配置】 四天王寺式

【検出遺構】 北側方形土壇に礎石

南側土壇に心礎（円形四柱座、

直径61cm、深さ13.5cm）

（舍利孔：直径10.1cm、深さ8.2cm）

【備考】 複弁蓮華紋軒丸瓦

現在、天下茶屋公園内に礎石



[15]



16. 摂津国分寺跡 大阪市天王寺区国分町

【存続年代】 奈良時代～

【瓦窯】 不明

【同範関係】 長岡京7014型式（重圓紋）、

四天王寺 N H V b ・

N H V b 2 型式



[16]

摂津国百濟郡

17. 堂ヶ芝茂寺 大阪市天王寺区堂ヶ芝1、2

【存続年代】 白鳳時代～平安時代

【検出遺構】 土壇、塔心礎（方形柱座）

【同範関係】 四天王寺 N M II c ・ N M II d ・

N M III c 型式、雜波宮（重圓紋）

【備考】 重圓紋軒丸瓦、唐草紋軒平瓦

大別王寺、摂津国百濟寺とする説もある

18. 百济尼寺跡 大阪市天王寺区細工谷1丁目

【存続年代】 白鳳時代～平安時代

【検出遺構】 溝、井戸、土坑

【同範関係】 四天王寺NM1-a1型式、

堂ヶ芝庵寺（重弁）

【備考】 木簡、墨書き土器「百濟尼」等多数、駒尾、

「和同開珎」枝錢、土器類



[18]

摂津国住吉郡

19. 摂津田辺庵寺 大阪市東住吉区北田辺4、駒川1

【存続年代】 白鳳時代～鎌倉・室町時代

【伽藍配置】 薬師寺式

【検出遺構】 東・西塔、南門、金堂



[19]

20. 榎津庵寺 大阪市住吉区山之内3丁目、遠里小野3丁目

【存続年代】 白鳳時代～

【検出遺構】 掘立柱建物（6世紀末～8世紀）、土坑、溝、井戸

【集落】 山之内遺跡



[20]

21. 津守庵寺 大阪市住吉区千林1、2、般辻1、2

【存続年代】 奈良時代～

【同範関係】 四天王寺NMⅡe型式

【備考】 901年創建津守寺（瑞璃寺）との関係は不明

河内国交野郡

22. 中山銀音寺跡 枚方市香里ヶ丘12-3205-1

【存続年代】 飛鳥時代～鎌倉・室町時代

【検出遺構】 東塔：東西10m南北8m 西塔：東西10m

7世紀代の塔心礎、礎石、

礎石抜き取り穴

【備考】 鳥尾、塙仏、懸仏

軒丸瓦瓦当面に百済寺と同様の突線

根津中山寺(宝塚市)の前身との世伝がある

(平安遷都とともに根津に移転か?)



(22)

23. 船橋廃寺 枚方市船橋本町1

【存続年代】 飛鳥時代か？～

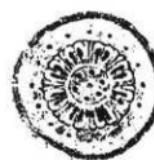
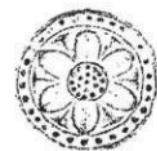
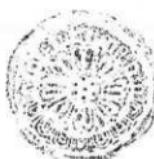
【検出遺構】 掘立柱建物、溝

【同範関係】 新堂廃寺Ⅳ A12型式、後期難波宮(重廓紋軒平瓦)

【集落】 船橋遺跡(白鳳時代から奈良時代の平瓦出土)

【備考】 獣面紋軒丸瓦(柏原の船橋廃寺出土との説も)、

飛鳥時代～奈良時代の丸瓦・平瓦



24. 九頭神廃寺 枚方市牧野本町1、2

【存続年代】 白鳳時代～

【検出遺構】 区画溝(東・西・北)

基壇(塔跡か？)：一边12m、版築

瓦積基壇：東西8.9m×南北9.5m、主軸北

7世紀第4四半期

東西棟掘立柱建物：1×7間以上、7世紀後半

【瓦窯】 榊葉平野山瓦窯、牧野阪瓦窯(平安)、

萩庄瓦窯(長岡京、西寺所川)

【集落】 九頭神遺跡

【同範関係】 山城・美濃山廃寺(単弁6葉)、

四天王寺NM I a 1型式(榊葉平野山瓦窯)、

蹉跎廃寺(外縁劍頭紋)

【備考】 「西寺」陽刻瓦

(24)

25. 百濟寺跡 枚方市中宮西之町

【存続年代】 奈良時代～

【伽藍配置】 観世音寺式？ 薬師寺式？

【検出遺構】 中門、南門：三間一戸 柱行2間

回廊

東・西塔：40尺四方の基壇に3×3間、

4面に階段 西塔のみ塔心確認

金堂：東西95尺×南北62尺、7×4間

中央に3×2間の内陣

講堂：7×4間

北方建物（食堂か？）：5×3間

東方建物（別院か？）：北西15m以上×南東11.6m

【集落】 禁野本町遺跡

【同範関係】 山城・平川庵寺（平城宮式）

【備考】 国指定特別史跡

軒丸瓦瓦当面に中山観音寺跡と同様の突線

寺院と神社が東西に並立（高宮庵寺でも確認）

飛鳥・白鳳時代の瓦が出土しているが、創建は

奈良時代

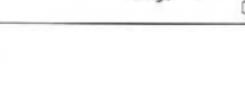
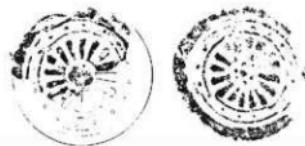
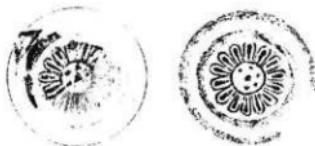
同様の瓦が出土する百濟寺南遺跡は前身寺院の

可能性がある

寺域160m四方

「和同開珎」、鷹尾、鬼瓦、埴仏、鉄釘、須恵器、

土師器、青磁、白磁



26. 麋徳泉寺 交野市寺3丁目

【存続年代】 奈良時代～

【備考】 平瓦片

[25]

27. 麋開元寺 交野市神宮寺2丁目

【存続年代】 奈良時代～

【伽藍配置】 薬師寺式か？

【備考】 神宮寺集落の東南で天平時代の礎石発見

軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦